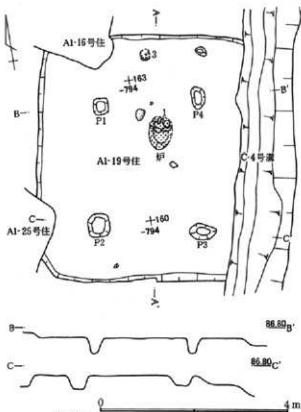


か否かは不明である。

床面は平坦をなす。床下掘形は壁沿い90～50cmの間隔をとり、幅1m、深さ10cm前後に掘り込み、中央部は約4m方形の高まりをなす。床土はLoam塊を混じえる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴で掘形は径35～50cm、深さ25～35cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)2.1m・南列(P2・P3)2.2m・東列(P3・P4)2.8m・西列(P1・P2)2.5mを測る。貯蔵穴・壁下溝は検出されない。

出土遺物は少なく、甕・高坏がある。



- A1-19住
1. 暗褐色土 C軽石多量・Loam粒少量混
  2. 黒褐色土 C軽石多・Loam粒少量・砂
  3. 暗褐色土 C軽石少量・Loam粒多量
  4. 暗褐色土 C軽石多量・Loam粒少量混・砂
  5. 暗褐色土 弱粘質・C軽石少量・Loam粒混

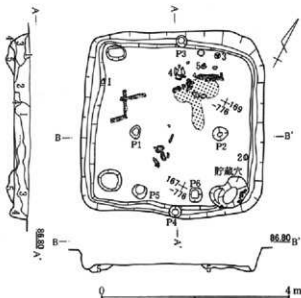
第214図 A1-19号住居跡

#### A1-21号壑穴跡 (第215図 P L. 70)

座標値X=165～170・Y=-774～-

778の範囲にある。平面形状はあまり長短軸差のない隅丸方形を呈する。規模は長軸3.9m・短軸3.8m、床面積12.2m<sup>2</sup>、確認壁高は35cmで北隣壁面上縁部の傾斜がとくに緩い。長軸方位はN-23°-Wを示す。埋土は大別4層からなり、Loam塊多く混じり不整合な堆積で人為的埋土の可能性が高い。なお、最上層のみ混入物が少ない。炉跡は検出されていない。

床面は平坦である。床下掘形は壁際四周を50～60cm、深さ20cmの凹帯を巡らし中央部は2～2.5m方形の高まりを造る。床土は黒褐色土にLoam塊を混じったものを充填する。床面直上に近く家屋構造材の一部であろう炭化材が残る。量的には少なく、遺棄材程度であろう。遺物残存も少なく廃屋に伴う意図的な放火であろう。柱穴と考えられる4穴は中軸線上内側に配されるP1・P2とこれに直交する中軸線上のP3・P4は壁面に接して穿たれる。P4の左右に配されるP5・P6は補助柱的な機能があるか。P1～P4は径30cm、深さ30cmである。P1・P2の柱間寸法は1.8mを測る。壁下溝は幅10～15cm、深さ10cm前後で全周する。



- A1-21壑
1. 黒褐色土 土器片混・底部黒色土
  2. 褐色土 Loam粒多量・塊少量・砂
  3. 褐色土 Loam粒多量・C軽石・黒色土混
  4. 黒褐色土 Loam粒・C軽石・炭化物混・砂
  5. 褐色土 Loam粒多量混

第215図 A1-21号壑穴跡

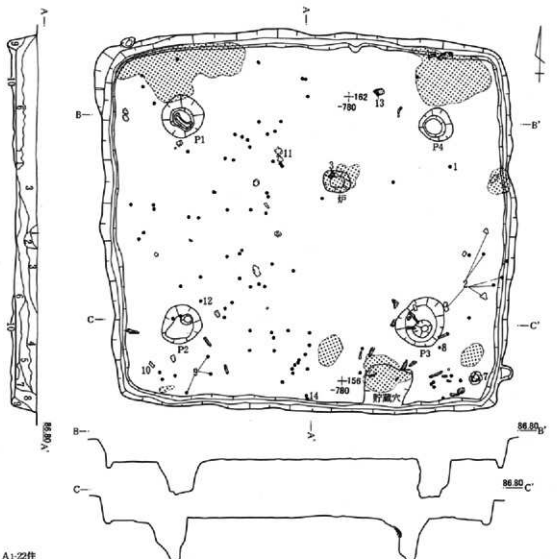
第3章 検出された遺構と遺物

西・南・東隅部にはそれぞれ土坑状の落ち込みが検出されているが、東隅のものが掘形形状・規模とも明瞭である。径70×50cm・深さ40cmの楕円形を呈する。貯蔵穴になろうか。

出土遺物は少量で破片化したものがほとんどで、高坏・壺などがある。

A<sub>1</sub>-22号住居跡 (第216図 P L. 70)

座標値X=155~163・Y=-776~-784の範囲にある。A<sub>1</sub>-26号住居跡(古墳前期)と重複しこれより新しい所産である。北西・北東隅及び東壁から南壁沿いにかけて焼土の分布と炭化材が残存するが、量は少ない。また、出土遺物も少量散在的で廃屋後の意図的な放火と考えられる。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸8.7m・短軸8.0m、床面積62.2m<sup>2</sup>、確認壁高45cmで直線・直立気味である。



A<sub>1</sub>-22住

1. 灰褐色土 灰色粘土塊混
2. 暗褐色土 粘質・焼土塊多量・C軽石・炭化物混
3. 暗褐色土 弱砂質・C軽石・Loam粒・炭化粒混
4. 暗褐色土 弱砂質・C軽石多量混・砂
5. 褐色土 弱粘質・Loam塊多量・C軽石・炭化物混
6. 褐色土 弱粘質・C軽石少量・Loam塊・焼土塊混
7. 暗褐色土 弱砂質・C軽石・Loam粒少量混
8. 暗褐色土 弱粘質・C軽石・焼土混・軟
9. 褐色土 砂質・Loam主体(壁崩落土)
10. 黄褐色土 Loam・暗褐色土混土(掘形)

第216図 A<sub>1</sub>-22号住居跡

長軸方位は略真北を示す。埋土は大別3層に分けるが、南・東方の壁際にLoam粒・塊を多く混ざる堆積土が流入し後方よりの人為的埋土も考えられる。

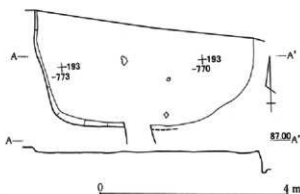
炉跡は中央やや北により、径60×40cm、深さ4～5cmの浅い窪みで地床炉である。炉底の焼土面は小範囲で異存状態は悪い。

床面は平坦である。床下掘形は浅く、床土にはLoam塊を混ざる褐色土を充填する。柱穴は4穴で上縁径70～100cmの大きな掘形で深さも70～90cmに達する。柱間寸法は北列(P1・P4)5.4m・南列(P2・P3)5.0m・東列(P3・P4)4.2m・西列(P1・P2)4.1mを測る。壁下溝は全周し、幅10～20cm・深さ5～10cmである。貯蔵穴は南壁際やや東に寄っており、100×90cm・深さ40cmの略方形である。

出土遺物は破片化したものが多く散在的である。壺・壺・高坏・模造土器などがある。

#### A1-24号竪穴跡(第217図)

座標値X=191～194・Y=-769～-773の範囲にある。調査時期が分割されたため北半は未検出である。平面形状は強い隅丸を呈するようであるが壁線はその軌跡のみの確認である。東西軸長は4.5m、南北方向は2.5mの範囲まで検出した。柱穴・炉跡などの諸施設は検出されない。出土遺物は極少で破片である。



第217図 A1-24号竪穴跡

#### A1-26号竪穴跡(第218図 P L. 70)

座標値X=153～161・Y=-771～-778の範囲にある。A1-22号住居跡(古墳前期)と重複するがこれより旧く西南部は消失する。平面形状は北東・南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.2m・短軸5.75m、床面積は33+θ㎡、確認壁高は10cmで浅い掘りこみである。長軸方位はN-52°-Eを示す。

炉跡は確認検出されていない。

床面は平坦で、床下の掘形は浅くLoam土を混ざる鈍黄褐色を充填して床土とする。数カ所から小穴が検出されているが、主柱穴を想定できる整合性は認められない。貯蔵穴に想定される土坑は東隅にあり75×65cm・深さ85cmの方形を呈する。

出土遺物は少量なお破片化したものがほとんどで、壺類が多い。



第218図 A1-26号竪穴跡

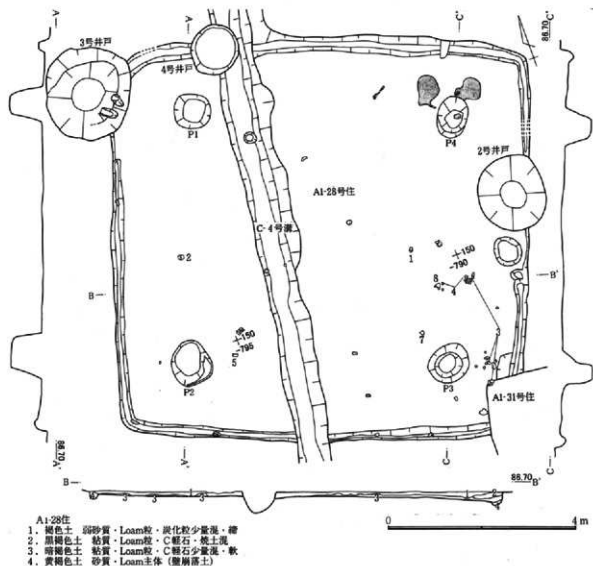
- A1-26層
1. 暗褐色土 砂質・Loam粒・炭化物混・礫
  2. 褐色土 砂質・Loam粒多量・C軽石少量混・礫
  3. 鈍黄褐色土 Loam主体(壁崩落土)

A1-28号住居跡 (第219図 P L. 70)

座標値  $X=146\sim 156$ ・ $Y=-787\sim -797$ の範囲にある。A1-31号住居跡(古墳後期)、2号・3号・4号井戸跡(中世以降)と重複する。また、西半部ではC-4号溝が南北に縦走する。平面形状は東西軸が若干勝るものの超短軸長差のない方形を呈する。規模は長軸8.8m・短軸8.5m、床面積69.5 $m^2$ である。壁立ちは壁線の軌跡を確認できる程度の残存で確認面は床土に近いLoam土混じりの暗褐色土の分布であった。長軸方位はN-24°-Eを示す。炉跡は確認できず未検出である。

床面は平坦である。床下掘形は壁線縁辺に幅1m・深さ10~15cmの凹帯を巡らし、中央部に5×6m方形の高まりを作る。床土はLoam塊を混じえる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で掘形は大きく径90cm、深さ60~70cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が5.5m、東列(P3・P4)5.2m、西列(P1・P2)5.3mを測る。壁下溝は全周し、幅10~15cm・深さ10cm前後である。貯蔵穴は確認されていない。

出土遺物は破片化したものがほとんどで散在的な出土状況である。S字口縁台付き甕(含む単口縁)が多く壺・器台の他、土師器類がある。



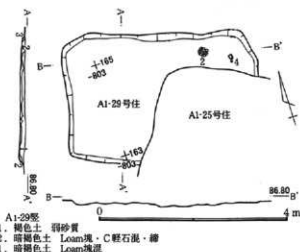
第219図 A1-28号住居跡

A<sub>1</sub>-29号竪穴跡 (第220図)

座標値  $X=162\sim 165$ ・ $Y=-799\sim -803$ の範囲にある。A<sub>1</sub>-25号住居跡(古墳後期)と重複し、南東部は消失している。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形を呈するが、壁線が波打ち不安定である。規模は長軸4.0m・短軸2.7m、床面積は約10.8m<sup>2</sup>になろう。確認壁高は10cmである。長軸方位はN-73°-Wを示す。残存埋土は薄く、床土との識別が困難なLoam塊混じりの暗褐色土である。

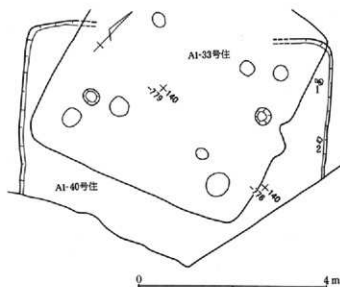
床面は平坦で堅牢さはない。炉跡とともに、柱穴・貯蔵穴など一般的住居施設が欠如する。

出土遺物は少量であるが、壺・高坏の他模造土器・腕輪状土製品などがある。

第220図 A<sub>1</sub>-29号竪穴跡A<sub>1</sub>-40号竪穴跡 (第221図)

座標値  $X=136\sim 142$ ・ $Y=-775\sim -781$ の範囲にある。A<sub>1</sub>-33号・A<sub>1</sub>-39号住居跡(古墳後期)と重複する。また、東隅部は現道(調査時)にかかるため不明部分が多い。平面形状は、北東～南西軸が確認されたのみであるがほぼ方形を呈しよう。北東～南西軸長は6.5mで、方位はN-50°-Eを示す。確認壁線はその痕跡にとどまり、床面もA<sub>1</sub>-33号住居跡の掘形でほとんど状況を知ることはできない。柱穴は4穴が想定されるが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>がその一部であろう。径30cm・深さ40cmである。炉跡などは検出されていない。

出土遺物は少なく、台付き壺の台座2点である。

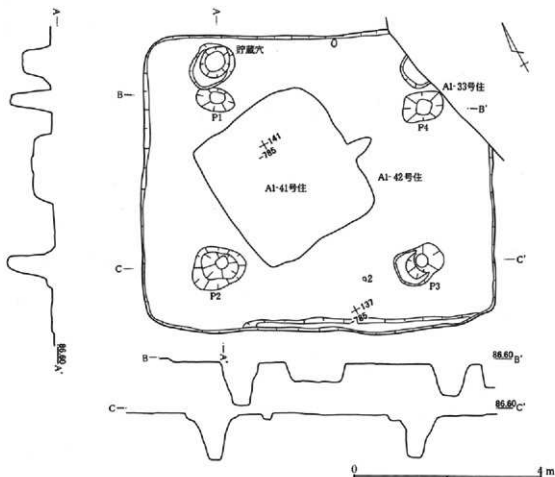
第221図 A<sub>1</sub>-40号竪穴跡A<sub>1</sub>-42号住居跡 (第222図 P L. 70)

座標値  $X=135\sim 143$ ・ $Y=-781\sim -788$ の範囲にある。A<sub>1</sub>-33号・A<sub>1</sub>-41号住居跡(古墳後期)と重複する。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸7.4m・短軸6.1m、床面積41.9m<sup>2</sup>、壁立ちは行割平が深く痕跡程度である。長軸方位はN-62°-Wを示す。

炉跡は中央部で重複するA<sub>1</sub>-41号住居跡で消失したため検出されていない。

床面は平坦と考えられるが、前記の重複で詳細は不明である。床下掘形は壁沿いに幅1m・深さ10cm程度の凹帯を巡らし、中央部は4.5m方形範囲が高まりをなす。床土は暗褐色土とLoam土の混土を充填する。柱穴は4穴で掘形は大きく、P<sub>1</sub>は径80×50cm・深さ80cm、P<sub>2</sub>は径110×90cm・深さ100cm、P<sub>3</sub>は径

80×70cm・深さ90cm、P4は径80×60cm・深さ60cmである。柱間寸法は、北列(P1・P4)4.3m・南列(P2・P3)4.1m・東列(P3・P4)3.2m・西列(P1・P2)3.4mを測る。貯蔵穴は北西隅にあり径100×90cm・深さ60cmの楕円形を呈する。壁下溝は南壁下に一部を検出した。幅25cm・深さ5～10cmである。出土遺物は少量である。



第222図 A1-42号住居跡

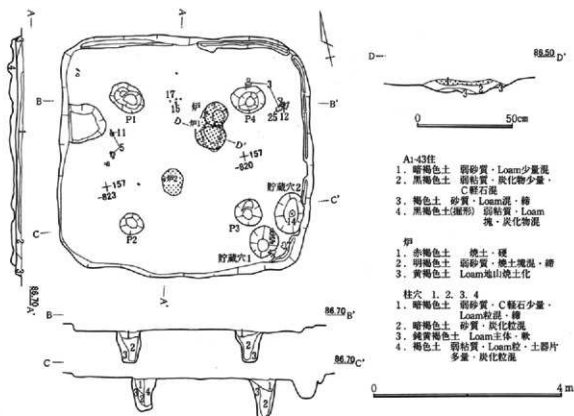
A1-43号住居跡 (第223図 P L. 71)

座標値X=154~159・Y=-818~-824の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ略隅丸方形を呈する。規模は長軸5.2m・短軸5.0m、床面積は23.2m、確認壁高は15cmで浅い。長軸方位はN-81'-Wを示す。粗土は大別2層で下位の床面に接する黒褐色土には炭化粒の混入が目立つ。

炉跡は新旧があり2箇所に検出した。中央やや北東寄りの炉1は径60×50cmの楕円形で浅く皿状に窪み、焼土面の形成が著しい。炉2は中央やや南西に寄り、径50×40cmの楕円形状が被熱範囲として確認され、旧段階の炉跡であろう。両者とも地床炉と考えられる。

床面は平坦で、床土はLoam塊を混じえる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で、P1は径80×60cm・深さ65cm、P2径50cm・深さ66cm、P3径60cm・深さ80cm、P4径70×60cm・深さ70cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)・西列(P1・P2)が2.5m、東列(P3・P4)は2.3mを測る。壁下溝は北壁から東壁下に検出され、幅10cm・深さ5～6cmである。貯蔵穴は南東隅に2穴あり、新旧炉跡に対応しようか。貯蔵穴1は径70cm・深さ50cmの略円形、2は径90×60cm・深さ30cmの楕円形をなす。

出土遺物は甕・壺・甔・器台・高坏など多器種である。

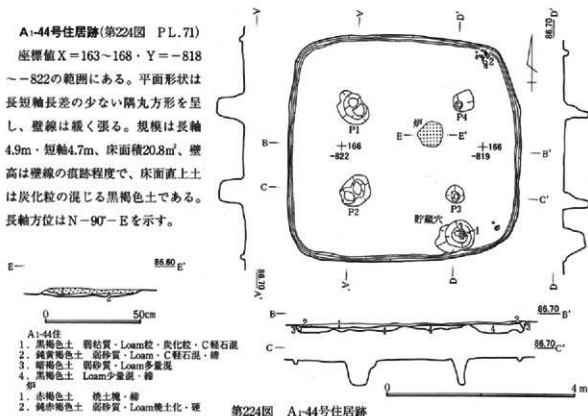


第223図 A1-43号住居跡

A1-44号住居跡(第224図 P.L.71)

座標値 X=163~168・Y=-818

~-822の範囲にある。平面形状は長短軸長差の少ない隅丸方形を呈し、壁線は緩く張る。規模は長軸4.9m・短軸4.7m、床面積20.8㎡、壁高は壁線の痕跡程度で、床面直上土は炭化粒の混じる黒褐色土である。長軸方位はN-90°-Eを示す。



第224図 A1-44号住居跡

炉跡は中央やや北東寄りにあり、径50cm程度の略円形で浅く窪む地床炉である。

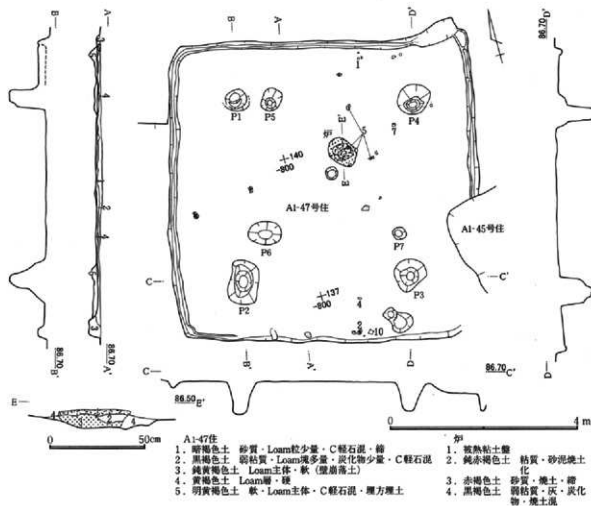
床面は平坦である。床下掘形は壁沿いを幅50~60cm・深さ約10cmの凹帯を巡らし、中央は3m前後の高まりとなる。床土にはLoam粒混じりの黒褐色土及びLoam土主体の黄褐色土を充填する。柱穴は4穴で、径40~50cm・深さ50~55cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が2.2m、東列(P3・P4)・西列(P1・P2)が2.0mを測る。壁下溝は全周し、幅・深さ10cmである。貯蔵穴は南東隅にあり、75×60cm・深さ45cmの略円形をなす。

出土遺物は少ないが、貯蔵穴より二重口緑壺・器台が、北東隅床面より高坏がある。

A1-47号住居跡 (第225図 P.L.71)

座標値 X=135~142・Y=-795~-802の範囲にある。A1-45号住居跡(古墳後期)と重複する。平面形状は長短軸差の少ない方形を呈する。規模は長軸6.6m・短軸6.4m、床面積39.3㎡、確認壁高は15~20cmで掘り込みは浅い。床面直上土は粘性のある黒褐色土である。長軸方位はN-76°-Wを示す。

炉跡は中央を僅か北に寄り、粘土材を用いている。厚さ約6cmの粘土を50×40cm大の盤状円形に整え平坦な炉床とし、被熱に硬化が著しく細かい亀裂が生じている。炉床掘形は床面を径65×50cmの浅い皿状を呈し、灰・焼土・炭化物を混ざる黒褐色土・砂泥を填じてある。



第225図 A1-47号住居跡



床面は平坦をなす。床下掘形は北壁から西～南壁沿いに幅約1m前後、深さ10cm程度の凹帯を巡らす。床土はLoam塊を混ざる黒褐色土とLoam塊を充填する。柱穴は4穴でP1は径50cm・深さ60cm、P2径90×60cm・深さ70cm、P3径70cm・深さ60cm、P4径75cm・深さ75cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)は3.3m、南列(P2・P3)と東列(P3・P4)が3.6m、西列(P1・P2)は3.9mを測る。掘形面ではP1～P3の内側に柱穴P5～P7深さ60～70cmの3穴を検出したが、P4を共有し南・西方向への拡張建て替えによるものと考えられる。柱間寸法は北列(P5・P4)は3.0m、南(P6・P7)・東(P7・P4)・西(P5・P6)の柱列は2.8mを測る。壁下の溝はA1-45号住居跡との重複で一部不明部分もあるが全周すると考えられる。幅15cm・深さ5～10cmである。貯蔵穴は検出されない。

出土遺物は少なく模造土器・甕などがある。

#### A1-48号竪穴跡(第226図 P L.71)

座標値X=149～151・Y=-799～-802の範囲にある。削平が深く、掘形面での検出である。平面形状は北西南東方向に長軸をもつ略方形である。規模は長軸2.6m・短軸2.4m、床面積5.0㎡、長軸方位はN-58°-Wを示す。炉跡や明瞭な柱穴などの諸施設は検出されていない。

掘形は中央部におよそ1.5m方形に高まりを残し、周縁は10cmほどの深さで凹帯を巡らす。床土はLoam粒・小塊を混じえる暗・黒褐色土を充填する。

出土遺物は少量・小片で図示できる物はない。

#### A1-49号竪穴跡(第227図)

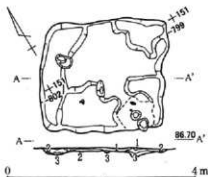
座標値X=175～179・Y=-766～-769の範囲にある。東半部は現道(調査時)にかかり全容は不明である。平面形状は略方形を呈すると考えられる。検出範囲は北西面壁は2.4m、南西面壁縁は2m、北東壁縁は隅部を含め50cmまで確認した。確認壁高は約30cmで直線・直立気味である。北西面壁縁方位はN-50°-Eを示す。床面は平坦と考えられるが検出範囲が狭く、詳細は不明である。炉跡などは確認されない。

出土遺物は模造土器・高坏・甕が多く埋土中の出土である。

#### A3-65号住居跡(第228図 P L.71・72)

座標値X=246～252・Y=-761～-767の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ隅丸気味の方形を呈する。規模は長軸5.4m、短軸4.3m、床面積20.6㎡、確認壁高は35cmで直線直立して立ち上がる。長軸方位はN-65°-Eを示す。埋土は大別4層で暗・黒褐色土にLoam塊を多く混じ、人為的埋土または攪乱土の流入・堆積が考えられる。

炉跡は中央やや北寄りにおいて65×45cmの浅い皿状に窪む掘形をもち、4個人頭大や長径25cm大の転石をもつて石囲炉とする。火床はLoam土面の焼土化が著しい。



A1-48号  
1. 暗褐色土 Loam粒・C軽石少量混  
2. 黒褐色土 粘質・Loam大粒多量混  
2. 褐色土 Loam大粒多量混・締 掘形

第226図 A1-48号竪穴跡

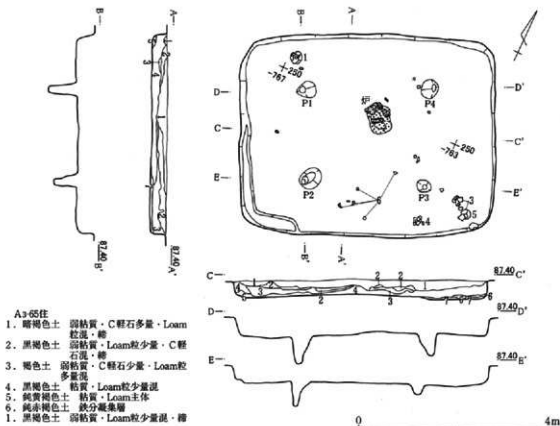


第227図 A1-49号竪穴跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

床面は平坦である。床下掘形は4箇所程度に150×80cm大の浅い土坑状窪みが施される。床土にはLoam土に黒色土を混する鈍黄褐色土が充填される。柱穴は4穴で、径40～50cm深さは50～60cmの楕円形状であるが、P3のみ深さ20cmと浅い。柱間寸法は北列（P1・P4）2.8m・南列（P2・P3）2.6m・東列（P3・P4）2.1m・西列（P1・P2）1.9mを測る。貯蔵穴は掘形面での確認で、南東隅にあり径80cm・深さ60cmで方形気味の形状を呈する。壁下溝は南西壁面下に一部が確認されている。

出土遺物は北西と南東部に偏っており、多くは埋土中からの出土で甕・壺・高坏などがある。



第228図 A3-65号住居跡

#### A2-157号住居跡（第229図 P L. 72）

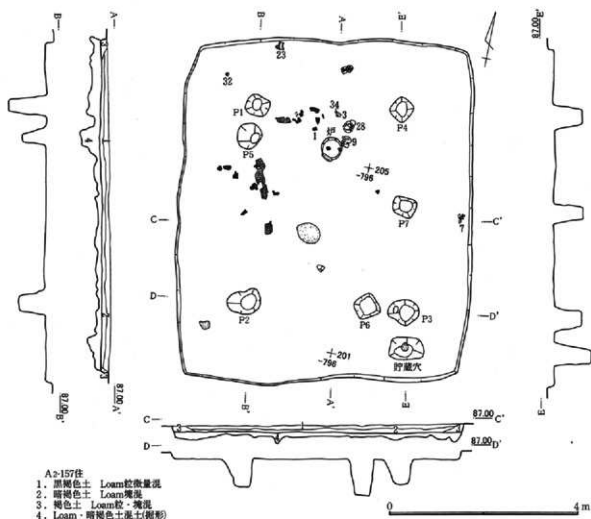
座標値X=200～207・Y=-793～-799の範囲にある。床面近くに炭化材がみられ被火住居であるが量は少ない。平面形状は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、壁線はやや膨らみをもつ。規模は長軸7.2m・短軸6.2m、床面積41.9㎡、確認壁高は15cmである。長軸方位はN-10°-Wを示す。埋土は大別2層からなり、暗～黒褐色土で下位にはLoam塊が混入する。

炉跡は中央やや北寄りにあり、径40cmほどの円形で浅い皿状に窪む。炉床には粘土材を厚さ5cmほどに塗りし火床は赤化著しい焼土面をなす。炉辺には長さ25cmの細長い転石が添えられる。また、中央やや南には径50cmの扁平円形転石が設置され何らかの工作作業台とも考えられる。

床面は平坦をなし柱穴P1～P4結縁の内側は比較的堅牢である。床下掘形は壁沿い幅約1mの凹帯状窪

みをなし、中央が若干高まる。床土はLoam塊を多量に混ざる黒褐色土を充填する。主柱穴は4穴でいずれも50cm方形の掘形で深さは50~80cmを有する。なお、P5~P7はいずれも主柱穴の結線上にあり補助柱穴的な性格が有ろうか。柱間寸法は北列(P1・P4)3.1m・南列(P2・P3)3.2m・東列(P3・P4)4.3m・西列(P1・P2)4.2mを測る。貯蔵穴は南東隅にあり70×50cm・深さ80cmの略方形である。

出土遺物は炉跡周辺床面に集中し、高坏・器台・甕・壺などがある。また埋土中には横造土器が多い。



- A2-157住  
 1. 黒褐色土・Loam粒微量混  
 2. 暗褐色土・Loam塊混  
 3. 褐色土・Loam粒・塊混  
 4. Loam・暗褐色土混土(埋形)

第229図 A2-157号住居跡

#### A2-162号住居跡 (第230図 P L. 72)

座標値X=203~210・Y=-771~-778の範囲にある。A2-49号溝(中世以降)と重複し南東隅部は消失する。平面形状は長短軸長差の少ない方形を呈する。規模は北東~南西軸6.4m・北西~南東軸6.3m、床面積38.2㎡、確認壁高は25cmで壁面は直線・直立気味である。北東~南西軸方位はN-28°-Wを示す。埋土は大別2層でLoam粒・塊が多く混入する暗褐色土からなり、人為的埋土または攪乱土の流入であろう。

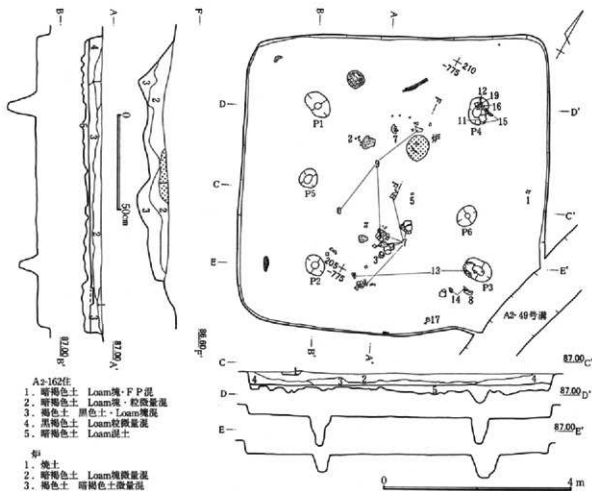
炉跡は中央やや北に寄る。径50cm程度の浅く窪む略円形である。火床は粘土材などの塗布はなく地床炉である。

床面は平坦をなし、主柱内側は硬く特に炉跡周辺は堅牢である。床下掘形は壁沿いが1m前後の幅で深さ

第3章 検出された遺構と遺物

10cmほどの凹部に窪め中央部は僅かな高まりとなる。床土はLoam塊を混ざる暗褐色土を充填する。柱穴は6穴(P1~P6)で主柱は4穴(P1~P4)であろう。径・深さは40~60cmで円形または楕円形の掘形をもつ。主柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)、東列(P3・P4)・西列(P1・P2)ともほぼ等間で3.4mを測る。東・西柱列間にあるP5・P6は補助柱と考えるが、配置は東列では南側P3に西列では北側P1にやや偏る。貯蔵穴・壁下溝は検出されていない。

出土遺物は中央部とP3・P4の周辺床面に集中し、盃・甕類が多い。また、人頭大の転石で輝石安山岩の出土があり、被熱と4~5箇所磨り痕が観察される。鍛冶作業などの痕跡は明らかではないが台石としての可能性もある。



第230図 A2-162号住居跡

A2-163号住居跡 (第231図 P L. 72)

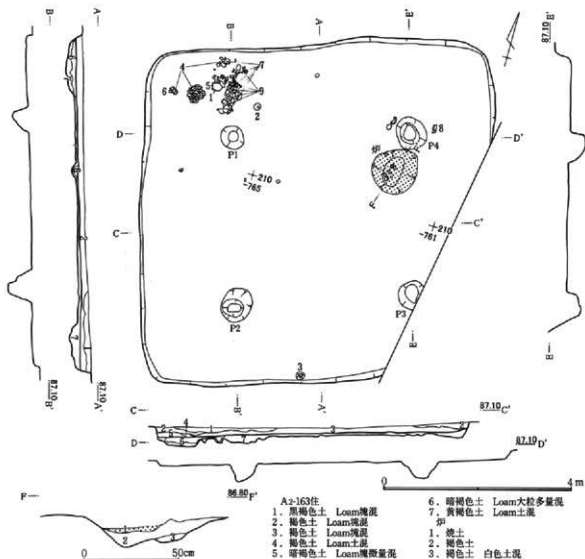
座標値 X = 205~213・Y = -760~-767の範囲にある。南東部は現道(調査時)下にかかり平面形状の全容は不明であるが短長軸長差のない方形を呈しよう。やや隅丸気味である。規模は軸長7.1m、床面積48.1+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高15cmである。南北軸方位はN-17°-Wを示す。埋土は大別1層でLoam塊混じりの黒褐色土である。

炉跡は柱穴P4に近く北東方に偏ってある。径1m程度の大振りな掘形をもち浅い窪みで中央部径60×

40cmの楕円形状に焼土化した火床が残る。地床炉である。

床面は平坦である。床下は壁沿い約1mの幅で深さ10cmあまりの凹帯が走り、中央は4.5～5mの方形高まりをなす。床土はLoam塊を多く混ざる褐色土を充填する。柱穴は4穴で径50～70cm・深さ40～50cmの円形掘形である。柱間寸法は北列（P1・P4）・南列（P2・P3）が3.7m、東列（P3・P4）3.3m・西列（P1・P2）3.6mを測る。貯蔵穴・壁下溝は検出されていない。

出土遺物は北東隅部に集中する。壺・甕・高坏・器台などがあり、うち完形壺には赤色塗彩文と寛播き絵画が施されたものがある。



第231図 A2-163号住居跡

#### A2-164号壁穴跡 (第232図)

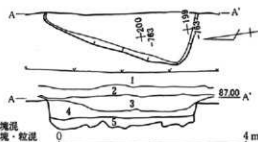
座標値X=198～201 Y=-762～-763の範囲にある。大半は現道（調査時）下に入り西壁・南壁の一部にかけての小面積を検出したにとどまる。形状は方形を呈すると考えられるが、西壁長3.2m・南壁線は約1mの検出である。確認壁高は45cmで壁面は直線・直立気味に立ち上がる。西壁線軸方位はN-25°-Eを示す。埋土は大別2層でLoam塊・黒色土の混ざる褐色土で下位層にはとくにLoam塊の混入が多い。

### 第3章 検出された遺構と遺物

床面は平坦である。床下形は深く10~20cmで、Loam土を混ざる暗褐色土を充填する。炉跡・柱穴などの諸施設を検出するに至らない。

出土遺物は壺小片が僅かである。

- A2-164壁
1. 黄土
  2. 褐色土 黒褐色塊・Loam塊混
  3. 褐色土 黒褐色塊・Loam塊・粒混
  4. 褐色土 Loam塊・粒混
  5. 暗褐色土 Loam土混



第232図 A2-164号壁穴跡

### A2-165号住居跡 (第233図)

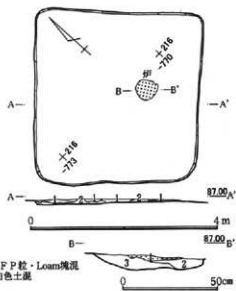
座標値  $X=213-218$ ・ $Y=-769--773$ の範囲にある。平面形状は北東-南西方向に長軸をもつ方形を呈する。検出時には掘削面に近く、削平が深くおよんでいた。規模は長軸3.7m・短軸3.5m、床面積12.2m<sup>2</sup>、確認壁高は壁線の痕跡程度である。長軸方位はN-50°-Eを示す。柱穴は検出されていない。

炉跡は中央やや東寄りにあり、径40cmあまりの焼土面として検出し地床炉である。

床土はLoam土・暗褐色土の混土を充填してある。

出土遺物は皆無である。

- A2-165住
1. 暗褐色土 褐色土・F P粒・Loam塊混
  2. 褐色土 Loam塊・白色土混
- 炉
1. 焼土
  2. 褐色土 暗褐色塊多量・Loam粒微量混
  3. 褐色土 白色土・暗褐色土



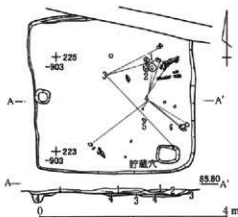
第233図 A2-165号住居跡

### B-71号壁穴跡 (第234図 P L. 73)

座標値  $X=222-225$ ・ $Y=-900--903$ の範囲にある。平面形状は長短軸長差の少ない方形を呈する。北東部の壁線は耕作擾乱を受けている。規模は長軸3.5m・短軸3.3m、床面積は11.5m<sup>2</sup>ほどになろう。確認壁高は10cmで確認できた壁線は僅かである。長軸方位はほぼ真北である。床面直上の埋土は混入物の少ない黒褐色土である。炉跡は検出されていない。

床面は平坦であるが湿気が多く堅牢さはない。家屋構築材とみられる炭化物が北東部に多く、壁際三角堆積土には焼土粒が混じる。炭化物の残存量や偏りから、主構造材撤去後の腐屋放火と考えられる。床下掘形は浅く、床土には薄い黒褐色土を充填する。貯蔵穴は南東部隅にあり径50×40cm・深さ25cmの楕円形を呈する。

出土遺物は炭化材とともに北東隅に集中し、壺・甕・模造土器などがある。



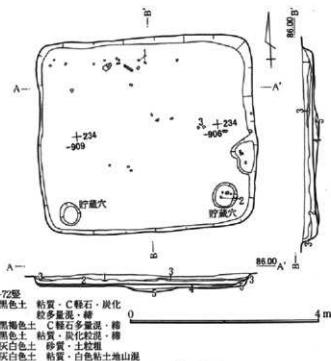
- B-71壁
1. 黒色土 硬・C軽石・粘土粒混
  2. 黒褐色土 硬・C軽石少量・粘土粒混
  3. 褐色土 弱粘質・粘土粒多量混
  4. 灰白色土 粘質・白色粘土塊山混(雜形)

第234図 B-71号壁穴跡

## B-72号壜穴跡 (第235図 P.L.73)

座標値  $X=231\sim 235$ ・ $Y=-905\sim -909$ の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈し、やや隅丸気味である。規模は長軸4.6m・短軸4.1m、床面積16.5㎡、確認壁高20cmである。長軸方位は  $N-88^{\circ}-W$ を示す。埋土は大別2層で、粘性のある黒・暗褐色土からなり下位層には灰色砂泥を塊状に混ざる。

床面は平坦をなすが湿気が多く堅牢さは失われている。床下の掘形は中央部を僅かに窪める。柱穴は検出されず、掘形で小穴は見られるものの柱穴としての配列はない。貯蔵穴と考えられる落ち込みは南東・南西隅それぞれに検出されるが径50cm、深さ10~20cmの略円形である。



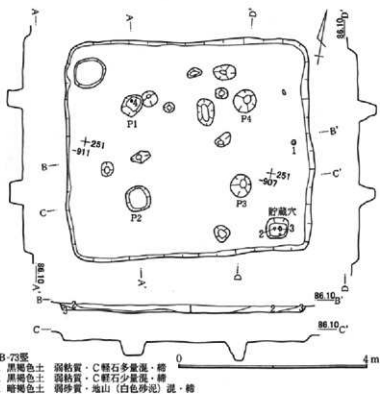
第235図 B-72号壜穴跡

出土遺物は床面近くに破片状態で散在してある。高坏・埴・模造土器等小片である。

## B-73号壜穴跡(第236図 P.L.73)

座標値  $X=248\sim 253$ ・ $Y=-906\sim -911$ の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形である。規模は長軸5.3m・短軸4.6m、床面積21.5㎡、確認壁高は10~13cmで僅かである。長軸方位は  $N-75^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別1層で粘性の強い黒褐色土である。

床面は平坦をなすが湿気が多く堅牢さはさして窺えない。柱穴は4穴で掘形径50cm前後、深さ30~40cmである。柱間寸法は北列(P1・P4) 2.4m・南列(P2・P3) 2.2m・東列(P3・P4) 1.8m・西列(P1・P2) 2.0mを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、50×40cm・深さ20cmで方形



第236図 B-73号壜穴跡

気味である。床下掘形からは深さ20cm前後の小穴が多く検出されているが性格は不明である。

出土遺物は模造土器・竈など少量である。

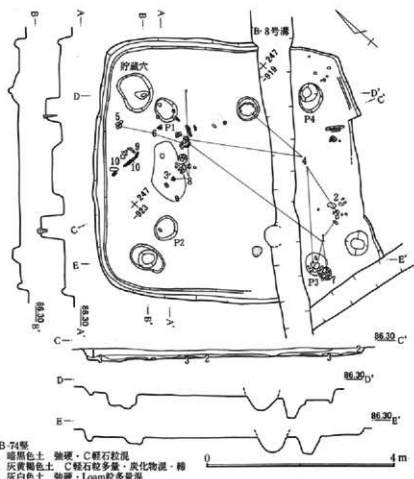
B-74号竪穴跡 (第237図 P.L.73)

座標値  $X=242\sim 249$ ・ $Y=-917\sim -924$ の範囲にある。平面形状は北西～南東方向に長軸をもつ略方形を呈するが南東壁線は不整形で形状が歪む。重複遺構の可能性もあるが不明である。規模は長軸6m・短軸5.5m、床面積28.1㎡、確認壁高は10cmで浅い掘り込みである。長軸方位は $N-43^{\circ}-W$ を示す。埋土は大別1層で粘性のある黒褐色土が床面を覆う。家屋構築材の一部と考えられる炭化材が床面上に遺存するが、量的には少なく廃屋後の被火と思われる。

床面は平坦をなすが堅牢さがなく認定に困難をきたした。柱穴はP1～P4の4穴で、径50cmほどの円形掘形をもち深さ40～50cmである。P1とP2の2穴には柱材が残存するが上端部分は腐敗やせのためか杭状に尖る。柱基部径は約

15cmである。柱間寸法は南壁線の歪みのためかP3の位置がやや間延びしている。北列(P1・P4)3.0m・南列(P2・P3)3.3m・東列(P3・P4)3.5m・西列(P1・P2)2.5mを測る。壁下溝は幅10～15cm・深さ5cmで南東壁線下が検出されていない。貯蔵穴は北西部隅にあり、径90×60cm・深さ約25cmで楕円形状を呈し、底面形状が不安定である。

出土遺物はP3付近および北西部に集中し、甕・壺など大型品が多い。



第237図 B-74号竪穴跡

B-75号竪穴跡 (第238図 P.L.74)

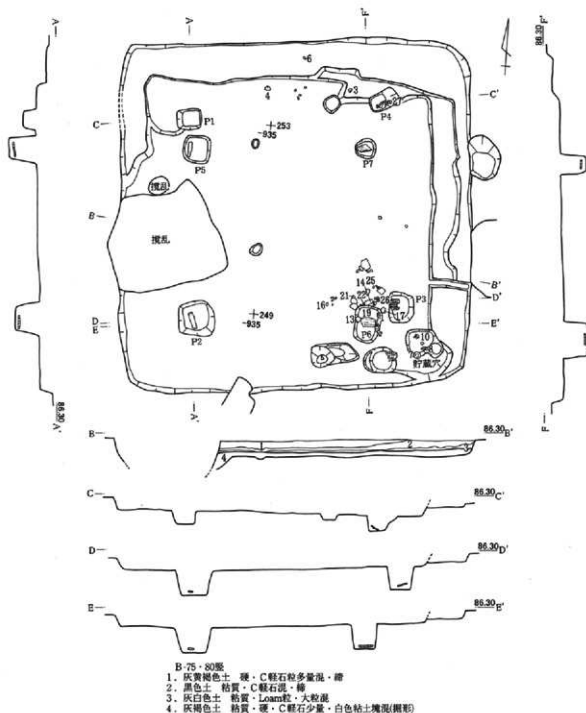
座標値  $X=247\sim 254$ ・ $Y=-930\sim -938$ の範囲にある。2つの柱穴組列と掘形の検出から拡張建て替えの住居跡と判明した。平面形状は長短軸長差のない方形を呈する。建て替え後・前の各規模は長軸7.4mと6.7m短軸7.3mと6.6m、床面積は51.4㎡と約44.2㎡、確認壁高は23cmあまりで直線の壁面をなす。長軸方位は建て替え後・前とも $N-83^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別3層からなり、上位から灰黄褐色・黒褐色・灰白色土とともに粘性の強い土質で地下水位上昇による高湿気環境によると考えられる。

床面は平坦をなすが湿気により堅牢さは窺えない。床下には拡張建て替え前の掘形を検出した。南・西



壁線を共有し、北・東壁線をそれぞれ約80cmほど拡張したことが知れる。柱穴は7穴で建て替え柱穴のうちP2は共有する。掘形は80～50cmの方形をなし深さ約50cmである。底面に近くP1を除くP2～P7全てに板材に加工した礎板が検出されている。柱間寸法は北列(P1・P4)4.0m・(P5・P7)3.6m・南列(P2・P3)4.4m・(P2・P6)3.7m・東列(P3・P4)4.4m・(P6・P7)3.7m・西列(P1・P2)4.3m・(P5・P2)3.5mを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径70×50cmの不整楕円形を呈し深さ45cmである。

出土遺物は南東隅貯蔵穴の周辺黒土に多く、一括廃棄されたと考えられる模造土器・小壺類がある。



第238図 B-75号壺穴跡

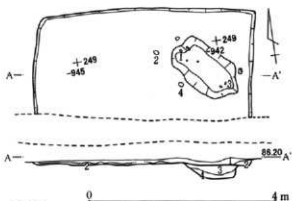
第3章 検出された遺構と遺物

B-76号竪穴跡 (第239図)

座標値  $X=247\sim 249$ ・ $Y=-941\sim -945$ の範囲にある。平面形状は方形を呈すると考えられるが、構築面の削平が著しく北半は壁線の痕跡がcaろうじて流れ、南半は消失している。全容が知れる東西軸長は4.6m、南北は $2.6+\varnothing$ mである。東西軸方位は $N-80^{\circ}-W$ を示す。炉跡・柱穴・貯蔵穴・壁下溝などは検出されていない。

床面は平坦をなすが、湿気が多く堅牢さはない。

出土遺物は小片・少量である。

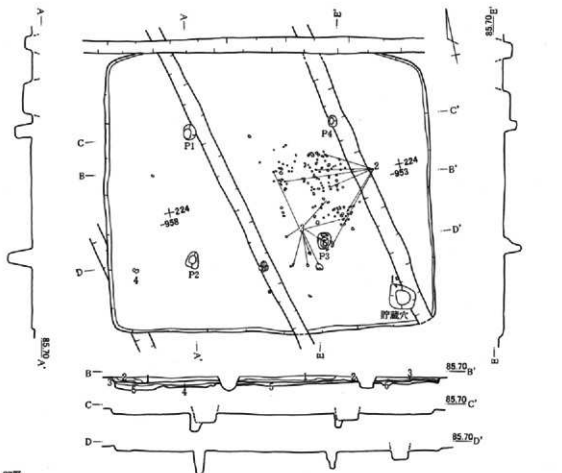


- B-76型  
 1. 暗褐色土 礫・C軽石・灰色粘土粒多量混  
 2. 灰褐色土 粘質・硬・灰色粘土多量・C軽石少量・粘土塊混  
 3. 灰褐色土 弱粘質・硬・粘土粒多量・C軽石少量混  
 4. 灰白色土 粘質・硬・白色粘土地山面

第239図 B-76号竪穴跡

B-77号竪穴跡 (第240図 P.L.74)

座標値  $X=220\sim 227$ ・ $Y=-952\sim -959$ の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸6.9m・短軸6.0m、床面積 $38.3m^2$ 、確認壁高は約10cmである。長軸方位は $N-80^{\circ}-W$ を示す。床面直上の黒土は粘性の強い黒褐色土である。炉跡は検出されていない。



- B-77型  
 1. 暗褐色土 弱砂質・土粒粗・C軽石粒多量混  
 2. 黒色土 C軽石少量・灰色粘土粒混・物碎  
 3. 暗褐色土 弱粘質・C軽石少量・Loam塊混

第240図 B-77号竪穴跡

床面は平坦をなすが、湿気が多く堅牢さはない。床下の掘形は北～西壁沿いにかけてL字状に凹帯を巡らす。床土は白色粘土を混ざる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径30×20cm程度の楕円形掘形で深さ40～50cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)3.1m・南列(P2・P3)2.8m・東列(P3・P4)2.6m・西列(P1・P2)2.6mを測る。貯蔵穴は南東隅部にあり、60×50cm・深さ40cmあまりの略方形を呈する。

出土遺物は中央や東寄りに細片状態で集中的に分布するが、多くは床面より若干浮いている。

#### B-78号竪穴跡 (第241図 P L 74)

座標値X=186~191・Y=-900~905の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈するが、南壁線は小さく蛇行する。規模は長軸4.9m・短軸4.6m、床面積19.8m<sup>2</sup>、確認壁高は15cmである。長軸方位はN-80°-Wを示す。埋土は大別1層で粘性の強い黒褐色土である。

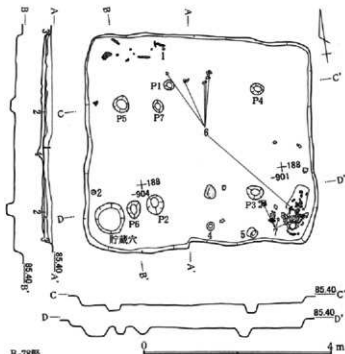
床面は平坦をなすが堅牢さはない。床下掘形は浅く、Loam土を混ざる黒褐色土を充填する。北西隅部に家屋構造物と考えられる炭化材を検出したが量的には極めて少ない。柱穴とおぼしき小穴は7穴を数えるがP1～P4を除き住居形状との整合性に欠ける。P1～P4は径30～40cm・深さ20cm前後の浅い掘形である。柱間寸法は北列(P1・P4)1.9m・南列(P2・P3)2.5m・東列(P3・P4)2.2m・西列(P1・P2)2.5mを測る。貯蔵穴と思われる落ち込みは南西部にあるが径60cmあまりの浅いもので確定できない。

出土遺物は南東隅部に集中し、小型壺・S字口縁台付甕などがある。

#### B-79号竪穴跡 (第242図)

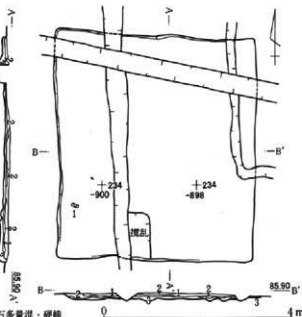
座標値X=232~237・Y=-896~900の範囲にある。平面形状は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.8m・短軸4.1m、床面積19.2m<sup>2</sup>、確認壁高は検出面がほぼ床面のため痕跡程度である。長軸方位は略真北を示す。

- B-79号
1. 暗褐色土 Loam粒少量・C軽石少量混・硬締
  2. 灰褐色土 粘質・硬・灰色粘土粒少量混
  3. 灰白色土 粘質・灰色粘土粒土混
  4. 暗褐色土 C軽石少量・粘土粒少量混・硬締
  5. 灰白色土 粘質・白色粘土粒土混



- B-78号
1. 黒褐色土 C軽石粒少量混・硬締
  2. 暗褐色土 灰色粘土少量混・C軽石少量混
  3. 黒褐色土 灰色粘土少量・C軽石粒混・硬締
  4. 黒褐色土 硬・Loam塊少量・C軽石混・強締

第241図 B-78号竪穴跡

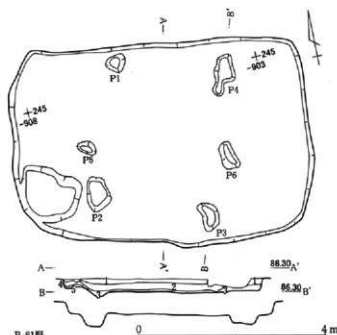


第242図 B-79号竪穴跡

床面は平坦をなすが軟弱である。床土はLoam塊と灰色粘土を混ざる黒褐色土である。出土遺物は二段口縁壺の口縁部の1点のみである。

**B-81号壁穴跡 (第243図)**

座標値  $X = 241 \sim 246$ ・ $Y = -902 \sim -908$  の範囲にある。平面形状は東西に長軸をもち隅丸の略方形を呈するが、壁線の軌跡は不安定である。規模は長軸6.2m・短軸4.3m、床面積23.4㎡、確認壁高は25cmである。長軸方位は  $N-82^{\circ}-W$  を示す。埋土は大別2層で粘性のある黒褐色土からなる。床面は平坦をなすが軟弱で踏み跡まりは窺えない。柱穴に想定される穴は6穴 (P1～P6) が検出され、径30～70cm・深さ20cmほどの不定型な楕円形状の掘形である。P5・P6は南北の柱列の間にあり柱筋をわずかに外へはずれる。柱間寸法は北列 (P1・P4)・南列 (P2・P3)・西列 (P1・P2) が2.8m、東列 (P3・P4) が3.0mである。P5・P6の柱間は3.0mを測る。

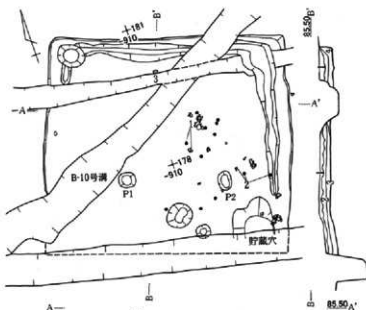


- B-81号  
 1. 暗褐色土 弱砂質・C軽石粒多量・Loam粒多量混  
 2. 暗褐色土 弱粘質・Loam大粒混  
 3. 暗褐色土 粘質・白色粘土地山混  
 4. 灰褐色土 C軽石粒・白色粘土粒多量混・硬締  
 5. 灰白色土 粘質・白色粘土多量混

第243図 B-81号壁穴跡

**B南-1号住居跡 (第244図)**

座標値  $X = 176 \sim 181$ ・ $Y = -907 \sim -913$  の範囲にある。平面形状はほぼ東西方向に長軸をもつ方形を呈すると思われるが、南縁は暗渠溝により消失する。規模は長軸5.3m・短軸は約4.5mと推定される。床面積23㎡+ $\theta$ 、確認壁高は18cmである。長軸方位は  $N-68^{\circ}-W$  を示す。埋土は大別2層で粘性の強い黒褐色土である。炉跡は未検出であるが暗渠溝などによる消失が考えられる。



- B南-1住  
 1. 黒褐色土 粘質・C軽石・Loam大粒・鉄少量混  
 2. 黒褐色土 粘質・C軽石・Loam大粒多量・鉄分混  
 3. 黒褐色土 強粘質・C軽石・Loam粒少量・鉄分極少量混  
 4. 黒褐色土 粘質・Loam大粒少量混

第244図 B南-1号住居跡

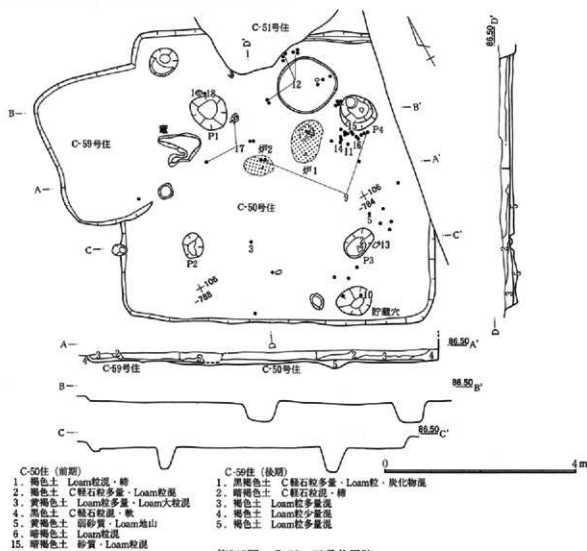
床面は平坦をなすが湿気が多く堅牢さはない。床土は灰白色粘土と黒褐色土の混土を充填する。柱穴は4穴と推定されるがやや配置に整合性の欠くP1・P2の2穴を検出した。上縁径40cmあり、深さは計測洩れで不明。柱間寸法は2mである。壁下溝は北～東壁沿いに幅広く検出されているが、床下掘形の可能性もある。貯蔵穴と思わしき落ち込みは南東隅にあるが、暗渠溝により半欠状態である。

出土遺物は中央東寄りに比較的集中し、甕・壺など少量である。

#### C-50号住居跡 (第245図 P L. 75)

座標値  $X=103-110$ ・ $Y=-781$ ～ $-789$ の範囲にある。C-51号住居跡(平安)・C-59号住居跡(古墳後期)と重複する。また、東側は現道(調査時)にかかる。平面形状は東西方向に若干の長軸をもつ方形を呈しよう。規模は長軸6.6m・短軸6.1m、床面積は約37.4㎡、確認壁高は20cm、長軸方位はN-57°-Wを示す。埋土はLoam塊を多量に混する暗・黄褐色土の不連続層からなり、人為的埋土または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は2箇所を検出され、炉1は中央やや北東寄りにある。径100×60cmの焼土面をなし、中央部には径30cmほどに粘土材が塗布される。炉2はやや北側にあり、焼土面の形成は弱く、径60×40cmで楕円形状の地床炉になろう。遺存状態より炉1が後出と考える。



第245図 C-50・59号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

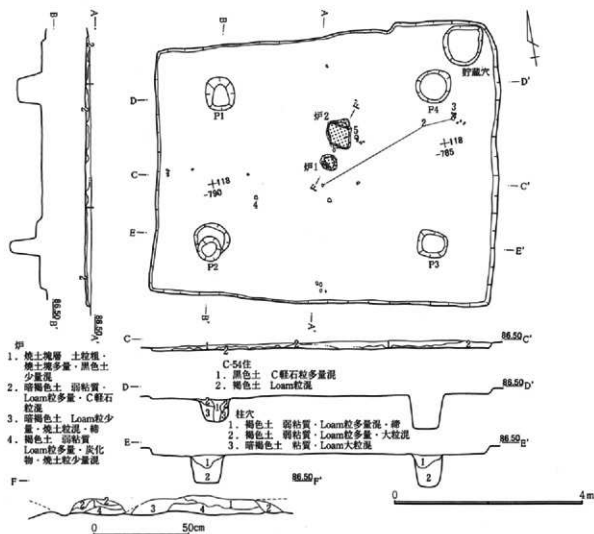
床面は平坦で、床下掘形も平準を成し、床土はLoam塊を混ずる褐色土を薄く充填する。柱穴は4穴でP1径80×70cm・深さ40cm、P2径50×40cm・深さ45cm、P3径70×50cm・深さ50cm、P4径70cm・深さ60cmである。柱間寸法は、北列(P1・P4)・東列(P3・P4)・西列(P1・P2)が3.0m、南列(P2・P3)が3.5mを測る。壁下溝は北東面壁の一部に検出され、幅10cm・深さ10cm程度である。貯蔵穴は南隅の小土坑が相当しよう。径80×60cm深さ45cmの楕円形を呈する。

出土遺物は破片化したものが多いものの、床面直上が大半である。模造土器・高坏・壺・甕類がある。

#### C-54号住居跡(第246図)

座標値X=114~120・Y=-783~-791の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形を呈するが東壁線がやや長く形状が歪み、北東部が隅丸になる。規模は長軸7.2m・短軸6.0m、床面積38.4㎡、確認壁高は15cmで掘り込みは浅い。長軸方位はN-79°-Wを示す。埋土はLoam塊と黒褐色土や褐色土が不連続に堆積する。2箇所の炉跡と掘形での柱穴の検出により建て替え住居跡であることが判明している。

炉跡は中央部2箇所に検出されるが、新(炉1)・旧(炉2)がある。炉1は径60×45cm、炉2は径35×



第246図 C-54号住居跡

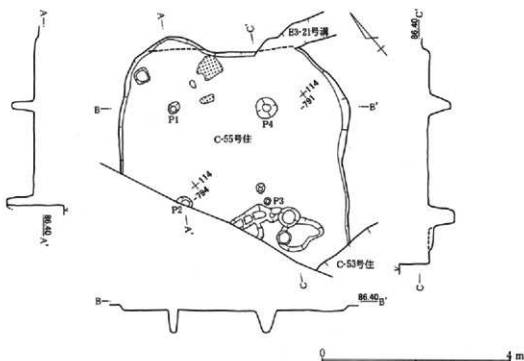
30cmである。両者とも浅い皿状の窪みで地床炉である。炉2は作り替えによる削平のためか焼土の残存は希薄である。

床面は平坦である。床下の掘形は壁沿い約1m幅、深さ10cm程度の凹帯を巡らせ中央が高まりを作る。床土はLoam土を混ざる褐色土を充填する。建て替え後の柱穴は4穴（P1～P4）でP1は径70×60cm・深さ50cm、P2径50cm・深さ65cm、P3径60cm・深さ70cm、P4径70cm・深さ70cmである。柱間寸法は北列（P1・P4）4.5m・南列（P2・P3）4.7m・東列（P3・P4）3.3m、西列（P1・P2）3.2mを測る。掘形検出になる柱穴はP5～P8の4穴で径50～25cmで深さはやや浅めである。柱間寸法は北列（P5・P8）3.4m・南列（P6・P7）3.6m・東列（P7・P8）1.9m・西列（P5・P6）2.1mを測る。貯蔵穴と考えられる落ち込みは北東隅にあり、径90×80cmの浅い窪みである。壁下溝は検出されていない。出土遺物は少量の破片状態で、床面に分布する。甕の他、模造土器などがある。

#### C-55号住居跡（第247図 P L. 75）

座標値X=111～116・Y=-790～-794の範囲にある。南西半は調査区域外にかかり、全容は不明である。C-53号住居跡（古墳後期）と重複する。壁線はやや膨らみがあり隅丸の度合いは強いが略方形になるうか。長軸は北東～南西方向にある。長軸は4.5mまで確認した。短軸は4.9m、床面積は16.5±0㎡、壁の立ち上がりは痕跡程度である。長軸方位はN-37°-Eを示す。掘土は床面直上にLoam塊混じりの暗褐色土がある。

炉跡は検出されていない。北東面壁近くに焼土分布が認められたが床面の被熱はなく炉跡とは認め難い。床面は平坦をなすがやや不安定である。床下の掘形は浅く、床土としてLoam塊混じりの黄褐色土を充填する。柱穴は4穴で径40～50cmで深さ45～50cmである。柱間寸法は北列（P1・P4）・東列（P3・P4）・西列（P1・P2）が2.0m、南列（P2・P3）が1.8mを測る。貯蔵穴・壁下溝などは不明である。出土遺物は少量で、塔・甕などがある。



第247図 C-55号住居跡

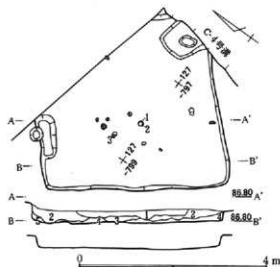
第3章 検出された遺構と遺物

C-56号竪穴跡 (第248図 P L. 75)

座標値X=125~128・Y=-795~-800の範囲にある。C-4号溝(中世以降)・C-60号住居跡(古墳前期)と重複するが、C-60号住居跡との新旧関係は不明である。北東半は元道にかり全容は不明であるが、北西~南東方向に長軸をもつ方形を呈しよう。長軸3.9m・短軸3.6m、床面積12.0+0㎡、確認壁高は約30cmで直線・直立する。長軸方位はN-36°-Wを示す。埋土は大別2層で上位層には混入物はなく、下位層にLoam粒が多く混じる。

床面は平坦で、床下には顕著な掘形をもたない。炉跡・柱穴などは検出されていない。

出土遺物は主に床面からであるが、少量・散在的である。小型甕・白付き甕など小片である。



- C-56層
1. 暗褐色土 C軽石粒多量・砂
  2. 暗褐色土 Loam粒・C軽石粒混
  3. 黒褐色土 C軽石粒多量・黒色土混・砂
  4. 褐色土 Loam大粒・C軽石粒混
  5. 褐色土 Loam粒・C軽石粒混・軟

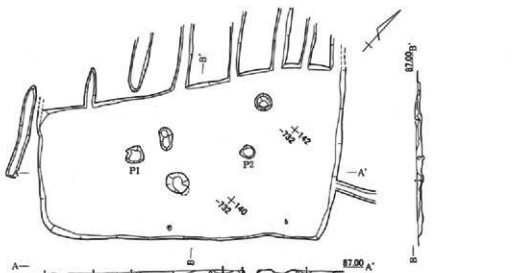
第248図 C-56号竪穴跡

D-01号竪穴跡 (第249図)

座標値X=137~143・Y=-730~-735の範囲にある。1号周溝墓台部に検出され、北西半の壁線は削平のためか消失している。また、周辺には北西南東走るサク状条痕が走り、残余の部分も床面まで削平がおよび壁線の痕跡を確認するに止まる。当跡は周溝墓・サク状条痕兩者より古い。平面形状は方形と考えられる。規模は北東~南西軸長が6.4mを測り、北西~南東軸は3.5mの範囲まで確認されている。北東~南西軸線方位はN-50°-Eを示す。

床面は平坦をなすが遺存状況は極めて不良である。掘形埋土(床土)には黒色土に褐色土を混ざる。位置的に柱穴に想定される2穴(P1・P2)を検出したが掘形が浅く確定的ではない。間寸法は2.4mを測る。

出土遺物はない。



- D-01層
1. 黒色土 C軽石多量・褐色土少量混
  2. 黒色土 均質・Loam多量混
  3. 黄褐色土 Loam主体(地山)均質

第249図 D-01号竪穴跡



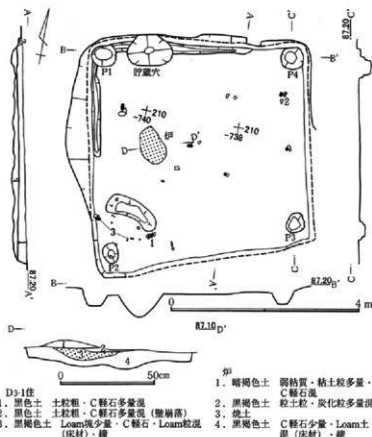
## D&gt;1号住居跡 (第250図 P.L.75)

座標値  $X=206-211$ ・ $Y=-736--741$ の範囲にある。工境-13号(平安)・D>13号・D>18号住居跡(古墳前期)と重複する。D>13号住居跡より旧いがD>18号住居跡との新旧関係は不明である。平面形状は南北方向に若干の長軸をもつ略方形を呈するが、西壁線が長く南西隅部に歪みが生じている。規模は長軸4.9m・短軸4.7m、床面積19.8+ $\theta$ m<sup>2</sup>、確認壁高は20cmである。長軸方位はN-10°-Wを示す。埋土は大別1層で混入物の少ない黒色土である。

炉跡は北西寄りにあり床土を窪めた浅い皿状で径70×50cmの楕円形である。火床には薄く粘土材を塗布した痕跡が残る、被熱が著しい。

床面は平坦である。床下10~15cmの掘形をもち、床土にはLoam粒・塊を少量混じえる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴であるが、通常的位置とは異なり四隅に配される。径40~50cm・深さ15~20cmで、柱間寸法は北列(P1・P4)4.0m・南列(P2・P3)3.9m・東列(P3・P4)3.5m・西列(P1・P2)4.2mを測る。壁下溝と考えられる痕跡は北壁から西壁の一部にみられ、幅10cm前後・深さ5cm程度である。貯蔵穴は北壁沿いの西側に偏ってある穴が相当しようか。上縁径100×60cm・深さ50cmの楕円形、すり鉢状である。

出土遺物は少なく散在的である。甕・高坏・壺などのほか石製勾玉がある。



第250図 D&gt;1号住居跡

## D&gt;2号住居跡 (第251図 P.L.75)

座標値  $X=165-174$ ・ $Y=-670--680$ の範囲にある。壁際に多量の焼土分布。炭化材・物が検出されているが、床面から数cm浮いた状態であり住居埋没途上での被火行為があったと考えられる。平面形状は北西~南東方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸7.9m・短軸7.3m、床面積53.6m<sup>2</sup>、確認壁高は20cmである。長軸方位はN-31°-Wを示す。埋土は大別1層でLoam土が斑点状に混入する暗褐色土である。人為的埋土か攪乱土の流入と考えられる。

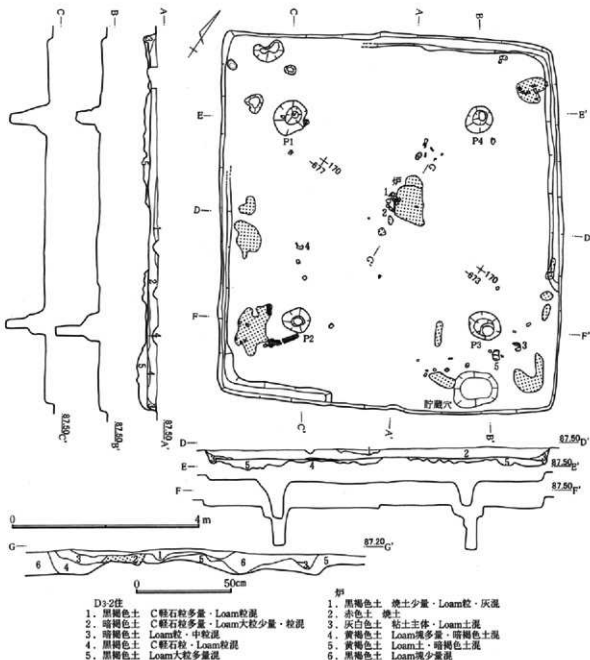
炉跡は中央やや北西寄りにあり、上面には薄く灰層が残る。径80cmの楕円形を呈し、床土を僅かに窪めてある。縁部には灰白色の粘土帯がみられ、火床にも粘土材が塗布されている。

床面は平坦をなす。床下は四壁沿いを低く窪め、中央部に高まりを残す。床土はLoam土・黒褐色土の混土を充填する。柱穴は4穴で径60cm前後、深さ60~80cmで略円形の掘形をもつ。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が4.0m、東列(P3・P4)4.5m・西列(P1・P2)4.4mを測る。壁下溝

第3章 検出された遺構と遺物

は床面では確認できなかったが、掘形面でもその一部を検出した。本来は全周していたと考えられる。幅・深さとも10cmほどである。貯蔵穴は南東部隅にあり、90×70cm・深さ60cmの長方形を呈する。

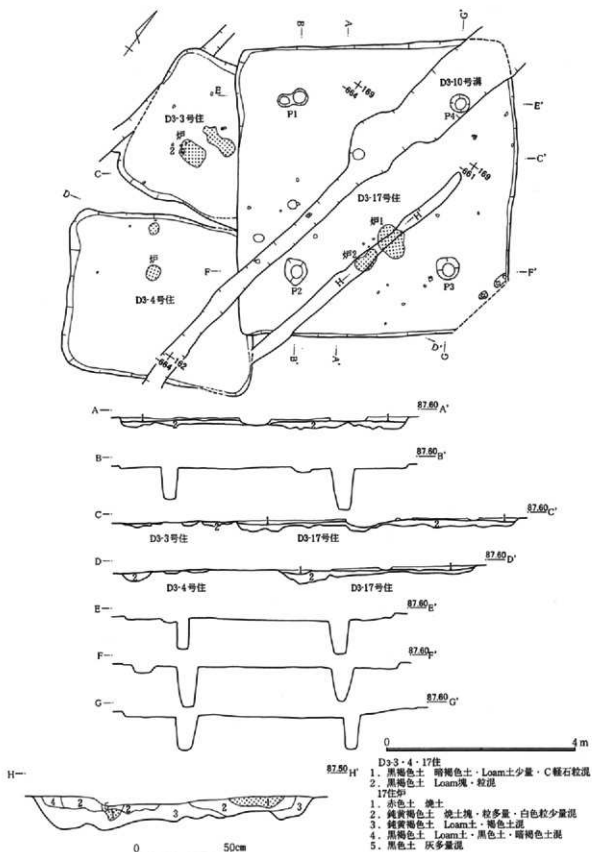
出土遺物は少量で散在して見られる。壺・高坏などがある。



第251図 D3-2号住居跡

D3-3号住居跡 (第252図 P L. 75)

座標値X=164~167・Y=-663~-667の範囲にある。東縁はD3-17号住居跡(古墳前期)と南東部でD3-4号住居跡(古墳前期)とそれぞれ重複するが新旧関係は前者より新しく、後者との関係は判明していない。一部が消失したため全容は不明であるが、平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形を呈しよう。規模は長軸3.5+ $\varnothing$ m・短軸2.9m、床面積8.5+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は10cmに満たず検出面は床面直上に近い。長軸方位は



第252図 D3-3・4・17号住居跡

N-87-Eを示す。

炉跡は中央やや南西寄りにあり、径55×40cmの楕円形で床面を僅かに窪める地床炉である。

床面は平坦をなす。床下掘形は浅く、壁沿い四周は幅約50cmで僅かに窪める。中央部は約1.5m方形域が微妙に高まる。床土はLoam土を混ざる黒褐色土である。柱穴・貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物は極少である。S字口縁甕・模造土器がある。

#### D<sub>3</sub>-4号住居跡 (第252図 P L. 75)

座標値X=160~164・Y=-663~-667の範囲にある。D<sub>3</sub>-3号・D<sub>3</sub>-17号住居跡(古墳前期)と重複し、後者より新しいが前者との関係は不明である。重複によって検出が床面であったため住居範囲は明確ではない。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形になろう。規模は長軸4.0m・短軸3.5m、床面積12.1+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は痕跡程度である。長軸方位はN-64'-Eを示す。

炉跡は中央やや北側に寄っており、径35×30cmの楕円形範囲が焼土化している。地床炉である。

床面は平坦をなす。床下掘形は東壁沿いを幅広く、他壁は約50cmの幅で窪ませ西側にやや偏った2×1.5mの範囲が高まりとなる。床土はLoam土を混じえる黒褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物はない。

#### D<sub>3</sub>-17号住居跡 (第252図 P L. 75)

座標値X=163~171・Y=-659~-666の範囲にある。D<sub>3</sub>-3号・D<sub>3</sub>-4号住居跡(古墳前期)と重複するが両者より古い。住居中央部にD<sub>3</sub>-10号溝が南北走する。平面形状は北東~南西方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸6.1m・短軸5.9m、床面積34m<sup>2</sup>、確認壁高は痕跡程度で7cm弱である。長軸方位はN-35'-Wを示す。

炉跡は中央やや南東に寄って2箇所近接してある。炉底は床土を窪め浅い皿状である。炉跡1は径80×60cm・炉跡2は径50×30cmでともに不整楕円形を呈し、地床炉である。残存状況から炉跡1が後出と考えられる。

床面は平坦をなす。床下掘形は四壁沿いを5~10cmの深さに窪め中央部分約3.5m方が高まりをなす。床土はLoam土を混ざる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径約50cm・深さ65~70cmの略円形掘形である。柱間寸法は北列(P1・P4)・東列(P3・P4)が3.4m、南列(P2・P3)3.2m・西列(P1・P2)3.6mを測る。貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物は極少で図示できる物は無い。

#### D<sub>3</sub>-5a・b号住居跡 (第253図 P L. 75)

D<sub>3</sub>-5号住居跡は拡張建て替えが考えられる遺構である。座標値X=153~161・Y=-659~-667の範囲にある。D<sub>3</sub>-5a号は拡張後、D<sub>3</sub>-5b号は拡張前の住居跡である。

D<sub>3</sub>-5a号住居跡 D<sub>3</sub>-5b号住居跡を対角線の等距離拡張によるものである。東辺部が調査区外にはいり全容は明らかではない。平面形状は東西方向に若干の長軸をもつ方形を呈すると考えられる。規模は長軸7.2m・短軸6.8m、床面積47.0+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は痕跡程度である。長軸方位はN-70'-Eを示す。

炉跡は中央やや南西寄りにあり、一部がD<sub>3</sub>-10号溝によって消失するが火床焼土面の残存は良好である。

径90×80cmで床土を浅い皿状に窪めた地床炉である。

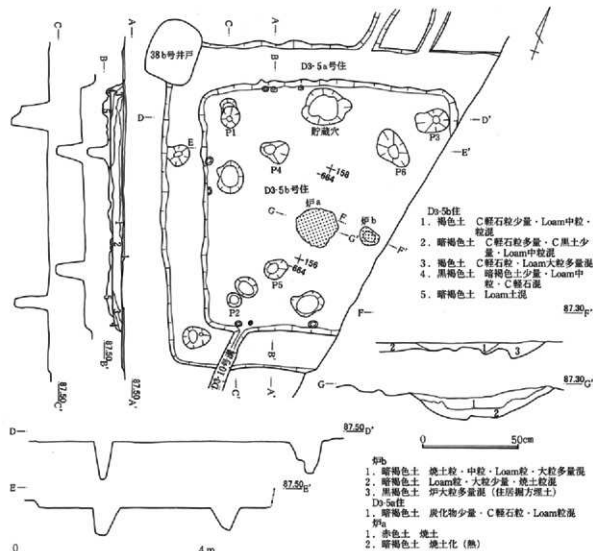
床面は平坦である。床土はLoam土・暗褐色～黒褐色土の混土を充填する。柱穴は南東に想定される1穴を除き3穴検出した。径30～40cm、P3は掘形が大きく径70×50cm、深さ70～80cmの楕円形をなす。柱間寸法は北列(P1・P3)4.4m・西列(P1・P2)3.8mを測る。貯蔵穴は検出されない。

D-5b号住居跡 拡張後前者の掘形での検出である。平面形状は長短軸長差のない方形を呈する。規模は軸長5.2m、床面積25.5+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、壁高は約30cmが残る。軸方位はD-5a号とほぼ一にするN-70°-Eを示す。埋土は大別2層でLoam土の多く混じる暗褐色土で、拡張時の埋土であろう。

炉跡は中央やや南西寄りにあり、径50cmの浅い楕円形の地床炉である。

床面は平坦である。床下掘形は壁沿い幅50～60cmで窪みが通る。中央部は約3.5m方形の高まりとなる。床土はLoam土が混じる暗褐色土を充填する。柱穴の検出は3穴である。P4は径60×50cm・深さ60cm、P5は径40cm・深さ60cm、P6は径90×50cm・深さ50cmである。柱間寸法は北列(P4・P6)・西列(P4・P5)とも2.5mを測る。貯蔵穴は北壁際にあり、径80cm・深さ40cmでやや方形気味をなす。

出土遺物は少なく、図示した遺物はD-5b号住居跡の埋土中のものである。壺小片と模造土器がある。



第253図 D-5a・b号住居跡

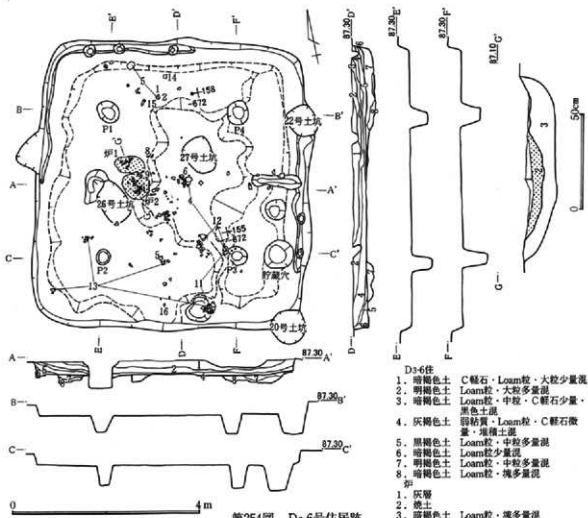
D<sub>3</sub>-6号住居跡 (第254図 P.L.75)

座標値 X=153~159・Y=-669~-676の範囲にある。D<sub>2</sub>-2号掘立柱建物跡と重複しこれより古い。平面形状はほぼ南北方向に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸6.0m・短軸5.6m、床面積30.7㎡、確認壁高は30cmで壁面は直線的で立ち上がりは直立気味になる。長軸方位はN-17°-Eを示す。埋土は大別3層で下位層に粘土質灰褐色土が堆積する。総体的にLoam粒・塊の混入が多く、自然・人為の区別はし難いが短期・集中的な埋没の様相が窺える。

炉跡は中央部やや西寄りにあり、床土を浅く皿状に窪めた径60cmの略円形を呈する床炉である。炉内及び北縁に薄く灰層が分布する。

床面は平坦をなす。床下掘形は四壁沿いを幅30~40cm・深さ10~15cmの凹帯を巡らせる。床土はLoam土を混する黒褐色・暗褐色土を充填する。柱穴は4穴で径30~40cm・深さ50cmほどの略円形の掘形をもつ。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が2.8m、東列(P3・P4)3.0m・西列(P1・P2)3.1mを測る。壁下溝は北・西壁及び南壁の一部に検出した。幅・深さとも10cm前後である。検出が掘形段階であったため、本来は全通していた可能性が高い。また、溝内には幾つかの小穴が認められる。貯蔵穴は南東隅部にあり、径60cm・深さ40cmの略円形を呈す。

遺物は炉跡周辺及び南側に数個体の壺類が圧壊状態で出土する。

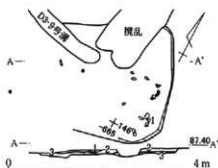


第254図 D<sub>3</sub>-6号住居跡

D<sub>3</sub>-7号竪穴跡(第255図)

座標値X=145-148・Y=-664~-666の範囲にある。削平が深く、西側の壁線は検出できない。平面形状は北東-南西方向に長軸をもつ隅隅丸の方形になろう。規模は長軸2.5+ $\varnothing$ m・短軸2.5m、床面積は計測不能で6 $\text{m}^2$ 足らずの小面積と思われる。確認壁高は北東面壁で7cm前後である。北東面壁線の軸方向はN-23°-Wを示す。床面検出部分が狭少で詳細は不明である。柱穴等は検出されない。

出土遺物は少なく、埴土より小型単口縁台付寛1点のみである。



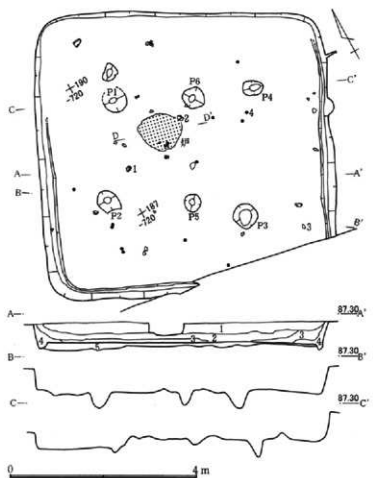
- D<sub>3</sub>-7号  
 1. 暗褐色土 砂質  
 2. 暗褐色土 C軽石・Loam粒少量混  
 3. 黄褐色土 Loam土多量・黒色土混

第255図 D<sub>3</sub>-7号竪穴跡D<sub>3</sub>-8号住居跡(第256図 P L.76)

座標値X=184~191・Y=-714~-722の範囲にある。調査が複数次にわたり南隅部が未検・消失している。平面形状は北西-南東方向に長軸をもつ隅隅丸気味の方形を呈す。規模は長軸6.3m・短軸6.0m、床面積は33.4+ $\varnothing$  $\text{m}^2$ 、確認壁高は約40cmで、壁面は直線的で直立気味に立ち上がるが上縁はやや傾斜が緩い。長軸方位はN-64°-Wを示す。埋土は大別3層で下位層はLoam塊の混入が極めて多い灰黄褐色土である。人為的または攪乱土の流入と考えられる。

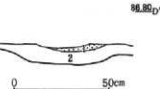
炉跡は中央やや北西に寄り、径90×80cmの円形で浅く皿状に窪む地床炉である。

床面は平坦をなすが、湿気が多くやや不安定である。床下掘形は壁際幅1m・深さ10cm程度の窪みが廻り、中央部に高まりを作る。床土はLoam土・黒色土・暗褐色土の混土を充填する。柱穴は6穴で主柱はP1~P4の4穴で径約50cm・深さ40~60cm、間柱と考えられるP5・P6は浅めで30cm程度である。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が3.0m、東列(P3・P4)2.7m・西列(P1・P2)



- D<sub>3</sub>-8住  
 1. 褐灰色土 C軽石粒多量・中粒極少量・Loam粒少量混  
 2. 灰褐色土 酸化鉄分・Loam塊多量・黒色土混  
 3. 褐灰色土 Loam粒少量混  
 4. 褐灰色土 Loam粒・中粒・C軽石粒混  
 5. 黒褐色土 Loam塊多量・黒色・暗褐色土混

- 炉  
 1. 赤色土 埴土  
 2. 黒褐色土 Loam塊多量・黒色・暗褐色土混

第256図 D<sub>3</sub>-8号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

2.1mを測る。北柱列と南柱列間にある間柱は各結線の僅か内側に配される。壁下溝は未検出の部分があるものの全周すると考えられる。幅10~15cm・深さ10cmと比較的明瞭な掘形をもつ。貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物は散在しており、甕・模造土器等埋土中からが多い。

#### D<sub>3</sub>-10号住居跡 (第257図 P L. 76)

座標値 X = 201 ~ 206 · Y = -748 ~ -753 の範囲にある。

D<sub>3</sub>-14号竪穴跡 (古墳前期) と重複しこれより旧く、南半は消失している。平面形状は北西~南東方向に若干の長軸をもつ略方形を呈しよう。規模は長軸4.1+0m・短軸3.9m、床面積は13.1+0㎡になろう。確認壁高は約30cmで壁面は直線的で直立気味である。長軸方位はN-31°-Wを示す。埋土は混入物の少ない暗褐色土である。

炉跡はほぼ中央にあるが大半はD<sub>3</sub>-14号によって破壊され、浅く皿状に窪む地床炉と考えられる。

床面は平坦と思われ、床下の掘形は北東~北西面壁沿いを1m前後の幅で僅かに窪ませる。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。

出土遺物は少なく、甕類の他形状不明のスサ入り土板小片がある。



第257図 D<sub>3</sub>-10・14号住居跡・竪穴跡

#### D<sub>3</sub>-14号竪穴跡 (第257図 P L. 76)

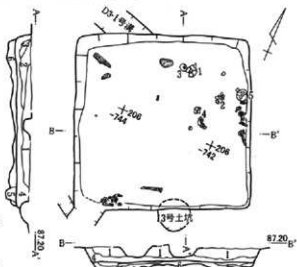
座標値 X = 200 ~ 204 · Y = -749 ~ -201 の範囲にある。D<sub>3</sub>-10号住居跡 (古墳前期) と重複し、これより新しい。平面形状はほぼ南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸3.6m・短軸2.9m、床面積8.6㎡、確認壁高は約35cmで壁面は法幅が広く傾斜をもつ。長軸方位はN-5°-Eを示す。埋土は混入物の少ない黒褐色土を主にする。炉跡・柱穴などは検出されない。

出土遺物は甕類が目立ち、北東寄り、床面より10~20cmの埋土中に多い。

#### D<sub>3</sub>-11号竪穴跡 (第258図 P L. 76)

座標値 X = 204 ~ 208 · Y = -740 ~ -745 の範囲にある。D<sub>3</sub>-13号竪穴跡 (古墳前期) と重複するがこれより古い。壁沿い数地点に炭化材が残り被火している。平面形状は長短軸長差のない方形を呈する。規模は軸長3.7m、床面積11.6㎡、確認壁高は30cmで直線的な壁面をなす。略東西軸線

- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| D <sub>3</sub> -11号 | C軽石多量             |
| 1. 黒褐色土             | C軽石・Loam粒多量・中粒少量混 |
| 2. 暗褐色土             | C軽石・Loam粒混        |
| 3. 暗褐色土             | C軽石・Loam粒少量・C軽石混  |
| 4. 黒色土              | C軽石・Loam粒少量混      |
| 5. 黒色土              | C軽石・Loam粒少量混      |
| 6. 暗褐色土             | C軽石少量・Loam土混・砂    |



第258図 D<sub>3</sub>-11号竪穴跡



方位はN-70°-Eを示す。埋土は大別2層で混入物の少ない黒色土である。

炉跡は検出されない。床面は平坦をなす。床下掘形は壁縁辺が不規則に窪み、中央部は高まりとなる。床土はLoam土を混ざる暗褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は床面より、台付甕・高坏・壺などがある。

#### D<sub>3</sub>-12号住居跡 (第259図 P L. 76)

座標値 X = 199 ~ 202 · Y = -736 ~ -741 の範囲にある。北部はD<sub>3</sub>-13号竪穴跡(古墳前期)と重複しこれより旧く、東隅部は湧水対策工事によって消失している。平面形状は長短軸長差のない隅丸の方形を呈しよう。規模は軸長4.0m、床面積14.2+0㎡、確認壁高は30cmで、壁面は直線的だがやや傾斜をもつ。北東-南西軸方位はN-46°-Eを示す。埋土は大別2層で混入物の少ない暗褐色土である。

炉跡は中央やや北東寄りにあり、径70cmで南縁に半欠の転石を据えている。床土を皿状に窪める床炉である。

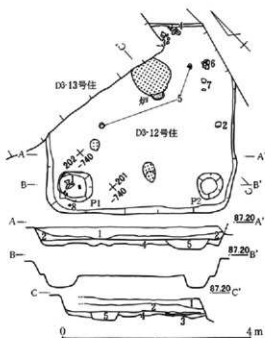
床面は平坦で、炉跡周辺は堅牢である。床下掘形はほぼ10cmの均一な深さである。床土はLoam土を混ざる黒褐色土を充填する。柱穴に相当する可能性のものは2穴(P1・P2)の検出であるが消失部分にあったかと考えられ、本来4穴で隅部に配される形態であろうか、しかし浅い掘形であり貯蔵穴の形状に類する。

P1は径60×70cm・深さ20cmで略方形、P2は径55×50cm・深さ20cmの円形の掘形をもつ。P1・P2間寸法は2.7mを測る。P1より完形度の高い高坏が出土している。

出土遺物は高坏・甕類の他P1の縁より石製勾玉がある。

#### D<sub>3</sub>-13号竪穴跡(第260図 P L. 77)

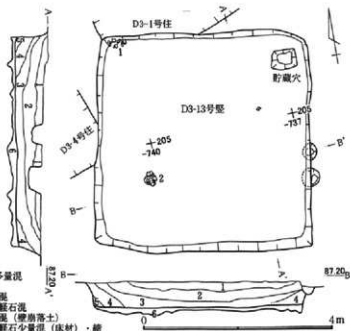
座標値 X = 202 ~ 207 · Y = -736 ~ -741 の範囲にある。D<sub>3</sub>-1号・D<sub>3</sub>-12



D<sub>3</sub>-12住

1. 暗褐色土 C軽石多量・Loam粒・中粒混
2. 黒褐色土 Loam粒少量・C軽石混
3. 黒色土 焼土粒多量・灰混(中班上灰層)
4. 黒褐色土 Loam埋土・C軽石少量混
5. 暗褐色土 C軽石・Loam粒・中粒少量混

第259図 D<sub>3</sub>-12号住居跡



第260図 D<sub>3</sub>-13号竪穴跡

D<sub>3</sub>-13竪

1. 暗褐色土 C軽石・白色粒多量混
2. 黒色土 C軽石混
3. 暗褐色土 C軽石・Loam粒混
4. 黒褐色土 Loam粒少量・C軽石混
5. 黄褐色土 Loam粒・塊多量混(壁崩落土)
6. 暗褐色土 Loam土多量・C軽石少量混(床材)・縁

### 第3章 検出された遺構と遺物

号住居・D<sub>3</sub>-11号堅穴（古墳前期）と重複し、前2者より新しく後者より古い。平面形状は略南北軸に若干の長をもつ方形を呈する。規模は南北軸4.6m・東西軸4.5m、床面18.2m<sup>2</sup>、確認壁高58cmで壁面は直線的で上縁の傾斜が緩くなる。長軸（南北）方位はN-12°-Eを示す。埋土は大別3層で上層にはAs-Faが混じるが、Loam塊などの混入物は少なく自然堆積になろう。炉跡は無い。

床面は平坦である。床下掘形には壁沿いに不規則な窪みが廻り、中央部は高まりとなる。床土はLoam塊を混ざる暗褐色土を充填する。柱穴は検出されていないが、東壁中央縁辺線線にかかり小2穴がある。径は30cm、堅穴検出面よりの深さ30cmである。穴間は60cm、出入り口施設に関わるものであろうか。貯蔵穴は北東隅部にあり、径50×40cm・深さ20cmの方形を呈する。

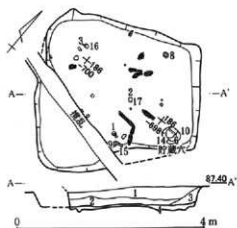
出土遺物は北西隅壁際に榑式土器片が床面より僅かに浮いて検出されている。他には甕・模造土器などいづれも埋土中である。

#### D<sub>3</sub>-15号堅穴跡（第261図）

座標値X=183~187・Y=-697~-701の範囲にある。平面形状は北東~南西方向に若干の長軸をもつ不整形方形を呈す。壁は南西面壁線が拡張し隅部は丸味をもつ。規模は長軸3.5m・短軸3.3m、床面積8.0m<sup>2</sup>、確認壁高は40cmで壁面は直線・直立するが上縁の傾斜が緩い。長軸方位はN-53°-Eを示す。埋土は大別2層で混入物の少ない暗褐色土からなるが、水分による鉄分凝固が著しい。炉跡は検出されない。

床面は平坦である。床下は壁沿い四周が幅1m弱で窪みを廻らし、中央は若干高まる。床土はLoam塊を多く混ざる。黒褐色土を充填する。被火しており、床面には家屋構造材と考えられる炭化物が残る。貯蔵穴は東隅部にあり、径35cm・深さ40cmの略円形を呈す。柱穴は検出されていない。

出土遺物は高坏・壺・S字口縁台付甕・模造土器などがある。



- D<sub>3</sub>-15堅  
 1. 暗褐色土 C軽石・鉄分土塊  
 2. 暗褐色土 C軽石・Loam塊  
 3. 黒褐色土 Loam塊  
 4. 黒褐色土 砂質・Loam塊少量混

第261図 D<sub>3</sub>-15号堅穴跡

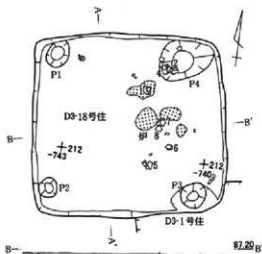
#### D<sub>3</sub>-18号住居跡（第262図 P.L.77）

座標値X=210~214・Y=-739~-743の範囲にある。D<sub>3</sub>-1号住居跡（古墳前期）と重複するが前後関係は確定できない。平面形状は東西方向にわずかに長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.05m・短軸3.85m、床面積13.6m<sup>2</sup>、確認壁高は30cmで壁面は直線的で立ち上がりは直立気味で

D<sub>3</sub>-18住

1. 暗褐色土 C軽石・Loam粒多量混  
 2. 黒褐色土 C軽石・Loam粒混  
 3. 暗褐色土 C軽石・Loam粒少量混  
 4. 暗褐色土 C軽石・Loam粒少量混  
 5. 褐色土 Loam混

0 4m



第262図 D<sub>3</sub>-18号住居跡

ある。長軸方位はN-79°-Eを示す。埋土は大別3層で上位2層がLoam塊の多く混じる暗～黒褐色土で、埋設途中での人為的埋土か攪乱土の流入があったと考えられる。

炉跡は中央やや東に寄り、径50×40cmの楕円形に床土を浅く皿状に窪め地床炉としている。周辺には焼土粒の分布が見られる。

床面は平坦である。床下掘形は西半部を僅かに窪める。床土はLoam土塊が多く混じる褐色土を充填している。柱穴は掘形段階の検出で確認はできないが、四隅壁際に浅い4穴が認められている。当遺跡では四隅に配する形態が知られておりこれに該当する可能性もある。各穴間寸法は北列(P1・P4)2.7m・南列(P2・P3)3.1m、東列(P3・P4)・西列(P1・P2)は2.8mを測る。貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物は中央床面に瓦片が多く他に高坏等がある。

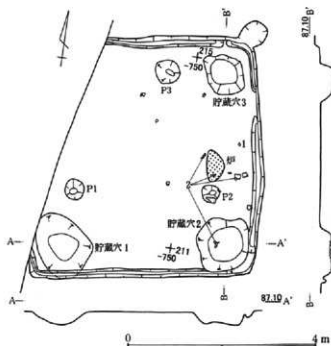
#### D>19号住居跡 (第263図 P L.77)

座標値X=210~215・Y=-748~-752の範囲にある。西側の一部は現道(調査時)下にかかり全容は不明である。平面形状は長短軸長差のない方形を呈しよう。規模は軸長約5.1m、床面積24+ $\theta$ m<sup>2</sup>、確認壁高は10cm足らずである。南北軸方位はN-9°-Wを示す。

炉跡は東壁際であり、径60×40cmの楕円形の浅い皿状に窪む地床炉である。周辺には炭化物粒・焼土粒が分布する。

床面は平坦である。湿気が多く確認に困難な部分が多かったが炉跡周辺は比較的堅牢さが残っていた。柱穴は北西部に有ろう1穴を除き3穴を検出したが、北東部のP3の配置に整合性が無い。P1・P2は径40cm・深さ30cmで柱間寸法は3.0mを測る。壁下溝は全周すると考えられる。幅・深さ10cmあまりになる。貯蔵穴は各壁三隅に類似する落ち込みがあり、特定できる状況はいずれからも得られず不明である。三者とも径1m前後・深さ20~30cmである。

出土遺物は少なく、瓦片などである。



第263図 D>19号住居跡

#### D>20号住居跡 (第264図 P L.77)

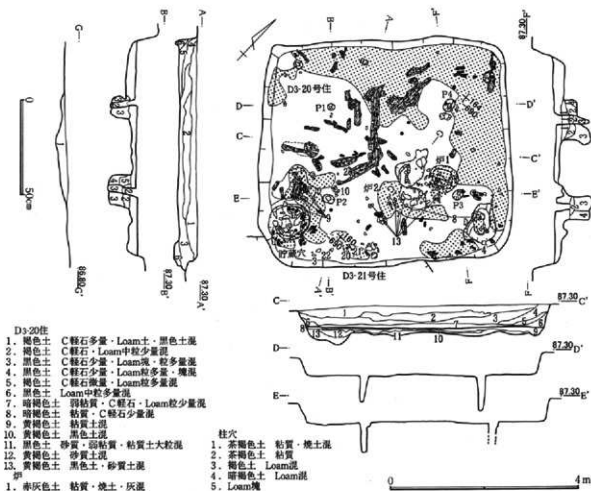
座標値X=158~164・Y=-686~-693の範囲にある。D>21号住居跡(古墳前期)と重複しこれより古い。床面上にはかなり多量の炭化材がのこり、被火住居である。平面形状は北東~南西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸5.2m・短軸4.8m、床面積21.3m<sup>2</sup>、確認壁高は約40cmで直線・直立気味に立ち上がるが、上縁は崩れのためか傾斜を緩くする。長軸方位はN-47°-Eを示す。埋土は大別3層からなるが、調査所見では多くの遺物に炭化材が重なり、さらにLoam塊が不連続に堆積する状況から家屋焼失中の

消火行為があった可能性も考えられている。

炉跡は中央やや東側に寄り、2箇所の火床を検出した。炉1は径60cmの円形で皿状に窪む。炉2はこれより小規模で径30cmの窪みである。炉1が後出と思われるが両者とも地床炉である。

床面は平坦・堅牢である。床下掘形は壁際1m幅で四周を窪め、中央部は若干の高まりとなる。床土はLoam塊が混じる暗灰褐色土を充填する。柱穴は4穴で径70~90cm、深さ70~80cmの掘形をもつ。柱間寸法は北列(P1・P4)2.5m・南列(P2・P3)2.7m・東列(P3・P4)・西列(P1・P2)2.0mを測る。貯蔵穴は南隅にあり、径80cm・深さ35cmの円形を呈する。

出土遺物は多く、貯蔵穴とその周辺及び炉跡付近に集中する。甕類が多く、壺・高坏・模造土器がある。



第264図 D3-20号住居跡

D3-21号住居跡 (第265図 P L. 77)

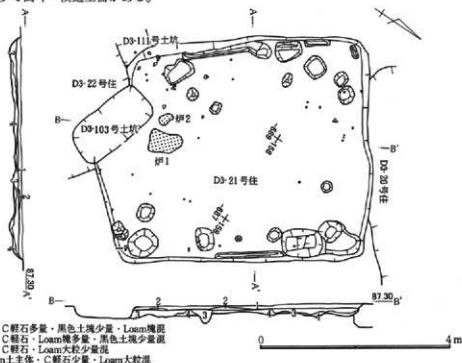
座標値X=154~160・Y=-685~-691の範囲にある。D3-20号・D3-22号住居跡(古墳前期)と重複する。前者より新しいが後者との関係は不明である。平面形状は北東~南西方向に長軸をもつ略方形を呈するが、南東面壁線が鈍角になりやや不整形になる。規模は長軸約5.5m・短軸4.7m、床面積23.0m<sup>2</sup>、確認壁高は10cm未満で浅い。長軸方位はN-33°-Wを示す。埋土は床面直上の薄層で、Loam塊の多い暗褐色土で床土の浮土であろうか。

炉跡は大小2箇所で南に偏ってある。炉1は径70×50cmの不整楕円形で床土を浅く窪める地床炉である。

炉2は径30cm前後の範囲が被熱火床面として残る。炉1の前段階のものであろう。

床面は平坦をなす。床下掘形は壁沿いが1～1.5m幅で若干窪み、中央部が高まりを作る。床土はLoam土が混じる暗灰褐色土を充填する。柱穴は通常4穴対応の配置にあるものは検出されない。北東面壁沿いに深さ30cm前後の小穴列を抽出し得るが相対のものは見られない。壁下溝は南西面壁下に部分的検出である。幅10cm・深さ8～10cmで断続的である。貯蔵穴相当の穴は北・東両側に見られるがいずれとも確定できない。

出土遺物は極少で高坏・模造土器がある。



第265図 D3-21号住居跡

#### D3-22号住居跡 (第266図 P L. 78)

座標値X=151～155・Y=-684～-689の範囲にある。D3-21号住居跡(古墳前期)と重複するが新旧関係は不明である。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸3.9m・短軸2.4m、床面積11.9㎡、確認壁高は5～6cmで痕跡程度である。長軸方位はN-48°-Eを示す。

炉跡は中央やや東寄りに被熱焼土面を検出した。径30cmほどの浅い皿状の窪みで地床炉である。

床面は平坦で堅牢さはない。床下掘形は壁際が窪み中央部が高まりをなす。床土はLoam塊の混じる暗褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴などは検出されないが、北東面壁際に1穴が穿たれる。径25cm・深さ20cmで穿孔方向は住居内側に傾く。住居構造に関わるかは不明である。

出土遺物は極めて少ない。小型鉢・台部などである。



第266図 D3-22号住居跡

D<sub>3</sub>-23a・b号住居跡 (第267図 P L. 78)

D<sub>3</sub>-23a号住居跡 座標値 X = 159 ~ 165・Y = -700 ~ -706の範囲にある。小片遺物の床上分布や灰化の進んだ炭化層の堆積から家屋廃棄後の意図的な放火住居と考えられる。床下より当跡よりも小規模な住居跡の存在が判明し、南東面・南西面壁線を一致させるところから拡張建て替えによる住居であろう。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸5.2m・短軸4.4m、床面積19.9m<sup>2</sup>、確認壁高は約10cmで浅い。長軸方位はN-50°-Eを示す。薄層でLoam土が斑点状に混じる明褐色土である。

炉跡は中央やや東側に寄っており、径60cmの不整形形で皿状の浅い窪みの地床炉である。

床面は平坦で、中央周辺には堅牢さが残る。北西面壁寄りを中心に薄い炭化層が分布する。焼失家屋になろうが基本的構造材の遺存が無く、家屋放棄後の残余物処分を目的とした放火であろう。床面は前段のD<sub>3</sub>-23b号住居跡をLoam土が混じる暗褐色土で埋して形成する。柱穴に相当する穴は検出されていない。壁下溝は北東・南西面壁下に検出されている。幅10cm・深さ8cm前後である。貯蔵穴と思われる施設は北西面壁沿いに2穴がある。貯蔵穴1は径60×50cm・深さ35cm、貯蔵穴2は径60×45cm・深さ20cmで両者とも楕円形状である。

出土遺物は中央部分に小片で散在する。甕・器台・模造土器などがある。

D<sub>3</sub>-23b号住居跡 座標値 X = 159 ~ 163・Y = -701 ~ -705の範囲にある。拡張建て替えD<sub>3</sub>-23a号住居跡の前段の住居である。南東面・南西面壁線が一致する。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸3.6m・短軸2.8m、床面積9.4m<sup>2</sup>、確認壁高は約16cm、調査面より24cmである。長軸方位はa号住居跡と同じくN-50°-Eを示す。埋土にはa号住居跡の床土になる。

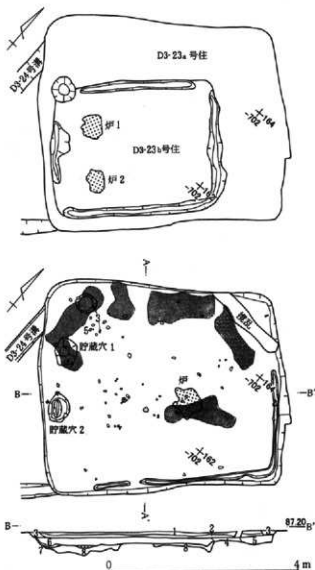
炉跡は西寄りに二箇所検出され、床土を浅く窪めた地床炉で径50×35cm程度の楕円形を呈す。

床面は平坦をなす。床下掘りは径1.5×1.0mほどの楕円形窪みを三箇所に配する。床土はLoam土が混じる黒褐色土を充填する。壁下溝は隅切れ箇所もあるが四壁を巡る。幅13cm前後、深さ5cmほどである。柱穴・貯蔵穴は検出されていない。

図示できる出土遺物は無い。

D<sub>3</sub>-23a・b住

- |         |                   |
|---------|-------------------|
| 1. 明褐色土 | C軽石多量・Loam土混      |
| 2. 黒褐色土 | C軽石少量・Loam粒微量混    |
| 3. 暗褐色土 | 砂質・C軽石少量混         |
| 4. 黄褐色土 | C軽石微量・Loam大粒多量混   |
| 5. 暗褐色土 | C軽石・Loam大粒少量混     |
| 6. 暗褐色土 | C軽石多量・Loam大粒少量混   |
| 7. 暗褐色土 | C軽石多量・Loam大粒混6住層方 |
| 8. 黒褐色土 | C軽石少量・Loam微量混     |



第267図 D<sub>3</sub>-23a・b号住居跡

D<sub>3</sub>-24a号住居跡・b号竪穴跡 (第268図 P L. 78)

D<sub>3</sub>-24a号住居跡 座標値X=179~184・Y=-708~-713の範囲にある。D<sub>3</sub>-9号住居跡(古墳前期)と重複し、これより古い。床下よりD<sub>3</sub>-24b号竪穴跡が検出され、これのほぼ対角線均等拡張による建て替え住居である。平面形状は長短軸長差の小さい略方形を呈する。規模は北西~南東軸4.1m・北東~南西軸4.0m、床面積14.6m<sup>2</sup>、確認壁高は約15cmである。北東~南西軸線方向はN-34°-Eを示す。大別2層で下位には混入物の少ない黒色の薄層が堆積する。

炉跡は中央やや東側に寄っており、径70×65cmの不整楕円形状で床土を浅く窪める地床炉である。

床面は平坦をなし、拡張前のb号竪穴跡に埋土をもって形成する。埋土はLoam粒・塊が混じる暗灰色土を充填する。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。

出土遺物は南西隅部に集中し、埋土中が大半である。甕・壺がある。

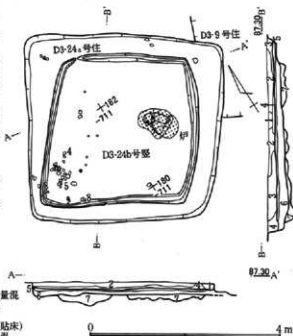
D<sub>3</sub>-24b号竪穴跡 座標値X=179~183・Y=-709~-713の範囲にある。D<sub>3</sub>-24a号住居跡の床下に検出された拡張前段の竪穴である。平面形状は長短軸差のない略方形を呈する。規模は軸長3.2m、床面積は9.1m<sup>2</sup>、確認壁高は14cmで調査面より25cmを有する。北東~南西軸方位はN-36°-Eを示す。炉跡は検出されない。

床面は平坦である。床下掘形は深さ10~25cmで不連続に掘られ、床土はLoam塊が混じる黒褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴などは検出されていない。

出土遺物は少なく、模造土器がある。

D<sub>3</sub>-24a住・b竪

1. 暗褐色土 砂質・複層土
2. 黒褐色土 C軽石多量・Loam大粒少量混
3. 暗灰褐色土 C軽石・Loam塊多量混
4. 黒色土 C軽石多量混
5. 褐色土 Loam大粒多量・C軽石混(地床)
6. 暗灰色土 C軽石・Loam粒少量・塊混
7. 黒褐色土 粘質・土塊混

第268図 D<sub>3</sub>-24a号住居跡・b号竪穴跡D<sub>3</sub>-27号住居跡 (第269図 P L. 78)

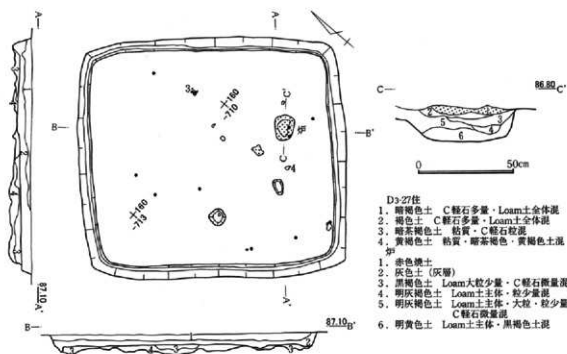
座標値X=156~162・Y=-708~-714の範囲にある。D-148号住居跡(古墳前期)と重複するがこれより新しい。平面形状は北西~南東方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸5.6m・短軸5.0m、床面積24.1m<sup>2</sup>、確認壁高は25cmで、壁面の立ち上がりはやや傾斜をもつ。長軸方位はN-40°-Wを示す。埋土は大別2層でLoam土が塊状及び斑点状に混入する。とくに下位層にLoam塊が多く、人為的または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は南東部に寄り、径50×40cmの楕円形で床土を浅く皿状に窪める地床炉である。

床面は平坦である。床下掘形は南西壁沿いがやや深いほぼ均一な面をなす。床土は黄褐色粘質土に暗褐色土を混じて充填する。壁下溝は四周を巡り、幅10cm・深さ5~6cmである。柱穴・貯蔵穴などは検出されていないが、西側中央部に小穴1穴のみ穿たれる。径・深さ30cm程度である。

出土遺物は少なく、埋土中より甕・壺・高坏など小破片である。

第3章 検出された遺構と遺物



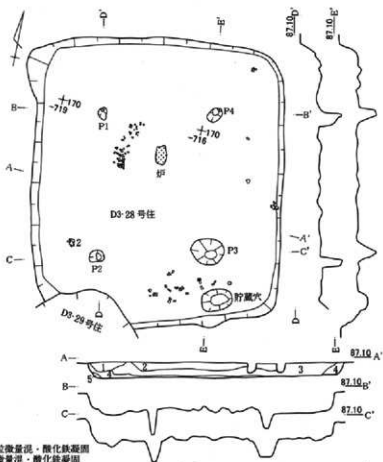
0 4m 第269図 D3-27号住居跡

D3-28号住居跡

(第270図 P L. 78)

座標値  $X=165\sim 171$ ・ $Y=-713\sim -719$ の範囲にある。D3-29号住居跡(古墳前期)と重複し、これより古い。平面形状は南北方向に長軸をもつ略隅丸方形を呈する。規模は長軸6.0m・短軸5.3m、床面積27.5m<sup>2</sup>、確認壁高約30cmで壁面立ち上がりはやや傾斜が緩い。長軸方位はN-8°-Wを示す。堀土は大別2層で下位層に塊・斑点状にLoam土が不連続に混入し、人為的または攪乱土の流入かと考えられる。

炉跡は中央僅か北に寄り、径40×20cmの小振りな炉である。床土を浅く窪めた地床炉である。



0 4m 第270図 D3-28号住居跡

D3-28住

1. 暗褐色土 砂質・C軽石多量・Loam粒微量混・酸化鉄混濁
2. 暗褐色土 砂質・C軽石多量・Loam粒微量混・酸化鉄混濁
3. 明灰褐色土 砂質・C軽石少量・Loam粒・中粒混
4. 黒褐色土 砂質・C軽石・Loam粒混
5. 明黄色土 Loam粒・中粒多量混



床面は平坦である。床下掘形は壁沿いを約1m幅で窪ませ、中央部に高まりを作る。床土はLoam土及び黄褐色粘質土混ざる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径30~40cm・深さ50~60cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)2.5m、東列(P3・P4)・西列(P1・P2)は3.0mを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径65×45cm・深さ30cmの楕円形を呈する。壁下溝は検出されていない。

出土遺物は南側及び炉跡周辺の床面に小片で分布する。鉢・甕・器台などがある。

#### D>29号住居跡(第271図 P L. 78)

座標値X=160~166・Y=-715~-720の範囲にある。D>28号住居跡(古墳前期)と重複しこれより新しい。灰化した炭化層分布が見られるが、構造的な炭化物の遺存はなく残存物処理的な放火とも考えられる。平面形状は長短軸差のない方形を呈する。規模は軸長4.4m、床面積16.2m<sup>2</sup>、確認壁高は40cmで壁面は直線的で直立気味に立ち上がる。北東~南西軸方位はN-50°-Eを示す。埋土は大別4層で部分的に不連続な堆積状況をなす。Loam土粒・塊の混入が多く、人為的または攪乱土の流入が考えられる。

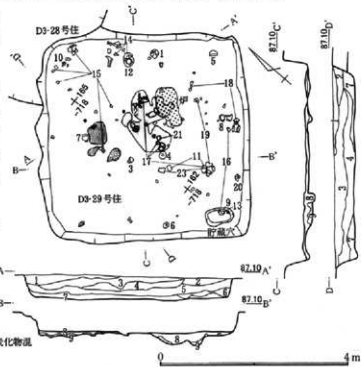
炉跡は中央やや東側に寄り、径70×60cmの不整楕円形で床土を浅く皿状に窪める地床炉である。

床面は平坦である。床下掘形は壁際を浅く窪め、中央部に僅かな高まりを作る。床土は黒色土とLoam塊の混土を充填する。貯蔵穴は南隅にあり径60×35cm・深さ35cmの楕円形を呈す。柱穴・壁下溝は検出されていない。

出土遺物は北東・南東面壁際床面の出土が多く、甕・壺・鉢などがある。

#### D>29住居

1. 暗褐色土 砂質・C軽石多量・Loam粒少量混
2. 暗褐色土 砂質・C軽石多量・Loam大粒少量・酸化鉄凝塊
3. 暗褐色土 砂質・C軽石多量・Loam粒・大粒混・酸化鉄凝塊
4. 暗褐色土 砂質・C軽石・Loam中粒多量混
5. 暗褐色土 C軽石少量・Loam中粒・中央焼土炭化物混
6. 褐色土 C軽石少量・Loam中粒多量混
7. 黒褐色土 C軽石・Loam粒微量混
8. 黄褐色土 粘質・黒色土・C軽石粒・砂質土混
9. 黄褐色土 粘質・黒色土少量・C軽石粒混



第271図 D>29号住居跡

#### D>30号住居跡(第272図 P L. 79)

座標値X=159~164・Y=-719~-725の範囲にある。平面形状は北東~南西方向に若干の長軸をもつ隅丸方形をなす。規模は長軸4.5m・短軸4.2m、床面積16.5m<sup>2</sup>、確認壁高は約15cmで低い。長軸方位はN-40°-Eを示す。

炉跡はやや南側に寄っており、径70×50cmの楕円形で床土を僅かに窪める地床炉である。

床面は平坦をなす。床下掘形は浅く、褐色土とLoam土の混土を充填する。壁下溝は北西・南東面壁の一部に検出した。幅10~20cmで深さは痕跡程度である。貯蔵穴は南隅にあり、径45×40cm・深さ20cmの略円形である。柱穴は検出されない。

出土遺物は少なく、埋土中より壺類がある。

D<sub>3</sub>-31号竪穴跡 (第273図 P L. 79)

座標値  $X = 162 \sim 167 \cdot Y = -725 \sim -729$  の範囲にある。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸4.3m・短軸3.7m、床面積13.9m<sup>2</sup>、確認壁高は25cmで全体に壁面の法幅が広く崩落も考えられるが、壁際の三角堆積は顕著ではない。長軸方位はN-27°-Eを示す。埋土は大別2層で混入物の少ない暗褐色土である。炉跡は検出されていない。

床面は平坦である。床下掘形は壁沿いに不連続な窪みが巡り中央部は若干の高まりをなす。床土は黒色粘質土とLoam土の混土を充填する。柱穴は6穴で、主柱と考えられるP1～P4は四隅に寄っている。補助柱と思われるP5・P6は南列と北列の間に配されるが、いずれも西列(P1・P2)側に偏っている。掘形は平面径は60～30cmの円形で総じて浅く20cm前後である。柱間寸法は北列(P1・P4)2.4m・南列(P2・P3)2.3m・東列(P3・P4)3.1m・西列(P1・P2)2.6mを測る。壁下溝は北西面壁から北東面壁への一部にかかって検出されている。幅・深さ約10cmである。貯蔵穴は見られない。

出土遺物は甕・高坏・模造土器などがあり、床面より僅か浮いた出土状況のものが多い。なお、南西面壁際には台付甕の白部が3個並んだ状態で出土している。

D<sub>3</sub>-31号

1. 暗茶褐色土 粘質・C軽石混
2. 暗茶褐色土 粘質・C軽石微量混
3. 黄褐色土 粘質・C軽石微量混
4. 淡褐色土 C軽石微量・粘質土混
5. 黄褐色土 C軽石微量・粘質土混

D<sub>3</sub>-32号竪穴跡 (第274図 P L. 79)

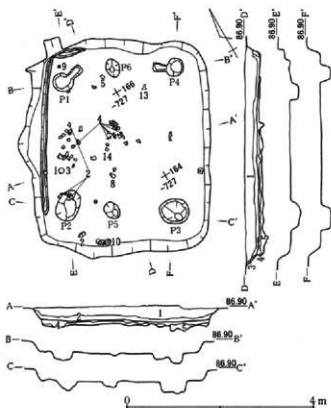
座標値  $X = 184 \sim 188 \cdot Y = -735 \sim -738$  の範囲にある。平面形状は長短軸長差のない方形を呈する。規模は軸長3.1m、床面積8.2m<sup>2</sup>、確認壁高は約25cmである。南北軸方位はほぼ真北を示す。埋土は大別2層で混入物の少ない粘性的ある黒～暗褐色土である。炉跡は検出されない。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。床下掘形は浅く、粘性黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径50～



- D<sub>3</sub>-30号
1. 黒色灰
  2. 焼土
  3. 灰層
  4. 焼土 黒色灰混
  5. 焼土化
  6. 暗褐色土 明褐色土・Loam土混 (住居側方埋土)

第272図 D<sub>3</sub>-30号住居跡



第273図 D<sub>3</sub>-31号竪穴跡

30cm・深さ30cm前後である。柱間寸法は北列(P1・P4)1.2m・南列(P2・P3)1.4m・東列(P3・P4)1.3m・西列(P1・P2)1.0mを測る。貯蔵穴は検出されない。出土遺物はない。

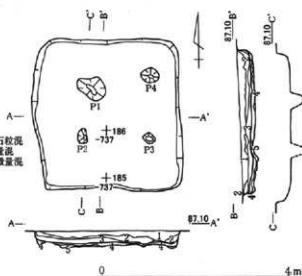
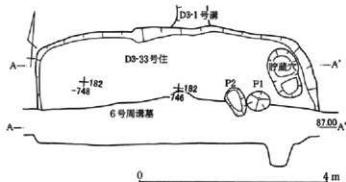
- D<sub>3</sub>-32型  
 1. 黒褐色土 粘質・C軽石粒混  
 2. 暗茶褐色土 粘質土微量混  
 3. 黒色土 粘質・C軽石微量混  
 4. 淡紫色土 粘質  
 5. 黄褐色土 粘質

D<sub>3</sub>-33号住居跡(第275図 P L.79)

座標値X=181~183・Y=-743~-748の範囲にある。南側の大半は6号周溝によって消失し残存範囲は小さい。平面形状は方形になろうか。規模は南北軸長5.9mで東西壁線は1.5mまで遺存する。南北軸線方位はほぼ北を示す。確認壁高は約15cmである。炉跡は検出されない。

柱穴は北東部の1穴(P1)のみの検出である。径50cm・深さ45cmである。貯蔵穴は北東隅にあり、径110×65cm・深さ45cmの楕円形である。

出土遺物はない。

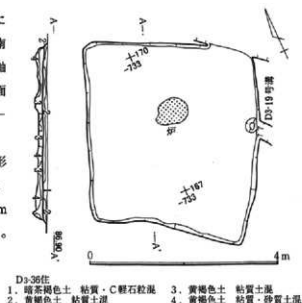
第274図 D<sub>3</sub>-32号壁穴跡第275図 D<sub>3</sub>-33号住居跡D<sub>3</sub>-36号住居跡(第276図 P L.79)

座標値X=165~170・Y=-730~-734の範囲にある。平面形状は北東~南西方向に長軸をもち、南東部がやや張り出す不整形を呈する。規模は長軸4.0m・短軸3.5m、床面積12.7㎡、確認壁高はほぼ床面での検出のため痕跡程度である。長軸方位はN-24°-Eを示す。

炉跡は中央やや北側にあり、径70×50cmの楕円形状を呈する地床炉で火床焼土面の遺存は狭小である。

床面は平坦で、堅牢さはない。床下掘形は約10cmの均一な深さで、黒色土とLoam土の混土を充填する。柱穴・貯蔵穴などは検出されていない。

出土遺物は壺小片が少量見られるにすぎない。



- D<sub>3</sub>-36住  
 1. 暗茶褐色土 粘質・C軽石粒混  
 2. 黄褐色土 粘質土混  
 3. 黄褐色土 粘質土混  
 4. 黄褐色土 粘質・砂質土混

第276図 D<sub>3</sub>-36号住居跡

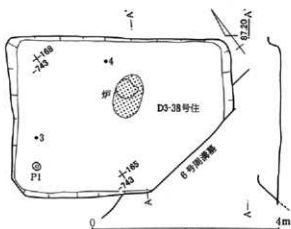
D<sub>3</sub>-38号住居跡 (第277図 P L.79)

座標値 X=164~168・Y=-739~-744の範囲にある。6号周溝墓の台座部にあり、南隅部は周溝によって消失している。平面形状は北西~南東方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.7m・短軸3.3m、床面積13.2㎡、確認壁高は40cmで壁面は直線的で直立気味に立ち上がる。長軸方位はN-55°-Wを示す。埋土は大別3層で混入物の少ない暗褐色土で、最上位には薄層で攪乱Loam土が覆うが6号周溝墓の盛土の可能性が高い。

炉跡は中央やや東に寄っており、窪みの小さな地床炉である。

床面は平坦である。床下掘形は深さ10cm程度で均一である。床土にはLoam土と暗褐色土の混土を充填する。柱穴・貯蔵穴などは検出されていない。

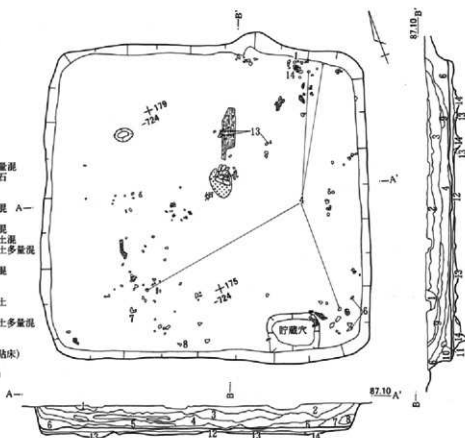
出土遺物は少なく埋土より甕。壺などの破片がある。



第277図 D<sub>3</sub>-38号住居跡

D<sub>3</sub>-39号住居跡 (第278図 P L.79)

- D<sub>3</sub>-39住
1. 暗茶褐色土 粘質 C軽石粒多量混
  2. 暗茶褐色土 粘質・C軽石粒多量混
  3. 茶褐色土 粘質 黄褐色土粒混 A-
  4. 暗茶褐色土 粘質 黄褐色土粒混
  5. 暗茶褐色土 黄褐色粘質土混
  6. 暗茶褐色土 黄褐色粘質土多量混
  7. 暗黒褐色土 粘質土 植物性鉄分混
  8. 黄褐色土 粘質土 壁崩落
  9. 暗茶褐色土 黄褐色粘質土 微量混
  10. 暗茶褐色土 黄褐色粘質土多量混
  11. 黄褐色土 粘質
  12. 黄・黒色土 粘質 (第1使用面跡床)
  13. 黄・黒色土 粘質 (第2使用面)
  14. 黄・黒色土 粘質



第278図 D<sub>3</sub>-39号住居跡

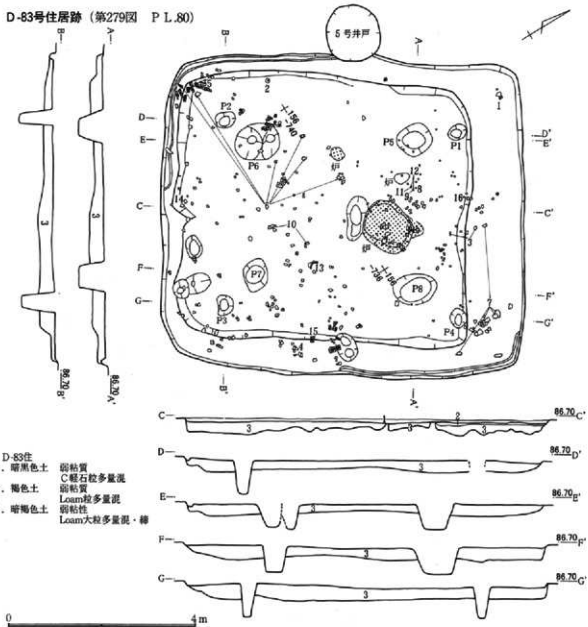
座標値  $X=172\sim 179$ ・ $Y=-719\sim -727$ の範囲にある。確認面ではさく状(凸)条線が重なる。平面形状は南東～北西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.9m・短軸6.6m、床面積39.6㎡、確認壁高は50cmで下半は直立するが上半は傾斜が緩く、壁面の崩落によるものと考えられる。長軸方位は $N-68^{\circ}-W$ を示す。埋土は大別3層で壁際はLoam粒の三角堆積が著しい。暗褐色土とLoam土塊層が互層的に堆積し、人為的または攪乱土の流入と考えられる。

炉跡は中央やや北寄りにあり径60×40cmの楕円形で浅く皿状に窪む地床炉である。

床面は平坦をなし、中央部特に炉跡周辺は堅牢である。床下掘形は壁際は約1.5m幅で窪みが廻り中央部に高まりを作る。床土は黒褐色土とLoam土の混土を充填する。柱穴は7穴(PL.79)ではほぼ拡張なしの建て替えによるものである。貯蔵穴は南隅にあり110×80cm・深さ25cmの方形を呈する。

出土遺物は破片状で散在的に分布する。甕・壺類がある。

D-83号住居跡 (第279図 P L.80)



第279図 D-83号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

座標値  $X=151\sim 160$ ・ $Y=-733\sim -741$ の範囲にある。西壁線中央で5号井戸跡(中世以降)と重複する。2つの柱穴組列と掘形の検出から拡張建て替えの住居跡である。拡張は南西面壁線を共有し、ほぼ対角柱筋の延長線を基軸に成されているようである。前・後段階とも平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸7.6mと6.1m・短軸6.6mと5.6m、床面積は47.8㎡と31.0㎡である。確認壁高は壁線の痕跡程度である。長軸方位は建て替え前後ともN-33°-Eを示す。南西部と南東面壁線に近く家屋構築材の一部と見られる炭化材が分布するが量的に少なく、家屋廃棄後の被火であろう。

後段階に属する炉跡は中央やや北寄りにあり、径100×90cm・深さ10cm程度の浅い楕円形である。炉底には粘性のある黒褐色土を充てる。上面には厚く焼土層が形成されている。前段の炉跡はほとんど形状を止めず掘形面で北寄り部分に小範囲の被熱痕が観察されたにすぎない。

床面は平坦をなす。拡張前段の床面は建て替え時に若干の削平・整地を受けたと考えられる。掘形は後段階床面より約20cmの深さにある。柱穴は前(P5～P8)・後(P1～P4)段階各4穴計8穴が検出されている。P1～P4は径約35cmとやや細身の掘形ながら深さ70cm程度である。P5～P8は径60～90cm・深さ約50cmで遺存する。柱間寸法は北列(P1・P4)3.9m・(P5・P8)3.1m、南列(P2・P3)3.9m・(P6・P7)2.9m、東列(P3・P4)4.9m・(P7・P8)3.4m、西列(P1・P2)4.9m・(P5・P6)3.4mをそれぞれ測る。壁下溝は南東面壁南西面・北西面壁の一部に検出した。幅10cm・深さ10～13cmである。

出土遺物は床面全体に小片状態で分布する。甕・壺・器台などがある。

#### D-84号住居跡(第280回 P.L.80)

座標値  $X=150\sim 158$ ・ $Y=-722\sim -730$ の範囲にある。平面形状は北東北～西方向に長軸をもち比較的整った方形を呈する。規模は長軸6.5m・短軸5.8m、床面積34.5㎡、確認壁高は45cmで壁面の崩れも少なく直立気味に立つ。当遺跡の古墳前期堅穴住居跡としては希な深い掘り込みである。長軸方位はN-47°-Eを示す。埋土は大別3層からなり上位層にはLoam粒が多く、下位は混入物が少ないことから自然埋没過程が進んだ後の人為的埋土が行われた可能性もある。

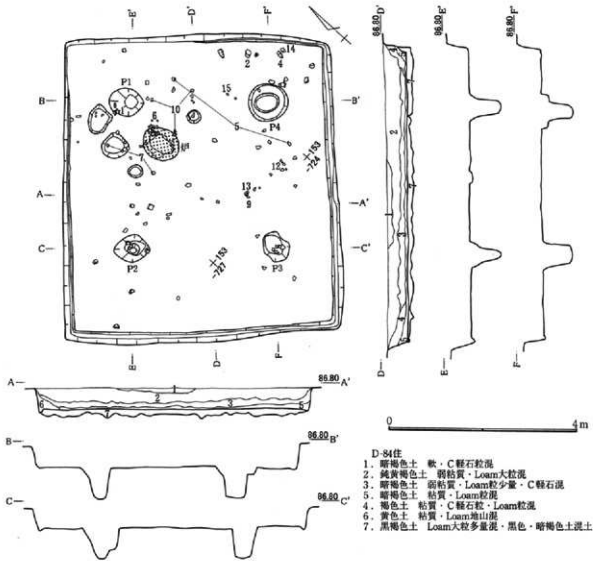
炉跡は中央から北へ偏っており、径40×30cmの浅い楕円形の窪みで焼土面を形成する地床炉である。

床面は平坦をなす。床下掘形は10cm程度でLoam土・暗褐色土を混ざる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で、径70～80cm・深さ60～70cmの掘形をもつ。P4のみ上縁径85cmで20cmほど掘込み二段形状である。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が3.0m、東列(P3・P4)・西列(P1・P2)が3.1mを測る。壁下溝は北隅で未検出部分があるもののほぼ全周していたと考えられる。幅10cm・深さ5～10cmである。貯蔵穴に相当する落ち込みは検出されていない。

遺物は破片状態が大半で、多くは埋土中からの出土である。甕類が多く壺・高坏の他、腕輪状土製品や土製紡錘輪がある。

#### D-85号住居跡(第281回 P.L.80)

座標値  $X=149\sim 152$ ・ $Y=-730\sim -735$ の範囲にある。1号周溝墓の北縁周溝と重複し、これより旧く南半は消失している。残存形状より方形を呈しよう。北東面壁線は4m(+θ)、北西面壁線は3.3m(+θ)まで検出した。確認壁高は約40cmで直線・直立気味である。北西面壁線軸方位はN-52°-Eを示す。埋土は大別3層でLoam粒・塊を多く混ざる暗褐色土で人為的な埋土と考えられる。



第280図 D-84号住居跡

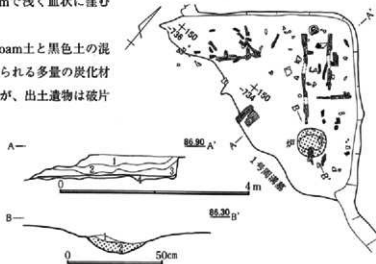
炉跡は北東面壁に近く、径60cmで浅く皿状に窪む  
 地床炉である。

床面は平坦と思われ、床土はLoam土と黒色土の混  
 土を充填する。家屋構築材と考えられる多量の炭化材  
 が遺存し焼失家屋の可能性は高いが、出土遺物は破片  
 状態の物が大半である。

D-85住

1. 黒色土 C軽石粒多量混
2. 暗褐色土 C軽石粒多量・Loam粒混
3. 褐色土 弱粘質・Loam粒多量混
4. 褐色土 弱粘質・Loam粒多量混

1. 炭化敷層
2. 焼工層



第281図 D-85号住居跡

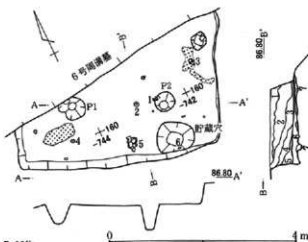
第3章 検出された遺構と遺物

D-86号住居跡 (第282図 P L.80)

座標値  $X=158\sim 161$ ・ $Y=-740\sim -745$ の範囲にある。6号周溝墓南縁周溝と重複し、これより旧く北半は消失する。残存形状より方形を呈しよう。検出部分は南西面壁の全幅長4.3mで、南東面壁は2.7m・北西面壁線は1mの範囲まで遺存している。確認壁高は50cmで直線・直立している。南西面壁線に直交する軸線方位はN-19°-Eを示す。埋土は大別3～4層でLoam塊を多く混ざる暗褐色土を主にし人為的な埋土が考えられる。炉跡は検出範囲内では確認されない。

床面は平坦をなす。床下の掘形は壁際は深く、中央に向かい高まる。床土はLoam土・黒色土・褐色土の混土をもって充填する。柱穴は4穴が推定されるが検出はP1・P2の2穴である。上縁径40cm・深さ50～60cmで、柱間寸法は2.0mを測る。貯蔵穴は南東隅にあり径80×60cm・深さ25cmの略方形を呈する。

出土遺物は壺・高坏など少量である。



- D-86住
- |         |                        |
|---------|------------------------|
| 1. 黒色土  | 土粒粗・C軽石多量混             |
| 2. 暗褐色土 | 弱粘質・軟・黒色土少量・Loam粒混     |
| 3. 褐色土  | 粘質・Loam粒多量・Loam塊混・砂    |
| 4. 暗褐色土 | Loam粒混                 |
| 5. 暗黒色土 | 粘質・Loam地山混             |
| 6. 黒褐色土 | Loam大粒多量・黒色土・暗褐色土・褐色土混 |
| 7. 黄褐色土 | Loam (地山)              |

第282図 D-86号住居跡

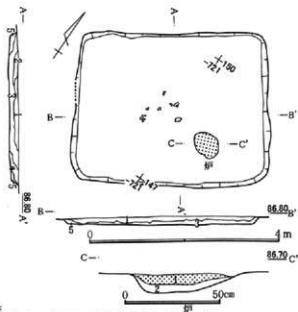
D-88号住居跡 (第283図 P L.80)

座標値  $X=146\sim 150$ ・ $Y=-718\sim -723$ の範囲にある。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.1m・短軸2.1m、床面積11.7m<sup>2</sup>、確認壁高は20cmである。長軸方位はN-55°-Eを示す。埋土は大別2層で下位層にLoam塊が多く混じり、人為的または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は中央やや南東方向にあり、床面を径55×50cm・深さ10cmたらずの皿状に窪めて地床炉とする。

床面は平坦をなすがやや危弱である。床土には黒色土とLoam土の混土を充填する。柱穴・貯蔵穴は検出されない。

遺物は少量で全て埋土中からの出土で、図示できる物はない。



- D-88住
- |         |                  |                  |
|---------|------------------|------------------|
| 1. 暗褐色土 | Loam粒少量・C軽石多量混・砂 | 1. 焼土            |
| 2. 黄褐色土 | C軽石少量・Loam大粒混・砂  | 2. 黄褐色土・Loam暗色土混 |
| 3. 褐色土  | 軟・C軽石粒・Loam大粒多量混 |                  |
| 4. 暗褐色土 | 土粒粗・Loam粒混       |                  |
| 5. 褐色土  | 軟・Loam粒混         |                  |

D-89号住居跡 (第284図 P L.80)

座標値  $X=149\sim 156$ ・ $Y=-745\sim -762$ の範囲にある。3号周溝墓・D-139号住居跡(古墳前期)と重複し、これより古い。床面には家屋構造材の一部と考えられる炭化材が多く、焼失家屋である。遺物の残存が極めて少なく廃屋後の放火であろう。平面

第283図 D-88号住居跡

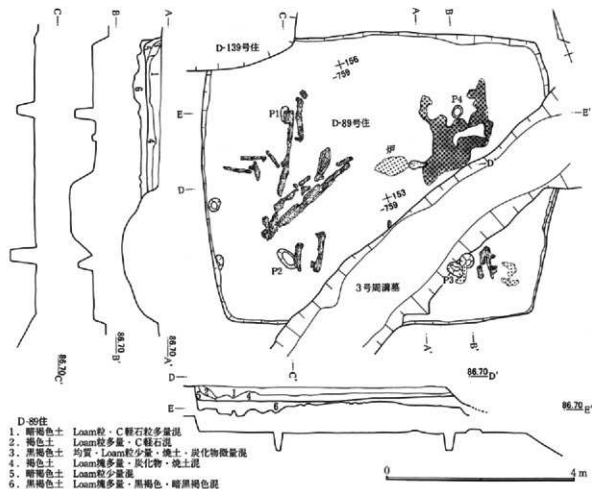


形状は東西方向に長軸をもつ略方形を呈し、各壁線は緩く膨らむ。規模は長軸7.5m・短軸6.1m、床面積41.3㎡、確認壁高は約30cmで壁面は直線的で直立して立ち上がる。長軸方位はN-75°-Wを示す。埋土は大別2層でLoam塊が多く混じる暗褐色土からなり、人為的埋土または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は中央やや東に寄っており、径70×40cmの楕円形焼土面が形成される。縁部に長径50cmほどの転石があり、炉材の一部であろうか。

床面は平坦をなし、中央部は堅牢である。床下掘形は四壁沿いに幅1m・深さ15cmほどに窪め、中央部は5×3mの略方形の高まりとなる。床土はLoam土・黒色土・暗褐色土の混土を充填する。柱穴は4穴で径20cmから50×30cmの比較的小径で深さ40cm前後の掘形をもつ。柱間寸法は北列(P1・P4)3.6m・南列(P2・P3)3.8m・東列(P3・P4)3.2m・西列(P1・P2)3.1mを測る。壁下溝・貯蔵穴は検出されない。

出土遺物は少なく、床面からの出土資料はない。



第284図 D-89号住居跡

#### D-135号住居跡 (第285図 P L.80)

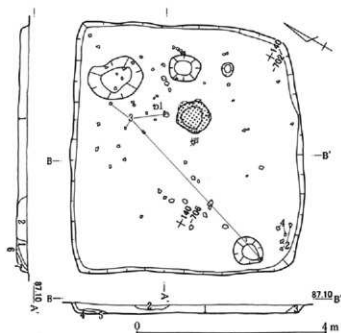
座標値X=138~144・Y=-701~-708の範囲にある。平面形状は北東~南西軸に若干の長軸をもつ略方形を呈するが、北東~南西壁線が短く、やや重む。規模は長軸5.2m・短軸5.0m、床面積22.7㎡、確認壁高は18cmである。長軸方位はN-60°-Eを示す。埋土は大別1層でLoam粒が多く混ざる暗褐色土で人為的か攪乱土の流入が考えられる。

### 第3章 検出された遺構と遺物

炉跡は中央やや東寄りにあり径70cm・深さ約15cmの皿状掘形に暗褐色土(床土)を充填する地床炉である。上面は焼土化の進んだ火床となっている。

床面は平坦をなし、炉跡周辺は堅牢さがある。床下掘形は全面均一な深さで、Loam土を混ざる暗褐色土を充填する。柱穴は検出されず、東隅に小穴1穴のみである。貯蔵穴に想定される落ち込みは北隅・東寄り・南隅にそれぞれ認められるがいずれとも決定できない。北隅のものももっと大きく、径120~90cm・深さ40cmである。

出土遺物は小片が全体に分布し、いずれも床面より上位にあり甕などの器種が多い。



- D-135住
1. 黒褐色土 Loam粒・C軽石粒多量混・褐色土・暗褐色土混在・粘
  2. 暗褐色土 軟・暗褐色土均質(燻焼作土)・粘
  3. 黄褐色土 Loam主体・褐色土極少量混・粘
  4. 暗褐色土 Loam粒混・粘
  5. 黒褐色土 黒褐色土均質・C軽石大粒多量混・粘
  6. 黒褐色土 黒褐色土均質・C軽石大粒多量混・粘
  7. 暗褐色土 C軽石粒多量混・粘

第285図 D-135号住居跡

#### D-136号住居跡(第286図 P L.81)

座標値X=141~147・Y=-688~-696の範囲にある。10号周溝墓(古墳前期)・D-147号住居跡(古墳前期)と重複し、両者より古い。平面形状は北東~南西方向に長軸をもつ略方形を呈すると考えられるが東隅の壁線がL字状に折れる。規模は長軸7.5m・短軸5.4m、床面積は36.4㎡程度になろう。確認壁高は40cmで直線・直立気味に立ち上がる。長軸方位はN-64°Eを示す。埋土は大別2層でLoam粒を混ざる暗褐色土である。

炉跡は東に偏っており、径100×60cmの楕円形の浅い窪みをなし、炉底には灰褐色粘土を充填する。

床面は平坦をなし。床下掘形は部分的・不規則に20cm程度の落ち込みを設けるが、Loam塊を混ざる暗褐色土を床土として充填する。柱穴は4穴で全体に西側に偏っている。径30~40cm、深さ50cmほどの掘形をもつ。柱間寸法は北列(P1・P4)3.0m・南列(P2・P3)3.3m・東列(P3・P4)2.8m・西列(P1・P2)2.9mを測る。貯蔵穴は北東面壁沿い中央にあり、80×40cm・深さ20cmの略方形を呈する。

出土遺物は甕・模造土器など少量である。

#### D-147号住居跡(第286図 P L.81)

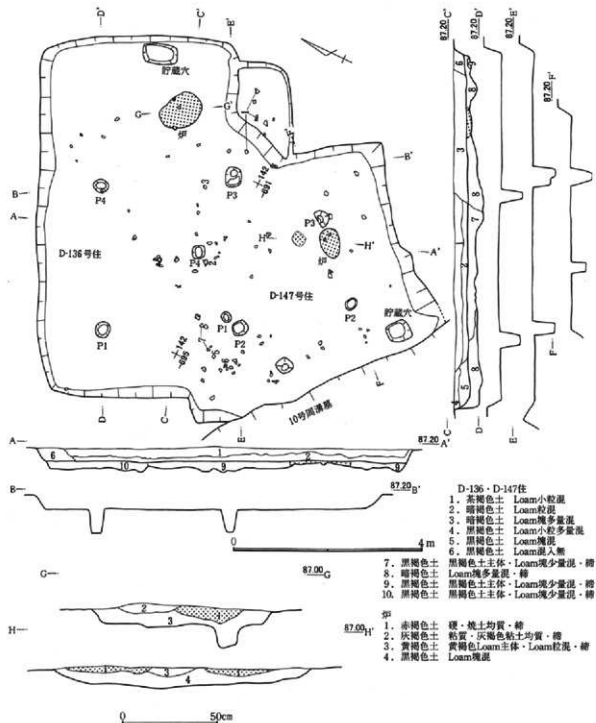
座標値X=137~143・Y=-689~-695の範囲にある。10号周溝墓D-136号住居跡(古墳前期)と重複し前者より旧く後者より新しい。平面形状は重複のため壁線の不明部分が多く定かではないが長短軸差のない方形を呈しよう。規模は北西~南東軸5.1m・北東~南西軸5.0+0m、床面積22.6+0㎡、確認壁高は約30cmで壁面は直線的で法幅があり傾斜して立ち上がる。北東~南西軸方位はN-54°Eを示す。埋土は大別2層でLoam塊が混じる暗褐色土で人為的または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は南東側に偏って近接して2箇所に焼土面が検出されている。径60×40cmの楕円形で浅い皿状に窪

み、Loam土を混入する暗褐色土を下地にする。炉床は焼土化が著しい。

床面は平坦である。床下掘形は比較的均一で、15~20cmと深目である。床土はLoam塊が混じる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径20~40cm・深さはいずれも30cmに満たない。配置に歪みが大きくやや整合性に欠ける。柱間寸法は北列（P1・P4）1.6m・南列（P2・P3）1.9m・東列（P3・P4）2.7m・西列（P1・P2）2.6mを測る。貯蔵穴は南隅にあり50×40cm・深さ45cmの方角を呈する。

出土遺物は散在しており、甕・模造土器などがある。



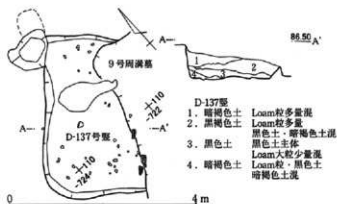
第286図 D-136・147号住居跡

D-137号竪穴跡 (第287図 P L.81)

座標値  $X=108\sim 112$ ・ $Y=-721\sim -724$ の範囲にある。9号方形周溝墓前方部の基部にあり、周溝によって南半は消失し全容は不明であるが平面形状は略方形を呈しよう。規模は北東～南西軸長は3.4m・北西～南東軸は2.2mまで遺存している。確認壁高は約70cmで深く、直線・直立して立ち上がる。北西面壁線軸方位は $N-43^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別2層でLoam塊を多量に混ざる黒褐色土からなり、人為的な埋土の可能性が高い。炉跡・柱穴などは検出範囲の中では見られない。

床面は平坦をなし、床下の掘形はほとんど成されていない。床面には炭化材が少量のこり、被火竪穴跡である。

床面からの出土遺物はほとんど無く、埋土中より壺片が少量のみある。



第287図 D-137号竪穴跡

D-139号住居跡 (第288図 P L.81)

座標値  $X=156\sim 167$ ・ $Y=-757\sim -767$ の範囲にある。D-218号住居跡(古墳後期)・6号周溝墓(古墳前期)と重複する。前者によって西壁線の一部は痕跡程度に、後者では東隅部が消失する。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸9.3m・短軸9.0m、床面積77.3m<sup>2</sup>、確認壁高は30cmで立ち上がりは直線・直立気味である。長軸方位は $N-68^{\circ}-W$ を示す。埋土は大別2層で混入物の少ない暗褐色土である。中央部床面より僅かに浮いて炭化材が集中し、被火住居跡である。

炉跡は中央やや北寄りにある。北半は欠しているが、高さ・幅10cm程度に粘土を塼様に弧状に巡らし、本来は全体を囲っていたものであろう。内部は平坦板状に粘土を敷き炉床とする。粘土材による盤型炉ともいえる形状で、径60cmほどの大きさである。

床面は平坦である。床下掘形は四壁から約50cmの間隔を置いて幅1m・深さ20cm前後の凹帯を巡らし、中央部およそ4m<sup>2</sup>方域が高まる。床土はLoam土・黒色土・暗褐色土の混土を充填する。柱穴は4穴で径60cm前後・深さ80～90cmで、P2のみやや小径で40cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)5.1m、南列(P2・P3)・東列(P3・P4)・西列(P1・P2)がほぼ等間で5.3mを測る。壁下溝はほぼ全周すると考えられ、幅15～20cm・深さ約15cmである。貯蔵穴は北東部隅にあり、一辺60cm・深さ40cmの方形をなす。

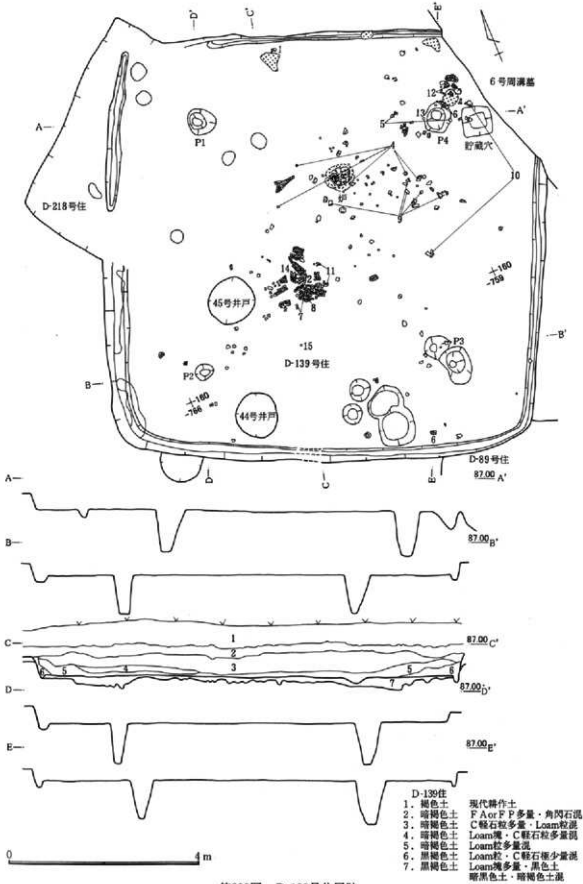
出土遺物は中央部に小破片で分布し、壺類が多い。

D-141号住居跡 (第289図 P L.81)

座標値  $X=140\sim 146$ ・ $Y=-680\sim -687$ の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.2m・短軸5.3m、床面積31.0m<sup>2</sup>、確認壁高は8cmで掘り込みは浅い。長軸方位は $N-72^{\circ}-E$ を示す。埋土は湿気が多く、鉄分の斑点状混入が著しい。

炉跡は中央やや東寄りにあり径60×50cmの浅い皿状楕円形で地床炉である。

床面は平坦をなすが湿気のためか堅牢さはない。床下掘形は壁沿いが幅1～1.5m・深さ15～20cmの凹帯が巡り中央部が高まりをなす。床土はLoam土・黒色土の混土を充填する。柱穴は4穴で径40cm前後、深さ

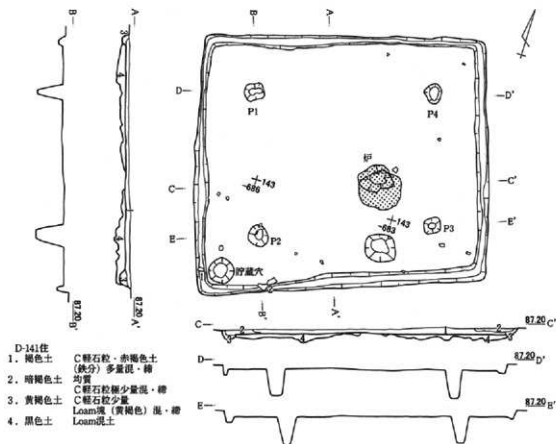


第288図 D-139号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

55～60cmである。P1・P3など方形気味の掘形もある。柱間寸法は北列（P1・P4）3.8m・南列（P2・P3）3.7m・東列（P3・P4）2.8m・西列（P1・P2）3.0mを測る。壁下溝は全周し、幅10～24cm・深さ5～10cmである。貯蔵穴は南西隅にある。径50cm・深さ40cmの円形である。

出土遺物は少なく、高坏・瓶などがある。



第289図 D-141号住居跡

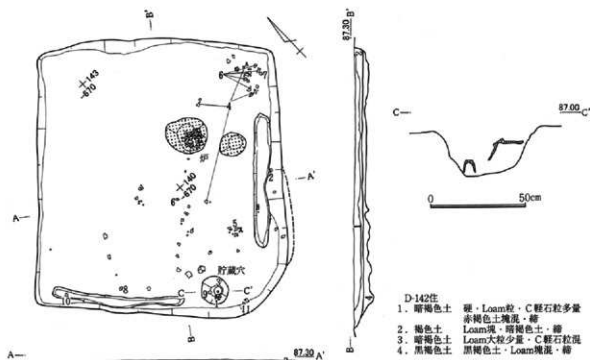
D-142号住居跡 (第290図 P L.82)

座標値  $X=137\sim 143$ ・ $Y=-666\sim -673$ の範囲にある。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ略方形を呈するが、南隅部の壁線には丸味がある。規模は長軸5.8m・短軸5.2m、床面積25.9㎡、確認壁高は15cmである。長軸方位はN-46°-Eを示す。埋土は大別2層で鉄分の沈着が著しい。

炉跡は中央やや北東寄りにある。径90×70cm・深さ15cmの皿状楕円形を呈し、掘形埋土のLoam・褐色土の混土を下地に上面に粘土を塗布し火床となす。南に近接して径50cmの焼土面がある。掘形は深さ10cmの皿状でLoam塊を混ざる黒褐色土を下地にする。前者炉跡への作り替え前段のものと考えられる。

床面は平坦をなす。床下掘形は壁沿い1m前後の幅で凹帯を巡らし、中央部が若干高まる。床土は黒褐色土・Loam土の混土を充填する。壁下溝は南東面壁・南西面壁下に一部が検出されているが、幅広い形状で壁下溝か否かは不明である。貯蔵穴は南隅にあり、径60cm・深さ25cmの略円形をなす。柱穴は検出されていない。

出土遺物は東半に散在するが埋土中からのものが大半である。貯蔵穴内より蓋・器台・小壺が出土する。



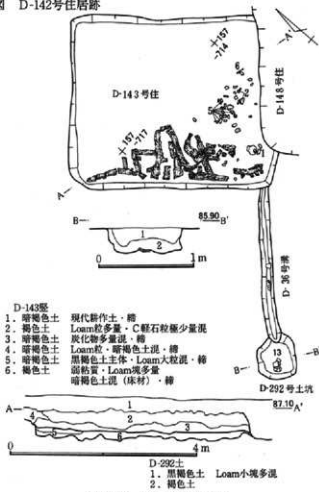
第290図 D-142号住居跡

## D-143号竪穴跡 (第291図 P.L.82)

座標値  $X = 154 \sim 159$ ・ $Y = -713 \sim -717$ の範囲にある。D-148号住居跡(古墳前期)と重複しこれより古い。調査が二次にわたり遺構城南・北で記録仕様にかなりの齟齬がある。平面形状は北西～南東方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.1m・短軸3.4m、床面積 $13.3 + \theta \text{ m}^2$ 、確認壁高は25cmで壁面立ち上がりは直線・直立する。長軸方位は $N-39^\circ-W$ を示す。埋土は大別2層で上層にLoam土が多く混入し、人為的埋土または攪乱土の流入が考えられる。印跡は確認されていない。

床面は平坦をなし、一次調査になる南半では構造物と考えられる多量の炭化材が残り消失竪穴跡であろう。(但し二次調査による北半部には炭化材などの記録は残されていない。)床下は10～20cm程度の掘形がありLoam土を混ざる暗褐色土が充填される。

出土遺物は南隅床面より構造土器・壺・甕などがある。



第291図 D-143号竪穴跡

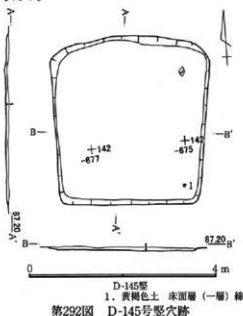
竪穴跡南隅より上幅25cm・深さ30cmあまりの溝が付帯する。南西方向に約3m延び、径80cm・深さ27cmの292土坑に連結する。土坑内より蓋1個体(PL.113)が出土している。調査時での認識は無かったと思われるが竪穴跡に付随する施設の可能性が高い。類例は隣接三和工業団地遺跡(『三和工業団地I遺跡(2)』群裡文 1999)において溝溝の巡る住居に求められると考える。

#### D-145号竪穴跡(第292図 P L.82)

座標値 $X=140\sim 144$ ・ $Y=-674\sim -677$ の範囲にある。平面形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈するが北壁は緩く膨らむ。規模は長軸3.5m・短軸3.2m、床面積9.7 $m^2$ 、確認壁高は掘り込みが浅く、削平が進んだためか床面が露呈し掘形による壁線の痕跡程度である。長軸方位は $N-6^{\circ}-E$ を示す。炉跡・柱穴などの諸施設は検出されていない。

床面は平坦で、床下の掘形は浅く5cm程度である。床土はLoam土を混ざる暗褐色土を充填する。

出土遺物は極めて少ない。



#### D-146号住居跡(第293図 P L.82)

座標値 $X=129\sim 136$ ・ $Y=-681\sim -688$ の範囲にある。10号周溝溝と重複しこれより古い。平面形状は南北方向に若干長い軸線をもつ方形を呈する。規模は長軸6.7m・短軸6.3m、床面積36.9 $m^2$ 、確認壁高は50cmで直線・直立気味の深い掘り込みである。長軸方位は $N-26^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別3層で上位層にはB軽石粒が混入する。総体的にLoam粒・塊の混入が多く人為的埋土または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は中央やや南に偏っており、径70×40cmの浅い楕円形の窪みをなす。火床は床土が焼土化する地床炉である。

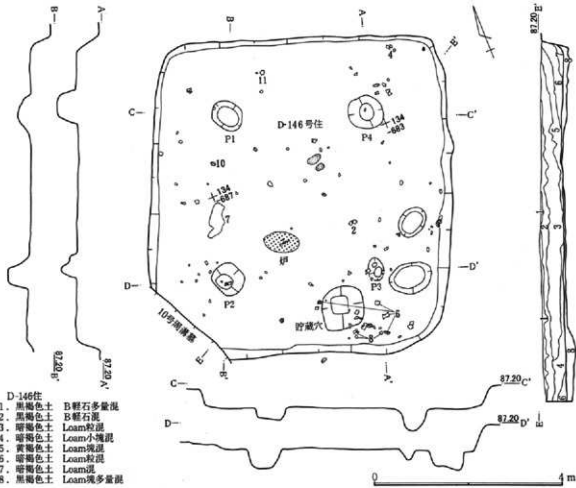
床面は平坦である。床下掘形は壁沿い幅1mほど、深さ10~20cmの凹帯を巡らし中央部は3.5×4.0mの方形高まりをなす。床土はLoam塊を混ざる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径40~50cm・深さ30~40cmで略方形の掘形をもつ。柱間寸法は北列(P1・P4)3.0m・南列(P2・P3)3.3m・東列(P3・P4)3.4m・西列(P1・P2)5.3mを測る。貯蔵穴は南側やや東に寄っており、径90cm・深さ60cmの方形を呈する。

出土遺物は散在しておりS字台付壺・高坏などのほかに、床面より若干の高さをもって完形の倣製重圓銅鏡がある。

#### D-148号住居跡(第294図 P L.82)

座標値 $X=152\sim 157$ ・ $Y=-709\sim -714$ の範囲にある。平面形状は北東~南西方向に長軸をもつ略方形を呈するが、南西面の壁長が短くやや歪む。規模は長軸4.5m・短軸4.0m、床面積14.1 $m^2$ 、確認壁高は55cmで壁面は直線・直立気味の深い掘り込みである。長軸方位は $N-55^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別3層で最上位層にはB軽石粒を多く混じえる。総体的にLoam塊が多く混入し人為的埋土または攪乱土の流入が考えられる。



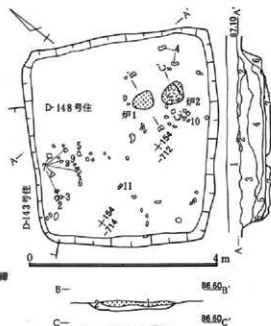


第293図 D-146号住居跡

炉跡は中央やや北東寄りに2跡検出されている。炉跡2は径50cmの浅い皿状窪みに暗褐色土を充て中央部には塗布された被熱粘土盤が残り火床としたものであろう。炉跡1は炉跡2と形状・規模とも類似するが、粘土を用いた火床は見られず地床炉であろう。

床面は平坦で堅牢である。床下掘形は深さ10cmほどで、床土にはLoam土と暗褐色土の混土を充填している。柱穴は検出されていない。

出土遺物は小片散在的で、壺・甕などのほか腕輪状土製品がある。



第294図 D-148号住居跡

- 炉跡
1. 赤褐色土 焼土・砂
  2. 暗褐色土 Loam粒混(床)・砂

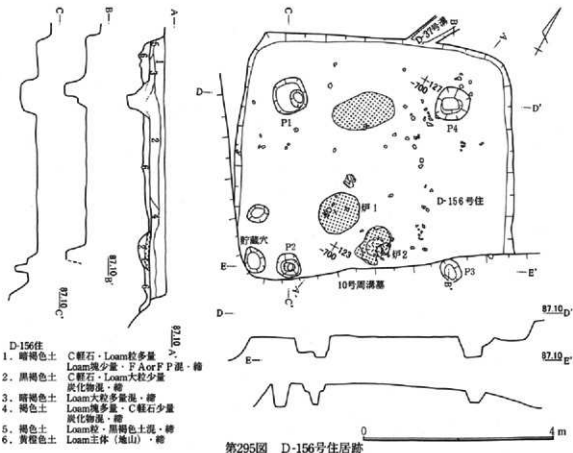
D-156号住居跡 (第295図)

座標値  $X=121\sim128$ ・ $Y=-696\sim-703$ の範囲にある。10号周溝墓の後方台部南端にあり南壁線は周溝によって失われているが柱穴の配置から、平面形状は北西～南東方向に長軸をもつ略方形を呈しよう。規模は長軸 $6.0+\varnothing$ m・短軸 $5.8$ m、床面積 $35.0+\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は $30$ cmである。長軸方位はN-27°-Wを示す。埋土は大別2層でLoam塊などの混入物の少ない自然堆積と考えられる。

炉跡は2箇所あり、中央やや南側に寄る。炉跡2は径 $70\times 60$ cmの楕円形で皿状に窪めた炉底に粘土材を $5\sim 6$ cmの厚さに塗布し火床となし、被熱によつて著しく硬化している。炉跡周縁には炉床と同質粘土を堤状に巡らせた痕跡が残る。炉跡1は径 $90$ cmあまりの楕円形状で、皿状に窪めた炉底にLoam土と黒褐色土の混土を敷き火床の焼土化が著しい。炉跡1には粘土材仕様の痕跡はない。

床面は平坦である。床下掘形は壁沿いを幅 $1$ m・深さ $10\sim 20$ cmに窪め、中央部は若干の高まりをなす。床土はLoam土と黒褐色土の混土を充填する。柱穴は4穴でおおよそ径 $50\sim 60$ cm・深さ $40\sim 45$ cmからなる。柱間寸法は北列(P1・P4)  $3.3$ m・南列(P2・P3)  $3.4$ m・東列(P3・P4)  $3.5$ m・西列(P1・P2)  $3.6$ mを測る。貯蔵穴は南隅の穴が相当しようか。径 $50$ cm・深さ $50$ cmの略方形である。

出土遺物は小片・少量で図示できるものはない。



第295図 D-156号住居跡

D-160号住居跡 (第296図 P L.83)

座標値  $X=132\sim 139$ ・ $Y=-691\sim-699$ の範囲にある。床面には炭化材が残る被火住居であるが量は少ない。南半は10号周溝墓方台部にあり北半は周溝によって消失するため、全容は不明であるが北東～南西方向に長軸をもつ略方形になろう。規模は長軸 $7.1$ m・短軸 $6.0$ m、床面積 $40.0$ m<sup>2</sup>、確認壁高は $40$ cmで上縁部

の立ち上がりは緩く崩れがある。長軸方位はN-33°-Eを示す。埋土は大別2層で下位層にはLoam塊が多く混入し、人為的埋土か攪乱土の流入であろう。

炉跡は中央やや西側に寄り、径80×70cmの楕円形で床土を僅かに窪める地床炉である。火床の焼土化は著しい。

床面は平坦である。床下掘形は深いところで約20cm、Loam塊を混ざる黒褐色土を充填する。柱穴は2穴の検出だが消失部分から本来は4穴であろう。径50~60cm・深さ30~40cmの楕円形状である。柱間寸法は南列(P1・P2)は2.3mである。貯蔵穴は南側隔近くの穴が相当しよう。径・深さ50cmの円形である。

出土遺物は床面より妻が多く・高坏・器台・蓋などがある。

- |         |                               |
|---------|-------------------------------|
| D-160住  | F P小粒多量混                      |
| 1. 黒褐色土 | Loam塊混                        |
| 3. 灰褐色土 | Loam粒・塊混                      |
| 2. 黄褐色土 | Loam粒少量混                      |
| 4. 灰褐色土 | Loam粒少量混                      |
| 5. 黒褐色土 | 灰・焼土塊混(床上)                    |
| 6. 黒褐色土 | Loam大・小粒多量・黒褐色・暗褐色・褐色土混(床材)・線 |

第296図 D-160号住居跡

## D-186号住居跡(第297図)

座標値X=133~136・Y=-754~-758の範囲にある。平面形状は北東~南西方向に長軸をもち、西側の壁線が角張らずに不整形を呈する。長軸3.3m・短軸2.9m、床面積8.8㎡、確認壁高は壁線の痕跡程度である。長軸方位はN-47°-Eを示す。

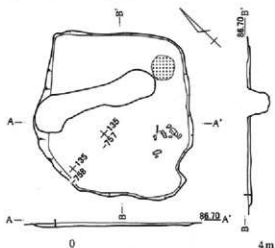
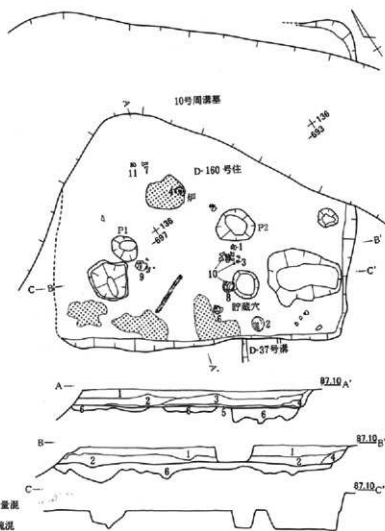
炉跡は明確さを欠き、東隔部に径50cmの焼土分布が記録されているが詳細は不明である。

床面は平坦をなすが、危弱である。貯蔵穴・柱穴などは検出されていない。

出土遺物は床面より壺1個のみである。

- |         |             |
|---------|-------------|
| D-186住  | 軽石・Loam粒少量混 |
| 1. 暗褐色土 |             |

第297図 D-186号住居跡



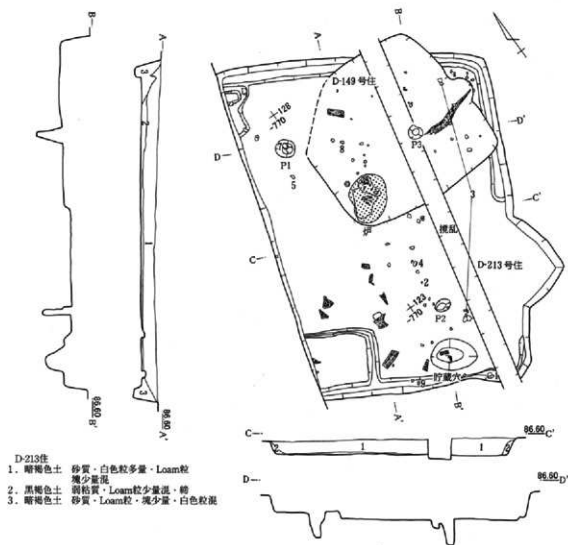
D-211号竪穴跡 (第69図)

座標値  $X=113\sim115$ ・ $Y=-774\sim-776$ の範囲にある。D-212号住居跡(古墳後期)と重複し、南半は現道(調査時)にかかり検出範囲は幅僅かである。北壁線長1.5m・東壁線長2.3mまで確認した。平面形状は方形を呈しようか。確認壁高は30cmで直線のな壁面をみせる。埋土は大別1層でLoam粒を混ざる黒褐色土である。柱穴・炉跡・貯蔵穴など諸施設の検出には至っていない。

出土遺物は少量でかろうじて台付甕台部小片がある。

D-213号住居跡 (第298図 P L.83)

座標値  $X=120\sim129$ ・ $Y=-765\sim-772$ の範囲にある。D-149号住居跡・D-195号土坑跡(古墳後期)と重複する。西側は現道にかかり全容は不明である。ただ柱穴の配置から南北に長軸をもつ方形を呈しよう。床面近くに炭化材が残り、被火住居である。規模は長軸7.1m・短軸5.6+ $\varnothing$ m、床面積44+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は45cmで壁面は直線的で直立気味に立ち上がる。長軸方位はN-33°-Eを示す。埋土は大別1層で混入物の少ない暗褐色土である。



炉跡は中央やや北寄りにある。径70×50cmの楕円形状で浅い皿状の窪みをなす。床土と考えられるLoam土・黒褐色土を混じた面を炉底とし、火床は著しい焼土面をなす。

床面は平坦をなすが、検出南西部に南壁下の溝に連結する方形区面の細溝がみられる。幅10～15cm、深さ20cmで明瞭な掘形をもつ。間仕切りのな施設であろうか。柱穴は4穴と考えられるが3穴を確認している。径20～30cm・深さ60～70cmで平面の割には深い掘形をもつ。柱間寸法は北列(P1・P3)1.8m・東列(P2・P3)は2.4mを測る。壁下溝は検出壁下にあり、本来全周するものと考えられる。幅20cm・深さ10cmで明瞭である。貯蔵穴は南東隅部にあり、径100×65cm・深さ45cmで楕円形を呈する。埋土中に炭化物層が形成され、厚さ3cmほどの均一なもので貯蔵穴の蓋施設材の可能性もある。

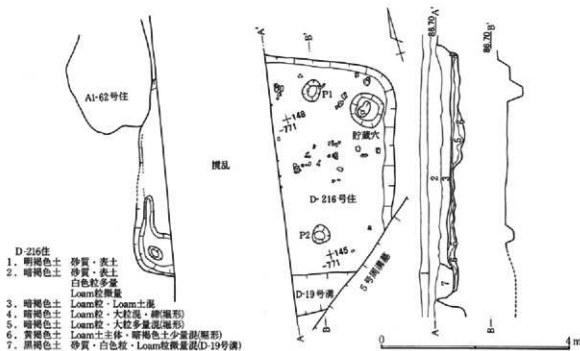
出土遺物は模造土器・埴・壺・高坏・器台・砥石などがある。

#### D-216号住居跡 (第299図 P.L.83)

座標値X=144～149・Y=-768～-774の範囲にある。西半は現道(調査時)下であり、二次の調査になる。平面形状は東西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸5.4m・短軸4.6m、床面積21.6㎡、確認壁高30cmでやや傾斜の緩い立ち上がりである。長軸方位はN-71°-Eを示す。埋土は大別1層で、Loam土など混入物が少なく自然堆積になろう。炉跡は床面検出範囲には認められていない。

床面は平坦をなす。床下掘形は不規則な浅い窪みをなす。床土はLoam粒・塊を混じえる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴が推定されるが検出は2穴である。径40cm・深さ15～30cmで円形の掘形をなす。柱間寸法東列(P1・P2)は3.0mを測る。貯蔵穴は北東隅部にあり、径70cm・深さ60cmの円形をなす。

出土遺物は散在的で大半が床面より若干浮いた状態である。単口緑甕の破片が目立つ。



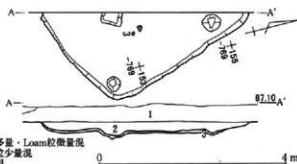
#### D-217号住居跡 (第300図)

座標値X=151～155・Y=-768～-770の範囲にある。現道(調査時)下に範囲の大半がかり全容は不明で、南東の一部のみ検出された。平面形状は隅丸の方形になろうか。東壁線約3.5m・南壁線約2.5mが

第3章 検出された遺構と遺物

知れる。確認壁高は25cm、東壁線軸方位はN-16°-Wを示す。埋土は道路基盤でほとんどが削平され混入物の少ない暗褐色土の薄層が残る。柱穴と思しき穴は南隅にあるが深さ20cm程度で浅い掘形である。

出土遺物は少なく、甕・二重口縁壺でいずれも小片である。



D-219号住居跡 (第301図)

座標値X=169~179・Y=-762~-765の範囲にある。攪乱のため北西面壁線と南西面壁線の一部を検出したに止まる。平面形状は方形を呈すると思われる。北西面壁線長4m・南西面壁線長4.5mまで検出した。確認壁高は18cmである。北西面壁線の軸方位はN-28°-Eを示す。

出土遺物は少量だが、甕・滑石製白玉・鉄塊などがある。

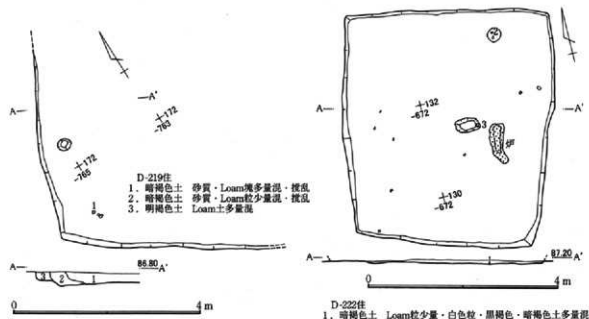
D-222号住居跡 (第301図 P L.83)

座標値X=128~133・Y=-669~-673の範囲にある。平面形状は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.9m・短軸4.4m、床面積19.3m<sup>2</sup>、確認壁高は削平が著しく検出面は床面直上か床土に達していると考えられる。長軸方位はN-16°-Eを示す。

炉跡は中央から東に偏っており、径80×30cmの長径範囲で焼土分布及び被熱面がある。僅かに窪み皿状で、床土と同質の暗褐色土を炉底に敷く。火床面は硬い焼土面となっている。

床面は平坦である。床下は四壁沿いが1m程度の幅で低く、中央部が方形に高まる。床土はLoam土・黒褐色土の混土を充填してある。柱穴は検出されていない。炉跡近く中央部に径50×30cm・深さ30cmの穴があり、貯蔵穴としては位置的に通例に違い性格は不明である。

出土遺物は少なく、模造土器がある。



第301図 D-219・222号住居跡

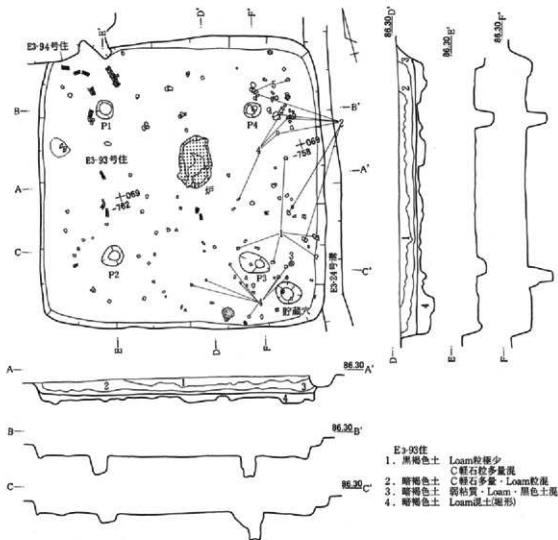
## E-93号住居跡 (第302図 P L.83)

座標値 X=065-072・Y=-757-764の範囲にある。E-94号住居跡(古墳後期)と重複する。炭化材が北西部に残り、被火住居である。平面形状は長短軸長差のない略方形を呈する。規模は両軸長とも6.0mで、32.4㎡、確認壁高は25cmで直線的な壁面を残す。南北軸方位はN-14°-Eを示す。埋土は大別3層で中位層にLoam塊が多く混じり人為的な埋土の可能性もある。

炉跡はほぼ中央部にあり径100×70cmの楕円形に浅く窪める。褐色土を炉底にする地床炉で、火床の焼土化が著しい。

床面は平坦である。床下掘形は幅50~80cmで壁沿いを窪ませ、中央部は4.5mほどの方形で高まりをなす。床土はLoam土を混ざる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴で上縁径40cm前後・深さ40~60cmだが、P2のみ深さ20cmの浅い掘形である。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)・西列(P1・P2)が3.1mの等間で、東列(P3・P4)が3.3mを測る。

出土遺物は散在的で、埋土が多い。鉢・甕・高坏・壺などがある。



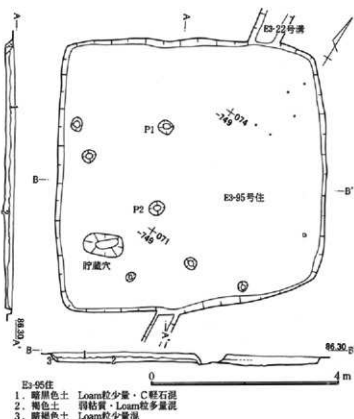
第302図 E-93号住居跡

E<sub>3</sub>-95号竪穴跡 (第303図)

座標値 X = 068 ~ 075 · Y = -745 ~ -752 の範囲にある。平面形状は長短軸長差のない略方形を呈するが、南西面壁線はやや内側へ歪む。規模は北西 ~ 南東軸長 5.8m · 北東 ~ 南西軸長 5.7m、床面積 28.6m<sup>2</sup>、確認壁高は 20cm、北西 ~ 南東軸方位は N-32°-W を示す。埋土は大別 2 層で下位層には斑点状に Loam 塊が多く混じり、床土の浮き上がり現象であろうか。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。柱穴は 4 穴と考えられるが検出は 2 穴である。配置からは P1 · P2 が相当しようが、ともに深さが 10 ~ 15cm と浅く柱穴としては確定的ではない。P1 · P2 間は 1.7m を測る。貯蔵穴と考えられる落ち込みは南西部隅にあり、径 80 × 50cm · 深さ 20cm の長楕円形を呈す。

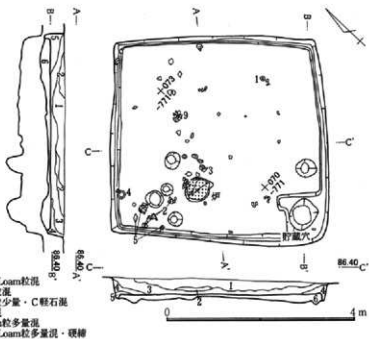
図示できる出土遺物はない。



第303図 E<sub>3</sub>-95号竪穴跡

E<sub>3</sub>-100号住居跡 (第304図 P L.83)

座標値 X = 068 ~ 074 · Y = -768 ~ -773 の範囲にある。平面形状は北西 ~ 南西軸が若干の長軸をなす略方形を呈するが、南東 · 南西面の壁線が鈍角気味に開きやや形状が歪む。規模は長軸 4.6m · 短軸 4.4m、床面積 17.8m<sup>2</sup>、確認壁高は 40cm で立ち上がりは直線 · 直立気味である。長軸北西 ~ 南東軸方位は N-40°-W を示す。埋土は大別 3 層で中位層には Loam 塊



第304図 E<sub>3</sub>-100号住居跡



を多量に混入して人為的埋土または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は南に偏っており、径50cmほどの皿状の窪みをなす地床型である。火床面には顕著な焼土面が形成されている。

床面は平坦である。床下掘形は中央部が2.5×2.0m範囲の不整形高まりをなし、周囲は深さ10cmほどの窪みが巡る。床土はLoam塊に暗褐色土を混じて充填する。配置から通常の柱穴を想定できる穴はなく、南西部に4穴、南東部に1穴を検出したが柱穴としての整合性に欠ける。貯蔵穴は南隅部にあり、径50cm・深さ50cmの略方形を呈するが、周囲110×80cmの方形範囲が約10cm落ち込んで段状になっている。壁下溝は全周し、幅・深さとも10cm前後である。

出土遺物は散在的であるが、やや南西部部に集中する傾向がある。台付甕・甕などがある。

#### E<sub>3</sub>-104号住居跡 (第305図)

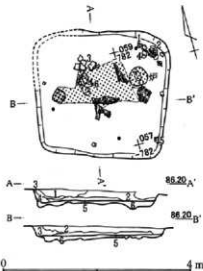
座標値 X=056-059・Y=-781~-783の範囲にある。北西部部は攪乱土坑によって壁線の一部は消失する。床面中央直上には炭化材・炭屑の分布があり被火住居である。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形である。規模は長軸2.8m・短軸2.6m、床面積6.1m<sup>2</sup>、確認壁高は25cmで直線・直立気味である。長軸方位はN-73°-Eを示す。埋土は大別2層でLoam粒・塊が多く混入し、人為的埋土の可能性が高い。

炉跡は北東に偏っており、径40cmの浅い皿状に窪める。炉底には7~8cmの厚さで灰白色粘土を充填し窪みをなさず平坦に炉床を作る。炉中央部は赤化・被熱程度が著しい。

床面は平坦をなす。床下掘形は四壁周辺がやや低く中央部に若干の高まりを作る。床土はLoam塊を混する暗褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

遺物は中央及び北東隅部にS字口縁台付甕等が主で床面炭化材下に出土する。

- E<sub>3</sub>-104住
1. 暗褐色土 土粒粗・軟・Loam粒少量混
  2. 褐色土 面粘質・C粒石粒・炭化物混
  3. 暗褐色土 弱粘質・焼土粒少量・Loam大粒混
  4. 黄褐色土 Loam塊
  5. 暗黒色土 土粒粗・炭化物・焼土混
  6. 暗褐色土 Loam塊混土(層状)



第305図 E<sub>3</sub>-104号住居跡

#### E<sub>3</sub>-129号住居跡 (第306図 P.L.83)

座標値 X=075-083・Y=-766~-773の範囲にある。E<sub>3</sub>-150号住居跡(平安時代)と重複する。平面形状は北東~南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.8m・短軸6.1m、床面積38.2m<sup>2</sup>、確認壁高は約30cmで緩い傾斜で立ち上がる。長軸方位はN-38°-Eを示す。埋土は大別2層でLoam塊が多量に混じり、人為的な埋土が考えられる。

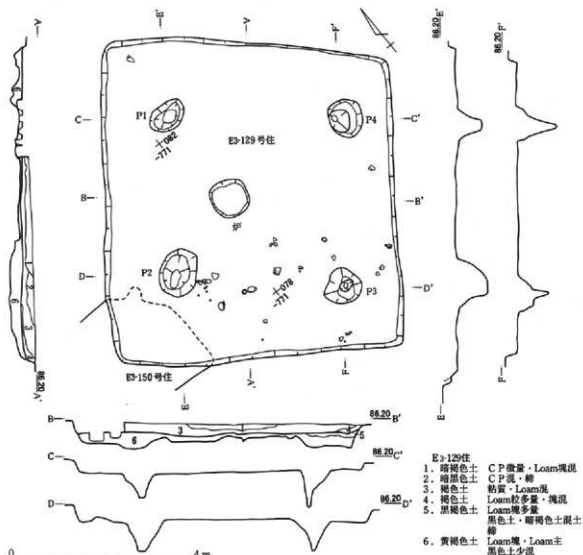
炉跡は焼土面などの炉床は不明確なものの、中央やや南西寄りに炉底掘形と思われる浅い皿状の窪みが認められる。径80cmあまりの大きさで位置・形状とも炉跡の痕跡と考えられる。

床面は平坦をなすが、攪乱が広くおよび不詳部分が多い。床下掘形には四壁沿いに幅1~2m・深さ20cmほどの凹帯を巡らせ、中央部分に1.5×2.5mの高まりを作る。床土はLoam塊が多く混じる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で、掘形の土線径は大きく80×60cm~100cm前後の略円形または楕円形を呈す。深さは50~90cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)・東列(P3・P4)・西列(P1・P2)が3.5m、

第3章 検出された遺構と遺物

南列 (P2・P3) が3.6mを測る。

出土遺物は当跡に伴うものは破片少量で、埋土中から古墳後期に属する遺物が多い。



第306図 E-129号住居跡

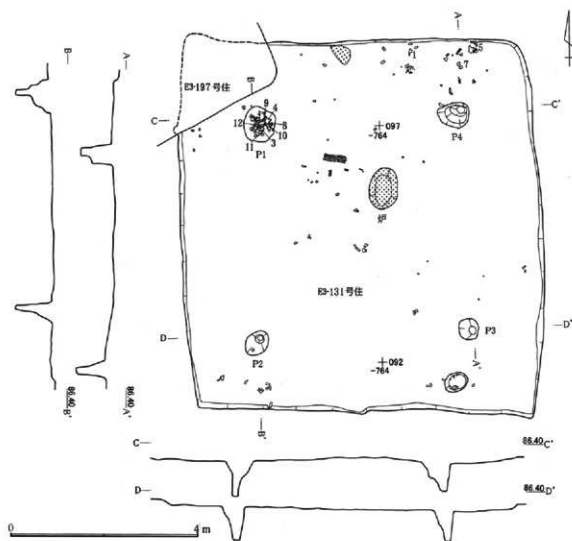
E-131号住居跡 (第307図)

座標値 X=090-098・Y=-760~-768の範囲にある。北西部でE-197号住居跡 (古墳後期) と重複する。平面形状は長短軸長差のない整った方形を呈する。規模は南北軸7.7m・東西軸7.6m、床面積55.9㎡、確認壁高は浅く10cm程度である。南北軸方位はほぼ真北を示す。

炉跡は中央やや北寄りにある。径90×60cmの浅い皿状楕円形で地床炉である。火床の赤化は著しい。

床面は平坦をなすが、著しい耕作条痕で詳細は不明である。柱穴は4穴で、径40~70cm、深さ60~80cmの楕円形掘形をもつ。柱間寸法は、北列 (P1・P4) 4.3m、南列 (P2・P3)・東列 (P3・P4)・西列 (P1・P2) はともに4.5mを測る。南東隅に径40cm・深さ30cmあまりの小穴を検出したが貯蔵穴かは不明である。

遺物は散在的で破片化したものが大半である。柱穴 (P1) 中には数個体分の甕・壺がままとって出土する。



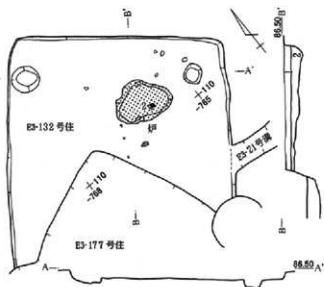
第307図 E3-131号住居跡

## E3-132号住居跡 (第308図 P L 83)

座標値  $X = 107 \sim 113$ ・ $Y = -764 \sim -770$

の範囲にある。南西半部はE3-177号住居跡(古墳後期)と重複し消失するが、平面形状は長短軸長差のあまり無い略方形を呈すると考えられる。規模は軸長4.8mほどになろう。床面積23㎡前後、確認壁高は15cm、北東～南西軸方位は $N-40^\circ-E$ を示す。

炉跡は中央やや北側に寄ってある。径 $120 \times 90$ cmの楕円形状で床土を皿状に浅く窪



第308図 E3-132号住居跡

E3-132住

1. 暗褐色土 C軽石粒多量混・椀底
2. 暗黒色土 Loom大粒多量・黒褐色土・暗褐色土混土(樹形)

### 第3章 検出された遺構と遺物

める地床炉である。火床は顕著な焼土面をなす。

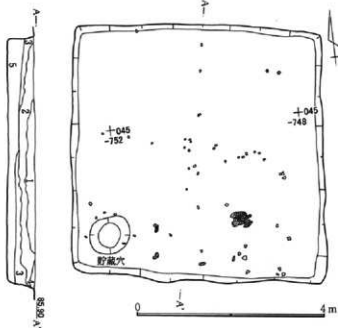
床面は平坦をなすが耕作条痕が著しく詳細は不明である。床土はLoam土を混ざる暗褐色土を用いる。出土遺物は少なく、甕・模造土器などで小片である。

#### E<sub>3</sub>-133号竪穴跡 (第309図 P.L.84)

座標値X=041~047・Y=-747~-753の範囲にある。平面形状は長短軸長差のない整った方形を呈する。規模は南北長4.4m・東西長4.3m、床面積25.4㎡、確認壁高は約50cmで直線・直立気味に立ち上がる。南北軸方位はN-6°-Eを示す。埋土は大別3層で上位層は混入物の少ない暗褐色土で埋まるが下位層にはLoam粒・塊が多く混じり人為的または攪乱土の流入が考えられる。炉跡は検出されない。

床面は平坦をなす。床下掘形は壁周縁はやや深く、中央部が緩く高まりをなす。床土はLoam土を混ざる暗褐色土を充填する。柱穴は検出されない。南西隅部には貯蔵穴を思わせる土坑があり、径80cm・深さ55cmの略円形を呈する。

出土遺物は図示できる物はなく、埋土中に古墳時代後期に属する遺物が散見する。



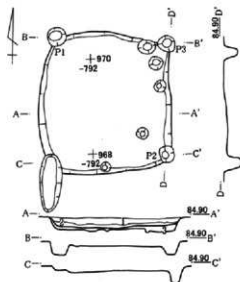
第309図 E<sub>3</sub>-133号竪穴跡

- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| E <sub>3</sub> -133竪 |                 |
| 1. 暗褐色土              | C軽石多量混・締        |
| 2. 暗褐色土              | C軽石混            |
| 3. 褐色土               | Loam粒多量混        |
| 4. 黄褐色土              | Loam粒多量混・C軽石微量混 |
| 5. 暗褐色土              | Loam混土(層形)      |

#### E<sub>3</sub>-167号竪穴跡 (第310図 P.L.84)

座標値X=967~970・Y=-790~-793の範囲にある。平面形状は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが東壁線を除きやや壁線が膨らむ。規模は長軸3.0m・短軸2.8m、床面積6.5㎡、確認壁高は約20cmで壁面は直線的である。長軸方位はほぼ真北を示す。埋土は大別2層でLoam粒が混じり攪乱土の流入と考える。炉跡は検出されない。

床面は平坦である。床下掘形は東壁沿いに幅1m・深さ15cmで深く、他所はこれより浅く均一である。床土はLoam粒・塊の混じる褐色土を充填する。出土遺物はない。



第310図 E<sub>3</sub>-167号竪穴跡

- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| E <sub>3</sub> -167竪 |                  |
| 1. 暗褐色土              | Loam粒微量混・締       |
| 2. 暗褐色土              | Loam中粒混・締        |
| 3. 褐色土               | Loam粒・塊多量混・締(層形) |

## E3-176号住居跡 (第311図 P L.84)

座標値  $X=101\sim 105$ ・ $Y=-759\sim -763$ の範囲にある。E3-20号溝 (中世以降) と重複する。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ略方形を呈するが、北東面壁線は縦く蛇行する。規模は長軸5.7m・短軸5.1m、床面積11.8㎡、確認壁高は8cmと浅い。長軸方位はN-44°-Eを示す。

炉跡は中央やや東に偏っている。径70×40cmの楕円形を呈し、浅い皿状の窪みで床土を窪めた地床炉である。火床は著しく赤化する。

床面は平坦をなすが耕作条痕がはげしく不評部分が多い。床下掘形は浅く、黒色土と暗褐色土の混土を充填する。柱穴などの施設は検出されていない。

出土遺物は少なく、壺口縁部など小片数点である。

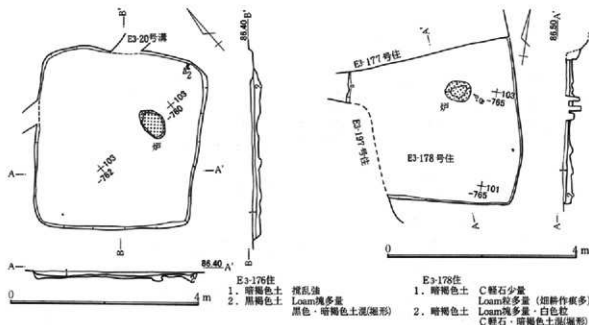
## E3-178号住居跡 (第311図 P L.84)

座標値  $X=100\sim 103$ ・ $Y=-764\sim -767$ の範囲にある。E3-197号住居跡・E3-177号住居跡 (ともに古墳後期) と重複し、南西部及び北半は消失する。全容は不明ながら平面形状は長短軸長差の無い略方形を呈しようか。東壁線は南側で緩く膨らむ。規模は東西長3.5～3.6m・南北長3.5+ $\varnothing$ m、確認壁高は約8cm、南北軸方位はN-6°-Wを示す。

炉跡は中央やや北東方にあり、径50cm前後の楕円形で床土を窪める地床炉である。

床面は平坦をなすが、耕作条痕が著しく詳細は不明である。床土はLoam土を混ざる暗褐色土を充填している。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。

出土遺物は少量で壺類の小片がみられるのみである。



第311図 E3-176・178号住居跡

## E3-184号住居跡 (第312図)

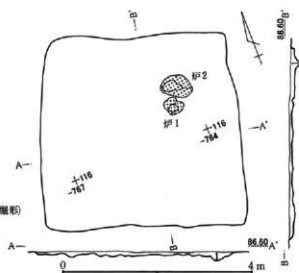
座標値  $X=114\sim 117$ ・ $Y=-763\sim -767$ の範囲にある。削平が深くおよび検出は掘形の埋土面である。平面形状は北西～南東方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸4.2m・短軸4.0m、床面積16.8㎡、長軸方位はN-74°-Wを示す。

### 第3章 検出された遺構と遺物

炉跡は中央やや北東寄りに被熱した皿状の窪みと考えられる。被熱部分は近接して2箇所ある。炉1は径70×50cm、炉2は径90×40cmの不整形円形を呈する。

出土遺物には遺構検出時に採取された甕・横造土器の小片がある。

E3-184住  
1.暗褐色土 Loam土・暗褐色土混(扇形)



第312図 E3-184号住居跡

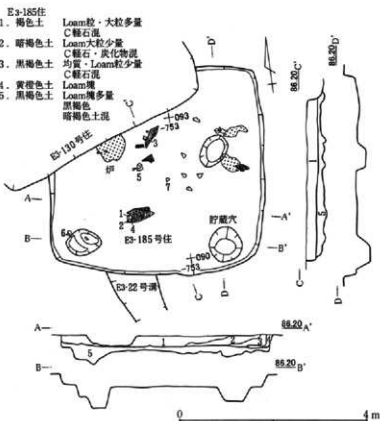
### E3-185号住居跡 (第313図)

座標値  $X = 089 \sim 093$ 、 $Y = -751 \sim -755$  の範囲にある。E3-130号住居跡(古墳後期)と重複し、西半部にE3-22号溝(中世以降)が南北走する。床面には家屋構造材と考えられる炭化材が残り、被火住居である。平面形状は東西方向に若干の長軸をなし、壁線の緩く影らむ隅丸方形である。規模は長軸4.5m・短軸4.3m、床面積17.0+ $\theta$  m<sup>2</sup>、確認壁高は20cm、長軸方位はN-81°-Wを示す。埋土は大別1層でLoam粒・塊を多く混入人為的埋土または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は中央やや北西寄りにあり、径60cmの楕円形で浅く皿状に窪める地床炉である。東方には炉跡と見られる床面の被熱箇所が検出されている。被熱範囲は径70×50cmほどの楕円形で床土を火床にする地床炉である。遺存状態から前者の炉跡に先立つものであろう。

床面は平坦である。床下掘形は壁周縁を15~20cm窪め、中央部は高まりをなす。床土はLoam土・黒色土・灰褐色土の混土を充填する。貯蔵穴は南東隅にあり、径70cm・深さ25cmの略円形を呈す。柱穴は検出されていない。

出土遺物は少量で、甕・高坏などがある。



第313図 E3-185号住居跡

床面は平坦である。床下掘形は壁周縁を15~20cm窪め、中央部は高まりをなす。床土はLoam土・黒色土・灰褐色土の混土を充填する。貯蔵穴は南東隅にあり、径70cm・深さ25cmの略円形を呈す。柱穴は検出されていない。

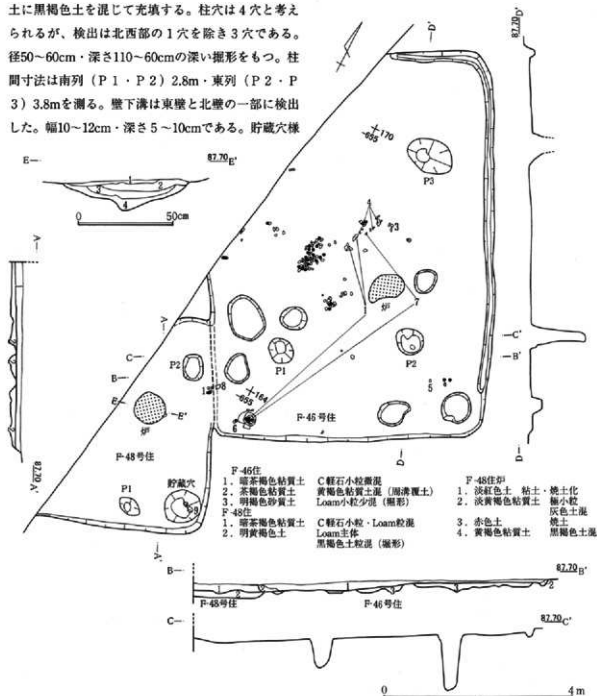
出土遺物は少量で、甕・高坏などがある。

## F-46号住居跡 (第314図 P L.84)

座標値  $X=163-172$ ・ $Y=-650--658$ の範囲にある。F-48号住居跡(古墳前期)と重複するがこれより新しい。西半は現道(調査時)にかかり不明である。平面形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈しよう。規模は長軸8.1m・短軸6.0m、床面積45.5+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は15~17cm、長軸方位はN-26°-Wを示す。粗土は混入物の少ない暗褐色土である。

炉跡は中央やや東に寄っており、径80×50cmの楕円形状で床土を炉床にする地床炉である。

床面は平坦をなす。床下掘形は壁沿いに幅1mほどの窪みを巡らせ中央部が高まりとなる。床土はLoam土に黒褐色土を混じて充填する。柱穴は4穴と考えられるが、検出は北西部の1穴を除き3穴である。径50~60cm・深さ110~60cmの深い掘形をもつ。柱間寸法は南列(P1・P2)2.8m・東列(P2・P3)3.8mを測る。壁下溝は東壁と北壁の一部に検出した。幅10~12cm・深さ5~10cmである。貯蔵穴様



第314図 F-46・48号住居跡

の落ち込みは南東隅部に2箇所確認されたが、両者とも浅い窪みで判然としない。

出土遺物は中央部に散在的な状況で、南西部床面からは完形度の高い甕が出土している。

#### F-48号住居跡 (第314図)

座標値X=159~164・Y=-654~-657の範囲にある。F-46号住居跡(古墳前期)と重複しこれより古い。西半は現道(調査時)にかかり不明である。平面形状は方形を呈しようか。略南北・東西の各軸長は4.5m・3.5mまで確認した。確認壁高は約15cmである。南北軸方位はN-13°-Wを示す。埋土は大別1層で混入物の少ない暗茶褐色土である。

炉跡は中央やや東に位置しようか。径60cmの略円形で、炉底には粘土材を塗布して火床とする。粘土材の厚さは45cmである。

床面は平坦である。床下掘形は中央部に若干の高まりをなす。床土はLoam粒・塊が少量混じる黒褐色土を充填する。柱穴様の2穴が検出されているが南側のP1は掘形が浅い。P2は径50×40cm・深さ30cmの楕円形状である。貯蔵穴は南東隅にあり、径70cm・深さ40cmの略円形である。

出土遺物は甕底部など少量である。

#### F-49号住居跡 (第315図 P.L.84)

座標値X=143~148・Y=-656~-660の範囲にある。平面形状は長短軸長差のない略方形を呈するが、東壁線がやや短く形状が歪む。規模は軸長4.1m、床面積14.4m<sup>2</sup>、確認壁高は34cmで壁面は直線的で直立して立ち上がる。南北軸方位はN-25°-Eを示す。埋土大別3層で、中位層に多量のLoam塊が混じり、人為的または攪乱土の流入であろう。

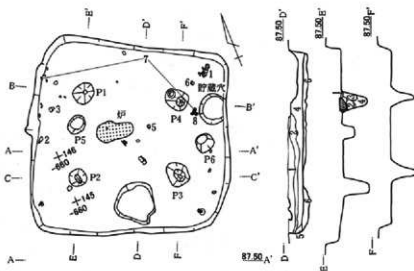
炉跡は中央僅かに北へ寄り、径80×40cmの不整楕円形で床土を浅く窪める地床炉である。

床面は平坦をなし、中央部は堅牢である。床下掘形はほぼ四壁に沿うように、幅70~100cm・深さ10cm

で窪みが回り中央部が高まりとなる。床土はLoam土が混じる粘性黒色土を充填する。柱穴は6穴が検出され、主穴はP1~P4で径35~50cm・深さ45~55cmである。P5・P6は間柱と考えられる。P5は径25cm、P6は55cmでP6は東列(P3・P4)の結線より40cmほど外側に配される。貯蔵穴は東壁沿いや北によってあり、径65×50cm深さ約30cm

である。

出土遺物は散在しており、床面のものが多い。模造土器が目立ち、甕・壺などがある。



F-49住

1. 暗灰褐色砂質土 C軽石粒多・Loam粒少混
2. 暗灰褐色砂質土 C軽石粒多・胎中・大粒混
3. 暗灰褐色砂質土 C軽石粒少・固Loam小粒混
4. 暗褐色土 C軽石粒少・固Loam小・中粒混
5. 黒褐色土 C軽石粒微・固Loam小・中粒少混
6. 黒色粘質土 黄褐色粘質土中粒混(層形)

柱穴 (P1)

1. 暗茶褐色粘質土 C軽石小粒混
2. 黄褐色粘質土 黒色粘質土微混
3. 黄褐色粘質土
4. 黄褐色粘質土 茶褐色砂質土混

第315図 F-49号住居跡



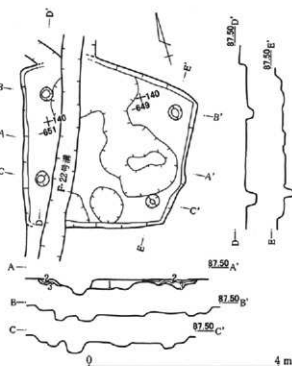
## F-51号竪穴跡 (第316図 P L.85)

座標値  $X=137\sim 141$ ・ $Y=-648\sim -651$ の範囲にある。掘り面での検出である。平面形状は長短軸長差のない略方形を呈するが、東壁線が短く形状が大きく歪む。規模は軸長3.5m、床面積10.2㎡、南北軸方位はN-15°-Eを示す。炉跡は検出されていない。

床下掘形は楕円形状で不連続な浅い窪みをなす。床土はLoam土混じりの褐色土である。柱穴は4穴で、径25~30cm・深さ20cm前後である。柱間寸法は北列(P1・P4)2.7m・南列(P2・P3)2.4m・東列(P3・P4)2.0m・西列(P1・P2)を測る。貯蔵穴などは検出されない。

出土遺物は少なく、単口緑瓶片が1点ある。

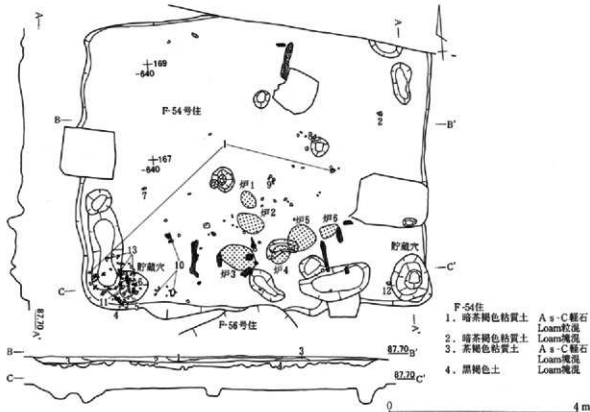
- F-51号  
 1. 褐色土 粘質・C軽石小粒混  
 2. 茶褐色土 C軽石散混  
 3. 淡茶褐色土 黄褐色粘質土混



第316図 F-51号竪穴跡

## F-54号住居跡 (第317図 P L.85)

座標値  $X=163\sim 169$ ・ $Y=-634\sim -641$ の範囲にある。調査が二次にわたり北壁線の一部が検出できていない。F-56号住居跡(古墳前期)と重複するが新旧関係は不明である。平面形状は東西方向に長軸をも



第317図 F-54号住居跡

- F-54号  
 1. 暗茶褐色粘質土 A s-C軽石  
 2. 暗茶褐色粘質土 Loam粒混  
 3. 暗茶褐色粘質土 Loam塊混  
 4. 黒褐色土 A s-C軽石  
 Loam塊混  
 Loam塊混

第3章 検出された遺構と遺物

つ隅九方形を呈する。規模は長軸7.4m・短軸6.2m、床面積は43.0㎡になろう。確認壁高は15cmである。長軸方位はN-86°-Wを示す。埋土は薄く1層ないしは2層でLoam粒などの混入物の少ない茶褐色である。

炉跡と考えられる痕跡は南壁近くに6箇所の焼土面が検出されている。長径50~80cmの大小の楕円形状でいずれもが多少とも硬化焼土面を有していた。床土を浅く窪めた地床坪である。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。床下掘形は中央部でおよそ3.0×2.5mの略方形範囲が僅かな高まりを作る。床土はLoam土が混じる黒褐色土を充填する。住居内には複数の小穴を検出するが、主柱を想定できる組み合わせは見いだせない。径50~30cmで深さはいずれも30cm前後である。貯蔵穴と考えられる施設は南東隅と南西隅に小土坑が見られる。両者とも径約100×80cm・深さ30cmである。

出土遺物は南西部にある貯蔵穴の一つに相当する土坑周辺に破片化して集中する。甕・壺・台付き壺などがあり、いずれも欠損部分が多い。

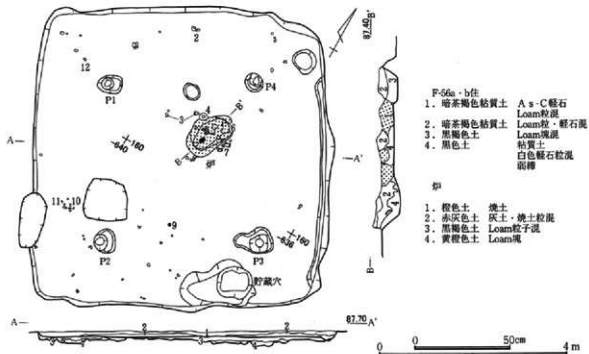
F-56a・b号住居跡 (第318・319図 P.L.85)

座標値X=156~163・Y=-635~-642の範囲にある。掘形面調査によって縮小位置で柱穴が検出され、建て替え住居跡と判明した。建て替え後をa号、前をb号とする。

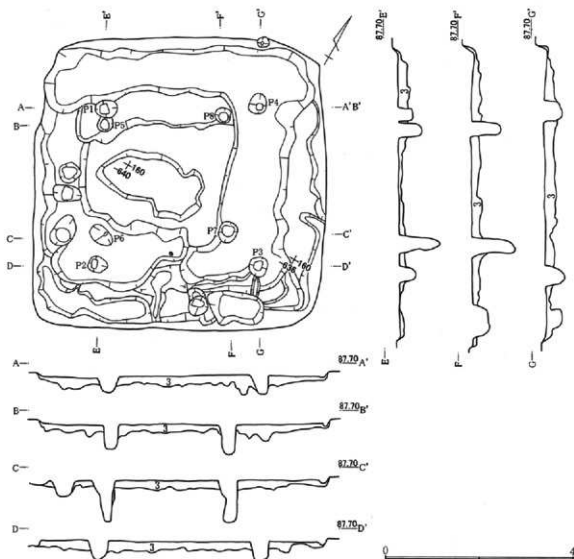
F-56a号住居跡 F-54号住居跡(古墳前期)と重複するが新旧関係は不明である。平面形状は北西~南東方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.4m・短軸6.2m、床面積36.8㎡、確認壁高は約15cm、長軸方位はN-30°-Wを示す。埋土は大別2層で掘り込みが浅く薄層であるがLoam粒・塊が多く混入し、人為的埋土か攪乱土の流入であろう。

炉跡は中央やや北寄りにあり、径110×70cmの楕円形状で床土を窪める地床坪である。

床面は平坦で、中央部分は堅牢さがある。床下は壁沿いに幅約1mの浅い凹帯を巡らし、中央部分では3m方形ほどの高まりとなる。床土はLoam塊が混じる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径40cm・深さ35cm



第318図 F-56a・b号住居跡



第319図 F-56a・b号住居跡掘形

ほどである。柱間寸法は北列（P1・P4）・東列（P3・P4）が3.3m、南列（P2・P3）3.4m・西列（P1・P2）3.2mを測る。壁下溝は北東面壁下に検出され、幅10cm・深さ4～5cmである。貯蔵穴は南東面壁際であり、75×65cmの略方形で深さ40cmである。なお、b号住居からの拡張にあたっては、南西面壁線または西列柱穴（P1・P2）の結線を基準に各3方向へ拡張する方法をとったものと考えられる。

出土遺物は甕・高坏・蓋・模造土器などがあり、甕類は炉跡周辺よりまとまって出土する。

#### F-56 b号住居跡

a号住居跡の掘形面より柱穴のみの検出であり壁線の痕跡はじめ炉跡などは窺うことはできず不明であるが、形状は方形を呈すると思われる。柱穴は4穴あり、径40cm・深さ50～85cmで拡張後のa号住居跡に勝る掘形を有する。柱間寸法は北列（P5・P8）2.5m・南列（P6・P7）2.6m・東列（P7・P8）2.4m・西列（P5・P6）2.3mを測る。

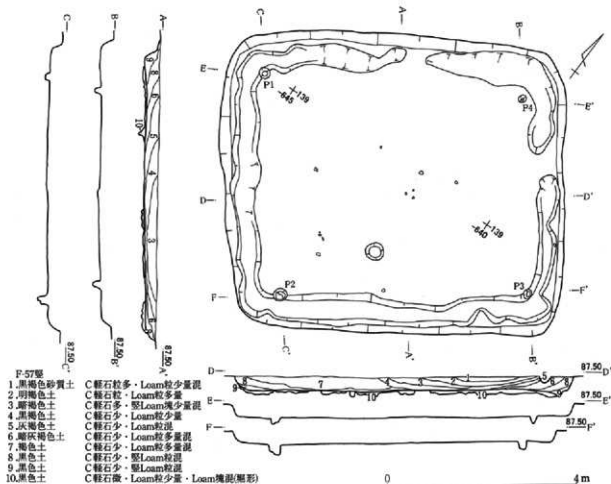
第3章 検出された遺構と遺物

F-57号竪穴跡 (第320図 P L.85)

座標値  $X=135\sim 142$ ・ $Y=-637\sim -646$ の範囲にある。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸7.2m・短軸6.1m、床面積39.3m<sup>2</sup>、確認壁高は28cmで壁立ちは傾斜をもち法幅が大きい。長軸方位はN-5°-Eを示す。埋土は住居跡中央部にかけてLoam粒・塊の混入が多く、東半部は著しい互層になっている。人為的埋土の様相が強い。炉跡は検出されない。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。床下掘形は四壁に沿って幅50cm・深さ10cm程度の比較的低低むらのない窪み帯が巡る。床土はLoam塊が混じる褐色～灰褐色土を充填するが、四壁沿いの凹帯にはLoam塊混じりの黒色土を用いている。柱穴は4穴であるが四隅に近接して配置されている。径15～30cm・深さ20cm前後で掘形は小規模である。柱間寸法は北列(P1・P4)5.5m・南列(P2・P3)5.2m・東列(P3・P4)4.1m・西列(P1・P2)4.7mを測る。貯蔵穴などは検出されない

出土遺物は埋土中より少量である。



第320図 F-57号竪穴跡

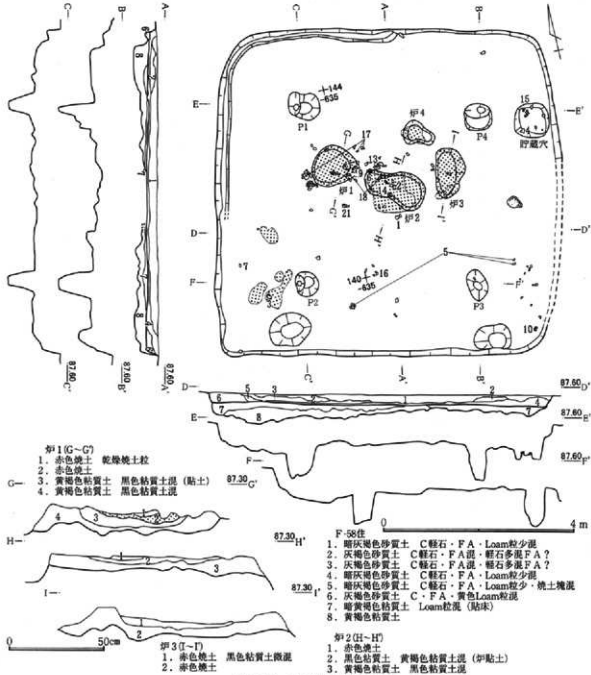
F-58号住居跡 (第321図 P L.85)

座標値  $X=137\sim 145$ ・ $Y=-630\sim -638$ の範囲にある。F-62号住居跡(縄文住居)と重複し、これより新しい。平面形状は東西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸7.3m・短軸6.8m、床面積45.6m<sup>2</sup>、確認壁高は20cmで壁面は直線的である。長軸方位はN-78°-Wを示す。埋土は大別2層で下位層にLoam粒・塊が多く、人為的または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡と考えられる痕跡は中央部僅かに北に寄って4箇所焼土面が確認されている。径110×70cm～70×50cm大の楕円形状のものが多く、いずれも床土を窪めた地床炉である。炉間には重複部分がなく新旧序列などは不明である。

床面は平坦をなし、中央部は比較的堅牢である。床下掘形は壁沿いに幅1.5～1.0mで深さ10cm前後の凹帯を巡らせ、中央部3～3.5m方形城の高まりを作る。床土は暗茶褐色土が混じるLoam土を充填する。柱穴は4穴で径60～70cm・深さ70cm前後である。柱間寸法は北列(P1・P4)3.9mで、南列(P2・P3)・東列(P3・P4)・西列(P1・P2)が3.7mを測る。壁下溝は北壁から西壁下にかけて検出され、幅15cm・深さ5～10cmである。貯蔵穴は東壁やや北に寄ってあり一辺70cmの略方形で深さ45cmである。

出土遺物は炉跡周辺に集中しているが埋土中のものも多い。高坏・器台・甕・壺・模造土器などがある。



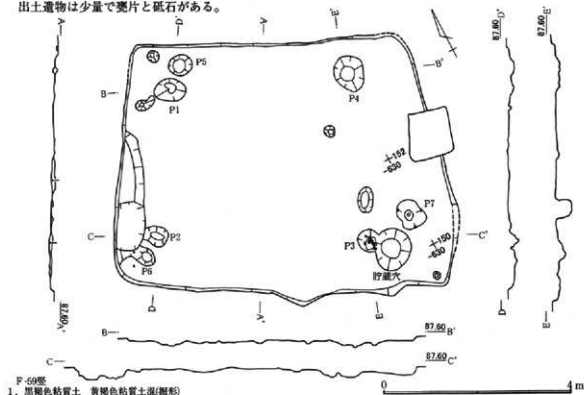
第321図 F-58号住居跡

F-59号竪穴跡 (第322図 P.L.85)

座標値  $X=149\sim 156$ ・ $Y=-628\sim -635$ の範囲にある。後代の削平が深く掘形面での検出である。平面形状は東西方向に長軸をもつが南壁線が長く台形を呈す。南壁線軸長7.0m・短軸5.2m、床面積33.9㎡、南壁線軸方位は $N-62^{\circ}-W$ を示す。炉跡は検出されない。

床土はLoam土混じりの粘性黒褐色土である。柱穴は4穴で径80~50cm・深さ20cm前後で浅い掘形である。柱間寸法は北列(P1・P4)2.8m・南列(P2・P3)3.4m・東列(P3・P4)2.7m・西列(P1・P2)2.3mを測る。P5~P7を検出するが、柱穴かの確定は出来ない。貯蔵穴様の穴は南東隅、柱穴P3に接してあり径90×70cm・深さ30cm前後の円形を呈す。

出土遺物は少量で甍片と瓦石がある。



第322図 F-59号竪穴跡

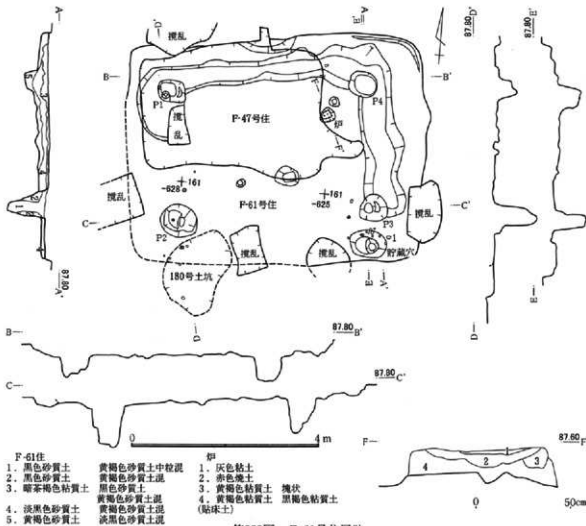
F-61号住居跡 (第323図 P.L.86)

座標値  $X=159\sim 164$ ・ $Y=-622\sim -629$ の範囲にある。F-47号住居跡(平安)と重複する。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.4m・短軸4.5m、床面積28.8㎡、確認壁高は15cmで浅い掘り込みである。長軸方位は $N-83^{\circ}-E$ を示す。埋土は攪乱土が多く不詳である。

炉跡はF-47号住居跡との重複のためか遺存状態は不良で径30cmあまりの小振りである。炉底は住居床土を窪め灰色粘土を塗布して火床とする。

床面は重複遺構のため遺存部分が少ないが平坦をなすと考えられる。床下掘形は北・西壁沿いに幅80cmの浅い窪みが巡り、床土はLoam土混じりの黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径60~80cm・深さ60~70cmの深い掘形である。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が4m、東列(P3・P4)2.6m・西列(P1・P2)2.3mを測る。貯蔵穴は南壁沿い東に偏っており、80×60cmの略方形で深さ20cmである。

出土遺物は少なく、貯蔵穴上面より小型蓋がある。



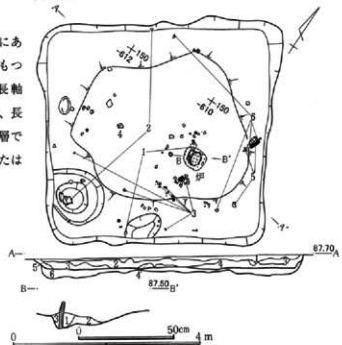
第323図 F-61号住居跡

F-64号住居跡 (第324図 P L.86)

座標値 X = 145 ~ 151 · Y = -607 ~ -613 の範囲にある。平面形状は北東～南西方向に若干勝る軸長をもつが長短軸長差の小さい方形を呈する。規模は長軸 4.7m · 短軸 4.5m、床面積 19.7m<sup>2</sup>、確認壁高は 26cm、長軸方位は N-59°-E を示す。埋土は大別 3～4 層で南側中位には Loam塊が多く混じり、人為的埋土または擾乱土の流入が考えられる。

- |            |                    |
|------------|--------------------|
| F-64住      |                    |
| 1. 黄褐色砂質土  | C 軽石粒・Loam粒少混・糠    |
| 2. 黄褐色砂質土  | C 軽石粒・Loam粒少混・糠    |
| 3. 黒褐色砂質土  | C 軽石粒多混            |
| 4. 褐灰色砂質土  | C 軽石粒多・Loam粒少混     |
| 5. 灰黄褐色軟質土 | Loam粒多混            |
| 6. 黒褐色土    | Loam粒・塊・C 軽石少混(扇形) |

- |          |         |
|----------|---------|
| 印        |         |
| 1. 暗赤褐色土 | 焼土粒混    |
| 2. 明赤褐色土 | 焼土      |
| 3. 黒褐色土  | Loam粒少混 |



第324図 F-64号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

炉跡は中央やや東側に寄り、径50cmの円形で床土を僅かに窪めた地床炉である。西縁には土師器甕の副部片を衝立状に埋置する。

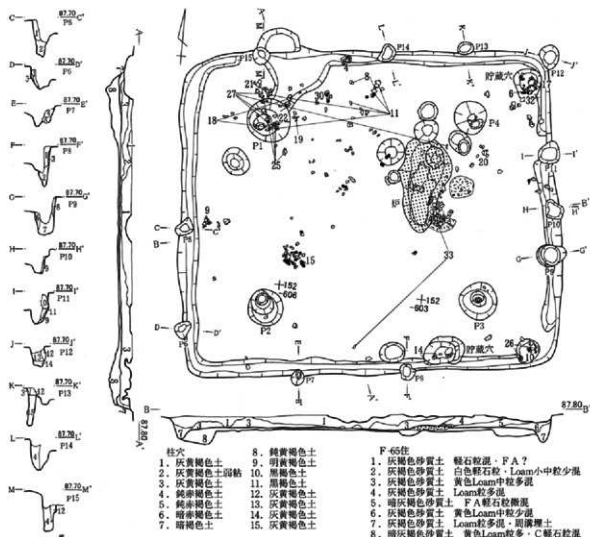
床面は中央3mほどの方形範囲が堅牢で僅かな高まりをなす。床下掘形は北西面壁から南東面壁沿いにかけて幅1mほどの窪みを巡らす。床土にはLoam塊が混じる鈍黄褐色土を充填する。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南隅にあり、二段掘り込みの略方形を呈する。上縁一辺120cmで10cm前後の深さで約20cmの縁幅をもつ。下縁は一辺70cmで床面よりの深さ約45cmになる。

出土遺物は炉跡周辺及び貯蔵穴内で、甕・壺などがある。

F-65号住居跡 (第325図 P L.86)

座標値X=150~157・Y=-600~-608の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸5.9m・短軸5.1m、床面積49.4m<sup>2</sup>、確認壁高は25cmで壁面は直線的で直立気味に立ち上がる。長軸方位はN-82°-Eを示す。埋土は不連続な堆積状態で、Loam塊が多量に混じり人為的な埋土の可能性が高い。

炉跡は中央やや東寄りにあり、200×100cmの長径な楕円形である。炉跡中央部に火床を示す焼土面が形



第325図 F-65号住居跡



成されている。炉底は床土を窪めた浅い皿状で焼土面南縁には片割れの長径転石を配置する地床炉である。炉跡周辺2箇所には灰色粘土の分布が見られる。

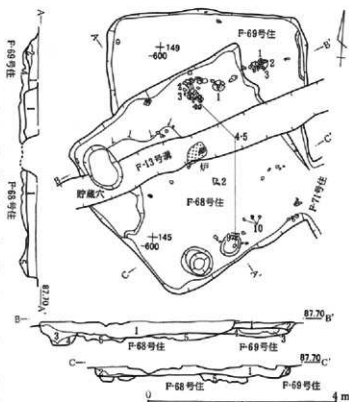
床面は平坦をなす。床下掘形は壁沿いに幅1m前後、深さ20~30cmの窪みを巡らせて中央部5.5×4.5mの方形範囲の高まりを作る。床土はLoam塊が多く混じる暗灰褐色土を充填する。主柱穴は4穴で掘形は径35~50cm・深さ45~60cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が3.4mで、東列(P3・P4)2.8m・西列(P1・P2)2.7mを測る。主柱穴の他壁縁に小穴を設けている。径20~30cmの小穴ながら深さ50~80cmの掘形をもつ。北壁・東壁は各3穴でさらに北東隅に1穴が穿たれる。北壁縁は西端より1.3mの間隔で1穴、続いて2.0m・1.2mで北東隅穴まで1.3mの間寸法である。東壁は北東隅の穴より1.5m、穴間は0.9m・0.7mで南端まで1.7mの間である。南壁は2穴でほぼ均等配置されている。東端より2.3m、穴間は1.7mで西端まで1.8mである。西壁は南に偏って配され、南端より0.7m、穴間は1.6mで北端まで2.7mを測る。貯蔵穴は北東隅または南壁沿いの落ち込みが相当しようか。前者は径50×40cm・深さ25cm、後者は径60×40cm・深さ40cmでともに方形気味の楕円形状である。壁下溝は全周し、幅10~20cm・深さ10cm前後である。

出土遺物は多く、極大の壺底部をふくむ壺類・甕・高坏・器台などがある。なお住居跡北側には埋土中より破片化した遺物が多い。

F-68号住居跡(第326図 P.L.87)  
 座標値X=143~148・Y=-596~-601  
 の範囲にある。F-69号竪穴跡・F-71号住居跡(古墳前期)と重複し、前者より新しく後者より古い。中央部にはF-13号溝(歴史時代以降)が東西走る。平面形状は北西~南東方向に若干の長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.3m・短軸4.0m、床面積15.1㎡、確認壁高約20cm、長軸方位はN-33°-Wを示す。埋土は大別1層でLoam粒が少量混じる灰褐色土である。後世の耕作痕が多くおよぶ。

炉跡は中央やや北に寄ってありF-13号溝の底面にのこらうじてその痕跡を留める。

床面は平坦である。床下掘形は北・南面壁沿いに幅1mの浅い窪みを巡らせ中央部に若干の高まりを作る。床土はLoam塊混じりの灰褐色土を充填する。柱穴は検出されない。貯蔵穴は西隅及び南隅に該当土塊を検出するが形状・規模から前者が相当しよう。径100×60cm・深さ30cmの楕円形



F-68住		F-69住	
1. 灰褐色砂質土	C 転石 白色転石 (FA?) 泥	1. 灰褐色砂質土	Loam小粒少 転石西面
2. 灰褐色砂質土	転石(C泥?)	2. 灰褐色砂質土	Loam小粒微 FA泥
3. 灰褐色砂質土	Loam小粒少泥	3. 黄褐色砂質土	灰褐色砂質土混(権形) 69住溝部分?
4. 灰褐色砂質土	Loam中粒少 転石少泥	4. 黄褐色砂質土	
5. 灰褐色砂質土	Loam中粒多泥		

第326図 F-68・69号住居跡・竪穴跡

を呈する。

出土遺物は北・南壁際に集中し床面出土が多い。甕類・模造土器が目立ち、高坏などもある。

#### F-69号竪穴跡 (第326図 P.L.87)

座標値  $X=147\sim 149$ ・ $Y=-596\sim -600$ の範囲にある。F-68号・F-71号住居跡(古墳前期)と重複し兩者より古い。F-68号住居跡によって南半は消失する。平面形状は方形を呈する。規模は東西軸4.2m・南北方壁線は約3.0mまで検出した。確認壁高は10cm足らずで低い。南北軸方位はほぼ真北を示す。埋土は大別2層でLoam塊が混入し、耕作攪乱土も多い。炉跡は検出されない。

床面は平坦と考えられるが消失部分が広く、床下掘形・床土など不明事項が多い。

出土遺物は床面より3個体の甕がまとも出土する。

#### F-71号住居跡 (第327図)

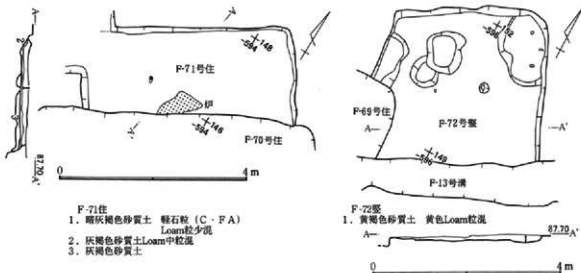
座標値  $X=145\sim 149$ ・ $Y=-592\sim -596$ の範囲にある。F-70号住居跡(平安時代)・F-68号住居跡(古墳前期)と重複し、南半部はF-70号住居跡によって消失する。平面形状は方形を呈しよう。規模は北西面壁長4.5m・北東・南西面壁線は約1.8mまで検出した。確認壁高は約25cmである。北西面壁線方位は $N-58^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別1層で砂質の暗灰褐色土である。

炉跡は中央やや北側にある。焼土粒の分布は $80\times 40\text{cm}$ の範囲になるが火床面の硬化は弱い。

床面は平坦である。床土はLoam・黒色土の混土を充填する。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。

#### F-72号竪穴跡 (第327図 P.L.87)

座標値  $X=148\sim 152$ ・ $Y=-593\sim -597$ の範囲にある。南縁はF-13号溝によって消失する。F-69号住居跡(古墳前期)と重複するがこれより古い。床面は削平され掘形面での検出である。平面形状は北西面壁線がやや短く歪んだ方形になる。規模は北東～南西軸3.7m・南東～北西軸3.3mまで確認した。床面積は $7.4\text{m}^2$ の程度になる。北東～南西軸方位は $N-66^{\circ}-E$ を示す。炉跡・柱穴の痕跡はなく、床土はLoam塊が混じる灰褐色土を充填している。



第327図 F-71・72号住居跡・竪穴跡

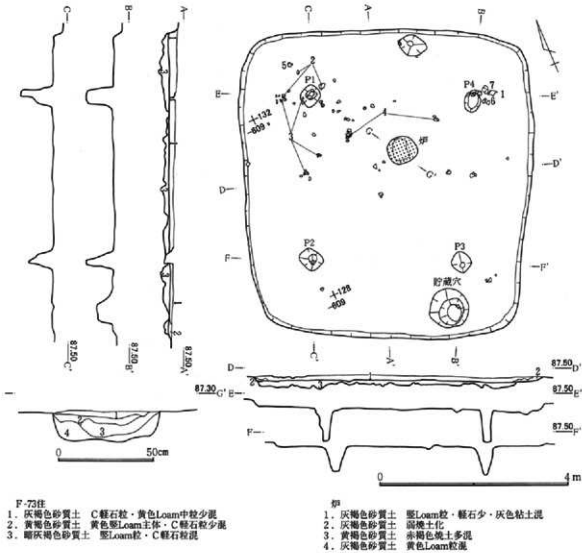
## F-73号住居跡 (第328図 P.L.87)

座標値  $X=126-133$ ・ $Y=-603$ の範囲にある。F-74号住居跡(古墳前)と接するが新旧関係は不明である。平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸6.5m・短軸6.3m、床面積35.2㎡、確認壁高は約10cmで低い。長軸方位は $N-16^{\circ}-E$ を示す。掘り込み浅く、堆積土は薄層で床面上はLoam塊の混入が多い。

炉跡は中央やや北寄りにあり、径60cmの略円形で床土を窪めて火床とする地床炉である。炉上面には灰色粘土が分布するものの炉底に塗布した様子は見られない。

床面は平坦である。床下掘形は四周边沿いに幅1m前後で不連続な深さ10～20cmの窪みを巡らせ、中央部約3.5m方形範囲が高まりとなる。床土はLoam塊層中に黒褐色土を混入して充填する。柱穴は4穴で、径40～45cm・深さ55～60cmの方形気味な掘形である。柱間寸法は北列(P1・P4)・東列(P3・P4)・西列(P1・P2)が3.4m、南列(P2・P3)が3.3mを測る。貯蔵穴は南東部にあり、径90×80cm・深さ40cmの略円形である。

出土遺物は散在して床面にあり、燧類が多い。



第328図 F-73号住居跡

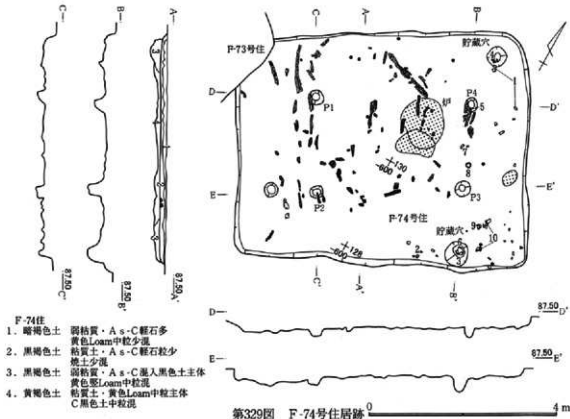
F-74号住居跡 (第329図 P.L.87)

座標値  $X=126\sim 133$ ・ $Y=-596\sim -603$ の範囲にある。床面上には炭化材が著しく残り、被火住居である。平面形状は北東-南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.2m・短軸4.9m、床面積27.8㎡、確認壁高は15cmで浅い。長軸方位は $N-62^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別2層で下位層にはLoam塊が大量に混じる黒褐色土が水平気味に堆積し、人為的な埋土の可能性が高い。

炉跡は中央やや北東部にあり、径100×80cmの楕円形で床面を浅く窪ます地床炉である。

床面は平坦をなし、中央部は堅牢である。床下掘形は四壁沿いに幅1m前後の窪みを巡らし、中央部に僅かな高まりを作る。床土はLoam塊に黒色土塊を混ぜ充填する。柱穴は4穴で径約30cm・深さ20~40cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)3.2m・南列(P2・P3)3.0m・東列(P3・P4)1.8m・西列(P1・P2)2.0mを測る。壁下溝は掘形面でその一部を確認したが不安定な遺存であった。貯蔵穴は北東部と南東部に相当する穴を検出している。北東部のものは径50cm、南東部のそれは径70cmあまりで深さほとんどに30cm程度の円形である。

出土遺物は壺・高坏・変類があり、南東側の貯蔵穴周辺に集中している。



第329図 F-74号住居跡 0 4m

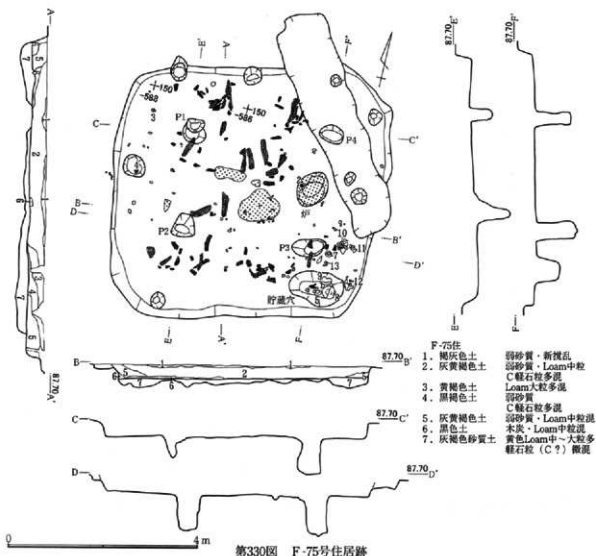
F-75号住居跡 (第330図 P.L.87)

座標値  $X=145\sim 151$ ・ $Y=-582\sim -588$ の範囲にある。北東側に攪乱土坑がかかる。床面直上には多数の炭化材が残り、被火住居である。平面形状は東西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸5.8m・短軸5.2m、床面積25.7㎡、確認壁高は約30cmで壁面は直線的・直立気味だが南壁面の上縁は法幅が広がる。長軸方位は $N-78^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別1層でLoam塊の混入が著しく、人為的な埋土が成された可能性が高い。

炉跡は中央やや東寄りにあり、炉底を基層のLoam土とする地床炉である。径60cmの略円形である。

床面は平坦である。床下掘形は壁沿いに幅1m・深さ20cmほどの窪みを巡らせ、中央部に約2.5×3.0m方形の高まりを作る。床土はLoam塊を混える灰褐色土を充填する。柱穴は4穴で径35～40cmで小振りであるが、深さは100cmに達する深い掘形を有する。柱間寸法は北列(P1・P4)3.0m・南列(P2・P3)2.8m・東列(P3・P4)2.4m・西列(P1・P2)2.1mを測る。北壁縁辺に3穴が穿たれる。径30cmほどで西側の1穴が最も深く、調査面より約80cm、他は50～40cmの掘形をもつ。穴間は西端・東端より約1mに各1穴があり、西より1.5m・1.7mの間隔である。貯蔵穴は南東隅にあり、径110×60cm・深さ45cmの楕円形を呈す。

出土遺物は貯蔵穴内およびその周辺に多く集中し、甕・壺類が多く高坏・器台・模造土器がある。



#### F-76号住居跡 (第331図 P L.88)

座標値X=139～143・Y=-579～-583の範囲にある。南西部隅で49号井戸(中世以降)と重複する。平面形状は北東～南西方向に若干の長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸3.7m・短軸3.5m、床面積11.5m<sup>2</sup>、確認壁高は僅かで7～8cmである。長軸方位はN-66°-Eを示す。

炉跡は中央やや西寄りに大小2箇所に焼土面を検出した。大は径50×40cm、小は40×30cmの楕円形状で地床炉である。

### 第3章 検出された遺構と遺物

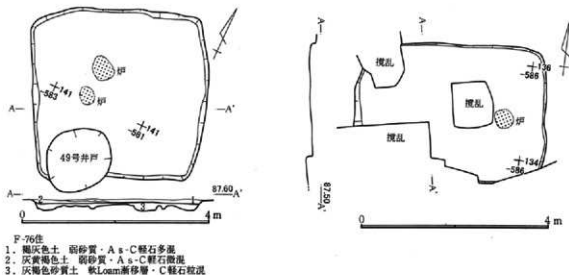
床面は平坦をなすが堅牢さはない。床下掘形は壁沿いに幅1m・深さ10cmほどの窪みを巡らせ中央部に方形1.5mほどの高まりを作る。柱穴・貯蔵穴は検出されず、出土遺物もない。

#### F-77号住居跡 (第331図 P L.88)

座標値  $X = 133 \sim 136$ ・ $Y = -585 \sim -589$ の範囲にある。南西隅部は攪乱を受け壁線は消失する。平面形状はほぼ東西方向に長軸をもつ隅丸方形になろう。規模は長軸4.0m・短軸2.9m、床面積10.7 $m^2$ 、確認壁高は痕跡程度である。長軸方位は $N-78^{\circ}-E$ を示す。

炉跡と考えられる焼土面は東側に寄っており、径約40cmの円形である。

床面は平坦と思われるが、攪乱が著しく不詳である。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。出土遺物は少なく、埋土(攪乱土)より、甕・高坏・器台・模造土器などが小片で見られた。



#### F-76住

1. 黒灰色土 弱砂質・A s-C軽石多量
2. 灰黄褐色土 弱砂質・A s-C軽石微量
3. 灰褐色砂質土 軟Loam層砂質・C軽石粒混

第331図 F-76・77号住居跡

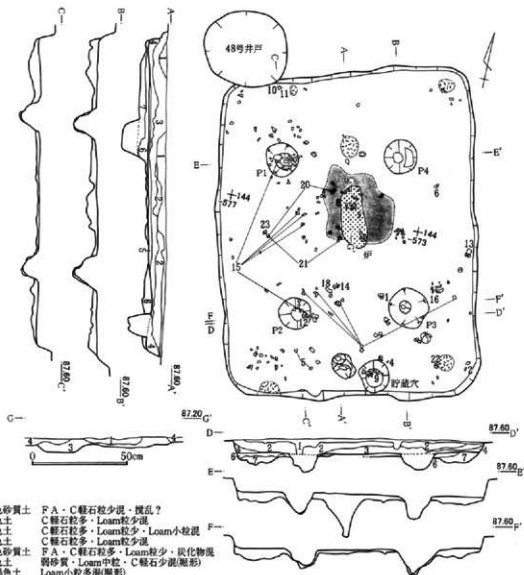
#### F-78号住居跡 (第332図 P L.88)

座標値  $X = 140 \sim 147$ ・ $Y = -571 \sim -577$ の範囲にある。平面形状はほぼ南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.8m・短軸5.5m、床面積34.1 $m^2$ 、確認壁高は約30cmで壁面は直線・直立して立ち上がる。長軸方位は $N-12^{\circ}-W$ を示す。埋土は大別2層で住居北側埋土は多量のLoam塊を混入する暗褐色土が堆積し、人為的埋土か攪乱土の流入が考えられる。

炉跡はほぼ中央にあり、径70×50cmの浅い楕円形の窪みを作る地床炉である。火床が分断することから2箇所ないしは炉の使用に時間差があった可能性もある。炉跡を中心に周囲1.5m範囲ほどに薄い炭化粒層が分布する。

床面は平坦をなす。床下掘形は壁沿いに幅1m・深さ15~20cmの窪みを巡らせ中央部分4.0×3.5m方形範囲の高まりを作る。床土はLoam塊が混じる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径70~80cm・深さ45~50cmの円形掘形をなす。柱間寸法は北列(P1・P4)2.4m・南列(P2・P3)2.3m・東列(P3・P4)3.1m・西列(P1・P2)3.2mを測る。壁下溝は掘形面の一部が確認されている。幅10cm・深さ15~20cmである。貯蔵穴は南壁沿い中央にあり、径70×60cm・深さ20cmの略円形である。

出土遺物は比較的床面出土が多く、甕・甕・異形器台・高坏・模造土器などがある。埋土中の遺物分布は南西隅と北西隅に集中し、破片化したものがほとんどである。

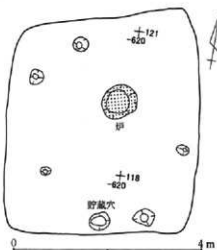


第332図 F-78号住居跡

F-81号住居跡 (第333図 P L.88)

座標値  $X=116\sim 121$ ・ $Y=-618\sim -622$ の範囲にある。遺存状況は悪く掘形面での検出である。平面形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸4.5m・短軸4.0m、床面積17.8 $m^2$ 、長軸方位はN-8°-Wを示す。

炉跡は中央やや北寄りにあり、径70cmの浅い窪みで若干の焼土面として確認されている。床面は遺損していない。小穴は6穴を検出したが柱列としての整合性は認められない。貯蔵穴は南壁沿い中央の1穴が相当しようか。径40cmの略円形である。出土遺物はない。



第333図 F-81号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

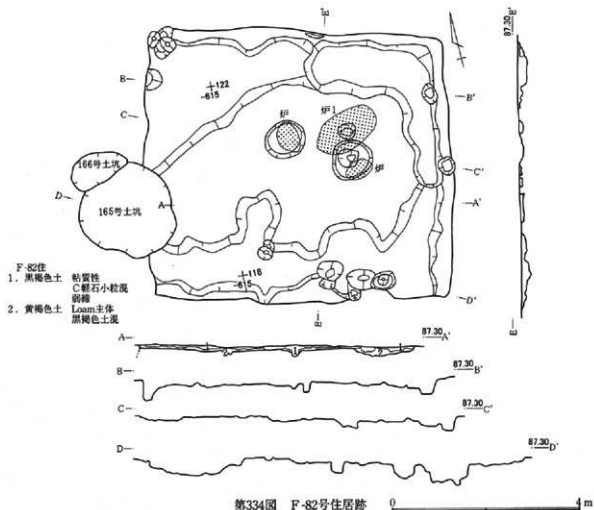
F-82号住居跡 (第334図 P L.88)

座標値  $X=117\sim 123$ ・ $Y=-610\sim -616$ の範囲にある。削平が著しく掘形面で検出である。平面形状はほぼ東西方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸6.6m・短軸5.8m、床面積35.8㎡、長軸方位はN-83°-Wを示す。

炉跡は中央僅か北東寄りに3箇所の焼土面を検出した。焼土面の形成範囲から炉1が最終の使用と考えられる。三者とも地床炉であろう。

床下掘形は壁沿いに不定幅(50~150cm)で窪み巡らせ、中央部4.0×3.5m範囲が不定形の高まりを作る。東・南・西壁際に小穴を検出するが柱列としては整合性に欠ける。

出土遺物は少なく、掘形埋土中より甕・器台片がある。



- F-82住  
 1. 黒褐色土 粘質性  
    C 軽石小粒混  
    弱粘  
 2. 黄褐色土 Loam主体  
    黒褐色土混

第334図 F-82号住居跡 0 4m

F-87号住居跡 (第335図 P L.88)

座標値  $X=135\sim 138$ ・ $Y=-622\sim -626$ の範囲にある。F-13号溝に南縁が接し、F-21号溝(中世以降)が当跡中央部を縦走する。平面形状は南東面壁線が短く北西~南東方向に長軸を持つ歪んだ方形を呈する。規模は長軸3.7m・短軸3.5m、床面積9.1㎡、確認壁高は痕跡程度である。長軸方位(南西面壁線)は約N-65°-Wを示す。

炉跡は北西方に偏り、径60×40cmの楕円形状の地床炉である。

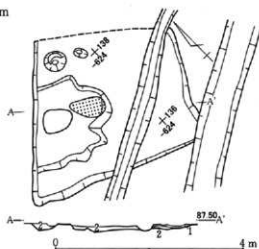
床面は平坦をなすと思われるが、耕作擾乱などが著しく不詳部分が多い。柱穴は検出されないが、貯蔵



穴と考えられる穴は北西隅部にある。径40cm・深さ30cmの円形である。遺物は少なく、みるべきものはない。

## F-87住

1. 暗褐色土 C 軽石粒・Loam粒混
2. 灰褐色砂質土 葦移層主体・軽石粒少・Loam粒少混

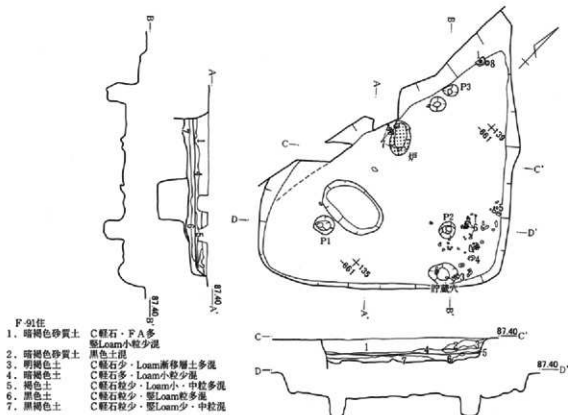


第335図 F-87号住居跡

## F-91号住居跡 (第336図 P.L.89)

座標値X=133~140・Y=-658~-662の範囲にある。西半は埋設物施工により消失する。全容は不明であるが、平面形状は北西~南東方向に長軸をもつ略方形を呈しよう。規模は長軸5.0+0m・短軸5.3m、床面積30+0㎡、確認壁高は35cmで壁面は直線的で直立気味に立ち上がる。長軸方位はN-45°-Wを示す。埋土は大別3層で中位にLoam塊が多量に混じる暗褐色土が堆積し、埋没途中での人為的埋土または攪乱土の流入が考えられる。

炉跡はほぼ中央にあたると考えられ、径70×40cmの楕円形状で床土を浅く窪める地床炉である。



## F-91住

1. 暗褐色砂質土 C 軽石・FA多量Loam小粒少混
2. 暗褐色砂質土 黒色土混
3. 暗褐色土 C 軽石少・Loam漸移層土多混
4. 暗褐色土 C 軽石多・Loam小粒少混
5. 褐色土 C 軽石粒少・Loam小・中粒多混
6. 黒色土 C 軽石少・Loam多混
7. 黒褐色土 C 軽石粒少・Loam少・中粒混

第336図 F-91号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

床面は平坦である。床下掘形は深さ15~20cmで壁際より中側に向かい僅かに深さを増している。床土は黒色土または褐色土にLoam土を混ぜ充填している。柱穴は3穴が検出され、北西の1穴は消失している。径40~50cm・深さ55~60cmの略円形または楕円形状の掘形をもつ。柱間寸法は南列(P1・P2)・東列(P2・P3)とも2.8mを測る。掘形面で南東面壁際の東寄りに1穴確認されているのが貯蔵穴と思われる。径60×40cm・深さ30cmである。

出土遺物は南東隅に集中し、住居跡埋没過程の比較的早い時期に投棄されたと考えられる。壺・甕・高坏・鉢などがある。

#### F-92号住居跡 (第337・338図 P L.89)

座標値 $X=122\sim 126$ ・ $Y=-649\sim -652$ の範囲にある。削平が深いのか床面直上での検出である。平面形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸3.8m・短軸3.3m、床面積12.0 $m^2$ 、長軸方位はほぼ真北を示す。

炉跡は中央やや北西にあり、径90cmあまりの略円形に焼土面が形成されている。炉底は床土を浅く窪める地床炉である。

床面は平坦である。床下掘形は西壁中央部分をのぞき四周を窪ませ中央部に高まりを作る。床土はLoam土が混じる暗褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。出土遺物は少なく、模造土器がある。

#### F-93 a・b号住居跡 (第337・338図 P L.89)

F-93 a号住居跡掘形調査面と炉跡・柱穴が検出され、拡張前後段階が重なる住居跡である。拡張後段階をa号、前段階をb号とする。拡張はb号住居跡の東柱穴列を基線に北・南・西へ1m強拡張したものである。

F-93 a号住居跡 座標値 $X=123\sim 133$ ・ $Y=-638\sim -649$ の範囲にある。平面形状は北東~南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸8.6m・短軸7.6m、床面積60.1 $m^2$ 、確認壁高は約30cmで壁面は直線的で直立気味に立ち上がる。長軸方位はN-45°-Eを示す。埋土は大別2層でLoam塊の多い暗褐色土で人為的な埋土か攪乱土の流入が考えられる。

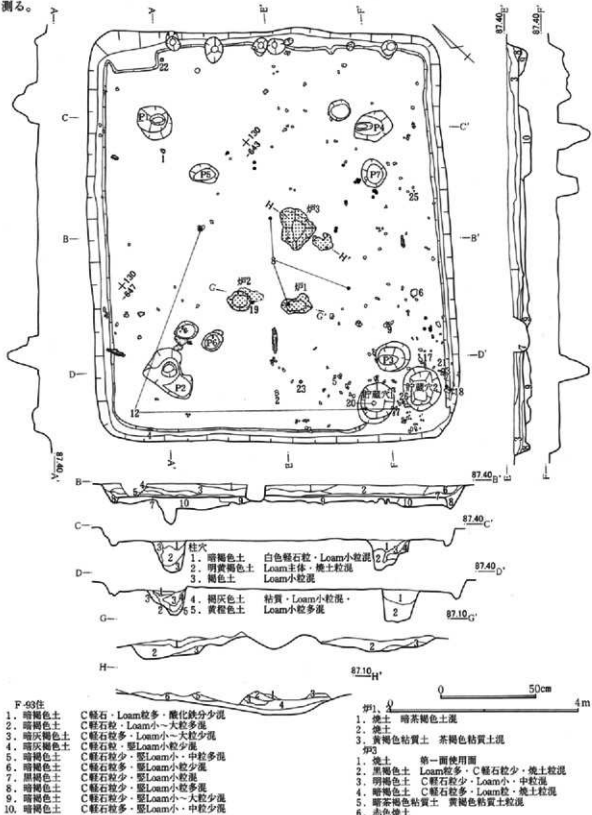
炉跡3はほぼ中央にあり、径90×70cmの不整楕円形を呈し、最下層と中間層を挟み炉床焼土面が形成される地床炉である。

床面は平坦である。壁沿い約1mの内側は比較的堅牢である。床土はLoam粒・塊を少量まじえる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴で径50~60cm・深さ約60cm前後である。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が3.5m、東列(P3・P4)3.7m・西列(P1・P2)3.9mを測る。北東面壁縁に小穴6~7穴が検出されている。検出面よりの深さ40~50cmで、中央に3穴が配され中心より左右に1.3m・1.5m間で各2穴が位置する。穴径は15~40cmと均一ではない。壁下溝は四壁下に巡る。幅10cm前後・深さ5~20cmである。貯蔵穴は南隅にあり、70×60cm・深さ約50cmの略方形である。2穴が併設されるが新旧の確定はできない。

出土遺物は模造土器が多く、甕・壺・高坏などのほかガラス小玉がある。

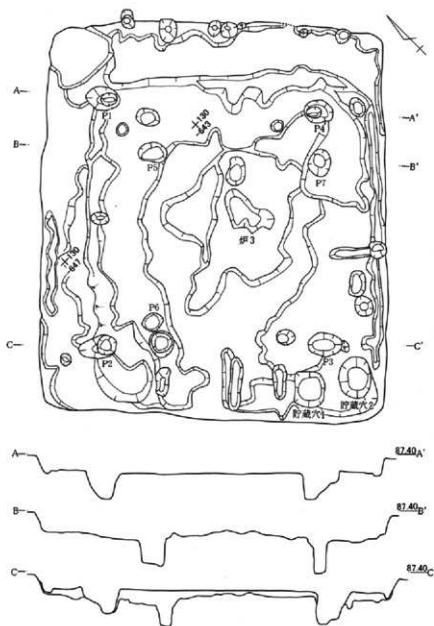
F-93 b号住居跡 F-93 a号住居跡への拡張前である。拡張については南東面壁縁に柱列結線を基準に3方向へ伸ばしたものである。平面形状は北東~南西方向に長軸をもつ方形であろう。規模は長軸約7.0m・短軸5.0mほどになる。床面積約35 $m^2$ 、確認壁高は40cm、軸方位は後段のa号とほぼ同軸方位を示す。

炉跡は小径の焼土面2箇所(炉1・2)を検出した。径50~60×30~40cmの浅い窪みを残す地床炉である。床面はa号住居跡の掘形により凹凸が多い。柱穴は4穴で径60~40cm・深さ60cmである。柱間寸法は北列(P5・P7)2.8m・南列(P6・P3)2.7m・東列(P3・P7)4.5m・西列(P5・P6)4.7mを測る。



第337図 F-92・93号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第338図 F-92・93号住居跡掘形

F-94号住居跡 (第339図 P L.89)

座標値  $X = 127 \sim 131$ ・ $Y = -621 \sim -624$ の範囲にある。平面形状は長短軸長差のない略方形を呈する。規模は北東～南西軸3.2m・北西～南東軸3.1m、床面積9.0m<sup>2</sup>、確認壁高は約30cmで壁面は直線的で直立気味に立ち上がる。北東～南西軸方位はN-68°-Eを示す。埋土は大別3層で中位には層厚にLoam塊混入土が堆積し不連続な大塊状を呈する。人為的な埋土の可能性が高い。

中央北東寄りに小範囲の焼土面が認められたが伊跡として良いかは不明である。

床面は平坦をなし堅牢である。床下掘形は南西・南東面壁沿い一部は壁沿いに窪みを巡らせ中央部に高まりを作る。床土はLoam塊と暗褐色土の混土を充填する。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南西隅にあり、径70×40cm・深さ20cmの楕円形である。

出土遺物は少なく、埋土中より壺・甕・模造土器など小片がある。

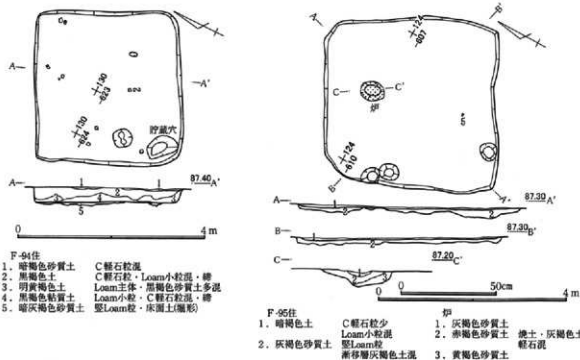
#### F-95号住居跡 (第339図 P L.90)

座標値  $X=121\sim 125$ ・ $Y=-606\sim -610$ の範囲にある。削平のためか床面に近い検出である。平面形状は長短軸長差のない略方形を呈するが南西面壁線は膨らみがあり、南東面壁線は大きく歪む。規模は軸長3.6m、床面積11.2m<sup>2</sup>、確認壁高は痕跡程度である。北東～南西軸方位はN-63°-Eを示す。

炉跡は北に偏っており、径50×40cmの楕円形状で床土を浅く窪める地床炉である。

床面は平坦をなすが隣作条痕が著しく遺存状態は悪い。床下掘形は北東面壁の一部から南東・南西面壁沿いに幅1mの窪みを巡らせ北半は若干の高まりとなる。床土はLoam塊が混じる灰褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。

出土遺物には壺・甕・模造土器などあるが埋土および攪乱層からの出土である。



第339図 F-94・95号住居跡

#### F-96号住居跡 (第340図 P L.90)

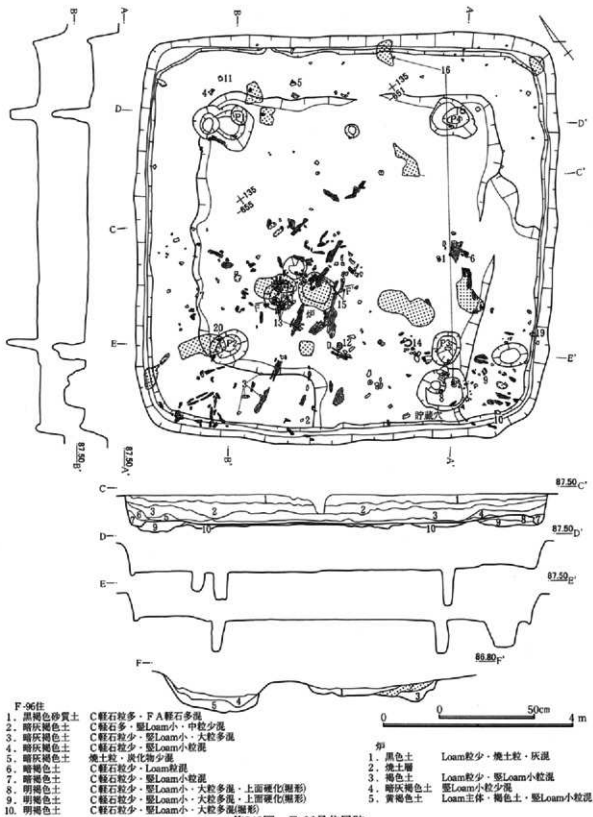
座標値  $X=127\sim 138$ ・ $Y=-648\sim -659$ の範囲にある。炭化材および焼土分布がみられ被火住居跡である。調査時点では、焼土・炭化材は床面との間層が存在したとしており、崩壊後の意図的焼却としている。平面形状は北西～南東方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸8.8m・短軸8.5m、床面積77m<sup>2</sup>、確認壁高は約50cmで壁面は直線的で直立気味に立ち上がる。長軸方位はN-54°-Wを示す。埋土は大別3層でLoam粒が多く、特に中位層に顕著である。人為的埋土が攪乱土の流入が考えられる。

炉跡は中央やや西に寄り、径70cmほどの円形で床土を浅く窪める地床炉である。

床面は四壁沿い幅約1mの範囲が帯状に緩く高まり、内側との高低差は4～5cmほどであるが、南西面壁沿いの中央部は高まりが跡切れる。床下掘形は四壁沿いが幅1mの帯状に窪む。床土はLoam土が混じる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴で径60～70cm・深さ60～80cmの掘形をもつ。柱間寸法は北列(P1・P

第3章 検出された遺構と遺物

4)・東列(P3・P4)・西列(P1・P2)が4.8mで南列(P2・P3)は4.7mを測る。壁下溝は全周し、幅10~20cm・深さ4~5cmである。貯蔵穴は南隅にあり、径100×80cmの略方形で深さ50cmである。出土遺物は炉跡および貯蔵穴周辺に集中し、甕・壺・高坏・器台などがある。

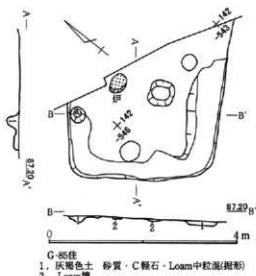


## G-85号住居跡 (第341図 P.L.90)

座標値  $X=140\sim 142$ ・ $Y=-543\sim -547$ の範囲にある。北半は削平によって消失し全容は不明である。検出は掘形面に近く、かろうじて平面形状と炉跡の存在から確認できた。平面形状は北東-南西方向に長軸をもつ方形を呈しよう。規模は長軸 $2.5+\varnothing$ m・短軸2.4m、床面積 $7.6+\varnothing$ ㎡、長軸方位はN-44°-Wを示す。

炉跡は中央やや北寄りにあり、小範囲焼土面の確認でかろうじてその存在が知れる。地床炉であろう。

床下掘形は壁沿いを幅約50cm・深さ4~5cmの浅い窪みを巡らせ、Loam塊が混じる灰褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴は検出されず、出土遺物もない。



第341図 G-85号住居跡

## G-88号住居跡 (第342図)

座標値  $X=128\sim 132$ ・ $Y=-502\sim -507$ の範囲にある。北縁部は前年度調査の削平によって消失する。G-89号竪穴跡と一部重複し土層断面では確認されていないが、混入物の観察より当跡が新しい所見がある。平面形状は方形を呈しよう。規模は南北軸は3.5mまでの確認で、東西軸長4.0mである。床面積 $13.0+\varnothing$ ㎡、確認壁高は約20cmである。南北軸方位はN-15°-Eを示す。埋土は大別2層で暗褐色土の自然堆積であろう。

炉跡と思われる痕跡は2箇所にある。炉1は北西に大きく偏り、径80cm前後で焼土面の形成は良好である。炉2はやや北寄りにあり、径 $50\times 30$ cmの楕円形で焼土面の状態は弱い。ともに地床炉である。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。

出土遺物は少量で高坏などがある。

## G-89号竪穴跡 (第342図)

座標値  $X=130\sim 131$ ・ $Y=-499\sim -502$ の範囲にある。G-88号住居跡(古墳前期)と重複し調査所見ではこれより古い。北部大半は前年の調査で削平消失するが、平面形状は方形になろう。東西軸は3.0m・南北は約1mの検出である。

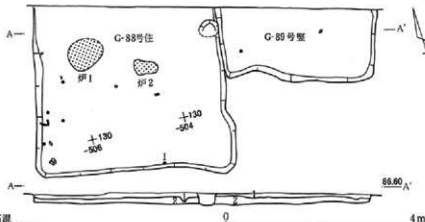
確認壁高は約5cmで痕跡程度である。床面はやや軟弱になる。炉跡・柱穴・貯蔵穴などの諸施設は検出されず出土遺物もない。

## G-88住

1. 暗灰褐色土 砂質・弱粘質  
C軽石多量混
2. 暗灰褐色土 砂質・弱粘質  
C軽石少量混(扇形)

## G-89竪

1. 暗灰褐色土 砂質・弱粘質・C軽石混
2. 暗灰褐色土 砂質・弱粘質・C軽石混(扇形)



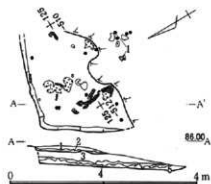
第342図 G-88・89号住居跡・竪穴跡

第3章 検出された遺構と遺物

G-98号壁穴跡 (第343図)

座標値  $X=124\sim126$ ・ $Y=-510\sim-512$ の範囲にある。谷地部縁辺で南側の大半は消失する。北東面壁線2.0m・北西面壁線約1.8mの範囲を検出したに止まる。北西面壁線軸方位は $N-35^{\circ}-E$ を示す。床面より10cm前後の上位で焼土・炭化材が残り、被火壁穴跡である。調査所見では炭化材に断面径 $14\times 7.5$ cm大の角状材が知られる。床面に堅牢さはなく、柱穴・貯蔵穴などは検出されていない。出土遺物は少なく、壺片がある。

- G-98壁
1. 暗褐色土 弱砂質・軟質・C軽石粒少量混
  2. 暗褐色土 白色粒少量混
  3. 暗褐色土 均質・C軽石粒少量混
  4. 暗褐色土 C軽石粒少量・鉄分凝集層混
  5. 暗褐色土 均質・白色粒少量混



第343図 G-98号壁穴跡

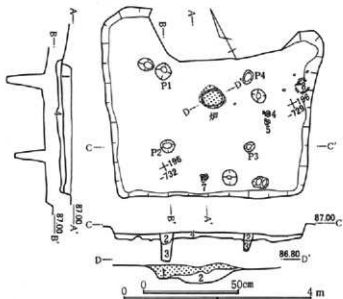
工場-1号住居跡 (第344図)

座標値  $X=194\sim199$ ・ $Y=-728\sim-732$ の範囲にある。調査前の排水溝施工のため北側の一部を消失する。平面形状は北西～南東方向に長軸をもつ方形を呈しよう。規模は長軸4.3m・短軸3.9m、床面積約15.2 $m^2$ 、確認壁高は20cmで壁高の割には法幅が広い。長軸方位は $N-66^{\circ}-W$ を示す。埋土は大別1層でLoam粒が混じる黒褐色土である。

炉跡はほぼ中央にあり、径60 $\times$ 50cmの楕円形状に床土を浅く窪める地床炉である。

床面は平坦をなし、中央部はやや堅牢である。床下掘形は深さ10cm前後で均一である。床土はLoam塊を少量混じえる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径35 $\sim$ 20cm・深さ50 $\sim$ 70cmの掘形をもつが南東部P3のみ浅く30cm前後である。柱間寸法は北列(P1・P4)1.8m・南列(P2・P3)1.7m・東列(P3・P4)1.5m・西列(P1・P2)1.6mを測る。貯蔵穴については南西壁沿いで円・方形2穴を検出したがいずれとも確証は得られない。円形は径35cm・深さ45cm、方形は35 $\times$ 25cm・深さ24cmである。

出土遺物には壺・鉢・壺・高坏などがある。



- 工場-1住
1. 暗褐色土 Loam粒混
  2. 黒褐色土 砂質・C軽石多量・Loam塊少量混
  3. 暗褐色土 砂質・C軽石・Loam粒少量混
  4. 黒褐色土 砂質・C軽石多量・Loam塊少量混(貼床)

炉

1. 焼土層
2. Loam粒 黒褐色土混

第344図 工場-1号住居跡

工場-3号壁穴跡 (第345図 P L.90)

座標値  $X=191\sim196$ ・ $Y=-710\sim-717$ の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形を呈するが南東隅部の壁線は丸味が強い。規模は長軸5.6m・短軸5.1m、床面積26.2 $m^2$ 、確認壁高は10cmと低い。長軸方位は $N-74^{\circ}-W$ を示す。埋土は床面直上に粘性の黒褐色土の薄層である。炉跡は検出されない。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。床土はLoam粒が混じる黒褐色土を充填する。柱穴に相当する穴は北

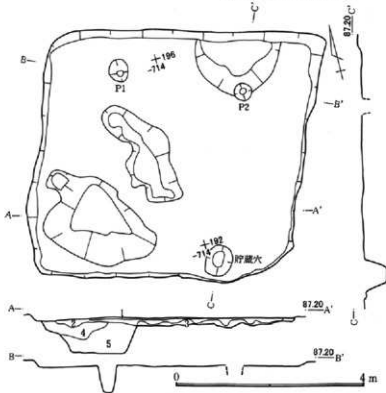


壁寄りに2穴検出したが対になるべき柱穴は確認されなかった。2穴は径約40cm・深さ60cmで、間寸法は2.5mを測る。貯蔵穴は南東隅部にあり、径65×55cm・深さ40cmの楕円形である。

出土遺物に見るべきものはない。

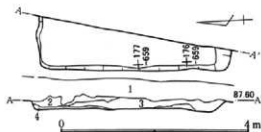
#### 工境-5号竪穴跡 (第346図)

座標値 $X=174\sim 179$ ・ $Y=-658\sim -659$ の範囲にある。西側小範囲の検出で、大半は調査区域外にかかる。竪穴跡としたが詳細は不明である。平面形状は方形を呈しようか。西壁長は4.0mで北・南壁線はそれぞれ1.0m・50cmを検出した。確認壁高は約25cmである。西壁線方位は $N-5^{\circ}-E$ を示す。出土遺物はない。



- 工境-5壁  
 1. 暗褐色土 Loam中粒多量泥・砂  
 2. 黒褐色土 砂質・C軽石・Loam粒・大粒泥  
 3. 黄色土 Loam土・黒褐色土泥  
 4. 明黄褐色土 風倒木痕?  
 5. 暗褐色土 風倒木痕?

第345図 工境-3号竪穴跡



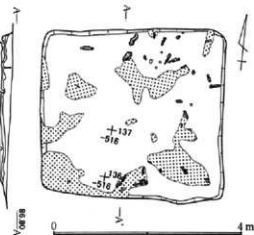
- 工境-3壁  
 1. 黄土  
 2. 黒褐色土 Loam土泥 (攪乱)  
 3. 暗褐色土 Loam粒少量泥  
 4. 暗褐色土 Loam中粒泥

第346図 工境-5号竪穴跡

#### 工境-7号竪穴跡 (第347図)

座標値 $X=135\sim 139$ ・ $Y=-513\sim -517$ の範囲にある。焼土・炭化材の分布が顕著で被火竪穴跡である。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸3.8m・短軸3.5m、床面積 $12.4\text{m}^2$ 、確認壁高は15cmで、南半の壁立ちは削平を受け不明瞭である。長軸方位は $N-81^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別2層で上位は

- 工境-7壁  
 1. 暗黒色土 FP泥  
 2. 暗赤褐色土 焼土塊・炭化物混  
 3. 暗褐色土



第347図 工境-7号竪穴跡

暗褐色土が厚く、下位には被熱した薄層が炭化材を覆う。炉跡は確認されない。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。床下掘形は浅く、床土には暗褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴は検出されていない。出土遺物は細片で図示するものはない。

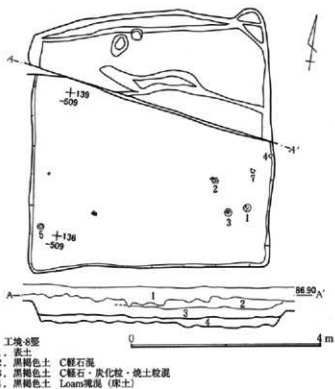
#### 工境-8号竪穴跡 (第348図)

座標値  $X=135\sim 140$ ・ $Y=-504\sim -509$ の範囲にある。北縁は調査区域外にかかるが、平成7・8年度に調査が実施された隣接する三和工業団地I遺跡の97号住居跡と同一遺構である。ここでは両者合成図をしめし、記載事項も部分的に参考にする。三和工業団地遺跡96号住居跡(古墳前期)と重複するが、新旧関係はこれより新しいとの所見である。

平面形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈す。規模は長軸5.3m・短軸5.1m、床面積は約27㎡になろう。確認壁高は50cmで壁面の法幅は広い。長軸方位はN-4°-Wを示す。埋土は大別3層で混入物の少ない黒褐色土である。炉跡は検出されない。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。三和工業団地I遺跡によれば(後世の地滑りのため東西方向に段差ができ、その南側が低い。)とされる。床土は粘性のある黒褐色土を充填する。柱穴・貯蔵穴なども検出されない。

出土遺物はS字口縁・単口縁台付き甕・壺・高坏・甕など床面からの出土が多い。



第348図 工境-8号竪穴跡

#### 工境-9号竪穴跡 (第349図 P L.90)

座標値  $X=233\sim 239$ ・ $Y=-727\sim -733$ の範囲にある。平面形状は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸5.3m・短軸4.6m、床面積21.4㎡、確認壁高は20cmで傾斜がやや緩く法面が広い。長軸方位はN-16°-Eを示す。埋土は大別2層で下位層にLoam塊が多く混じる褐色土である。炉跡は検出されない。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。床下掘形は浅く均一である。床土はLoam粒・塊が混じる黒~暗褐色土を充填する。柱穴に類する穴は中央部東西軸方向に3穴がある。径40cm・深さ25~30cmで明瞭な掘形をもつ。壁下溝は北~東壁下に部分的な検出である。幅10cm・深さは痕跡程度である。

出土遺物は少なく散在的で、埋土中である。

#### 工境-10号竪穴跡 (第350図 P L.90)

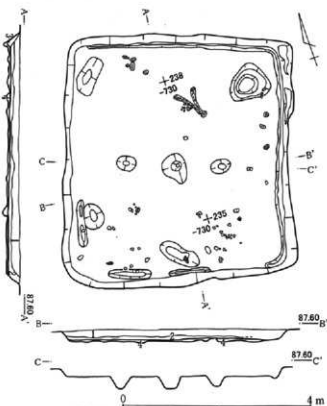
$X=217\sim 222$ ・ $Y=-730\sim -736$ の範囲にある。工境-11号竪穴跡と重複するが新旧関係は不明である。

調査過程には掘形面での高低差もなく重複遺構としての確定はできなかったが、10号竪穴跡の壁下溝の痕跡が11号竪穴域に残り、また、貯蔵穴と想定される方形土坑の検出により別遺構として扱う。

平面形状は北東～南西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸5.1m・短軸3.8m、床面積15.7㎡、確認壁高は25cmで壁面の傾斜が緩く法面幅が広い。長軸方位はN-64°-Eを示す。埋土は大別1層で湿気による酸化現象が著しい。床面直上の薄層にはLoam粒が多く混じる。炉跡はない。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。床下掘形は壁沿い四周が若干窪み、中央部に高まりを作る。床土はLoam粒・塊が混じる粘性黒褐色土を充填する。貯蔵穴は南東部隅にあり径50×40cmの方形で深さ35cmである。壁下溝は全周し幅10～15cm・深さ15～18cmである。柱穴は検出されない。

出土遺物は埋土中が多く、中央部に集中する。壺・甕・高坏などがある。



工境-9号

1. 暗褐色土 砂質・白色粒多量・Loam粒少量混
2. 明灰褐色土 白色粒少量・Loam粒・中粒多量混
3. 暗褐色土 砂質・Loam粒少量混
4. 暗褐色土 弱粘質土Loam大粒多量混(團形)

第349図 工境-9号竪穴跡

## 工境-11号竪穴跡 (第350図 P.L.90)

座標値X=217～220・Y=-730～-733の範囲にある。工境-10号竪穴跡と重複するが新旧関係は判然とし難い。平面形状は北西～南東方向に長軸をもつ方形になろう。規模は長軸3.1m・短軸2.9m、床面積7.5㎡、確認壁高は35cmで立ち上がりは傾斜をもち法幅は広い。長軸方位はN-28°-Wを示す。埋土は大別2層からなり上位層は炭化物・Loamが混じる暗褐色土で下層はLoam土が斑点状に混じる黒褐色土である。

工境-10・11号

1. 黒褐色土 砂質・白色粒多量混
2. 黒褐色土 砂質・白色粒多量・Loam粒混
3. 明灰褐色土 白色粒・Loam粒多量混
4. 暗褐色土 Loam粒多量混
5. 黒褐色土 弱粘質・Loam粒・大粒少量混



第350図 工境-10・11号竪穴跡

床面は踏み締まりは弱く、不安定である。北東面・南東面壁際に3穴を検出したが柱穴としての整合性はない。径30cm・深さ25~30cmである。壁下溝は北東面壁・北西面壁下に部分的に検出した。幅15cm・深さ4~5cmである。当跡に伴う遺物はほとんどない。

工境-12号住居跡 (第351図 P L.90)

座標値  $X=209\sim 217$ ・ $Y=-726\sim -733$ の範囲にある。三和工業団地遺跡65号住居跡(古墳前期)と同一で西半部にあたる。両者の合成図を作成し本書に掲載する。平面形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸7.9m・短軸7.0m、床面積は50㎡前後になろう。確認壁高は約20cm立ち上がりはやや傾斜をもつ。長軸方位はN-16°-Wを示す。埋土は大別1層で黒褐色土の自然堆積であろう。

炉跡はほぼ中央にあり径70cmで炉床に粘土材を塗布した作りと考えられ、中央部に厚さ5cmほどの被熱粘土盤の残欠がある。

床面は平坦であるが堅牢さは弱い。床下掘形は浅く、部分的に壁際を窪めてある。床土はLoam塊が混じる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴で径40~45cm・深さ50cm前後である。配置は、南東部柱穴P3がやや内側に振れて柱筋がゆがむ。柱間寸法は北列(P1・P4)4.0m・南列(P2・P3)3.8m・東列(P3・P4)3.6m・西列(P1・P2)4.3mを測る。壁下溝は東壁の一部に確認したに止まる。貯蔵穴は検出されない。

出土遺物の多くは埋土中からで甕・壺などがある。



## 第5節 古墳時代前期の遺物

本節では舞台遺跡における古墳時代前期の、主には堅穴住居跡・堅穴跡から出土した土器を中心に分類を行い各器種の成・調整技法など基本的諸属性を記載した。また、計測値は遺構ごとに土器以外の遺物とともに表立てで掲載した。

### 1. 土器の器種分類

分類の目的は、広く当該期の遺跡範囲内での土器種組成を概観するため、器種分類の域を超えるものではない。また、分類の基準は形態上の差異を主にしたが、機能・成調整の記述は普遍的な事項に止め、器種名称については通有に用いられているものに準拠した。

舞台遺跡出土の古墳前期の土器には大別して、埴形（小型丸底）土器（以下、形土器を略す）・器台・高坏・甌・蓋・鉢・壺・甕の器種がある。各器種に見られる大きな形態差による分類にはA・B・Cのalphabetを、さらに口縁・体部・底部・加飾の有無などの細別にはA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>のように算用数字を加えて用いた。成・調整技法のうち基本的なものは分類項に記載したが、個別固有に必要と考えられる場合には各遺構出土の遺物記載項でふれることとした。

埴A いわゆる小型丸底形土器である。体部が浅く口縁部が内湾気味に大きく開き、口径が体部径に勝る。底部の作りで2つに分かつ。

A<sub>1</sub> 底部は小さな平底で体部剝削り後磨き、口縁部内外面は磨きを施す。

A<sub>2</sub> 底部は丸底で磨きの有・無がある。

器台 坏部と脚部を通す孔の有・無でA・B 2つに分かつ。外面及び坏部内面に磨きを施すものが多い。

器台A 皿状の坏部をもち、孔が脚部に貫通するもの。坏部の形状から4つに分かつ。

A<sub>1</sub> 坏部が緩く内湾気味に開く。

A<sub>2</sub> 坏腰部が強く屈して上半が直線的に立ち上がる。

A<sub>3</sub> 扁平な坏部で脚部上半が柱状をなすもの。

A<sub>4</sub> 坏部と脚部がくの字状に屈するもの。いわゆるX字器台に類似する。

器台B 坏部と脚部が貫通しないもの。土坏部の形状から3つに分かつ。

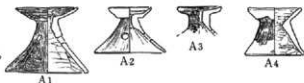
B<sub>1</sub> 坏部が緩く内湾気味に開く。

B<sub>2</sub> 坏端部が小さく立ち上がるもの。

B<sub>3</sub> 坏部が内湾気味に小さく開く。



第352図 土器分類 (埴)



第353図 土器分類 (器台)

高坏 坏部の形状でA～Eの5つに分かつ。脚部に3～4円孔を穿ち、外面及び坏部内面に磨きを施すものが多い。

高坏A 楕形の坏部をもつ。

A<sub>1</sub> 小型の楕形坏部で脚部は大きく開き、坏径より大きい。

A<sub>2</sub> 大型の楕形坏部で脚径は坏径より小さい。

高坏B 坏部は底辺外面に小さく腰部を作り、直線的に開く。

B<sub>1</sub> 小型で直線的に開く坏部で、脚は大きく開き坏径より大きい。

B<sub>2</sub> 大型で直線的に開く坏部で、脚径は坏径より小さい。

高坏C 坏部は深目で下半が緩やかに屈して、上半は外反気味に開く。

高坏D 坏部外底は水平面を作り、強く屈して直線的に大きく開く。

高坏E 坏部上半が外反して大きく開く。

E<sub>1</sub> 坏外底辺に稜をもち外反気味に立ち上がり上半は大きく外反して開く。

E<sub>2</sub> 坏腰部で屈曲し、外反して大きく開く。

高坏脚部 柱状形態の脚部で裾部の形状でA～Dの4つに分かつ。外面丸磨き、内面丸調整を施すものが多い。脚部への穿孔は無い。

A 脚部2/3程度の下位で強く折れて裾部は大きく開く。

B 脚部先端が直角ほどに強く折れ、短い裾部を作る。

C 脚部下位で屈して直線的に開く裾部。

D 脚部下位で外反気味にゆったり開く裾部。

結合形土器 壺または壺口縁部と脚を結合したと思われるもの。

A・Bの2つに分かつ。

結合土器A 壺口縁部を結合したもので、器台形態。丸磨きを施すものが多い。

A<sub>1</sub> 二段口縁壺の口縁を結合させ、坏部と脚部に孔が貫通する。脚部に円孔を穿つ。

A<sub>2</sub> 大きく外反して開く坏部に複数の円孔を穿つ。坏部と脚部を貫通する孔は無い。

結合土器B 小型壺を結合したもので脚部の作りは甕などの台部とは異なり、高坏・器台のものに類似する。壺体部は刷毛目で部分的に磨きを施す。

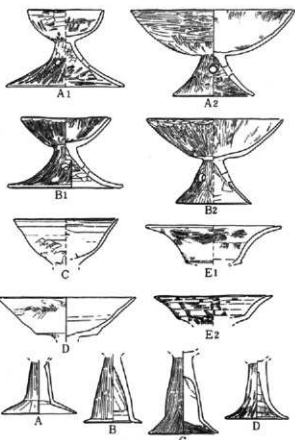
B<sub>1</sub> 罎を結合したもので 口径は台部径に勝る。体部は膨らみが強く罎より壺化している。

B<sub>2</sub> 小型壺を結合したもの。

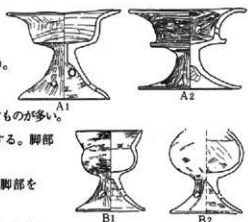
鉢 口縁部の径が大きく、壺・甕に比べ体部に深みの無いもの。口縁部及び体部の形状からA～Gの7つに分かつ。器面調整は刷毛目・丸磨だが大半を占めるが丸磨きを施し精製土器仕様のものもある。小型品が多い。

鉢A 口縁部はくの字状に屈し内湾気味に開く。体部は半球形である。

鉢B 罎形の大型品。口縁部は直線的に上方へ開き体部は扁平。口径は体部径より勝り口縁・体部の区画は明瞭な凹線状で段をなす。胎土緻密で内外面丸磨きを施し精製土器風。



第354図 土器分類 (高坏・脚)



第355図 土器分類 (結合形土器)

鉢C 小型丸底で半球形の体部。口縁部は強く小さく外屈する。

鉢D 小型平底で体部は内湾気味に大きく上方へ開く。体・口縁部の区画が不鮮明。

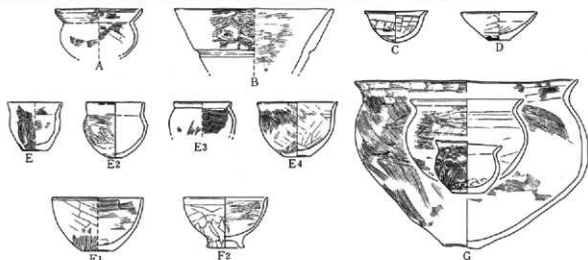
鉢E 平底で口縁をもち、小型で体部形状は壺・甕に近い。器面調整は刷毛目・篋撫でが多く磨磨きを施すものもある。

- E<sub>1</sub> 口縁部が小さく外傾し台部が直線的な小型品。甕形態に近い。  
 E<sub>2</sub> 口縁部が内湾して直立し、肩部が丸く張る。外面磨磨きを施す。  
 E<sub>3</sub> 体部は壺形の球形で口縁部は短く外屈し端部が細まる内斜口縁。  
 E<sub>4</sub> 口縁部くの字状に屈し、体部は球形。  
 E<sub>5</sub> 口縁部は緩く外反気味に開き、体部は深目の碗形である。

鉢F 小型品で体部と口縁部の区画がないもの。

- F<sub>1</sub> 体部は碗形で内湾気味に立ち上がりそのまま口縁に連する。  
 F<sub>2</sub> 低い台が付き体部は碗形で内湾気味に立ち上がり口縁部に連する。内面磨磨き。

鉢G 平底で体部は丸く強く張る。口縁部は短く、くの字状に外反して開く。器面調整は刷毛目で内面磨磨きを施すものもある。口径10cm前後・20cm前後・30cm以上の大・中・小型品がある。



第356図 土器分類 (鉢)

甌A 鉢形土器に底部を穿孔したもので、単孔である。体部内外面は刷毛目・篋撫で両者がある。

- A<sub>1</sub> 平底に単孔を穿ち、体部は直線的で上方へ開く。内外面刷毛目調整。  
 A<sub>2</sub> 平底に単孔を穿ち、体部は内湾気味に上方へ開く。内外面磨撫で調整。  
 A<sub>3</sub> 尖り丸底の底部に単孔を穿ち、内湾して立ち上がる体部から上端部が短く直立する。内外面刷毛目調整。  
 A<sub>4</sub> 突出する平底に単孔を穿ち、腰部がくびれて丸く張り体部上半は直立して立ち上がる。内外面は磨撫で調整。



第357図 土器分類 (甌)

蓋 穿孔の有・無でA・B2つに分かつ。器面調整は艶撫で・刷毛目がある。

蓋A 穿孔がある蓋で、台部の内湾して開き、口縁端部が直なもの。

A1 小型で体部に穿孔をもつ。

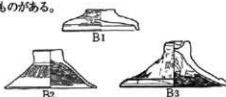
A2 凹状摘みの中央を穿孔する。

蓋B 孔が無く、体部がいの字状に開き、口縁が屈するもの、外反するものがある。

B1 低い凸状摘みで体部の直線的に開き、口縁部が直に屈する。

B2 凸状摘みで口縁部が外反気味に開く。

B3 凹状摘みで体部が外反して開き、口縁部は外側に折り返す。



壺 形態が多様多様であるが口縁部の形態を主に大・小を加味し大別A～Hの8つに分かつ。壺との峻別に苦慮するものもあるが、基本的には体部に対する頸部の窄まりを目安にした。

壺A 丈高な口頸部をもち小径な平底で小型品が多い。外面及び口縁内面に艶磨きを施す。

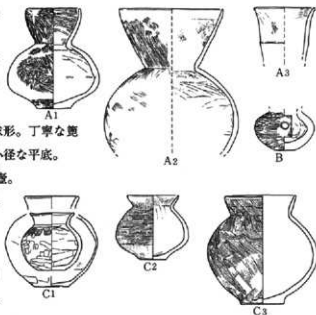
A1 口頸部は内湾して直立に近く立ち上がる。体部中央やや下方が強く張る下腹れ状の球形でいわゆる瓢形土器に似る。

A2 口頸部は直線的に上方へ延び、体部は球形。丁寧な艶磨きを施し精製された作りのものが多い。底部小径な平底。

A3 口頸部は細長く直立直線的に延びる長頸壺。

壺B 体部に円孔を穿つ。頸部は直立して延び口縁部は大きく外反して開く。外面・口縁内面は艶磨きを施す。須恵器属に類似。

壺C 短く外傾する口縁部で形状は多種多様である。器高10～15cm前後の小型品でベタの平底が多い。内外面は艶撫で後刷毛目または艶磨きを施す。



第358図 土器分類 (蓋)

第359図 土器分類 (壺 (1))

C1 口縁部は直立気味で端部が小さく外反する。体部は球形でベタの平底である。

C2 口縁部は外傾し、端部が内湾する。体部は中位下部で強く張り下腹れ気味である。

C3 口縁部上方へは直線的に延びる。体部は球形と若干長目のものがある。凸状の平底。

C4 口縁部は外反気味で高目に延びる。台部は中位で強く張るやや扁平な球形でベタの平底。

口頸・体部は全面に艶磨きを施す。器内が薄く精製土器である。

C5 口縁部は長く大きく開き体部径に勝る。体部は球形下腹れ気味で大径のベタ平底である。

C6 口縁部はくの字状に大きく開き体部は球形と長形があり、ベタの平底である。

壺D 二段口縁をもつもの。

D1 二段口縁の上段は強く外反して水平に近く開く。頸部は直立・やや外傾するものがあり、体部は球形。加飾するものが多く口唇部・口縁下段に小棒状や円形浮文・刺突文などを、また体部肩には帯襷横線と波状文・S字状筋文区切り

の縄文を施すものがある。多くは贈答品など祝儀用で底部穿孔される。艶磨き調整は実用器に多く、供献には少ない。

D2 外反して開く二段口縁が加飾されない。中型品が多く、体部は整った球形で艶磨きを施すものが多い。

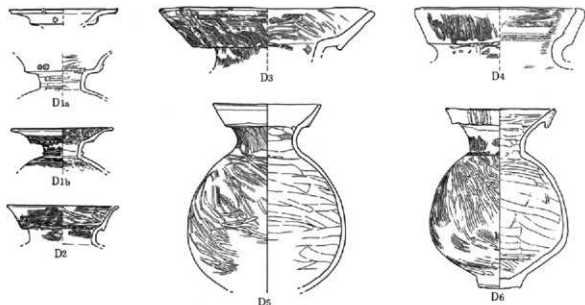
D3 器内の厚い大型品。口縁部上段は直線的に外傾し、複数本単位の棒状浮文を貼る。



D<sub>4</sub> 器内の厚い大型品。短い頸部から屈して口縁部は小さく直線的に外傾する。

D<sub>5</sub> 口縁部内面の二段形状は弱く、体部は下腹れ気味の球形である。

D<sub>6</sub> 短く直立する頸部で口縁部は直線的に開く。口縁部は下端を突出させた折り返し状の幅広口縁帯を作り、複数本単位の棒状浮文を貼る。頸基部には細い凸帯を巡らす。体部は下腹れの球形で腰部が強くくびれ



第360図 土器分類 (壺 (2))

凸状の平底。いわゆるパレススタイルの形骸化した壺。

壺E 口縁部に折り返しの口縁帯をもつもの。小径な口頸で外反して開く。

E<sub>1</sub> 口縁部は外反して開き、端部を幅狭に折り返す。加飾され体部肩にS字状結節で区切る縄文帯に円形浮文を施し、口唇・頸基部に円形朱文を点ずる。

E<sub>2</sub> 口縁部は外反して開き、端部を幅狭に折り返す。加飾は無い。

E<sub>3</sub> 口縁部上半が内湾して開き、端部に幅広な折り返し口縁帯を作る。口縁帯外面は縄文で加飾する。

E<sub>4</sub> 幅広な折り返し口縁帯を作り、加飾されない。

E<sub>5</sub> 幅狭な折り返し口縁帯で口縁・頸部・肩部にかけて描き波状文を施す、樽式土器。

壺F 小径な口頸で口縁端部を折り返し口縁帯のないもの。

F<sub>1</sub> 口縁部上半が強く外傾する。球形の体部下半が強くくびれて下腹れ形状をなす。底部は厚く凸状の平底。

F<sub>2</sub> 口縁部は外反する口縁。体部は球形でやや下腹れ形状底部はベタ平底。器面調整は粗目の刷毛。



第361図 土器分類 (壺 (3))

第3章 検出された遺構と遺物

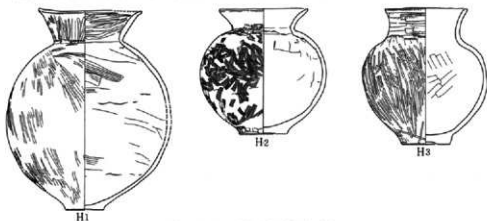
壺G 口縁部は外反して開く広口の壺である。口縁端部に幅狭な面を作るもの。口唇上・下端を掴み突出させ幅狭な面を作る。口縁外端面・頸基部凸帯に櫛歯刺突文で加飾する。



壺H 口縁部は外反して開く広口壺で、口縁内面・口唇部は面取りするものと丸く納めるものがある。

第362図 土器分類 (壺(4))

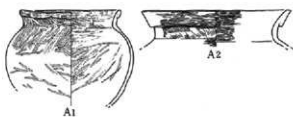
- H1 口唇端部が面取り状に整えられる。体部球形で平底。  
 H2 口縁内面は面取り状施削り。体部全体が球形に張る。平底。  
 H3 口頸部外反気味に高く直立する。体部球形で底部凸状平底。



第363図 土器分類 (壺(5))

甕 平底甕・台付甕に大別されるが、口縁部の形態で平底甕には折り返し口縁と単口縁が、台付甕には単口縁とS字状口縁があり、A～Dの4つに分かつ。

甕A 折り返し口縁で平底である。器面調整は刷毛目が大半で希に寛磨きを部分的に施すものもある。



第364図 土器分類 (甕(1))

A1 折り返しの口縁帯は幅狭である。

A2 幅広な折り返し口縁帯が作られる。

甕B 単口縁の平底で体部は球形または卵形。器面調整は体部刷毛目で外面腰部など部分的に施削り。内面口縁部・見込み部に刷毛目、中位は寛撫でを施す。

B1 口縁部はくの字状に折れ直線的ないしは外反するものがある。体部は球形で平底。

B2 口縁部くの字状に折れて直線的。体部はやや卵形を呈す。ベタ平底。

B3 口縁部上半が受け口状に内湾する。体部は肩張りして卵形。

B4 口縁部下半が直立し、上半は外屈する。体部は肩張りして卵形で底部は先細りの丸底。

B5 口縁部がやや高く直立気味に延びる。体部は卵形で平底。樽式土器の承譜とされる。

B6 口縁部は狭くくの字状に折れて外反して開き、口唇部上端を掴みだす。器面調整は寛撫で。



第365図 土器分類(壺(2))

壺C 台付の壺で口縁部はくの字状に屈して開く単口縁である。体部の形状は球形または卵形を呈す。器面調整は荒撫で後、総じて目間隔の粗い刷毛で口縁部内面におよぶものが多い。台端部の内側への折り返しはない。

C1 口縁部が短く、くの字状に開く。大・中・小型がある。

C2 口縁部は直線的でくの字状に屈し、丈高に開く。器面調整の刷毛の目間隔は粗くない。

壺D いわゆる東海地方系譜のS字状口縁台付壺である。S字状に屈曲する口縁部をもつ。体部は球形か卵形で総じて器内は薄く台端部は内側に折り返す。体部及び台部の見込みには大半砂泥を塗布する。器面調整は荒撫で後刷毛目で、目間隔の粗いものがある。内面は荒撫でまたは指頭による撫で上げが顕著である。口縁部内外面は撫で調整。大・中・小型がある。



第366図 土器分類(壺(3))

第3章 検出された遺構と遺物

2. 住居跡・竪穴跡の出土遺物

当該期土器類の器質は総じて土師器に限定され、特にことわりのない限り土師器として扱う。

A<sub>1</sub>-1号住居跡 (第367図)

器台 A<sub>2</sub>類 (1)。器面調整は寛磨き。(2)も器台脚部になろう。3円孔を穿つ。



第367図 A<sub>1</sub>-1号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-1号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	器台	7		現高5.3	赤褐色	黒土		2	器台	13		現高4.2	赤褐色	北壁際	

A<sub>1</sub>-4号住居跡 (第368図 P L.91)

壺 D<sub>2</sub>類 (1)。上段下顎に刺突文、体部肩には櫛掻き波状文を施し頸基部に凸帯を巡らす。口縁施磨き。

甕 A<sub>2</sub>類 (2)。内外面は粗目の刷毛調整。

A<sub>1</sub>-4号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	二段口埴壇	16.1		現高6.5	緑	南東壁際		2	甕	26.6		現高8	赤褐色	南東壁際	



第368図 A<sub>1</sub>-4号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-5 a号住居跡 (第369・370図 P L.91)

器台 A<sub>2</sub>類 (1・2)。脚部 (3)は3円孔。其他坏部との貫通孔が無く、高坏脚部との区別がつかないもの (4~11)が多い。

鉢 B類 (12)。内外面施磨きを施し、灰白色の精製された胎土である。

蓋 B<sub>2</sub>類 (13)。B<sub>3</sub>類 (14)になろうか。(13)は凸部内面が窪み、(14)の凹みは小さい。

壺 A<sub>2</sub>類 (15・16)。(15)は頸部A<sub>1</sub>類に似る。小径な凹み底。E<sub>2</sub>類 (17・18)。(18)の口唇部は面取り状に矩形。F<sub>2</sub>類 (19・21)。H<sub>1</sub>類 (22)。(32)は体部に施磨きがあり、壺になろう。

甕 A類 (23)。B<sub>2</sub>類 (24)。C<sub>2</sub>類 (25・26)はいずれも小型品である。D類 (28~31)は大・小型があり、(28・31)には肩部に横線がはいる。其他甕類は口縁部のみが残存が多くB類とC類の判別が困難である。(27)は口縁部が大きく開くことからC<sub>2</sub>類に、(33)は受け口状でB<sub>2</sub>類になる可能性もある。(36)は口唇部面取り状で矩形。(37~39)は端部折り返しがなくC<sub>2</sub>類の台部になろう。

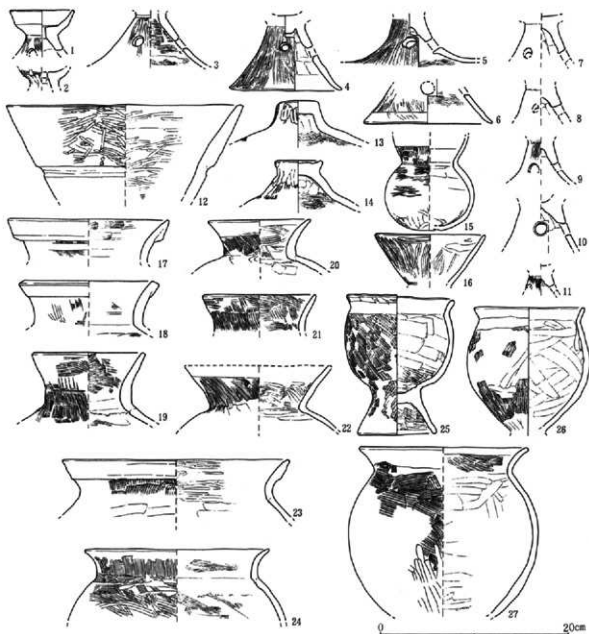
その他、模造土器 (40~46)の壺・鉢形がある。(47)は土製球製品で1孔が貫通する。器面は全体に刺突が施される。

A<sub>1</sub>-5a号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	器台	7		現高5	赤褐色	黒土		6	高坏脚	13.6				灰白	黒土
2	器台					灰白	黒土	7	高坏脚			現高5.5		赤褐色	黒土
3	器台			現高6		灰白	黒土	8	高坏脚					灰白	黒土
4	高坏脚	12		現高8		灰白	黒土	9	高坏脚					灰白	黒土
5	高坏脚			現高5.5		灰白	黒土	10	高坏脚					灰白	黒土

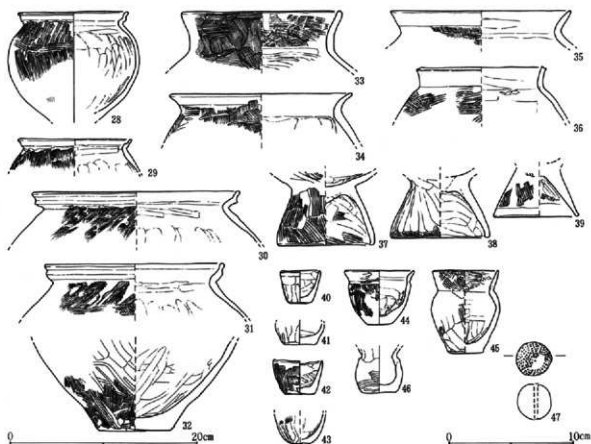
## 第5節 古墳時代前期の遺物

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
11	器台?					灰白	雑土	30	S字口縁台付甕	22		規高5		雜灰	雑土
12	鉢	25		規高10		灰白	雑土	31	S字口縁台付甕	19		規高5		灰白	雑土
13	蓋	鉢4.2		規高4.5		灰白	雑土	32	甕		7.5	規高10		灰白	雑土
14	蓋	鉢5.1		規高5.5		灰白	雑土	33	甕	17		規高6.5		灰白	雑土
15	蓋		2.5	規高10	9.4	赤褐	雑土	34	甕	19.4		規高5.5		灰白	雑土
16	甕	11.7		規高45.3		灰白	雑土	35	甕	19				灰白	雑土
17	甕	17		規高5		灰白	雑土	36	甕	13.6		規高5.5		灰白	雑土
18	甕	14.8		規高5.3		灰白	雑土	37	台付甕(台部)		10.2	規高8		灰白	雑土
19	甕	12		規高7.5		灰白	雑土	38	台付甕(台部)		10.4	規高7		灰白	雑土
20	甕	10.8		規高5.5		灰白	雑土	39	台付甕(台部)		8.4	規高5.5		灰白	雑土
21	甕	11.6		規高4		灰白	雑土	40	横造土器	4.1	2.5	3.4		灰白	雑土
22	蓋	15.6		規高7		灰白	雑土	41	横造土器		3.4	規高2.5		灰白	雑土
23	蓋	24		規高6.5		赤褐	雑土	42	横造土器	8.1	3.1	3.6		灰白	雑土
24	蓋	19.5		規高7.5		暗褐	雑土	43	横造土器		2	規高3		灰白	雑土
25	台付甕	11.5	8.5	14.8		灰白	雑土	44	横造土器	7.1	2.6	5.7		灰白	雑土
26	台付甕	11.6		規高13.2	13	灰白	雑土	45	横造土器	6.9	3.7	8.8		灰白	雑土
27	蓋	18		規高18	20	赤褐	雑土	46	横造土器		3.4	規高5		灰白	雑土
28	S字口縁台付甕	11.6		規高11.5	14	赤褐	雑土	47	土製玉	径2.6×1.7					雑土
29	S字口縁台付甕	12		規高3		灰白	雑土								



第369図 A-5a号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第370図 A1-5a号住居跡出土遺物(2)

A1-7号住居跡(第371・372図 P.L.91)

埴 A1:類(1) 口縁部矮小化し体部は深い。小径平底。外・口縁内面施磨き。

器台 A1:類(2) 赤彩を施し、胎土緻密で精製土器か。脚に3円孔を穿つ。外・内面内面施磨き。

高坏 B2:類(3) 内外面に施磨き、赤彩を施す精製土器。

結合土器 B1:類(4) 結合する埴部は口縁部矮小化。内外面施磨き、脚に3円孔を穿つ。

鉢(5)はE:類になろうか。小型で甕類との峻別ができず。外面細目の刷毛。内面肌荒れ顯著。

壺 A:類(6) 口頸欠損外面赤彩を施す精製品。 D:類(7) 口縁外刷毛目、内面施磨き。

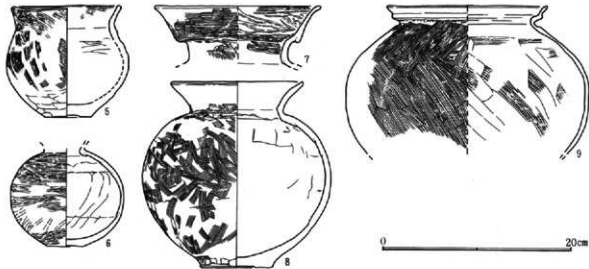
H:類(8) 体部外面細目の刷毛、口縁部内外撫で調整。 甕 C:類(9) は体部やや粗目の刷毛調整。

A1-7号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	埴	9.8	3	6.8		灰白	床面	5	甕		3.8	10.5		灰白	床面
2	器台	6.2	12.4	7.5		赤彩	床面	7	甕	17.5		10.3		灰白	床面
3	高坏	24		42.0		赤彩	床面	8	甕	14	7.6	10.6		灰白	床面
4	結合土器	10.5	11	12.7	16.3	灰白	床面	9	S字口縁甕	16.6		15.5	25.7	刷毛	床面
5	甕	11.6	4.8	11.7		赤彩	床面								



第371図 A1-7号住居跡出土遺物(1)



第372図 A1-7号住居跡出土遺物(2)

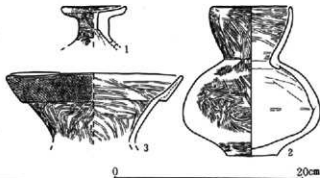
## A1-10号住居跡(第373図 P L.92)

器台 A<sub>2</sub>類(1)は脚上半部が柱状、3円孔を穿つ。

壺 A<sub>1</sub>類(2)所謂瓢形土器。口縁は内湾して立ち、体部下半強張り下膨風。内外面磨き。E<sub>2</sub>類(3)幅広な折り返し口縁帯を作り縄文を施す。

## A1-10号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	6.7		現高4		赤褐色面	
2	壺	8.4	5.3	15.8	14.5	赤褐色面	
3	壺	18.8		現高7.3		褐色面	



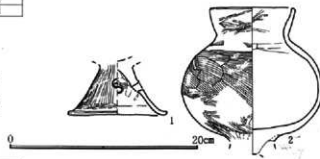
第373図 A1-10号住居跡出土遺物

## A1-15号住居跡(第374図)

結合土器 B<sub>2</sub>類(2)口縁は内湾して立つ壺形。口縁内外面磨き、外面刷毛後部分的に磨きを施す。

## A1-15号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏		10.5	現高6		灰白(赤面)	
2	台付壺	9		現高15.4	14.8	灰白(赤面)	



第374図 A1-15号住居跡出土遺物

## A1-19号住居跡(第375図 P L.92)

高坏 B<sub>2</sub>類(1)内外面丁寧な磨き。(2)はB<sub>1</sub>類の脚部になろうか。

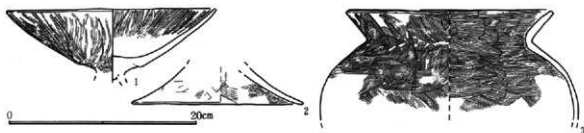
壺 B<sub>1</sub>類(3)内外面に刷毛目調整。

## A1-19号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏	22		現高7.5		褐色面	
2	高坏?		18.3	現高4.5		灰白(赤面)	

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
3	壺	22		現高11.3	27.5	褐色面	

第3章 検出された遺構と遺物



第375図 A1-19号住居跡出土遺物

A1-21号住居跡 (第376図 P.L.92)

高坏 A<sub>1</sub>類 (2) 内外面へら磨き。(3) はA<sub>2</sub>類またはB<sub>2</sub>類の脚部になろう。3円孔を穿つ。

壺 D<sub>2</sub>類 (4) 幅状な折り返し口縁帯で、頸部内外面刷毛後鈍磨き。(1) は無孔の器台脚部。(5) は壺口縁部で体部刷毛目、口縁部内外面撫で調整。



A1-21号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台		9.8	深高6.5		灰土	
2	高坏	12.3		深高7.5		赤陶	埋土
3	高坏		12.2	深高7.9		灰白	埋土
4	壺	19		深高8.5		赤陶	埋土
5	壺	18.2		深高6		赤陶	埋土

第376図 A1-21号住居跡出土遺物

A1-22号住居跡 (第377・378図 P.L.92)

器台 A<sub>1</sub>類 (1) は内外面寛磨き、赤彩を施す。

高坏 C<sub>1</sub>類 (2) は坏部が深いもののB<sub>2</sub>類に近い。内外面寛磨き。(3) は赤彩され3円孔を穿つ。

壺 (4) はA<sub>2</sub>類になろう。内外面丁寧な鈍磨き。(5) は頸部が広く増形の大型化に通ずる。(7) は口縁欠損するがD<sub>6</sub>類になろう。頸部内面に赤彩が残る。

甕 A<sub>2</sub>類 (8) は折り返し口縁帯及び内面に鈍磨き。C<sub>1</sub>類 (11) は外面極細目の刷毛。(12) はD類の台部。(18) は土製品で片端がやや細まり未通の小孔をもつ。(19) は土製球で1孔が貫通する。

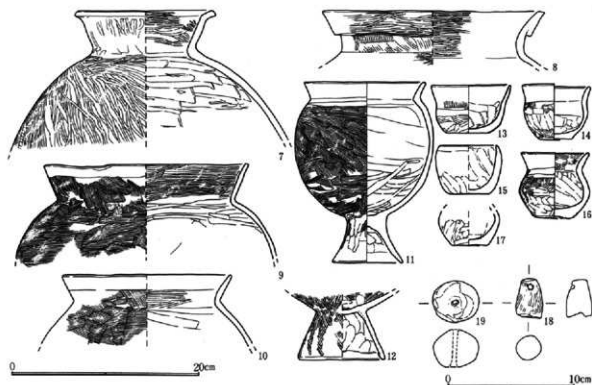
A1-22号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
1	器台	7		深高1.5		灰白	埋土	
2	高坏	22		深高7.5		灰白	埋土	
3	高坏		12.8	深高7		赤陶	埋土	
4	壺	8.4		深高4.3		灰白	埋土	
5	甕	12		深高7		赤陶	埋土	
6	横造土器		2	深高3.2		灰白	埋土	
7	甕	14.3		深高14	20	灰白	埋土	
8	壺	23.6				赤陶	埋土	
9	壺	21.6		深高10	27.5	灰白	埋土	
10	壺	18		深高7.5	22.5	灰白	埋土	
11	果口縁台付甕	12.8		7.5	19	14.7	灰白	埋土
12	SPC器台付甕			9	深高		灰白	埋土
13	横造土器	8.3		4.5	5		赤陶	埋土
14	横造土器	7.2		3.3	5.9		灰白	埋土
15	横造土器	3.8		4	9.1		灰白	埋土
16	横造土器	7.2		4	7		灰白	埋土
17	横造土器			4	深高4		灰白	埋土
18	土製品	3.1		2.1	2		陶灰	埋土
19	土製球	3.6		3.3			灰白	埋土



第377図 A1-22号住居跡出土遺物 (1)





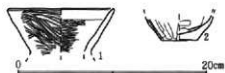
第378図 A1-22号住居跡出土遺物(2)

A1-24号竪穴跡(第379図)

壺 A<sub>2</sub>類(1・2)。(1)は内外面宛磨きで黒色処理を施す。

A1-24号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1壺		11		現高3		灰白	埋土
2黒染土壺			3.8	現高3		灰白	埋土



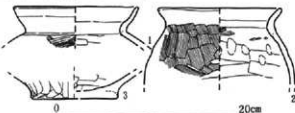
第379図 A1-24号壺穴跡出土遺物

A1-26号竪穴跡(第380図)

甕 B<sub>2</sub>類(1・2)。(1)は口縁部内外面横撫で。(3)は壺底部と思われる。

A1-26号甕

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1甕		13.2		現高4		灰白	埋土
2甕		13		現高8	15.8	黒灰	埋土
3甕			9			灰白	埋土



第380図 A1-26号竪穴跡出土遺物

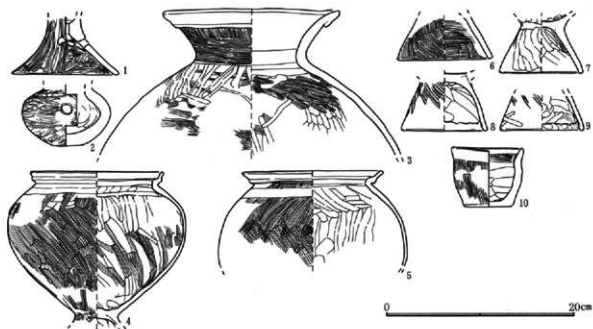
A1-28号住居跡(第381図 P.L.92)

器台 (1)は脚部に4円孔を穿つ。

壺 A<sub>1</sub>類(2)は器内厚く体部中位に1円孔を穿ち、後代の壺形状。外面宛磨き。E<sub>2</sub>類(3)は折り返し口縁帯横撫で、頸部は上半縦、下半横位の細目刷毛。体部は刷毛後宛磨き。

甕 D類(4・5)は小型に属す。(6・7)は端部に折り返し無く、C類の台部。(8・9)はD類台部。A1-28号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
1器台脚部			11.4	現高6		灰白	床面	6壺台部		10.1		現高4.5		灰白	床面	
2土脚部はきう				現高6.5	孔径1.2	灰白	床面	7壺台部				8.8		現高6	灰白	床面
3甕		18.6		現高15	32×2	灰白	床面	8壺台部		9		現高6.5		灰白	床面	
4折口縁付甕		14.2		現高16.5	16.8	灰白	床面	9壺台部				8.8		現高3.5	灰白	床面
5折口縁付甕		15		現高30	20	灰白	床面	10黒染土壺		7.6	4.6	6.2		灰白	床面	



第381図 A1-28号住居跡出土遺物

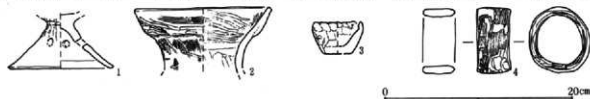
A1-29号竪穴跡 (第382図 P.L.92)

高坏 (1) は脚部に3円孔を穿つ。

壺 D類 (2) は幅広な折り返し口縁帯で施磨きを施す。(4) は土製陶輪状製品。器面に刷毛目を施すが調整はさほど密ではない。

A1-29号竪

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	高坏脚部			11	底高6.5	灰白	壁土	3	模造土器	5.2	3.2	3.4			
2	壺口縁部	14.4		底高7	底高	赤褐色	表面	4	陶輪状土製品	外径7	内径5.1	厚0.8			



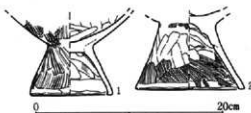
第382図 A1-29号竪穴跡出土遺物

A1-40号竪穴跡 (第383図)

壺 (1・2) は台部で端部折り返し無くC類になろう。

A1-40号竪

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	台付き壺台部		8.8	底高3.5		灰白	表面
2	台付き壺台部		11.0	底高3.3		灰白	表面



第383図 A1-40号竪穴跡出土遺物

A1-42号住居跡 (第384図)

(1) は壺形で模造土器の可能性もある。薄手だが作りはやや粗雑。壺 (2) は口縁直立し短い。内外面横撫で。

A1-42号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	模造土器			底高3.2		灰白	厚土
2	壺口縁	12.4		底高3.7		褐色	埋土



第384図 A1-42号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-43号住居跡(第385・386図 P.L.93)

器台 A<sub>1</sub>類(1)は外面及び坏部施磨き。脚に4円孔を穿つ。A<sub>1</sub>類(2)は内外面刷毛目。(3)は3円孔を穿つ。

高坏 A<sub>1</sub>類(4)は内外面丁寧な施磨き。(5)は坏腰部が強く屈するが脚形状よりB類か。内外面施磨き。

瓶 A<sub>2</sub>類(7)は単孔で内外面施磨で。

蓋(8)はB<sub>2</sub>類に属するが凸状柄みを横に貫通する1孔を穿つ。撫で調整。

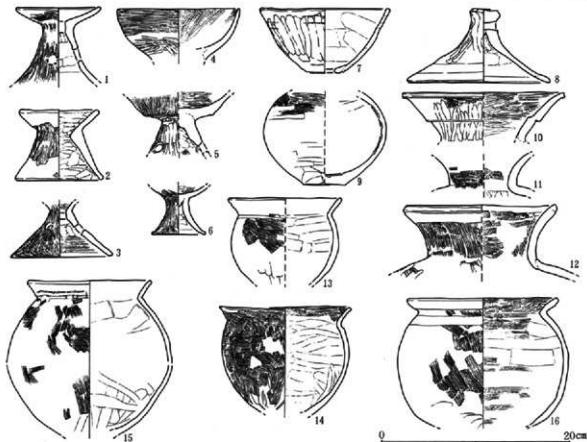
壺 B類(9)。C<sub>2</sub>類(10)。F類(12)は口唇部面取り状に矩形を呈す。

甕(13・14・16・18)など広口で鉢に似るが、(14・15)はC類台付きの可能性もある。(17)は刷毛後施磨きが顕著。D類(19)は中型になろう。(20)はC類、(21)はD類の台部。

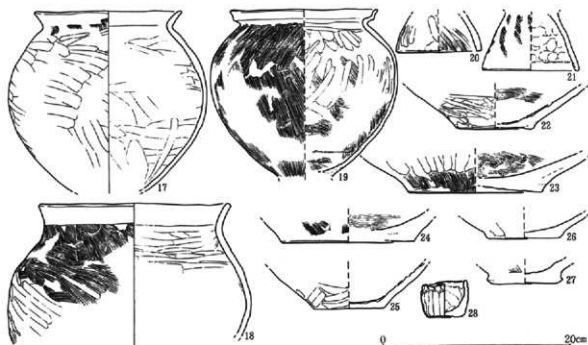
(22~24)は大型壺底部か。(6)はやや小降りの脚部で無孔。上位形状は不明、内外面施磨き。

A<sub>1</sub>-43号住

番号	器種	口径	高径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	高径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	9		現高9.0		灰白	層土	15	單口鉢壺底欠	13		現高16.5	17.5	焼灰	床面
2	器台	8.5	9.3	7.5		灰白	床面	16	單口鉢壺底欠	16		現高13.5	18	灰白	層土
3	器台脚部		10.8	現高9.0		灰白	床面	17	單口鉢壺底欠	15.6		現高19	21	焼灰	床面
4	高坏坏部	13		現高5.0		灰白	層土	18	單口鉢壺上半	20.3		現高14	25.5	灰白	床面
5	高坏坏部			現高7.0		赤褐色	床面	19	S字口鉢壺台	15.6		現高18	19.8	灰白	床面
6	高坏脚部		5.8	現高5.3		灰白	層土	20	單口鉢壺台		9	現高4.2		焼灰	層土
7	瓶	13.8	2.5	6.8	孔径2	灰白	床面	21	S字口鉢壺台		10.2	現高6.2		灰白	層土
8	蓋	胴径3.2	15.1			焼灰	床面	22	壺底部		8.4			赤褐色	層土
9	壺胴部		4.4	現高10.0	13	灰白	床面	23	壺底部		14			灰白	層土
10	壺口縁	17		現高3		焼灰	層土	24	壺底部		4			焼灰	層土
11	壺頸部	胴径7		現高4.5		灰白	床面	25	壺底部		7.6			灰白	層土
12	壺口縁	18.2		現高2.0		赤褐色	層土	26	壺底部		8			灰白	層土
13	單口鉢壺	12		現高9		灰白	層土	27	壺底部		8			灰白	層土
14	單口鉢壺底欠	14		現高11.3		赤褐色	床面	28	壺底土器	4.8	3.8	3.8		灰白	床面

第385図 A<sub>1</sub>-43号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



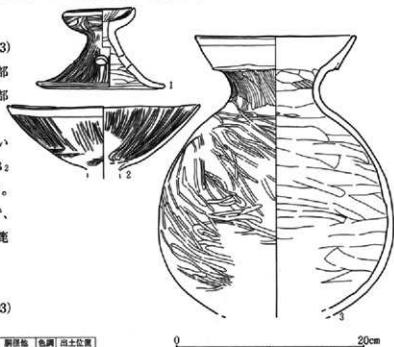
第386図 A1-43号住居跡出土遺物(2)

A1-44号住居跡(第387図 P.L.93)

器台(1)はA<sub>1</sub>類とするが坏部の湾曲が強い。内外面寛磨き、脚部に4円孔を穿つ。

高坏(2)は腰部の折れが弱いもの。坏部直線的な作りはA<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>類に遡る。内外面丁寧な寛磨き。

壺 D<sub>2</sub>類(3)は緩い二段口縁で、下膨れの体部。外面・口縁内面は寛磨き。



第387図 A1-44号住居跡出土遺物

A1-47号住居跡(第388図 P.L.93)

A1-44号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	7.5	13.7	8.4		灰白	野蔵穴
2	高坏坏部	20.2		残高7		灰白	床面
3	二段口縁壺穴	8.6		残高29.5		橙	野蔵穴

鉢 E<sub>1</sub>類(2)は小型で平底。体部は粗目刷毛。(8)も類似するが模造土器になろう。

壺 B<sub>1</sub>類(5)は体部粗目刷毛。(6)はD類、(7)はC類の台部。

(1)は高坏C類になろうか。(9)は横位拂掻きと山形文を施す壺片で所謂宮廷式か。(10)は焼成土製品、円盤形。器面は寛撫で調整。用途不明。

A<sub>1</sub>-47号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏-下腹上			現高3.7		褐色	埋土	5	平口鉢	19.3	6.2	26	27	褐色	埋土
2	小鉢	9.7	4	7.3		灰白	埋土	6	S字状口鉢	17				灰白	埋土
3	鉢	31		現高6		灰白	埋土	7	平口鉢台付		8.2	現高4.3		褐色	埋土
4	甕	18				灰白	埋土	8	模造土器	8.6	4	4.8		灰白	埋土

第388図 A<sub>1</sub>-47号住居跡出土遺物A<sub>1</sub>-49号竪穴跡 (第389・390図)

高坏 (1・2) は4円孔を穿つ。外面磨ぎ。

鉢 G類 (3) は極小で外面粗目刷毛。

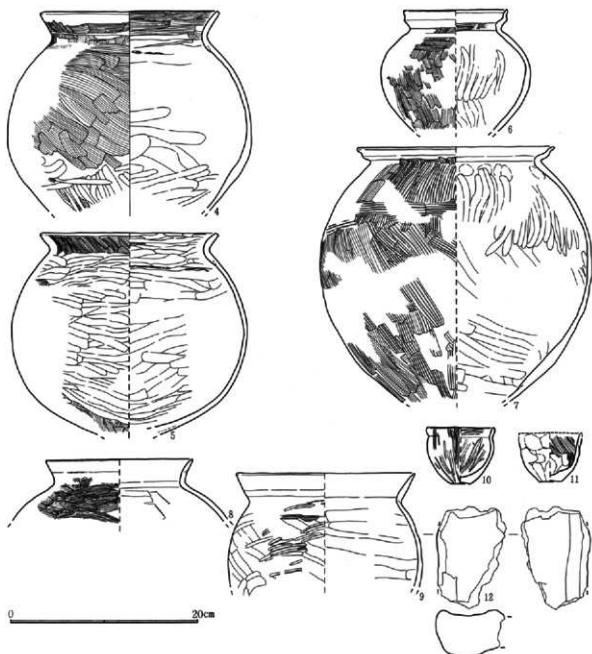
甕 (4~9)。(5) は台部欠損でC<sub>1</sub>類になろう。刷毛目後発撫で調整が顕著。D類 (6・7) は頭部に横位刷毛を施し、(7) の刷毛は粗目。(4・8・9) はB<sub>1</sub>類になろうか。(9) は刷毛目後の発撫でが顕著。

(12) は用途不明の土製焼成品。

A<sub>1</sub>-49号竪

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏臀部		14.6			灰白	埋土	7	S字口鉢台付	20.8		現高26.3	28.8	灰白	埋土
2	高坏臀部			現高6.5		褐色	埋土	8	甕	15.4		現高6.5		褐色	埋土
3	小鉢	9.5	3.5	8		褐色	埋土	9	甕	19		現高17	20.5	褐色	埋土
4	甕	19		現高20.5	25.8	褐色	埋土	10	模造土器	7.2	2.2	5.9		灰白	埋土
5	甕	18.8		現高21	25	褐色	埋土	11	模造土器	6.8	2.4	5.1		灰白	埋土
6	S字口鉢台付	11		現高13	16	褐色	埋土	12	土製品					灰白	埋土

第389図 A<sub>1</sub>-49号竪穴跡出土遺物 (1)



第390図 A<sub>1</sub>-49号竪穴跡出土遺物(2)

A<sub>3</sub>-65号住居跡(第391図 P.L.94)

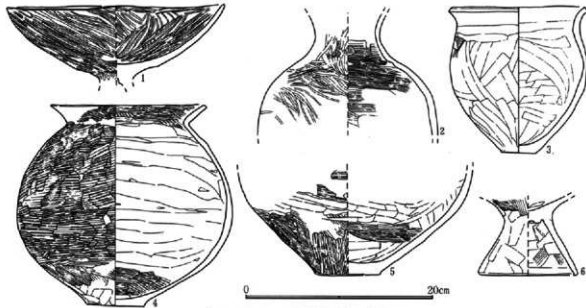
高坏 A<sub>2</sub>類(1)は内外面丁寧な荒磨き。

壺(2)は口縁部欠損するがA<sub>2</sub>類で体部は長目になろう。外面荒磨き、内面刷毛目調整。

甕(3)は広口小型甕で体部刷毛後寛撫でが顕著、口唇部は面取りで矩形。B<sub>1</sub>類(4)は外面及び内面・見込み部に粗目刷毛。口唇部は面取り状に矩形。(6)はC類の台部。

A<sub>3</sub>-65号住

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	部 種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	
1	高坏坏部	23.2		取高16.5		橙 黒土		4	甕	16.4	6	21.2		黒灰 黒土		
2	壺胴部			取高13		赤黒 黒土		5	美丫手形					7	取高11	黒灰 黒土
3	小型甕	14.5	3.6	15.4		灰白 黒土		6	台付甕台部			10.5	取高8.5		赤黒 黒土	



第391図 A3-65号住居跡出土遺物

## A2-157号住居跡 (第392図 P.L.94)

器台 A<sub>1</sub>類 (1~3)。(2)は坏部B<sub>2</sub>類に似る。(3)は腰部が屈しA<sub>2</sub>類に通ずる。(4)は高坏A<sub>1</sub>類坏部の可能性がある。脚部に穿たれる円孔は(1)が3,(3)が3,(5)が4孔である。

高坏 B<sub>1</sub>類 (6)は内外面施磨き。脚部4円孔を穿つ。(7)はA<sub>2</sub>類か。内外面施磨き。(8)は内面に赤彩。

結合土器 A<sub>2</sub>類 (9)。坏・脚の境は円平板を置き、坏部は大きく外反し水平に開き、上下二段に各5円孔を穿つ。脚部は無孔。内外面施磨き。

鉢 A類 (10~12)。(12)は体部刷毛後施磨きを施し、他は刷毛目調整。

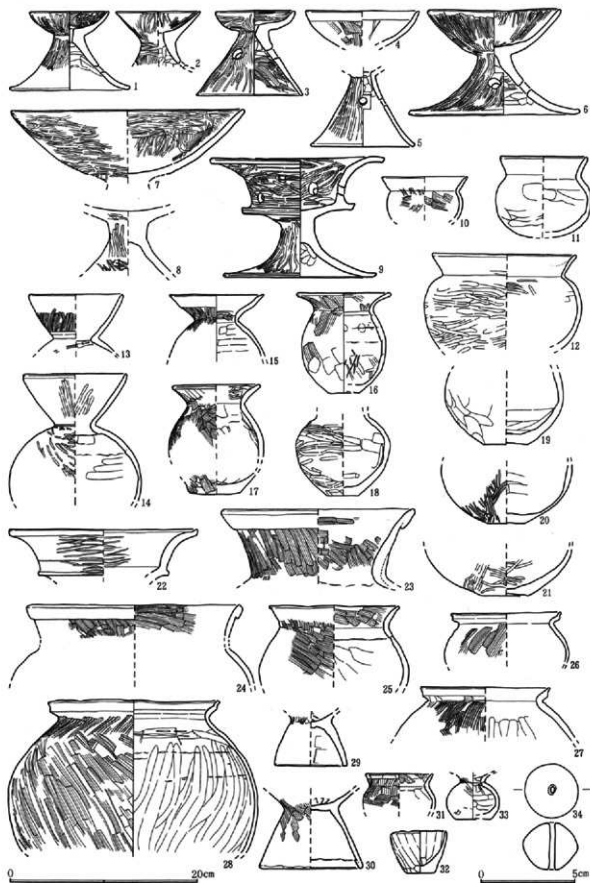
壺 A<sub>2</sub>類 (13~14)。(13)は頸部刷毛目、(14)は外面・口頸内面施磨き。C<sub>2</sub>類 (15)は頸部中位に稜をなし上半横撫で、下半刷毛目調整。C<sub>6</sub>類 (16~17)。体部は長形で刷毛目。(18~21)は壺体部。(19)は撫撫で、他は施磨きを施す。D<sub>2</sub>類 (22)の口唇端部は上方へ抓み出す。内外面施磨き。E<sub>2</sub>類 (23)。

甕 A<sub>1</sub>類 (24)。B<sub>1</sub>類 (25)。D類 (26・30)。(27)の口縁S字の屈曲が弱い。(28)は刷毛目粗く、内面の撫で上げが強い。(29)はC類、(30)はD類の台部。

(34)は土製球製品で中心に1孔が貫通する。(31~33)は鉢・壺の構造土器。

## A2-157号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	
1	器台	8.2	12.8	8.2		橙	体部	18	壺		3.4	現高2.7		灰白	体部	
2	器台	8.8		現高6		灰白	体部	19	壺		4.8	現高4.7		灰白	体部	
3	器台	8.2	11.1	9.1		灰白	体部	20	壺		4	現高6.3		灰白	体部	
4	高坏坏部	12				灰白	体部	21	壺		4.8	現高5		灰白	体部	
5	高坏脚部		11	現高7		灰白	体部	22	二重口縁部口縁	20		現高5.3		灰白	体部	
6	高坏	14.2	17.8	12.1		灰白	体部	23	壺		20.5	現高7.4		灰白	体部	
7	高坏坏部	24.4		現高5.5		灰白	体部	24	壺		22.8	現高8.5		灰白	体部	
8	高坏			現高7		灰白	体部	25	壺		15.8	現高8.4		灰白	体部	
9	結合土器	18.3	16	12.5		灰白	体部	26	S字口縁壺		11.6	現高5.4		灰白	体部	
10	鉢	9		現高4.4		灰白	体部	27	S字口縁壺		13.6	現高5.2		灰白	体部	
11	鉢	9		8.5		橙	体部	28	S字口縁壺		18	現高16.3	26.3	灰白	体部	
12	鉢	14.6		現高9.9	16.7	灰白	体部	29	台付壺台部		7.7	現高5.2		灰白	体部	
13	壺	10		現高9.5		灰白	体部	30	S字口縁壺台部		10.6	現高8		灰白	体部	
14	壺	11		現高14		灰白	体部	31	構造土器	7		現高3.8		灰白	体部	
15	壺	10		現高7.7		橙	体部	32	構造土器	6	3	4.4		灰白	体部	
16	壺	10	3	10.6		灰白	体部	33	構造土器		3.8	現高4		灰白	体部	
17	壺	9	5.5	11.5		灰白	体部	34	土製玉	径2×2.8	孔径0.4			重	灰白	体部



第392図 A2-157号住居跡出土遺物



A<sub>2</sub>-162号住居跡 (第393・394回 P L.94・95)

(1・2) は器台または高坏脚、3円孔を穿つ。

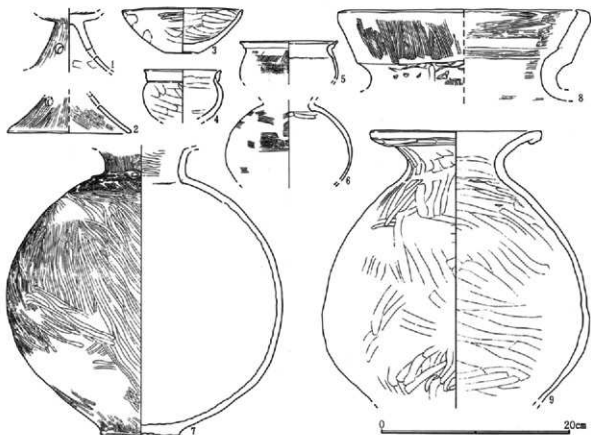
鉢 D<sub>3</sub>類 (3) は内外面篋撫で、小径な平底。E<sub>3</sub>類 (4・5)。(4) は口縁部疑似S字、(5) はS字状口縁をもつ。外面極細目の刷毛。

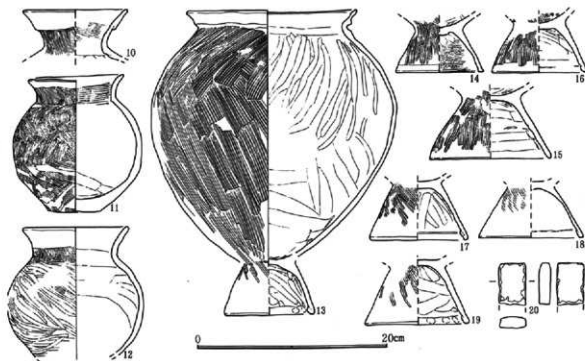
壺 (6) はA<sub>2</sub>類になろうか。外面細目刷毛。(7) は口縁部欠くがD<sub>1</sub>b類の大型品で頸部は直立する。肩部に円形浮文2点3対と縄文帯を巡らせ赤彩で加飾する。体部は細目の篋撫きを施す平底。D<sub>4</sub>類 (8) は器内厚く大型である。口頸部は短く、外反する頸部は小さな段をなし口縁は直線的。E<sub>2</sub>類 (9) は体部下膨れ形状で内外面丁寧な篋撫で。E<sub>4</sub>類 (10) は折り返し口縁帯横撫で、頸部刷毛目。

甕 B<sub>1</sub>類 (11・12)。小型で形状は甕に通ずる。(12) は刷毛後口縁部横撫で、体部篋撫で。D類 (13) は粗目刷毛。内面は強い撫で上げ。(14・15) はC類、(16~19) はD類台部。

A<sub>2</sub>-162号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径径	色調	出土位置
1	高坏脚部			規高8		靑	扉面	11	甕	10.2	5.6	14.4	13.5	灰白	扉面
2	高坏or器台脚		13.2	規高3.8		灰白	扉面	12	甕	11.2		規高13.6	14.5	灰白	扉面
3	鉢	12.8	3.5	4.8		灰白	扉面	13	S字口縁台部	18		規高26.5	26	灰白	扉面
4	小型鉢	8.2		規高3.3		灰白	襷土	14	厚口縁台部		9.4	規高5.8		灰白	扉面
5	S字口縁台部	10.3		規高4.1	10.4	灰白	扉面	15	厚口縁台部		12.8	規高		灰白	扉面
6	壺			規高8.3	13.5	灰白	襷土	16	S字口縁台部			規高6.5		赤陶	扉面
7	壺		8.4	規高30	29	赤陶	扉面	17	S字口縁台部		10.5	規高5.5		灰陶	扉面
8	壺	28.6		規高29.6		赤陶	扉面	18	S字口縁台部		9.6	規高5.4		灰白	扉面
9	壺	19		規高28.7	28	灰白	扉面	19	S字口縁台部		11	規高7		灰白	扉面
10	壺	11.2		規高5		灰白	襷土	20	甕台部	長4.4	中2.8	厚1.2		扉面	

第393圖 A<sub>2</sub>-162号住居跡出土遺物 (1)



第394図 A2-162号住居跡出土遺物(2)

A2-163号住居跡(第395・396図 P.L.95)

器台 A:類(1・2)。器面調整施磨き、脚内面は施撫でまたは刷毛目。脚部3円孔を穿つ。

高坏 B:類(3)。坏部で器面調整施磨き。

鉢 F:類(4)。低い台が付き下端面は面取り状に平。外面施撫で、内面施磨き。口唇部内斜する。

甕 De類(5)。H類(6)。(5)は口縁部を折り返し下端を大きく突出させ口縁帯を作る。口縁帯には3本単位の棒状浮文を貼付。頸基部に細い凸線を巡らす。下地は刷毛目調整で体部・口縁内施磨き、内面施撫で。(6)は下地は刷毛目で体部施撫でを施す。肩部に絵のごとき施撫を施し、口縁内面と肩部に对称して朱点文を配す。

甕 B:類(7)。B<sub>1</sub>類(8)。C:類(9)。外面に粗目の刷毛目で(7・8)は内面施撫で、(9)は内面とも刷毛目調整。

A2-163号住

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	部 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	9.8	12.8	10.3		赤褐色	床面	6	甕(紅土器)	12.5	5.3	20.5	18.5	赤褐色	床面
2	器台脚部		11.9	現高5.5		赤褐色	床面	7	甕	15.6	5.6	19.9		褐色	床面
3	高坏坏部	14.2		現高5.5		灰白	床面	8	甕	16.6		現高11.5		灰白	床面
4	附付鉢	12	6	8		灰白	壁土	9	単口縁合付甕	18	10.6	29.2	24.2	灰白	床面
5	甕	17.4	6.7	29.2	21.7	赤褐色	床面								



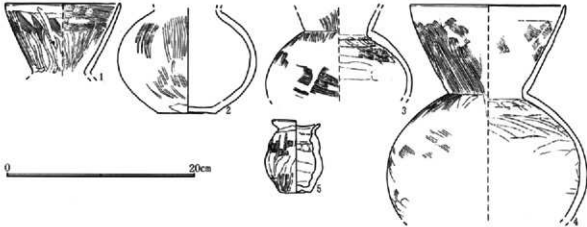
第395図 A2-163号住居跡出土遺物(1)



第396図 A-163号住居跡出土遺物(2)

B-71号竪穴跡(第397図 P.L.95)

壺 A<sub>2</sub>類(1~4)。(1・3)は刷毛後施磨き。(2)は胎土粗いが施磨き。(4)は細目刷毛調整。



第397図 B-71号竪穴跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

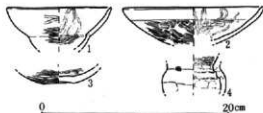
B-71号竪

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	底口部	12.2		器高5.5		灰白	床面
2	胴部		6	器高11	14.7	灰白	床面
3	模造土器			器高9.5	15.5	灰白	床面

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
4	口部	16.4		器高22	31	灰白	床面
5	模造土器	5	3.2	7.8		灰白	床面

B-72号竪穴跡 (第398図)

埴 (1) はA<sub>1</sub>類、内外面施磨き。高坏 (2) はA<sub>1</sub>類で内面施磨き、外面刷毛目。(3) はA類になろう。



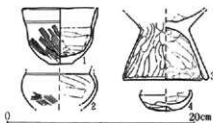
第398図 B-72号竪穴跡出土遺物

B-72号竪

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	埴	11		器高4		灰白	北壁面床面
2	高坏坏部	15		器高4		灰白	南壁面穴内
3	底口部		3	器高2		灰白	床面
4	模造土器	直径5.6		器高4		灰白	壁土

B-73号竪穴跡 (第399図 P L.96)

鉢 A類 (1・2)。(1) は明瞭な平底で体部は刷毛目。(2) は刷毛後施磨き、外面に赤彩を施す。(3) は甕D類の台部。(4) は埴の模造土器か。



第399図 B-73号竪穴跡出土遺物

B-73号竪

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	鉢	7.9	2.5	5.9		灰白	東壁面床面
2	鉢			器高4		灰白	南壁面穴内
3	台付甕台部		9.2	器高7.2		輪灰	野原穴内
4	模造土器		1.4	器高3.3	5.5	灰白	F1内

B-74号竪穴跡 (第400・401図 P L.96)

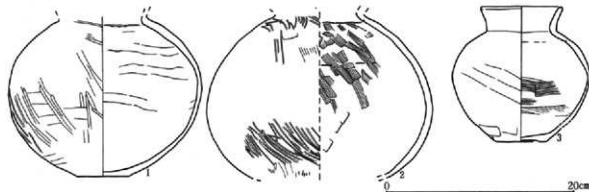
甕 A<sub>2</sub>類 (1・2)。C<sub>1</sub>類 (3) は外面刷毛後顕著な施撫で。H<sub>1</sub>類 (4) はやや広口の甕で刷毛後施磨きを施す。

甕 B<sub>1</sub>類 (5~7)。刷毛目調整で腰部は強い施撫で調整。(7) の口縁部内外面は刷毛後横撫で。C<sub>1</sub>類 (8) は体部外面細目刷毛、口縁部横撫で。

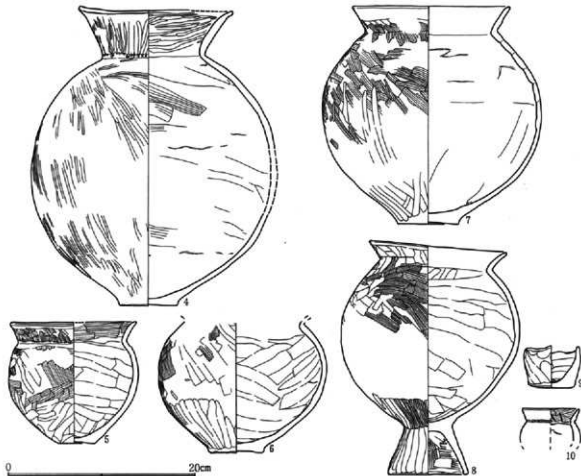
B-74号竪

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	甕		5.6	器高16.7	20.5	灰白	床面
2	甕			器高17	23.9	灰白	床面
3	甕	8.6	5.4	14.1	14.7	灰白	床面
4	甕	16.4	6	31.3	25	灰白	床面
5	甕	13.3	3.7	12.9	13.7	灰白	床面

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
6	甕		5.8	器高13.5	18	赤黄	床面
7	甕	16.6	6.5	23	23	灰黄	床面
8	単口罐台付甕	14.5	3.4	24.6	15.7	灰白	床面
9	模造土器	5.4	4.8	4.5		灰白	床面
10	模造土器		6	器高4.2		灰白	床面



第400図 B-74号竪穴跡出土遺物 (1)



第401図 B-74号壺穴跡出土遺物(2)

## B-75号壺穴跡(第402図 P.L.96)

埴 A:類(1~5)。小径な窪み底。甍磨き主体にするが(4)は刷毛後甍磨き、(5)は大振りで口縁刷毛後上位は横撫で。(3)は外面、(4)は内面に赤彩。

壺(7・8)はH:類にならうか。内外面甍磨き。(10)はC:類で外面甍磨き、小径な窪み底。(9)はA類。(11~18)は体部及び下半に甍磨きを施す。

甗 C:類(19・20)。小型で(19)は粗目刷毛、(20)は撫撫で調整が顕著に加わる。ともに口縁部刷毛後横撫で。(21~24)はC:類の台部。

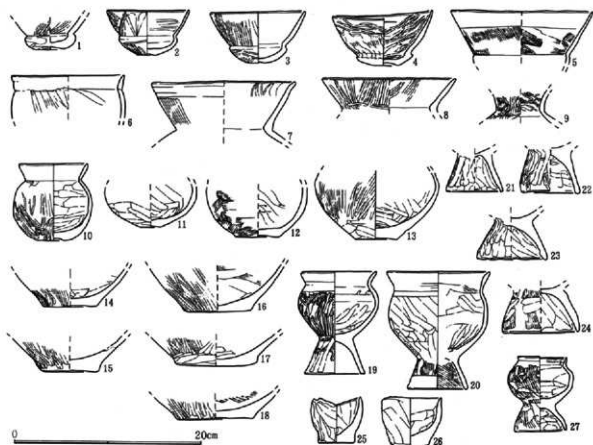
(6)は鉢E:類にならう。撫撫で調整。

## B-75号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	埴口縁欠		2.4	甍高3.1		灰白	甗土
2	埴	8.6	2	4.7		灰白	甗土
3	埴	10	2	5.3		灰白	甗土
4	埴	10.5	2.6	5.8		灰白	甗土
5	埴	15		甍高6		灰白	甗土
6	鉢	12		甍高5		灰白	甗土
7	壺口縁部	15		甍高6.5		灰白	貯蔵穴内
8	壺口縁部	14		甍高3.5		灰白	貯蔵穴内
9	甗					灰白	
10	甗	7.2	3.4	8.1	6.3	灰白	貯蔵穴内
11	甗胴部?		2	甍高4.5	9.8	灰白	甗土
12	甗胴部?		4.6	甍高5.5	10.5	灰白	甗土
13	甗胴部?		4.2	甍高7.2	13	灰白	甗土
14	甗底部		3			灰白	甗土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
15	甗底部			6		灰白	甗土
16	甗底部			7		灰白	甗土
17	甗底部			8.6	甍高3.5	灰白	甗土
18	甗底部			8		灰白	
19	単口縁壺台	8.2	6.4	108		灰白	甗土
20	単口縁壺台	11	6.2	12.4		灰白	甗土
21	単口縁壺台			甍高4.5		灰白	甗土
22	単口縁壺台			甍高5		灰白	甗土
23	単口縁壺台			甍高7.4		灰白	甗土
24	単口縁壺台			甍高4.9		灰白	甗土
25	甗造土跡	4.9	3.6	4.9		灰白	甗土
26	甗造土跡	6.2	3.8	5		灰白	甗土
27	甗造土跡	58.2	5.6	8		灰白	内

第3章 検出された遺構と遺物

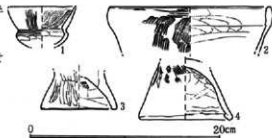


第402図 B-75号竪穴跡出土遺物

B-76号竪穴跡 (第403図)

埴A:類 (1)。口縁部外面施磨き、体部篋削り、上半施磨き

(2)は鉢になろうか。口縁内側に折り返し肥厚させる。体部刷毛目。臺台部 (3)はC類、(4)はD類。



第403図 B-76号竪穴跡出土遺物

B-76号竪

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	埴	5.4		視高4.4		灰白	床面
2	鉢?	17		視高4.5		赤褐色	床面
3	単口縁臺台部		8	視高4.5		赤褐色	床面
4	5F口縁臺台部		10	視高4.5		灰白	床面

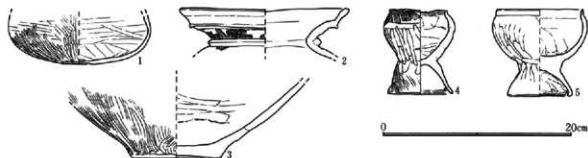
B-77号竪穴跡 (第404図 P L.97)

壺 (1)は器内の薄い壺下半でA類になろうか。丁寧な施磨き。(2)はD類で矮小化した二段口縁、頸部に断面矩形の凸帯を巡らす。刷毛目調整。(3)は施磨きを施す。

B-77号竪

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	壺		3	視高5.5	15	灰白	貯蔵穴内
2	二段口縁	16		視高5		灰白	埋土
3	壺下半		9.4	視高9.5		灰白	埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
4	横造土器	6.2		6.9	88	灰白	埋土
5	横造土器	9		6.8	9.2	灰白	埋土



第404図 B-77号竪穴跡出土遺物

## B-78号竪穴跡 (第405図 P.L.97)

壺 C<sub>1</sub>類 (2) は体部刷毛後施撫で。C<sub>2</sub>類 (3) は大きく開く口縁部で縦いが有段。体部施磨き。E<sub>4</sub>類 (4) は薄い折り返し口縁帯で刷毛目調整。

甕 B<sub>1</sub>類 (5)。C類 (6・7)。

## B-78号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	壺		2.4	腹高2.5		灰白	床面
2	小型壺	7	4.1	9		灰白	床面
3	小型壺	10.6	4.2	9.2		灰白	床面
4	壺	15.5		腹高5.5		灰白	床面

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
5	甕	15.4	5	16.8		灰白	床面
6	S字口縁台付壺	14.9	9.2	27.5	22.5	灰白	床面
7	S字口縁台付壺	17	8.5	32.2	26	灰白	床面

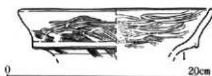


第405図 B-78号竪穴跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

B-79号竪穴跡 (第406図)

壺 D<sub>2</sub>類 (1)。内外面刷毛目後焼磨き。口径20.8cm



第406図 B-79号竪穴跡出土遺物

B南-1号住居跡 (第407図 P.L.97)

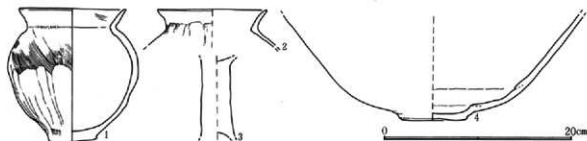
甕 B<sub>1</sub>類 (1・2)。(1)は刷毛後口縁部横撫で、体部下半  
焼撫で。

(3)は柱状で高環脚部になろうか。

B南-1号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	甕	11.2	8.1	14	13.8	灰白	床面
2	甕	11.4				灰白	床面

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
3	高环脚?			現高9		灰白	床面
4	壺下半			7	現高11.5	灰白	床面



第407図 B南-1号住居跡出土遺物

C-50号住居跡 (第408・409図 P.L.97)

器台 (1)、高环 (2~4) はともに3円孔を穿つ。鉢 (5)は口縁部がN字状に折り返しがあり、  
本遺跡唯一の出土である。体部刷毛目調整。

壺 A<sub>3</sub>類 (6)は内外面焼撫で。(7・8)は緩い二段口縁形態をもつがA<sub>4</sub>類になろう。E<sub>4</sub>類 (9)は  
刷毛後焼磨き。F<sub>2</sub>類 (10)は外面刷毛目、内面刷毛後焼磨き。

甕 (12・13)は体・口縁部の形状からB<sub>1</sub>類。(14・15)は台付きと考えられC<sub>1</sub>類。(13・15)は口唇部  
矩形で面取り状。(19)C類の台部。

(11)は鉢・甕判じ難いが鉢E類に通じる。(16~18)は壺底。(16)は窪み底、(18)はベタ底である。

C-50号住

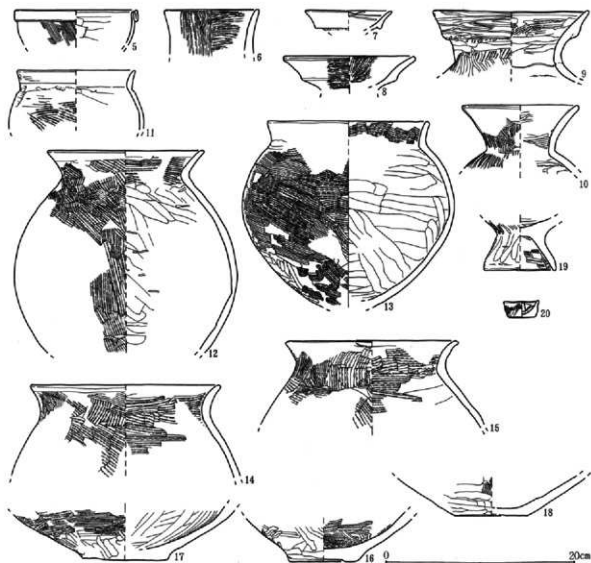
番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台		10.1	現高9		灰白	床面
2	高环脚部		13	現高7.2		灰	P内
3	高环脚部			現高7.3		灰	床面
4	高环脚部			現高6		灰白	断面
5	鉢	13		現高4		灰	断面
6	壺口縁部	10		現高5		陶灰	埋土
7	甕	9				灰白	床面
8	壺口縁部	14		現高3.5		灰白	埋土
9	甕	16.4		現高7.5		灰白	床面
10	甕	12		現高7		灰	貯蔵穴内

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
11	甕	12.4		現高6		灰	床面
12	甕	16.8		現高21	23.5	陶灰	床面
13	甕			現高19.5	22.5	陶灰	床面
14	甕	20.2		現高10		陶灰	床面
15	甕	18.4		現高9		灰白	P4内
16	壺底部		7.2	現高5		灰白	床面
17	壺底部		9	現高5.5		灰白	床面
18	壺底部		7.6	現高4		灰白	床面
19	壺口縁部付壺台		7.6	現高5.8		灰白	埋土
20	横造土器	4	2.81.4			灰白	埋土



第408図 C-50号住居跡出土遺物 (1)





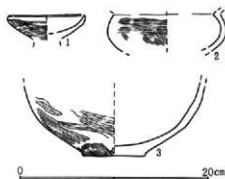
第409図 C-54号住居跡出土遺物(2)

C-54号住居跡(第410・411図 P L.98)

器台(1)はA類。(2)は口縁部欠き増か鉢、やや大振り  
で深みのある体部。宛磨きされ内外面は赤彩が施される。(4)  
は壺・甕判じ離いが内外面一部に宛磨きを施す。(5・6)は  
甕D類の台部に類似するが、端部は未完状態で製作途上の改  
変であろうか。

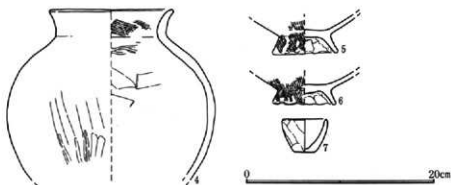
C-54号住

番号	器名	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	器台(小坏部)	8.2		規高5		灰白	床面
2	残胴中位			規高4		灰白	床面
3	器下半		6.6	規高16		橙	床面
4	器上半	12.1		規高17.5	22	灰白	床面
5	台付甕台部			規高5.5		灰白	床面
6	台付甕台部			規高7		灰白	床面
7	残底土器	4.8	3.5	2.3		灰白	床面



第410図 C-54号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



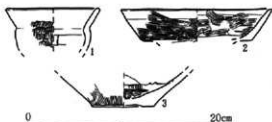
第411図 C-54号住居跡出土遺物(2)

C-55号住居跡(第412図)

(1)は形状埴をなすが刷毛目調整で作りは雑。(2)は壺口縁D<sub>2</sub>類。(3)は窪み底。

C-55号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	埴	10		現高4.5		赤陶	断面
2	壺口縁	16		現高3		赤陶	埋土
3	窪み底		6.6	現高4.2		雑灰	埋土

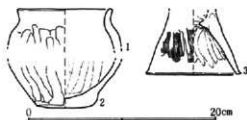


第412図 C-55号住居跡出土遺物

C-56号住居跡(第413図)

C-56号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1-2	小壺	10	6	12.5	25	灰白	表面
3	台付蓋台		10	現高7		雑灰	埋土



第413図 C-56号住居跡出土遺物

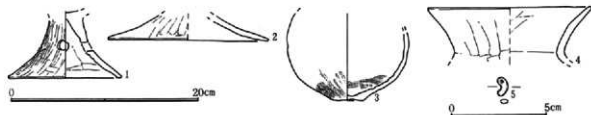
D<sub>2</sub>-1号住居跡(第414図 P.L.98)

(1・2)は高坏脚部。(1)は4孔孔を穿つ。  
壺(4)はF<sub>2</sub>類になろうか。外面寛磨き内面刷毛後撫で、(3)は寛磨き

D<sub>2</sub>-1号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	高坏脚部		12	現高6.5		灰白	埋土
2	高坏脚部		8.5	現高3.5		灰白	埋土
3	蓋		3	現高9.2	12.7	灰白	埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
4	壺	17.5		現高6		雑	埋土
5	石釦勾玉	長3	厚0.4	孔径0.2			埋土



第414図 D<sub>2</sub>-1号住居跡出土遺物

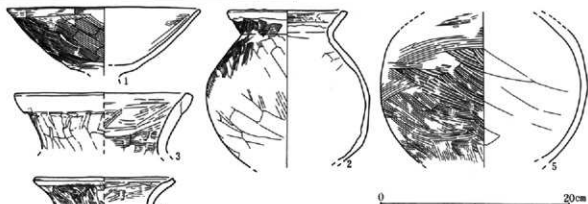
D<sub>2</sub>-2号住居跡(第415図 P.L.98)

高坏 B<sub>2</sub>類(1)は外面刷毛目、内面寛磨き調整。  
壺 E<sub>1</sub>類(2・3)。(2)の折り返しは薄く、外面に痕跡程度。刷毛後強い寛磨で調整。(3)は外面磨削。(4)は口唇部矩形。(5)は外面粗目刷毛調整。

D<sub>3</sub>-2号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置
1	高坏坏部	20.6		現高7		橙	床面
2	甕	12.8		現高16		橙	床面
3	甕	18.9		現高6		灰白	埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置
4	甕	14.5		現高3		灰白	床面
5	甕			現高16.5		21.5	灰白 床面

第415図 D<sub>3</sub>-2号住居跡出土遺物D<sub>3</sub>-3号住居跡 (第416図)D<sub>3</sub>-3号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置
1	S字口縁甕	19.7				灰白	埋土
2	横造土器	7.7	3	4.6		灰白	埋土

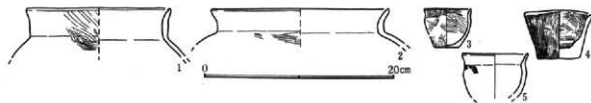
第416図 D<sub>3</sub>-3号住居跡出土遺物D<sub>3</sub>-5a・b号住居跡 (第417図 P L.98)

甕 (1・2) は口縁部コの字状を呈しB<sub>4</sub>類に属しようか。

D<sub>3</sub>-5a・b号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置
1	甕	15.4		現高5.2		灰輪	埋土
2	甕	19		現高3.9		灰輪	埋土
3	横造土器	5	2.7	4.1		灰白	埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置
4	横造土器	7.2	4.6	5.1			
5	横造土器	7		現高4.6		灰白	埋土

第417図 D<sub>3</sub>-5a・b号住居跡出土遺物D<sub>3</sub>-6号住居跡 (第418図 P L.98)

(1) は高坏脚部、3円孔を穿つ。

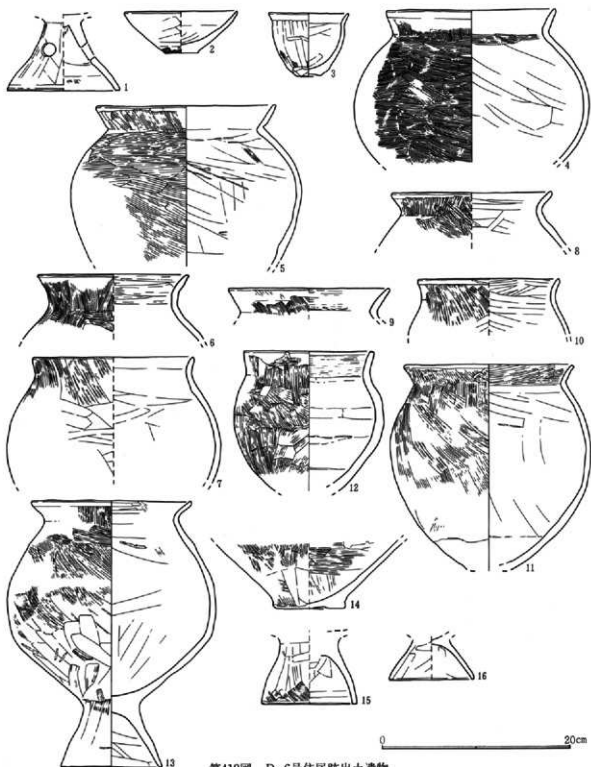
鉢 D<sub>1</sub>類 (2)。E<sub>1</sub>類 (3) は刷毛目後施撫で調整。

甕 B<sub>1</sub>類 (4) は体部に焼成後の穿孔がある。孔径約3cm。(12・13) は下半に台部の亮しが窺われC類か。(7) は口縁部コの字状形態でB<sub>4</sub>類になろうか。C類 (14) は刷毛後体部下半に施撫で調整。(15・16) ともC類台部。

第3章 検出された遺構と遺物

D<sub>3</sub>-6号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏坏部	12	12	現高8.1		灰白	床面	9	罍	17				灰黒	床面
2	钵	8.2	3.6	4.3		灰白	床面	10	罍	15		現高5.9		灰白	壁土
3	钵	8.4	3.6	6.4		灰白	壁土	11	罍	19		21.7		赤黒	床面
4	罍	18		16	24.7	黒灰	床面	12	罍	13.8		14.7		赤黒	床面
5	罍	19		現高17	24.4	灰白	床面	13	单口钵台付罍	17	10.8	28	22.2	黒灰	床面
6	罍	16		現高7		赤黒	床面	14	窓底部		7.2	現高4.8		黒	床面
7	罍	17		13.3	22.5	赤黒	床面	15	单口钵台付罍		10	現高7.7		灰白	床面
8	罍	17		現高5.9		黒灰	床面	16	单口钵台付罍		9	現高4.6		灰白	床面



第418図 D<sub>3</sub>-6号住居跡出土遺物

D<sub>3</sub>-7号壺穴跡 (第419図 P.L.98)

(1)は甕C類または結合土器B類か。台部の作りから甕C類の可能性が高い。体部は粗目刷毛後施削り。

D<sub>3</sub>-7号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	半口縁台付壺	11		現高10.5	12.2	赤褐色	断面

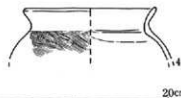
D<sub>3</sub>-8号住居跡 (第420図 P.L.98)

高坏脚(1)は3円孔を穿つ。(2・3)は横造土器か。

D<sub>3</sub>-8号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏脚形		14	現高7.0		灰白	断面
2	鉢	8.4	3	5.8		灰白	断面

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
3	鉢	10.9	5	6.6		灰白	断面
4	甕	14		現高5.4		灰白	断面



0 20cm

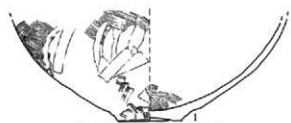
第419図 D<sub>3</sub>-7号壺穴跡出土遺物第420図 D<sub>3</sub>-8号住居跡出土遺物D<sub>3</sub>-10・14号住居跡 (第421・422図 P.L.98)

(1・2)は壺下半部、刷毛後施掘で。(3～5)は甕B類かと思える。外面刷毛調整で(4)の内面には施磨きが見られる。(6・7)はC類に属し小型品である。(8)はC類、(9)はD類の台部。

D<sub>3</sub>-10・14号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	壺下半		6.2	現高11.6	29+φ	灰白	断面
2	壺下半		7.6	現高11.8	27+φ	灰白	断面
3	甕	14.8		現高15.5	19.5	暗褐色	断面
4	甕	14.6		現高17.6	22.2	暗褐色	断面
5	甕	21				赤褐色	断面

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
6	半口縁台付壺	8.8		現高10.9	10.1	灰白	断面
7	半口縁台付壺?					9.8	灰白
8	半口縁台付壺台			9.6	現高4.9		暗褐色
9	SPD縁台付壺台			8.9	現高7.5		暗褐色



0 20cm

第421図 D<sub>3</sub>-10・14号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第422図 D3-10・14号住居跡出土遺物(2)

D3-11号竪穴跡(第423図 P.L.99)

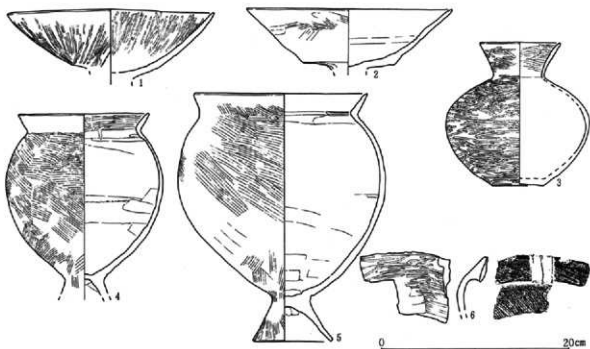
高坏 B2類(1)。内外面篋磨き。D類(2)は刷毛目後篋撫で調整。

壺 C4類(3)は薄手の作りで丁寧な篋磨きを施す。

甕 C1類(4・5)。体部外面粗目刷毛。(4)は口縁外面、(5)は内外面横撫で調整。

D3-11号竪

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏坏部	21.9		現高7		灰白	床面	4	単口縁台付甕	13.6		現高19		橙	床面
2	高坏坏部	21.7		現高7		焼灰	床面	5	単口縁台付甕	18.4		26	16.5	橙	床面
3	壺	8.4	8.5	15		22	床面	6	甕口縁					灰白	床面



第423図 D3-11号竪穴跡出土遺物

D3-12号住居跡(第424図 P.L.99)

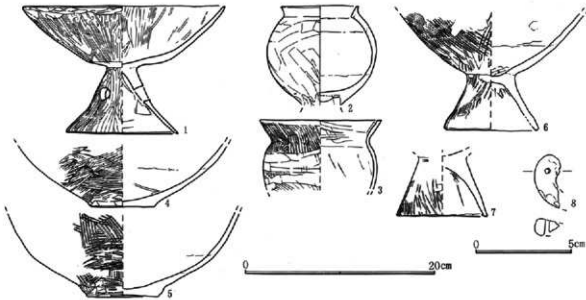
高坏 B2類(1)は内外面篋磨き。脚部3円孔を穿つ。

(2)は結合土器B3類になろうか。口縁部は短く内傾して尖る。体部篋撫で。

(3~5)甕B類で(3)は口唇上端は面取り状で矩形。(6・7)は甕C類。

D3-12号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏	21.3	11.9	13.4		赤褐	P1内	5	甕			7.6	現高9	赤褐	床面
2	台付甕	8.2		現高10.5	11.7	灰白	床面	6	単口縁台付甕			10	現高12.5	焼灰	床面
3	甕	13		現高7	12	灰白	床面	7	単口縁台付甕台			9.6	現高6.8	焼灰	床面
4	甕			6.8	現高6.5	赤褐	床面	8	石製勾玉	径2.8	幅1.3	厚0.9	孔径0.2		床面



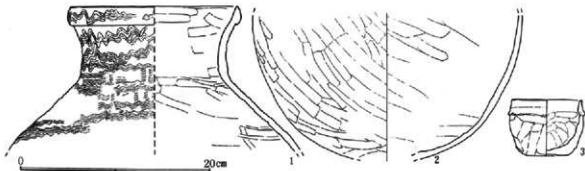
第424図 D3-12号住居跡出土遺物

D3-13号竪穴跡 (第425図 P L.99)

- (1) は所謂樽式土器の壺、幅狭な折り返し口縁帯で口頸部から体部にかけて櫛描き波状文を施す。  
 (2) は寛B類 (Be類か) の可能性が高い。体部外面施撫で。(3) は模造土器で折り返し口縁状で端部細まる。

D3-13号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	樽式壺	19.6		現高15.5		黒灰	黒土	3	模造土器	7.4	4	5.9		灰白	黒土
2	壺			現高15	28.5	赤褐色	黒土								



第425図 D3-13号竪穴跡出土遺物

D3-15号竪穴跡 (第426図 P L.99・100)

器台 A1類 (1) は内外面施撫で、脚部3円孔を穿つ。

高坏 A2類 (2) は外面施撫で後施磨き、内面施磨き。(5) はA1類か鉢類になろうか。内外面施撫で。

結合土器 A1類 (3) は外面刷毛後施磨き、内面施磨き。

鉢 E類 (4) は内外面刷毛後施撫で。

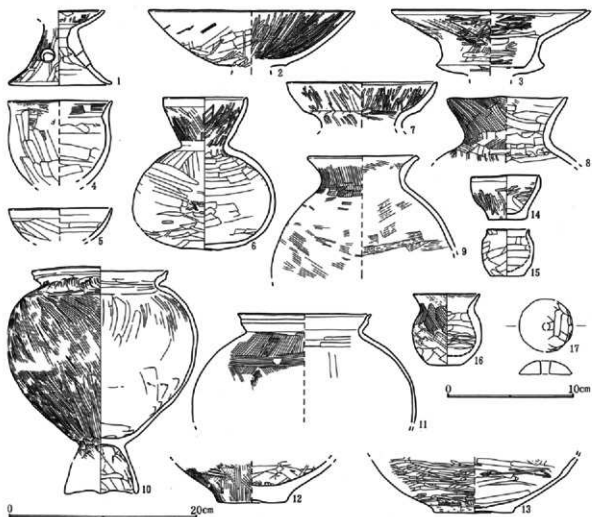
壺 A1類 (6) は下膨れ形状でベタ平底。外面・口縁内面施磨き。D2類 (7) は内外面施磨き。F2類 (8・9)。

甕 D類 (10・11)。(10) は肩部に粗略な横刷毛。(11) は粗目刷毛で肩部横刷毛目。

第3章 検出された遺構と遺物

D<sub>3</sub>-15号竪

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	10	11	7.8		灰褐色	庫面	10	S字口端付蓋	14.5	7.9	23.9	30.3	褐色	貯蔵穴
2	高坏坏部	21.8		現高7		灰白	庫面	11	S字口縁蓋	14		現高11.5		13.4	褐色
3	鉢台土部	21		現高7		灰白	庫面	12	巻底部		7.1	現高4.5			灰褐色
4	鉢	11.2		現高7		灰白	埋土	13	巻底部		8.3				灰白
5	高坏坏部?	11		現高3.5		灰白	埋土	14	巻底土部	7.2	4	4.7			灰白
6	器	8.9	4	11	15	灰褐色	貯蔵穴	15	巻底土部	4.5	3.4	4.9			灰白
7	二重口縁密	15.8		現高4.5		褐色	埋土	16	巻底土部	7	3.3	7.6			灰白
8	器	12.7		現高7		褐色	庫面	17	土製紡錘輪	径4.2	厚1	径4-5.5			灰白
9	器	11.7		現高13		褐色	庫面								



第426図 D<sub>3</sub>-15号竪穴跡出土遺

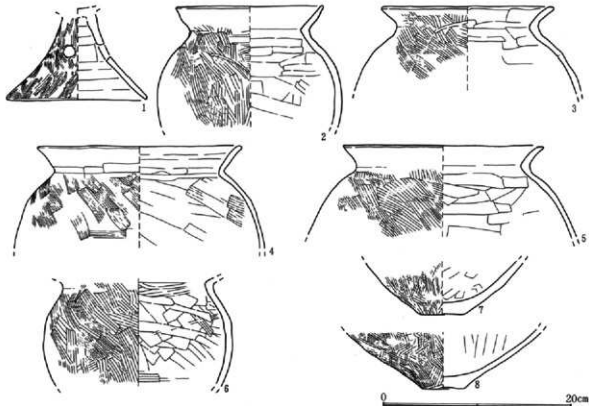
D<sub>3</sub>-18号住居跡 (第427図 P L.100)

変 B類 (2~8)。体部外面総じて粗目の刷毛。(2)は口縁形状が受け口状でB<sub>3</sub>類になろうか。

D<sub>3</sub>-18号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏坏部		15	現高9.5		褐色	庫面	5	器	21		現高9.5	28+φ	灰褐色	庫面
2	器	15.6		現高13	19.5	灰白	庫面	6	器			現高11.5	20	灰白	庫面
3	器	18.2		現高10	21+φ	褐色	埋土	7	巻底部		4.4	現高2.5		褐色	庫面
4	器	21.6		現高10.5	26.5+φ	灰褐色	庫面	8	巻底部		4.4	現高6		灰褐色	庫面

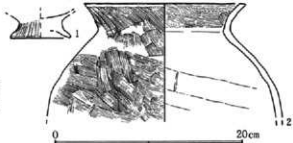




第427図 D<sub>3</sub>-18号住居跡出土遺物

D<sub>3</sub>-19号住居跡 (第428図)

(1) は不明器形の台部、寛磨きを施す。(2) は  
甕B<sub>1</sub>類か。細目刷毛で口唇上端は面取り状に矩形。



第428図 D<sub>3</sub>-19号住居跡出土遺物

D<sub>3</sub>-19号住

番号	器種	口径	胴径	器高	胴径粗	色調	出土位置
1	台部		6.4			灰白	甕土
2	甕	17		甕高12.1	24.5+φ	灰褐	伊達床面

D<sub>3</sub>-20号住居跡 (第429・430図 P L.100・101)

器台 A<sub>1</sub>類 (1) は外面寛撫で、内面寛磨き。

高坏 B<sub>1</sub>類 (2・3)。(2) は外面刷毛目、内面刷毛後寛磨き。(3) は内外面寛撫で後内面寛磨き。

(4) はB<sub>2</sub>類か。

鉢 E<sub>1</sub>類 (6) は口縁部の外反度が弱い。内外面寛磨き。

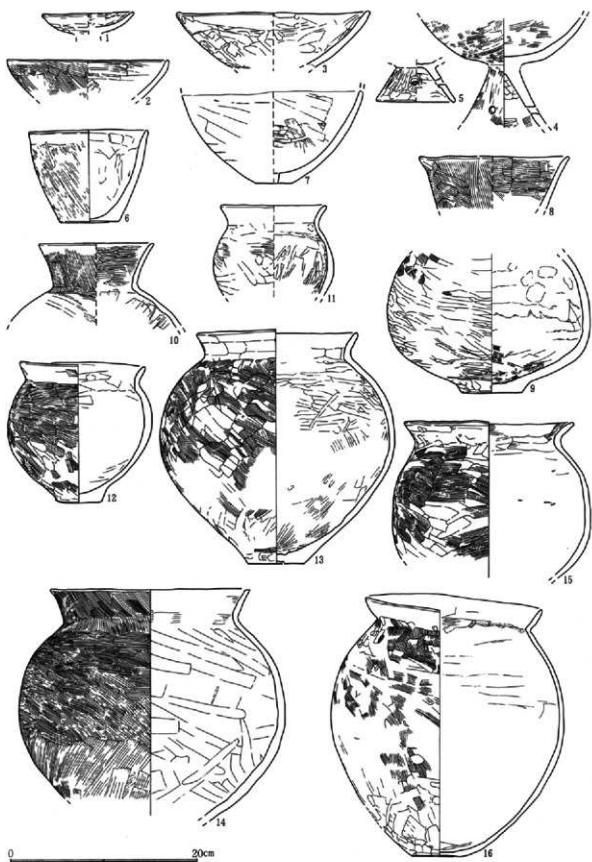
甌 A<sub>2</sub>類 (7) は小径半孔で内外面寛撫で。

壺 (8) はA類になろう。内外面刷毛目。(9) は体部の形状よりD<sub>2</sub>類かF<sub>1</sub>類と考えられる。体部外面刷毛後寛磨き。F<sub>2</sub>類 (10) は口頸部刷毛、体部寛磨き。

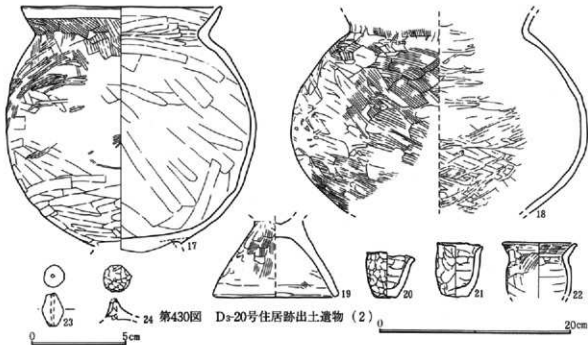
甕 B<sub>1</sub>類 (11~15・18)。大・中・小がある。口縁部内外面横撫でが多い。B<sub>2</sub>類 (16) は体部やや長形でベタ平底、外面刷毛後寛撫で、口縁部内外面横撫で。(17) は台部が離脱したものでC<sub>1</sub>類になる。体部刷毛後寛撫で。(19) はC類台部で大型の体部か。

(24) は蓋摘み部と考えられ乳頭形を呈す。

第3章 検出された遺構と遺物



第429図 D<sub>2</sub>-20号住居跡出土遺物 (1)



第430図 D<sub>20</sub>-20号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台坏部	10		規高2		赤黄	灰白 漆面
2	器台坏部	17.2		規高2		灰白	漆面
3	高坏坏部	20		規高5.8		黄	漆面
4	高坏坏部			規高11		灰黄	漆面
5	高坏脚部	8.5		規高4.5		黄灰	漆面
6	钵	12.7	6	10		灰白	漆面
7	瓶	19	3.8	規高9.5	孔径1	灰白	漆面
8	器口縁	16				灰白	漆面
9	器		6.2	規高14.8	21.5	赤黄	漆面
10	器	12.2		規高18 + φ		灰白	漆面
11	器	11.2		規高9.5	13	黄	漆面
12	器	13.3	5	15	15.2	赤黄	漆面

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
13	器	17.2	5.8	24.2	24.7	黄	漆面
14	器	21.2		規高34.5	26	黄	漆面
15	器	18		16	21	黄	漆面
16	器	19	5.5	27.5	24.5	灰白	漆面
17	器口縁付残片?	21.2		規高38	26.3	黄	漆面
18	器			規高21.5	31.3	黄	漆面
19	器口縁付残片			13.3	規高8.5	赤黄	漆面
20	横造土器	5.1	1.9	4.8		灰白	漆面
21	横造土器	4.7	2.7	5.7		灰白	漆面
22	横造土器	7.6		規高5.5		灰白	漆面
23	土製玉	長1.7	径1.1	孔径0.15		灰白	漆面
24	器残片			規高2		灰黄	漆面

D<sub>21</sub>-21号住居跡 (第431図)

(1) は高坏A<sub>1</sub>類になろう。内外面鈍磨き。

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏	14		規高4		灰白	漆面
2	横造土器	3	3	4		灰白	漆面

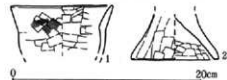


第431図 D<sub>21</sub>-21号住居跡出土遺物

D<sub>22</sub>-22号住居跡 (第432図)

(1) は鉢E<sub>1</sub>類で外面刷毛後鈍磨。 (2) は壺C類台部。

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	鉢	10.7		規高5		灰白	漆面
2	壺C類台部		9.3	規高5.2		灰白	漆面

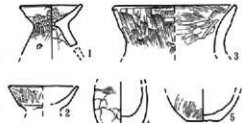


第432図 D<sub>22</sub>-22号住居跡出土遺物

D<sub>23</sub>a・b号住居跡 (第433図)

器台 A<sub>2</sub>類 (1・2)。外面刷毛後鈍磨。 (1) は腰環部の屈曲が弱い。脚部3円孔を穿つ。

壺 F<sub>2</sub>類 (3) は内外面刷毛目。 (4・5) は壺形の模造土器。



第433図 D<sub>23</sub>a・b号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	6.5		規高5		灰白	漆面
2	器台	7.4		規高5		灰白	漆面
3	壺	13.2		規高5		灰白	漆面

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
4	横造土器	4.2		規高4.6		灰白	漆面
5	横造土器	3.6		規高3.7		灰白	漆面

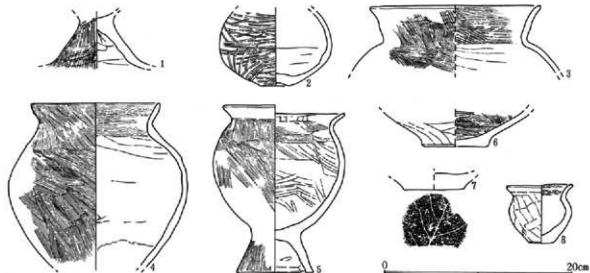
第3章 検出された遺構と遺物

D<sub>3</sub>-24a・b号住居跡 (第434図 P L.101)

(1) は高坏脚部無孔。(2) は壺A<sub>2</sub>類になろう。外面丁寧な磨き。(7) は木葉痕のある壺底部。  
 甕 C<sub>1</sub>類 (5) は細目刷毛で口縁部内外面横撫で。(4) は口縁部形状からB<sub>2</sub>類か。細目刷毛。

D<sub>3</sub>-24a・b号住

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	部 種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	高坏脚部			現高6.4		焼灰	壁土	5	単口縁台付壺	12.9	8	17.8	14	焼灰	壁土
2	壺		3.2	現高7.8		灰白	壁土	6	壺		7	現高4		焼灰	壁土
3	甕	18		現高7.1		焼灰	壁土	7	甕底部		6.3			焼灰	壁土
4	甕	13.6		現高17.4	24	灰白	壁土	8	甕流土器	7	2.4	6.1		灰白	床面



第434図 D<sub>3</sub>-24a・b号住居跡出土遺物

D<sub>3</sub>-27号住居跡 (第435図 P L.101)

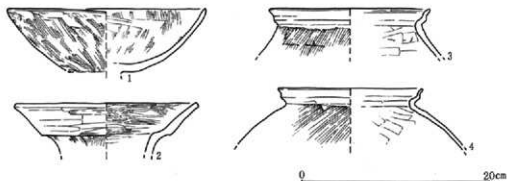
高坏 B<sub>2</sub>類 (1) は内外面磨きで赤彩を施す。

壺 D<sub>2</sub>類 (2) は口縁部磨きで赤彩を施し、頸部は刷毛目。

甕 D類 (3・4) は粗目刷毛。

D<sub>3</sub>-27号住

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	部 種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	高坏坏部	21		現高6.5		灰白	壁土	3	S字口罍甕	17		現高5		灰白	壁土
2	二重口罍甕	19		現高5		灰白	壁土	4	S字口罍甕	15.3		現高6.5		灰白	壁土



第435図 D<sub>3</sub>-27号住居跡出土遺物

D<sub>3</sub>-28号住居跡(第436図 P L.101)

器台 (1)はA類に属するか。口唇部は細まって尖る。

鉢 D類 (2)はやや体部に深みがあり内外面とも篋撫でに近い刷毛目調整痕。

D<sub>3</sub>-28号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	8.2		現高4		灰白	甕土	3	蓋	20.4				灰白	甕土
2	鉢	12.5	5.6	5.7		灰白	甕土	4	甕造土器		2.6	現高3.5		灰白	甕土

第436図 D<sub>3</sub>-28号住居跡出土遺物D<sub>3</sub>-29号住居跡(第437・438図 P L.101・102)

(1)は坯部への貫通孔が認められ器台に分類されるが大型になろう。2孔2対の間に各1孔を配し計6円孔を穿つ。(2~4)は高环脚部。(2)は上下二段に各4孔、(3)は3円孔、(4)は無孔。

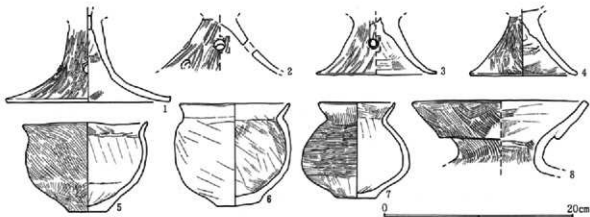
鉢 E<sub>1</sub>類 (5・6)。(5)は外面粗目刷毛、(6)は篋撫で調整。

壺 C<sub>1</sub>類 (7)。口縁部上半は内湾し、体部下位で強く張って下膨れ気味。体部粗目刷毛。D<sub>3</sub>類 (8)は刷毛目。F<sub>2</sub>類 (9・10)。刷毛後磨きを施す。(11)も同類か。

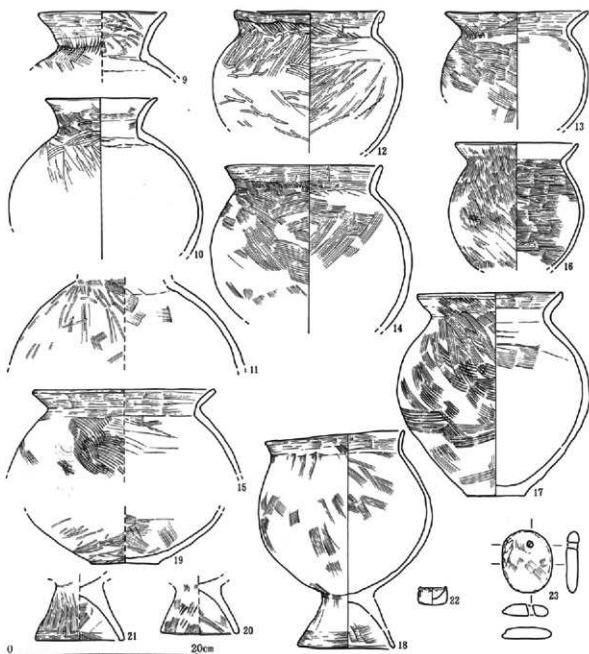
甕 A<sub>1</sub>類 (12)。幅狭な折り返し口縁帯で刷毛後内外面磨きを施す。B<sub>1</sub>類 (13~15)。(16・17)は口縁部内湾気味でB<sub>2</sub>類になろう。(20・21)はC類の台部。

D<sub>3</sub>-29号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
1	器台脚部		17.4	現高9.7		橙	床面	13	壺	15.2		現高12.3	15.5	焼灰	床面	
2	高环脚部			現高6		灰白	床面	14	壺	16.7		現高17	21	灰白	床面	
3	高环脚部		12.9	現高6.5		灰白	床面	15	壺	19.4		現高10	25+8	灰白	床面	
4	高环脚部		13	現高7		灰白	床面	16	壺	13		現高13	14.3	焼灰	床面	
5	鉢	12.2	4	9.5	12.5	橙	床面	17	壺	15.3	6	21.3	20.3	灰白	床面	
6	壺	11.6	4.5	30.8	12.2	灰褐	床面	18	埴口縁台付壺	14.7	10.3	22.8	18.3	灰白	床面	
7	壺	8	4.2	30.1	11.4	灰白	床面	19	甕底部		7		現高5.5		灰白	床面
8	一重口縁壺	16.5		現高8		灰白	床面	20	埴口縁台付壺		8.3		現高6		橙	床面
9	壺	15.6		現高7		灰白	床面	21	埴口縁台付壺		9.4		現高7		橙	床面
10	壺	11.7		現高16.5	20.3	灰白	床面	22	甕造土器	2.9	2.7	1.9		灰白	床面	
11	壺			現高10	25	灰白	床面	23	石製有円蓋	径6.5	幅5.3	厚1.3	孔径0.5		床面	
12	壺	15.9		現高15	20	焼灰	床面									

第437図 D<sub>3</sub>-29号住居跡出土遺物 (1)

第3章 検出された遺構と遺物



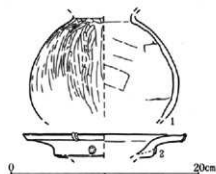
第438図 D<sub>3</sub>-29号住居跡出土遺物 (2)

D<sub>3</sub>-30号住居跡 (第439図)

壺 (1) はA類。外面施磨き。(2) はD<sub>1</sub>a類。口唇側縁2個単位の浮文、下段に1個単位の円形浮文を貼る。

D<sub>3</sub>-30号住

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色澤	出土位置
1	壺			現高10.5	15.8	磨	甌土
2	二段口埴器	17				灰白	甌土



第439図 D<sub>3</sub>-30号住居跡出土遺物

## D&gt;31号竪穴跡 (第440図 P.L.102)

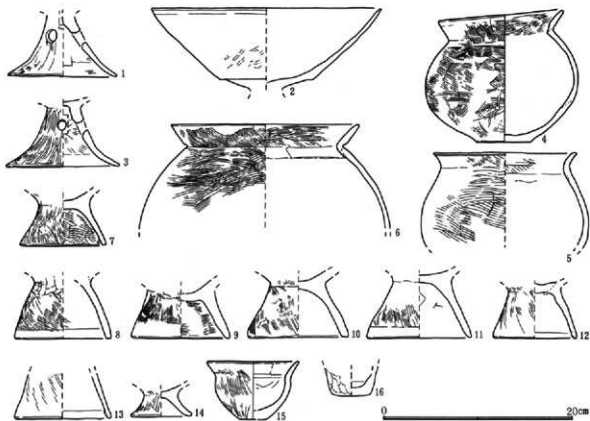
(1) は器台脚部で、3円孔を穿つ。

高坏 D<sub>2</sub>類 (2)。内外面磨きを施すが器面摩滅で不鮮明。(3) は4円孔を穿つ。甕 B<sub>2</sub>類 (4~6)。(5) は口唇上端面取り状で平ら。(7~11) はC類、(12~13) はD類の台部。

(14) は器形不明の台部で磨きを施す。(15~16) は模造土器

## D&gt;31号竪

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台脚部		11.5	規高5.5		灰白	覆土	9	車口縁台付甕台		10.4	規高6.2		灰	覆土
2	高坏坏部	24.4		規高5.5		灰白	覆土	10	車口縁台付甕台		10.7	規高7		灰褐	覆土
3	高坏脚部		12.1	規高7.2		灰白	覆土	11	車口縁台付甕台		11.1	規高7		灰褐	覆土
4	甕	13	5.7	14	16	灰白	覆土	12	5字口縁台付甕台		9.8	規高6		灰白	覆土
5	甕	15		規高10	17.5	灰白	覆土	13	5字口縁台付甕台		10.3	規高5		灰褐	覆土
6	甕	20		規高11	26.5	黄	覆土	14	台付甕台		6.5	規高3.5		灰褐	覆土
7	車口縁台付甕台		9.2	規高5.5		黄	覆土	15	模造土器	9.8	2.7	6.1		灰白	覆土
8	車口縁台付甕台		10.3	規高7		黄	覆土	16	模造土器		4	規高3.3		灰白	覆土

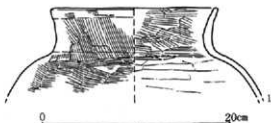


第440図 D&gt;31号竪穴跡出土遺物

## D&gt;33号住居跡 (第441図)

(1) は口縁部直立気味の甕である。粗目刷毛。

B類になろうか。口径17.6cm。



第441図 D&gt;33号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

D<sub>3</sub>-36号住居跡 (第442図)

D<sub>3</sub>-36号住

番号	部 種	口径	底径	器高	刷付物	色調	出土位置
1	裏底面		6.4			灰白	埋土
2	車口縁台付臺台		11			灰褐	埋土



第442図 D<sub>3</sub>-36号住居跡出土遺物

D<sub>3</sub>-38号住居跡 (第443図)

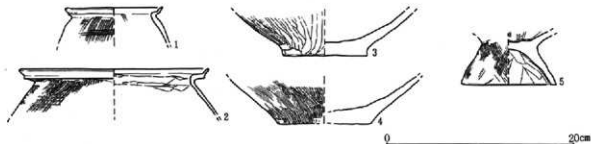
甕 D類 (1・2)。横位刷毛目を施し、S字状口縁内面は水平に近く折れる。

(3・4)は壺、(5)は甕C類の台部。

D<sub>3</sub>-38号住

番号	部 種	口径	底径	器高	刷付物	色調	出土位置
1	S字口縁壺	10.2		現高4		灰白	埋土
2	S字口縁壺	20		現高5		灰白	埋土
3	壺底面		9			灰白	埋土

番号	部 種	口径	底径	器高	刷付物	色調	出土位置
4	壺底部		10			灰白	埋土
5	車口縁台付臺台		10	現高5.5		灰白	埋土



第443図 D<sub>3</sub>-38号住居跡出土遺物

D<sub>3</sub>-39号住居跡 (第444・445図 P L.102)

(1～3)は高坏脚部。(1)は無孔で、他は3円孔を穿つ。

(4)は結合土器、A<sub>1</sub>類になろう。調整痕は不鮮明だが篋撫で後篋磨きを施す。

(5・6)は壺、(5)はA類に、(6)は体部粗目の刷毛目調整

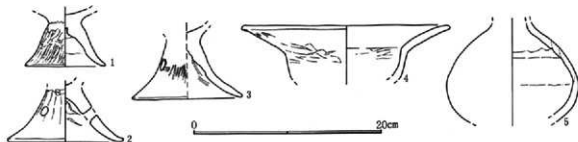
甕 (7～11)はB類またはC類。(12～14)はC類の台部。

(15)は板状焼成土製品で器面には刷毛目痕が残る。破損品で用途不明。

D<sub>3</sub>-39号住

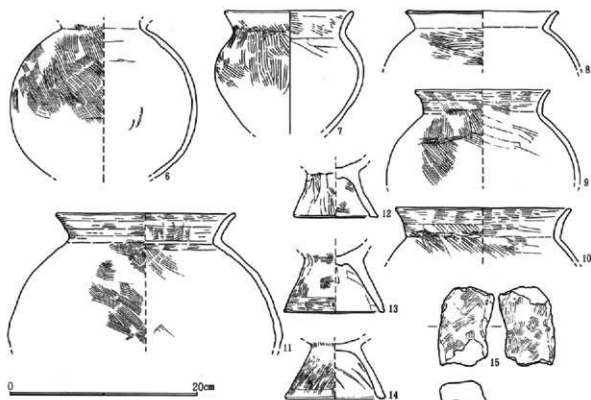
番号	部 種	口径	底径	器高	刷付物	色調	出土位置
1	高坏脚	8.4		現高6.2		灰白	床面
2	高坏脚	12.3		現高6.5		赤褐	床面
3	高坏脚部	11.6		現高8		灰白	床面
4	高坏脚部	22		現高6		灰白	床面
5	壺			現高10.5	14	赤褐	床面
6	壺			現高16.5	19.5	灰白	床面
7	甕	13.5		現高13	15.7	灰褐	床面
8	甕	16		現高6	20+8	赤褐	床面

番号	部 種	口径	底径	器高	刷付物	色調	出土位置
9	壺	14		現高10	30.2	灰褐	床面
10	壺	18.4		現高6		灰褐	床面
11	壺	19		現高14.5	29	灰白	床面
12	車口縁台付臺台		10.7	現高6.2		灰白	床面
13	車口縁台付臺台		10.6	現高7.3		灰白	床面
14	車口縁台付臺台		9	現高6.5		灰白	床面
15	板状土製品	長15	幅5	厚2.5		灰白	床面



第444図 D<sub>3</sub>-39号住居跡出土遺物 (1)





第445図 D-39号住居跡出土遺物 (2)

D-83号住居跡 (第446・447図)

器台 A:類 (1)。B:類 (2) は坏・脚の貫通孔がなく口縁部が小さく外反して立つ。

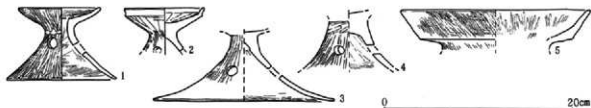
(3・4) は高坏脚部、寛磨きを施し各3円孔を穿つ。

壺 D:類 (5)。(6・7) は同一個体の可能性があり、E:類になろう。刷毛後寛磨きを施し、内面見込み部は刷毛後寛撫で。(17) は小型壺形態で口縁部は短く直立し体部長形で寛磨きを施す。

甕 D:類 (11~14) は肩部に横位刷毛目を施す。(15) はC:類、(16) はD:類の台部。

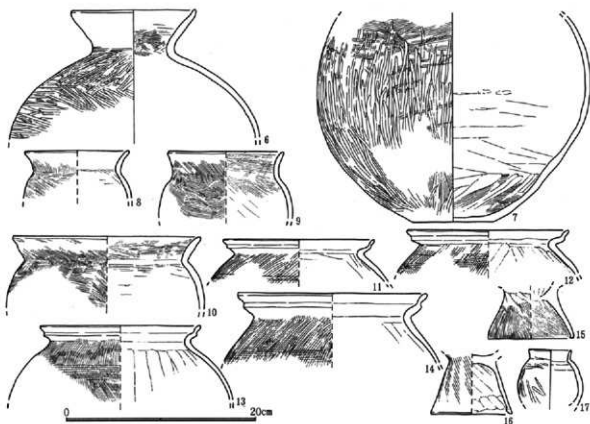
D-83号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	8.5	11.4	7.6		灰白	床面	10	壺	19.8		現高7.5		灰陶	床面
2	器台	8.5		現高4.5		灰白	床面	11	S字口縁臺	16		現高4.5		灰白	床面
3	高坏脚		19.2	現高7.3		灰褐色	床面	12	S字口縁臺	17		現高4.5		灰白	床面
4	高坏脚			現高6		灰白	床面	13	S字口縁臺	16.9		現高7.3		灰白	床面
5	二口縁壺口縁	20		現高4		灰白	床面	14	S字口縁臺	19.8		現高7.3		灰白	床面
6	壺	13.3		現高13.5	26.5	灰白	床面	15	單口縁臺台		9	現高6.5		灰白	床面
7	壺		8.4	現高21.5	28.8	灰白	床面	16	S字口縁臺台		8.6	現高6.5		灰白	床面
8	甕	11		現高5		灰白	床面	17	横直土器	4.5		現高5.5		灰白	床面
9	甕	12		現高7		灰白	床面								



第446図 D-83号住居跡出土遺物 (1)

第3章 検出された遺構と遺物



第447図 D-83号住居跡出土遺物 (2)

D-84号住居跡 (第448・449図 P.L.102)

器台 A:類 (1) は脚部無孔。刷毛後焼磨き。

(2) は高坏形態だが脚部刷毛目で無孔。坏部焼撫で調整。作りやや雑で模造土器か。(3) は壺A類の口縁か。

壺 D:類 (4) は口縁部焼撫で、頸部焼磨き。

壺 A:類 (5) は幅狭な折り返し口縁帯。(6・7) はB:類になろう。D類 (8・9) は小型で口縁S字の作りが小さい。(8) は粗目刷毛で肩部に横目刷毛目がある。(10) はC類、(11・12) はD類の台部。

(14) は土製陶輪状製品。外面焼撫で、内面刷毛後焼磨き。

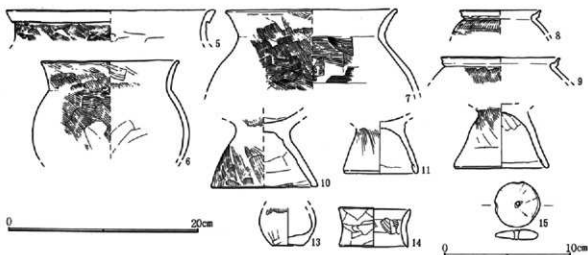
D-84号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	器台	7.6	10.4	8.2		灰白	埋土
2	高坏	11.2	9.7	8		黄	埋土
3	高坏手坏部	11.7		高さ2.8		灰白	埋土
4	二段口縁壺口縁	19.3		高さ7.4		灰白	埋土
5	壺	22		高さ3.5		黄	埋土
6	壺	14.6		高さ10.2	16.5	赤褐色	埋土
7	壺	18.2		高さ0.6	22	黄	埋土
8	S字口縁小型壺	8.6		高さ2.5		灰白	埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
9	S字口縁壺	12.4		高さ2.4		灰白	埋土
10	溝口縁分付台		11.4	高さ8		赤褐色	埋土
11	S字口縁壺台部		8	高さ6		灰白	埋土
12	S字口縁壺台部		10	高さ6.7		灰白	埋土
13	模造土器		3.2	高さ3.9		灰白	埋土
14	陶輪状土製品	外径7.5	中心内径3	高さ4		灰白	埋土
15	土製陶輪	径4-3.6	最大厚0.8			灰白	埋土



第448図 D-84号住居跡出土遺物 (1)



第449図 D-84号住居跡出土遺物(2)

## D-86号住居跡(第450図 P.L.102)

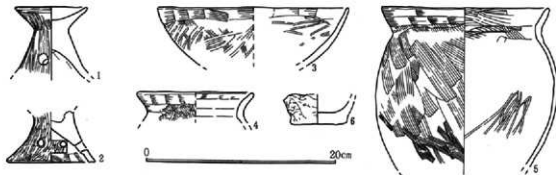
器台 B<sub>2</sub>類(1)。坏・脚部との貫通孔無く、脚部3円孔。(2)は小型で器台脚になろう。5円孔を穿つ。

高坏 (3)はA<sub>2</sub>類になろう。口縁部横撫で、体部縦磨きを施す。

甕 (5)は体部長形で口縁部形状からB<sub>2</sub>類に近い。内面部分的に縦磨き。

## D-86号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	7.6		現高7.5		灰白/磨土		4	甕	12.4		現高3		灰白/磨土	
2	器台脚部		9.4	現高5.5		灰白/灰面		5	甕	17.7		現高17		褐灰/灰面	
3	高坏坏部	20.2		現高6		灰輪/磨土		6	横造土器		5.9	現高3.2		灰白/磨土	



第450図 D-86号住居跡出土遺物

## D-135号住居跡(第451図 P.L.103)

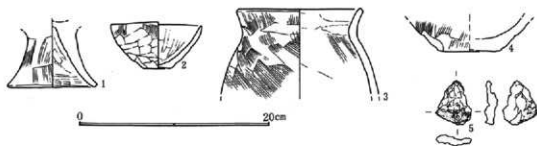
鉢 D類(2)は外面刷毛後縦削り、内面強い縦撫で調整。模造土器の可能性もある。

甕 (3)は口縁部の屈曲弱くB<sub>2</sub>類に近い。内面口縁屈曲部には削削りを施す。

## D-135号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏脚部		9.6	現高6.9		灰白/磨土		3	甕	13.4		現高9		褐灰/磨土	
2	鉢	9.6	2	4.9		灰白/磨土		4	甕		6.8			磨土	

第3章 検出された遺構と遺物



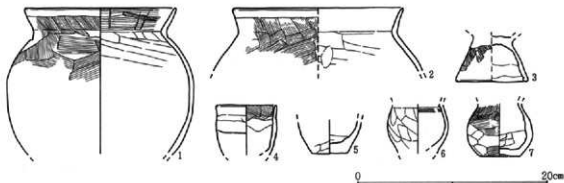
第451図 D-135号住居跡出土遺物

D-136号住居跡 (第452図)

D-136号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
1	鉢	36		現高15	20	灰白	腰土	5	横造土器			3.8	現高3.4		灰白	腰土
2	鉢	38		現高7		灰白	腰土	6	横造土器			現高5.1		黄	腰土	
3	S字口縁臺台		7.6	現高5.2		灰白	腰土	7	横造土器		4.2	現高5.6		灰白	腰土	
4	横造土器	6.4		現高5.3		灰白	腰土									

甕 B<sub>1</sub>類 (1・2)。(1)は口縁内面に粗目刷毛。(2)は粗目刷毛後横撫でを施す。(3)はD類台部。



第452図 D-136号住居跡出土遺物

D-139号住居跡 (第453図 P.L.103)

鉢 D<sub>1</sub>類 (1)は上端が強く内湾し口縁部を作る。口縁部横位刷毛、体部縦位刷毛目。

(2・3)は高坏脚部。(2)は3円孔、(3)は4円孔を穿つ。

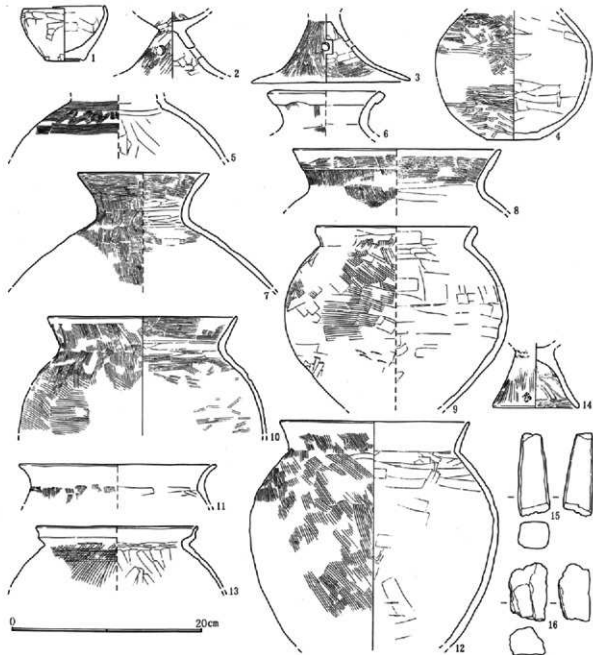
壺 (4)は外面刷毛後寛磨き、A類またはC<sub>1</sub>類と思われる。(5)は肩部に櫛目波状文と上下に横線文を配す。二段口縁壺にならう。所謂宮廷式土器。E<sub>2</sub>類 (6)。F<sub>2</sub>類 (7)は細目刷毛調整。

甕 (8~12)。(11)は口縁部ややB<sub>4</sub>類に似る。(12)はC<sub>1</sub>類の台付き甕か。D類 (13)は肩部に横位刷毛目が巡る。(14)はC類台部。

(15・16)は角状焼成土製品、用途不明。

D-139号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	鉢	8.6	4.2	5.8		灰白	床面	9	甕	17		現高19		灰白	床面
2	高坏脚			現高6.5		灰白	床面	10	甕	20		現高12		灰白	床面
3	高坏脚		17	現高7.7		灰白	床面	11	甕	20.8		現高4		灰白	床面
4	壺口部欠		5.5	現高13.5	16.5	灰白	床面	12	甕	20		現高34		赤褐色	床面
5	壺肩部			現高6		灰白	床面	13	S字口縁臺台	17		現高6.5		灰白	床面
6	甕	15.4		現高5		暗褐色	床面	14	卓口縁台付臺台		8.8	現高6.5		灰白	床面
7	甕	14		現高12		灰白	床面	15,16	角状土製品	長8.5・6	厚2.3,3.3			灰白	床面
8	甕	22		現高6.5		灰白	床面								



第453図 D-139号住居跡出土遺物

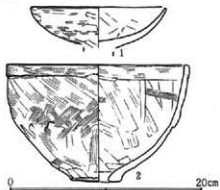
D-141号住居跡 (第454図 P.L.103)

高坏 A<sub>1</sub>類 (1)。内外面磨き

甗 A<sub>1</sub>類 (2)。口縁部は薄手の折り返し。単孔である。外面刷毛目、内面口縁横撫で、体部磨撫で。

D-141号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏	14.1		甗高4		灰白	床面
2	甗	19.1	5.2	12.5		灰白	床面



第454図 D-141号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

D-142号住居跡 (第455図 P.L.103)

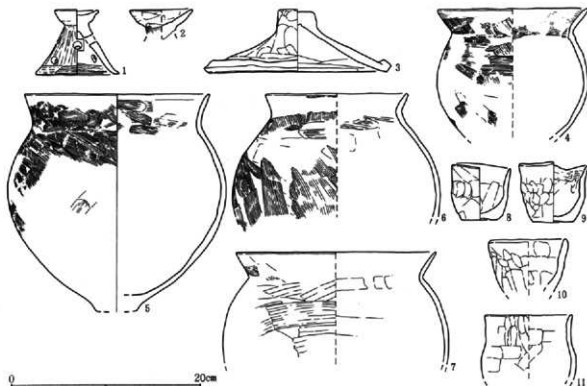
器台 B<sub>2</sub>類 (1・2)。(1)は脚部上下各4円孔を穿つ。

蓋 B<sub>3</sub>類 (3)。凸状摘みで口縁部は外側へ折り返され肥厚する。寛撫で調整。

甕 (4~7)。B<sub>1</sub>類 (5)は極細目刷毛。(4)は細目(7)は粗目の刷毛調整。

D-142号住

番号	器種	口径	底径	器高	刷毛地	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	刷毛地	色調	出土位置
1	器台	4.8	3.9	6.8	灰白	野黒穴内		7	甕	21		視高11.8	灰白	床面	
2	器台	6.8		視高3.1	橙	床面		8	横造土器	6.1	4	5.9	灰白	床面	
3	蓋	腹部4.1	19.6	6.3	灰白	野黒穴内		9	横造土器	7.4	4.3	6.4	灰白	野黒穴内	
4	甕	16		視高13.5	16	灰白	床面	10	横造土器	8.4		視高5.5	灰白	床面	
5	甕	19.6	4	22.8		灰白	床面	11	鉢	9.2		視高6.9	灰白	床面	
6	甕	15.2		視高12		灰白	床面								



第455図 D-142号住居跡出土遺物

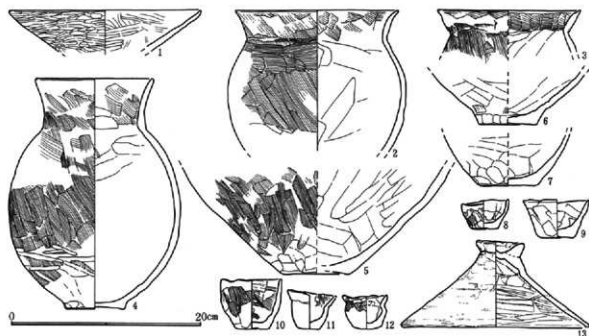
D-143号壺穴跡 (第456図 P.L.103)

(1)は高坏B<sub>2</sub>類になろうか。内外面寛撫き。

甕 (2~4)。(2)は口縁部ややコの字状でB<sub>4</sub>類か。B<sub>3</sub>類(4)は口縁部高く直立し、体部長形で樽式土器の系譜と思われる。(6・7)は刷毛後の寛撫でが顕著。

D-143号壺

番号	器種	口径	底径	器高	刷毛地	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	刷毛地	色調	出土位置
1	高坏坏部	25.1		視高4.3	灰白	床面		8	横造土器	5	2.9	3.1	灰白	床面	
2	甕	17.4		視高14.7	19	赤褐	床面	9	横造土器	7	3.7	4	灰白	床面	
3	甕		6.1	視高5.6	灰白	床面		10	横造土器	6.5	3.6	5.3	灰白	床面	
4	甕	12.2	6.4	24.1	16	橙	床面	11	横造土器	5.3	2.4	4.1	灰白	床面	
5	壺下半	7.3		視高11.1	赤褐	床面		12	横造土器	4.8	3.1	3.6	灰白	床面	
6	甕	15.1		視高5	赤褐	床面		13	甕	20	直径15	8	横式土	土内	
7	甕		5.7	視高5.5	横式	床面									



第456図 D-143号壑穴跡出土遺物

## D-146号住居跡 (第457図 P L.103)

高坏 (2) はC類またはD類にならうか。内外面施磨き、脚部は幅広く細目刷毛を施す。3円孔を穿つ。

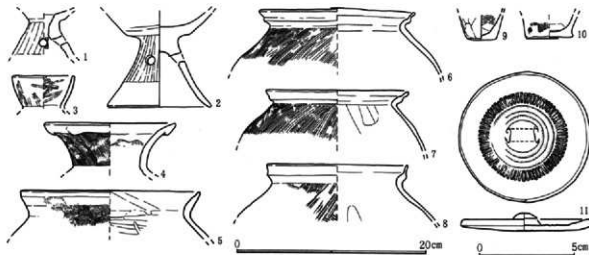
壺 (3) はA:類か。施磨きを施し胎土は密で精製な作り。E:類 (4) は頸部細目刷毛。

甕 D類 (6~8)。(8) は口縁上部直立、粗目刷毛。

(11) は微製小型重圈鏡。同心円に3重圈が巡る。

## D-146号住

番号	器種	口径	底径	器高	刷毛施	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	刷毛施	色調	出土位置
1	壺台			規高5		灰白	埋土	7	S字口縁甕	15		規高7		灰白	埋土
2	高坏脚		11	規高3.9		赤陶	埋土	8	S字口縁甕	15		規高5.9		灰白	埋土
3	壺	6.6		規高2.5		灰白	埋土	9	横造土器		3	規高2.7		灰白	埋土
4	壺口頸	14		規高5.6		灰白	埋土	10	横造土器		5	規高2.4		灰白	埋土
5	甕	19		規高5		灰白	埋土	11	銅鏡(重圈鏡)	径6.9	厚0.4	厚0.3		素鏡	埋土
6	S字口縁甕	16.6		規高7		灰白	埋土								



第457図 D-146号住居跡出土遺物

D-148号住居跡 (第458図 P.L.104)

(1) は器台脚か。刷毛目調整、坏部とは貫通孔無く脚無孔。

鉢 E<sub>3</sub>類 (2・3)。口縁部短く外屈、内外面寛撫で。

壺 (4・5) はD<sub>5</sub>類になろうか。(4) は口縁外面横撫で、内面寛磨き。

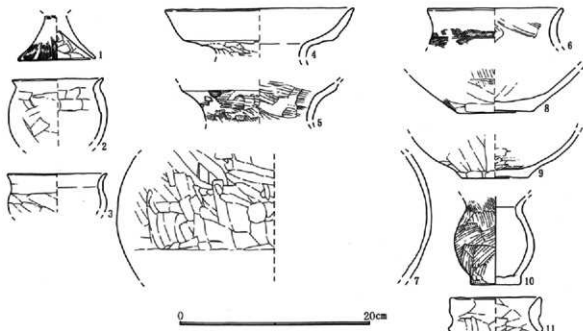
甕 (6~9)。(6) はB<sub>1</sub>類か。(7~9) は寛削り調整が顕著。

(11) は腕輪状焼成土製品。寛撫で調整。(10) は壺形模造品。

D-148号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色澤	出土位置
1	高F <sub>1</sub> 器台脚		8.3	履高5		灰白	埋土
2	小型鉢	9.6		履高7.1		灰白	埋土
3	小型鉢	10.6		履高4.1		灰白	埋土
4	二段口縁壺	20		履高5.3		灰白	埋土
5	二段口縁壺			履高4		灰白	埋土
6	甕	14.4		履高3.9		赤褐	埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色澤	出土位置
7	器鉢部			履高15	33	灰白	埋土
8	壺底部		8			灰白	埋土
9	壺底部		7			赤褐	埋土
10	模造土器		5	履高9.4		灰白	埋土
11	腕輪状土製品	外径10	内径7	3.8		灰白	埋土



第458図 D-148号住居跡出土遺物

D-160号住居跡 (第459図 P.L.104)

器台 A<sub>1</sub>類 (1) は丁寧な寛磨きを施す。脚部に初圧痕、4円孔を穿つ。

高坏 A<sub>2</sub>類 (2) は内外面丁寧な寛磨きで赤彩を施す。

鉢 E<sub>1</sub>類 (3)。小型で内外面刷毛後口縁は横撫で。内面口縁横撫で、体部寛磨き。

蓋 B<sub>3</sub>類 (4)。凹状摘み。口縁端部外側に折り返す。細目刷毛調整。

壺 (5) はA類口縁部。寛撫で後外面部分的に寛磨き。

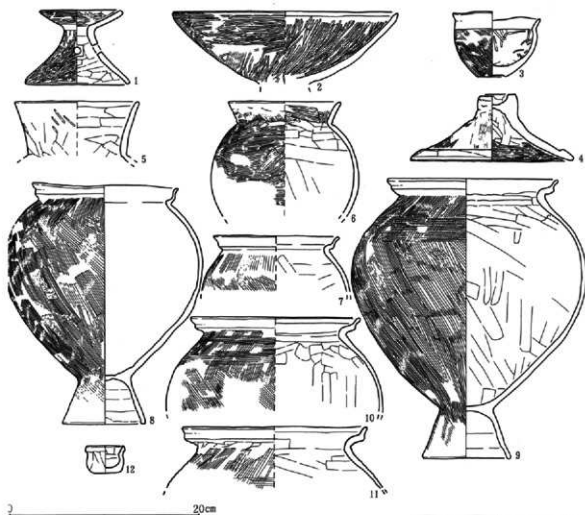
甕 B<sub>1</sub>類 (6)。体部外面細目刷毛。D類 (7~11)。(9~11) は胴部に横位刷毛目で(10)は二段に分離。(9)の台端部は折り返しが無く異例。

D-160号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色澤	出土位置
1	器台	8.6	10.6	7.9		赤褐	埋土
2	高坏坏部	24		履高5.5		灰白	埋土
3	鉢	9.2	3.5	6.9		灰白	埋土
4	蓋	17	胴部3.7	7.1		灰白	埋土
5	壺	13.2				灰白	埋土
6	甕	12		履高12	15.5	灰白	埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色澤	出土位置
7	5字口縁壺	13.4		履高5.5	15.5	灰白	埋土
8	5字口縁壺付蓋	15.5	8.8	25.4		灰白	埋土
9	5字口縁壺付蓋	18.1	9.3	29.8	25	灰白	埋土
10	5字口縁壺	18		履高10	32.8	灰白	埋土
11	5字口縁壺	19.6		履高6.5		灰白	埋土
12	模造土器	4	2.4	2.9		灰白	埋土





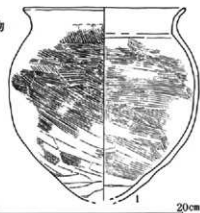
第459図 D-160号住居跡出土遺物

D-186号住居跡 (第460図)

甕 B<sub>1</sub>類 (1)。口縁部コの字に屈し、体部やや長形で底部に向かい窄まる。丸底か。口縁部横撫で。

D-186号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	甕	17		現高30.5	20	表面	底面



第460図 D-186号住居跡出土遺物

D-213号住居跡 (第461図 P.L.104)

埴 A<sub>1</sub>類 (1)。口縁の広がりやや弱まり、体部に深をもつ。内外面刷毛後挽磨き。

器台 A<sub>1</sub>類 (2)。外面寛撫で後挽磨き。坏部矮小。

高坏 B<sub>2</sub>類 (3)。内外面寛磨き。

鉢 E<sub>2</sub>類 (4)。口縁部横撫で、体部細目刷毛。E<sub>2</sub>類 (5)。口縁部直立し内外面寛磨き。

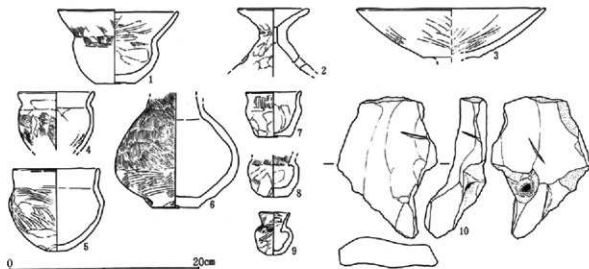
甕 (6)は口縁部欠くがA<sub>1</sub>類にならうか。体部刷毛目調整、底部木葉痕。

(7~9)は模造土器。(10)は不定形砥石。

第3章 検出された遺構と遺物

D-213号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	甕	12.8	4	7.8		黒灰	埋土	6	甕	5		観高11.7		灰白	埋土
2	甕台	7.6		7		灰白	床面	7	横造土器	6	3.4	4.7		灰白	P1埋土
3	高坏坏部	20		観高3.2		灰白	床面	8	横造土器		3	観高4.4		赤黒	床面
4	鉢	8		観高0.2		灰白	埋土	9	横造土器	3.3	2	4.5		灰白	床面
5	鉢	9.2	2	8.7		黒	埋土	10	磁石	長15	幅10	厚3			埋土



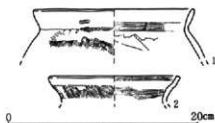
第461図 D-213号住居跡出土遺物

D-216号住居跡 (第462図)

甕 (2) は受け口状でB:類になろうか。

D-216号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	甕	17		観高5.2		灰黒	埋土
2	甕?	16		観高2.9		黒	埋土



第462図 D-216号住居跡出土遺物

D-217号住居跡 (第463図)

(1) は甕D:類。口縁部細目刷毛。(2) は甕B:類か。(3) は甕C類台部。

D-217号住

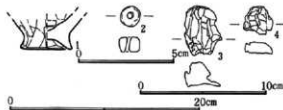
番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	二重口鉢	18		観高3.8		灰黒	埋土	3	二重口鉢台部分	6.6		観高4.9		灰黒	床面
2	甕	18		観高4		灰白	埋土								



第463図 D-217号住居跡出土遺物

D-219号住居跡 (第464図)

(1) はF<sub>2</sub>類鉢の台部か。(2) は滑石製白玉。  
(3・4) は不整形鉄塊。



第464図 D-219号住居跡出土遺物

D-219号住

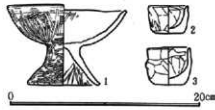
番号	器 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	付冑の鉢		5.6	腹高3.8		灰褐	床面
2	滑石製白玉	径1	厚0.8	孔径0.15			埋土
3,4	鉄塊						埋土

D-222号住居跡 (第465図 P L. 105)

高坏 A<sub>2</sub>類 (1) は内外面寛磨き、脚部孔無し。

D-222号住

番号	器 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏	12.6	7.5	8.5		橙	床面
2	横流土器	4.3	3	2.9		灰白	床面
3	横流土器	4.5	3	3.9		灰白	中央穴内



第465図 D-222号住居跡出土遺物

E>93号住居跡 (第466図 P L. 105)

高坏 B<sub>2</sub>類 (1・2)。内外面寛磨き。(2) は脚部3円孔を穿つ。

鉢 G類 (4)。体部扁平球形で広口である。体部細目刷毛、口縁部横撫で。

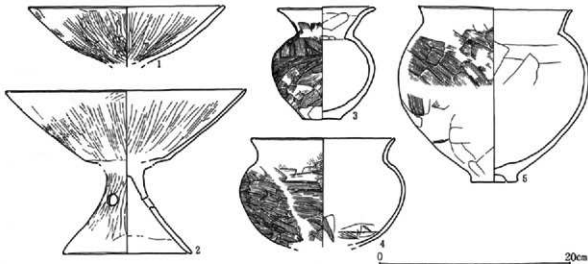
壺 C<sub>2</sub>類 (3)。口縁部は大きく開き、体部径に拮抗しC<sub>3</sub>類に通ずるか。外面細目刷毛、口縁横撫で。

甕 (5) はB<sub>1</sub>類に低い台が付く。C類製作途上での改変であろうか。体部細目刷毛、下半横撫で。

E<sub>3</sub>-93号住

番号	器 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏坏状	20.7		腹高6		橙	埋土
2	高坏	25.4	13.6	17.1		橙	埋土
3	甕	10.4	4	11.9	11	灰白	埋土

番号	器 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
4	鉢	15.4		腹高11		黄	埋土
5	甕	16.4	5	18.1	20	黄灰	埋土



第466図 E>93号住居跡出土遺物

E>100号住居跡 (第467図 P L. 105)

瓶 A<sub>2</sub>類 (2)。底部窄まり小径単孔。体部開き上半は直立。口唇部上端面取りされ平ら。外面細目、内面粗目刷毛。

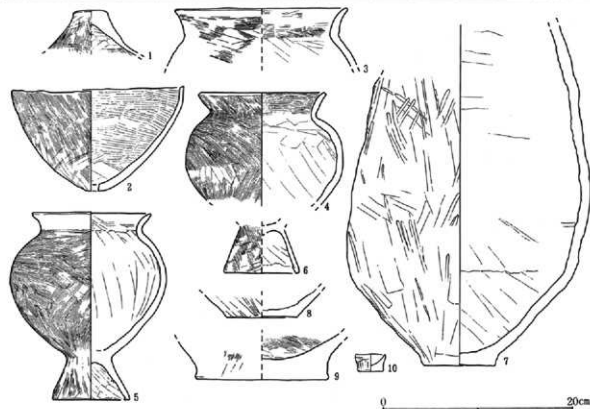
甕 (3~7)。C<sub>2</sub>類 (5) は体部細目刷毛、口縁部横撫で、内面寛撫で。(4) も同類か。(6) はD類

台部。(7)は長形の体部でかなり異形。体部寛撫で後粗く寛磨きを施すが作りは雑。

(1)はB類の蓋。(8・9)は木葉痕底部で(9)は大型蓋か。

E<sub>3</sub>-100号住

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	蓋		3.5	現高4.7		灰白	床面	6	5字口縁台付蓋			8	現高3.5		層
2	鉢	18.3		10.7	孔径1.6	赤	床面	7	葉口縁部欠			7.5	現高35.8		灰白
3	葉口縁部	16		現高6		灰白	床面	8	葉底部			7.4			灰白
4	葉	13		現高11.8		赤	床面	9	大型蓋底部			14			灰白
5	5字口縁台付蓋	12.6	8	19.8	15.5	赤	床面	10	板造土器	3	2.7	1.8			灰白



第467図 E<sub>3</sub>-100号住居跡出土遺物

E<sub>3</sub>-104号住居跡(第468・469図 P L. 106)

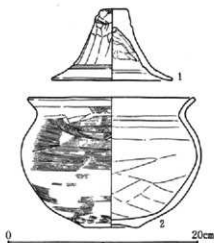
(1)は丈高く高坏脚部に似るが頂部は完結し蓋B類か。裾部に稜を作る。寛撫で調整。

鉢 G類(2)。体部扁平球形で、広口。体部細刷毛目、口縁横撫で。

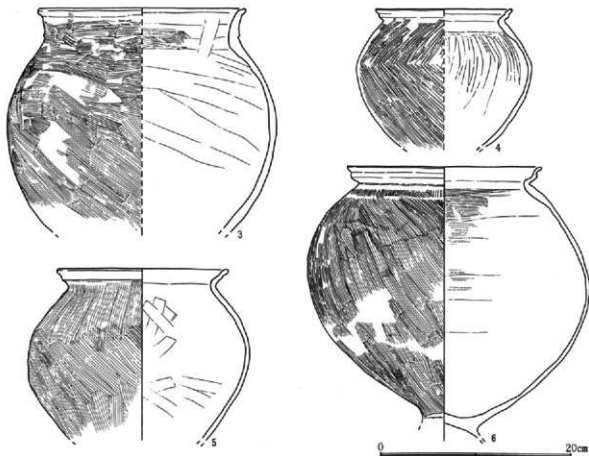
変(3)は口縁部小さくコの字状でB<sub>1</sub>類か。D類(4~6)。(4)は粗目刷毛、内面撫で上げ。(5)は口縁S字形が緩い。粗目刷毛、内面寛撫で。(6)は内面横位刷毛及び体部横撫で。

E<sub>3</sub>-104号住

番号	部 種	口径	底径	器高	胴径	胴径	色調	出土位置
1	蓋	3	12.8	7.5			灰白	床面
2	鉢	17.7	5.8	12.7	19	赤褐色	赤	床面
3	変	22		現高13.6		28	灰白	床面
4	5字口縁台付蓋	14.6		現高14.5		18.5	灰白	床面
5	5字口縁台付蓋	14.9		現高14.3		19	灰白	床面
6	5字口縁台付蓋	20.6		現高28.6		29.5	赤褐色	床面



第468図 E<sub>3</sub>-104号住居跡出土遺物(1)

第469図 E<sub>2</sub>-104号住居跡出土遺物(2)E<sub>2</sub>-131号住居跡(第470・471図 P L.106)

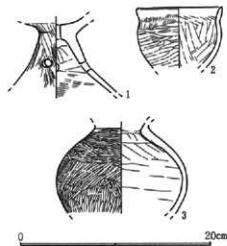
鉢 E<sub>2</sub>類(2)は外面刷毛後艶磨き、内面口縁横撫で、体部艶撫で。

壺(3)はA2類またはC<sub>2</sub>類にならうか。外面丁寧な艶磨き、赤彩を施す。F<sub>2</sub>類(4)は口縁部刷毛目、体部刷毛後艶磨き、やや下膨れの球形でベタ平底。

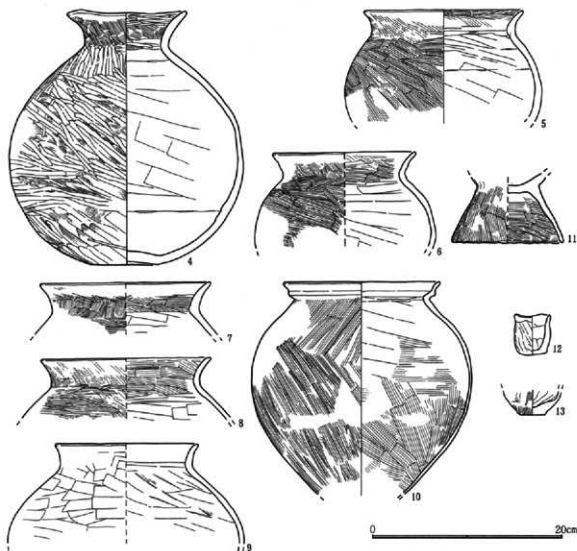
甕(5~11)。B<sub>2</sub>類またはC類。(5・8)は口唇部上端面取り状に。(9)は体部艶撫で調整。D類(10)。内外面刷毛目調整。(11)はC類台部。

E<sub>2</sub>-131号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台脚部分			規高5.5		灰白	床面
2	鉢	8.8		規高6.5		灰白	甕土
3	壺			規高9.5	13.5	灰白	P1内
4	壺	12.8	7	26.6	24.5	灰白	P1内
5	甕	16.6		規高11.7		灰白	床面
6	甕	15		規高10		灰白	甕土
7	甕	18		規高9.5		灰白	床面
8	甕	18		規高6		灰白	P1内
9	甕	15		規高10.5	25	灰白	P1内
10	SFC器台付甕	16.4		規高22.5	23.2	灰白	P1内
11	単口縁甕台部		11.6	規高7		灰白	P1内
12	横造土器	3.8	3	4.2		灰白	P1内
13	横造土器		2.8	規高2.5			甕土

第470図 E<sub>2</sub>-131号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第471図 E-131号住居跡出土遺物(2)

E-132号住居跡 (第472図 P.L. 106)

- (1) は鉢D類か。作りやや粗雑で模造土器の可能性ある。
- (2) は甕B<sub>1</sub>類に通ずる。内外面粗目刷毛、口縁部内面から外面体部肩に赤彩を施す。
- (3) は甕C類台部

E-132号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	鉢	8.8	3.7	4.8		灰白/黒土	
2	甕	15.6		現高8		赤陶(赤内)	
番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
3	台付甕台部		13.4	現高8		灰陶/黒土	



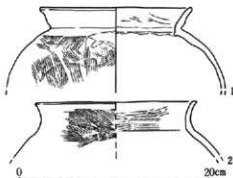
第472図 E-132号住居跡出土遺物

## E-176号住居跡 (第473図)

甕 (2) は口縁部形口コの字状に近く、B 4 類になるか。

E<sub>3</sub>-176号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	甕	16		現高6.5	23.4	灰白	床面
2	甕	17		現高6		褐灰	硬土

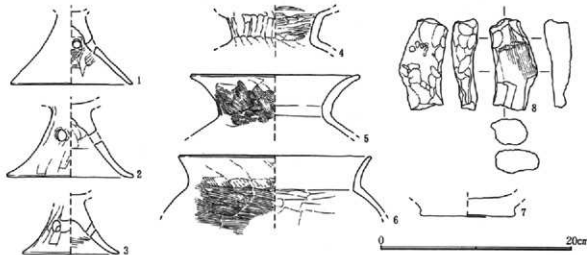
第473図 E<sub>3</sub>-176号住居跡出土遺物

## E-185号住居跡 (第474図)

(1~3) は高坏脚部。(1) は4円孔、(2・3) は3円孔を穿つ。(4) は壺C類の二段口縁頸部。(5) は壺G<sub>2</sub>類。内面頸部施削り、外面刷毛目。(7) は壺底部で木炭痕がある。(8) は不明焼成土製品、指頭痕で一部に刷毛目。

E<sub>3</sub>-185号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏脚部		13.8	現高7.7		灰白	床面
2	高坏脚部		13.4	現高8.1		灰白	床面
3	高坏脚部		10.2	現高6.3		赤褐	床面
4	壺頸			現高6		灰白	床面
5	壺	18		現高9.5		灰褐	床面
6	甕	20.4		現高9.3		灰白	床面
7	壺底部			10		灰白	床面
8	土製品	現長6.5	厚2.8-1		幅4	灰白	床面

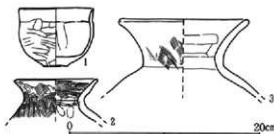
第474図 E<sub>3</sub>-185号住居跡出土遺物

## F-46号住居跡 (第475・476図 P L. 107)

鉢 E<sub>2</sub>類 (1)。直立気味の口縁で、小径底部。外面口縁部横撫で、体部施撫で。

壺 F<sub>2</sub>類 (2~4)。(4) は体部顕著な下彫れ。口頸部刷毛目、体部施削り。

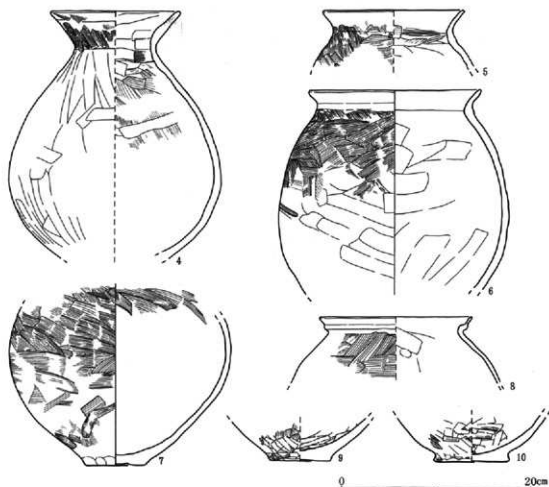
甕 (5~7)。体部細目刷毛目。(5・6) はやや長形な体部。(7) はB<sub>1</sub>類。D類 (8) は粗目刷毛目で肩部に横位刷毛目。



第475図 F-46号住居跡出土遺物(1)

## F-46号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	鉢	8	2.5	6.2		灰白	床面
2	壺	8.9		現高4.2		灰白	床面
3	壺	12.7		現高7.9		灰白	床面
4	壺	12.9		現高20	22.5	灰白	床面
5	甕	15		現高6.2		灰白	床面
6	甕	18.2		現高21.4	24.4	灰白	床面
7	甕		6.4	現高18.8	23.5	灰白	床面
8	S字口縁壺	16		現高6.9		灰白	床面
9	甕		6.5			灰白	床面
10	甕		8			灰白	床面



第476図 F-46号住居跡出土遺物(2)

F-49号住居跡 (第477図 P.L.107)

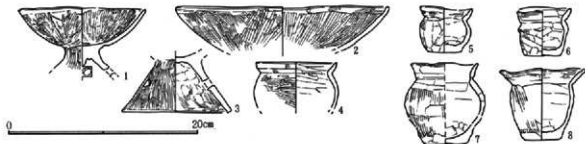
高坏 A<sub>1</sub>類 (1)、A<sub>2</sub>類 (2)。内外面丁寧な焼磨き。(1)は脚に4円孔、(3)は3円孔を穿つ。

鉢 E<sub>3</sub>類 (4)。口縁部短く外屈し端部細まる。外面焼磨き、黒色処理を施す。

(5~8)は模造土器で大小対形態か。

F-49号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置
1	高坏	13.4		規高7.3		赤褐	床面	5	模造土器	5.5	3.6	4.9		灰白	床面
2	高坏幹部	22.5		規高4.5		赤褐	床面	6	模造土器	5.7	3.9	5.1		灰白	床面
3	高坏幹部?		11.5	規高7		赤褐	床面	7	模造土器	7.1	4.4	8.5		灰白	床面
4	鉢	8.6		規高5		灰白	床面	8	模造土器	9.1	4	7.6		灰白	床面



第477図 F-49号住居跡出土遺物



## F-54号住居跡 (第478図 P L. 107)

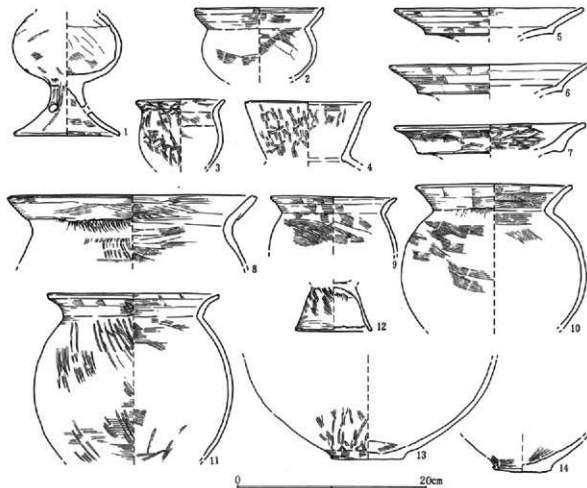
結合土器 B<sub>2</sub>類 (1) はA<sub>2</sub>類との結合と思われる。体・脚部荒磨きを施すが胎土粗雑。脚3円孔を穿つ。  
鉢 A<sub>2</sub>類 (2)。口縁部くの字状に折れ、内湾して開き、体部半球形。施撫で調整。E<sub>2</sub>類 (3) は外面  
荒磨き。

壺 A<sub>2</sub>類 (4)。D<sub>2</sub>類 (5~7)。(13・14) は壺下半部。

甕 A<sub>2</sub>類 (8)。幅広な折り返し口縁帯、外面粗目刷毛、内面粗目刷毛後撫で調整。(10・11) はB<sub>1</sub>類か、  
体部整った球形。(10) は外面細目刷毛、(11) は粗目(掻き目)刷毛目。(12) はD類台部。

## F-54号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	結合土器		11.2		11.5	灰白	床面	8	甕	26.4		現高7.5		灰白	床面
2	鉢	13.6		現高7.5	12.1	灰白	床面	9	壺	13.4		現高6		赤褐色	床面
3	鉢	9.4		現高7.5	8.8	灰白	床面	10	壺	16.5		現高15	19.5	灰白	床面
4	壺	13.4		現高7		赤褐色	床面	11	壺	18.1		現高17.5	21	灰白	床面
5	二段口縁壺	20				灰白	床面	12	SFC融合台甕白		8.2	現高5.2		赤褐色	床面
6	二段口縁壺	21				灰白	床面	13	壺		7.7	現高11	26.5+8	赤褐色	床面
7	二段口縁壺	20.2				灰白	床面	14	壺底部		6			灰白	床面



第478図 F-54号住居跡出土遺物

## F-56号住居跡 (第479図 P L. 107)

器台 (1) は坏部器内厚く箱形を呈す。当遺跡では唯一例である。

第3章 検出された遺構と遺物

高坏 (2) はB<sub>2</sub>類と思われる。坏部磨き、脚刷毛後篋削りを施し4円孔、(3) は2孔1対の4孔を穿つ。

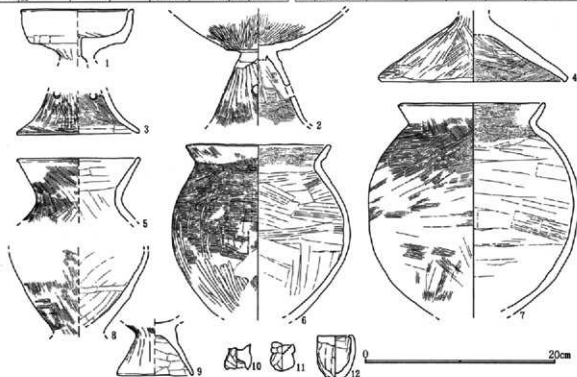
蓋 B<sub>2</sub>類 (4) は摘み凹形状、体部篋削り。内面細め刷毛後篋撫で。

壺 F<sub>2</sub>類 (5) は細目刷毛。

甕 (6・7) はB類か。体部やや長形、細目刷毛で(6) は下半及び内面に強い篋撫で。(8) はC類か。(9) はC類台部。

F-56号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径色	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径色	色調	出土位置
1	器台坏部	12		現高5.2	赤陶	赤陶		7	甕	15.4		現高22.3	22	灰白	灰陶
2	高坏坏部			現高11.5	赤陶	赤陶		8	台付蓋				15	灰白	灰陶
3	高坏胴部		13		灰白	灰陶		9	器台付蓋台					灰白	灰陶
4	蓋	19.4		現高7	灰白	灰陶		10	横造土部		2.5	現高2.6		灰白	灰陶
5	壺	12.8		現高6.5	灰白	灰陶		11	横造土部	2.3		3		灰白	灰陶
6	甕	15.3		現高18.5	18.7	灰白	灰陶	12	横造土部	4		4.6		灰白	灰陶



第479図 F-56号住居跡出土遺物

F-57号竪穴跡 (第480図)

甕 (1) は体部内外面篋撫で。

F-57号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径色	色調	出土位置
1	甕	15.3		現高5.5	赤陶	赤陶	



第480図 F-57号竪穴跡出土遺物

F-58号住居跡 (第481図 P.L. 107)

器台 A<sub>2</sub>類 (1・2)。内外面磨き。(1) は脚部4円孔、(2) は3円孔を穿つ。(3) はA<sub>2</sub>類になろうか、無孔。

高坏 A<sub>2</sub>類 (4)。内外面磨き。(5) は上半不明だがC類になろう。脚4円孔を穿つ。

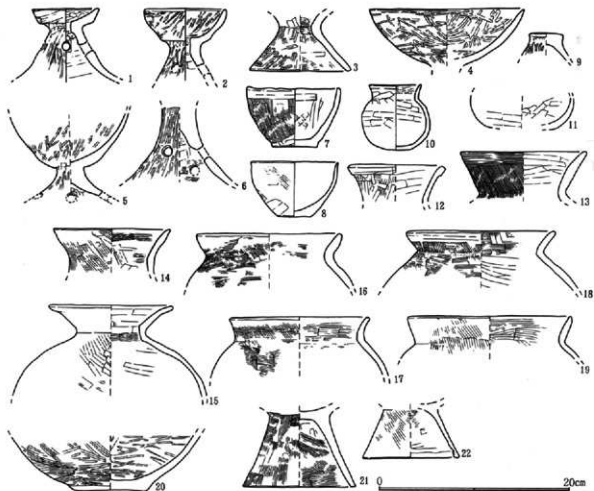
壺 C<sub>1</sub>類 (10) は小型でベタ平底、外面篋撫で。(12) はE類か。F<sub>2</sub>類 (13・14)。H<sub>2</sub>類 (15) は内面類基部篋削り、体部外面磨き。

甕 (16-19)。B<sub>1</sub>類・C<sub>1</sub>類の判別が困難。(21) はC類・(22) はD類台部。

(9)は蓋摘み部。(20)は壺底部。

F-58号住

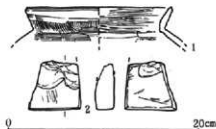
番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	器台	7.1		器高7.5		灰白	床面	12	器	10.4				灰白	埋土
2	器台	8.8		器高7.5		赤褐色	埋土	13	器	13.4		器高5		灰白	埋土
3	器台		10.8	器高6		赤褐色	床面	14	器					灰白	床面
4	高坏坏部	22		器高6		黄灰	貯藏穴	15	器	13.2		器高9.5	30.5+9	灰白	貯藏穴
5	高坏			器高9.5		赤褐色	床面	16	器	15		器高6		灰白	床面
6	高坏胴部			器高8		灰白	埋土	17	器	14.9		器高6		灰白	床面
7	钵	9.9	4.9	6.1		灰白	床面	18	器	15.8		器高6		黄灰	埋土
8	钵	9.3	3.2	5.8		灰白	床面	19	器	17.3				灰白	埋土
9	壶蓋部					赤褐色	埋土	20	器		7.8	器高6		黄灰	床面
10	壺	5.5		6.8	7.2	灰白	埋土	21	平口罐台付器台			器高8.5		灰白	埋土
11	壺			器高6		灰白	床面	22	平口罐台付器台		10.2	器高5.5		黄灰	埋土



第481图 F-58号住居跡出土遺物

F-59号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	壺	15.4		器高4		赤褐色	貯藏穴
2	磁石欠皿	長5.5	幅5	厚2		灰褐色	埋土



第482图 F-59号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

F-61号住居跡(第483図)

(1)は蓋A<sub>1</sub>類。体部の端近くに孔を穿つ。腕撫で調整。



第483図 F-61号住居跡出土遺物

F-61号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	蓋		9.2		底高3	灰黒	貯蔵穴土層
2	壺		10.9		底高6	10.9	腐葉 黒土

F-64号住居跡(第484図 P.L.108)

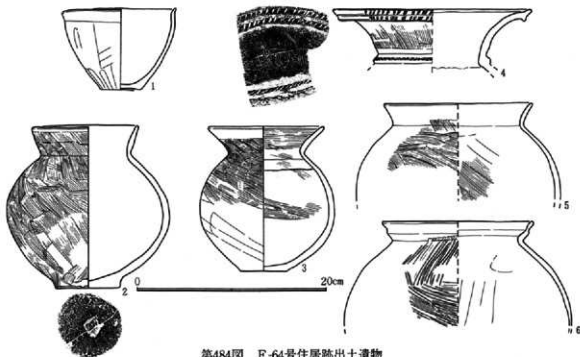
鉢 E<sub>4</sub>類(1)は口縁部小さく外傾、口縁横撫で、体部腕撫で腰部寛削り。内面の器面荒れ顕著。

壺 C<sub>3</sub>類(2)は口縁部直線的に延びる。体部球形、底部小さな窪み底、刷毛目調整。C<sub>6</sub>類(3)は口縁部大きく、くの字状に開きベタ平底。体部細目刷毛、下半寛削り。G類(4)は口縁部外反して開く大口。口唇部を上下に掴みだし幅状な縁を作る。口縁帯に2段の刺突文を施す。頸基部に凸帯を巡らせ刺突を加える。胎土は粗雑。

壺(5)はB<sub>1</sub>類かC類。細目刷毛。(6)はD類で刷毛目粗い。

F-64号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	鉢		12.1	4.4	8.5	赤陶 体面	
2	壺		11.3	6.8	17.2	灰白 野産穴	
3	壺		12.2	5	15.2	灰白 体面	
4	壺			21			
5	壺			15.8		底高10.2	21.5 灰白 体面
6	S字口縁壺			16		底高11	24 灰白 体面



第484図 F-64号住居跡出土遺物

F-65号住居跡(第485・486図 P.L.108)

器台 A<sub>1</sub>類(1)。A<sub>2</sub>類(2)は脚部寛磨き、3円孔を穿つ。

高坏 A<sub>1</sub>類(3・4)。(4)は坏内外面寛磨き、脚外面刷毛後寛磨き、内面寛磨き、3円孔を穿つ。B<sub>1</sub>類(5~7)。内外面寛磨き。(7)は脚3円孔を穿つ。B<sub>2</sub>類(8)は内外面寛磨き。

鉢 E<sub>2</sub>類(10・11)。(10)は外面寛撫で。(11)は細目刷毛。

壺(12)はC<sub>4</sub>類になろう。内外面寛磨き。(13)はD<sub>1</sub>類、(14)はD<sub>2</sub>類か。E<sub>1</sub>類(15)は幅状な折り返し口縁。体部側にS字状結節で2段に区切る縄文帯に、3点組単位の円形浮文を貼る。口唇・頸基部に

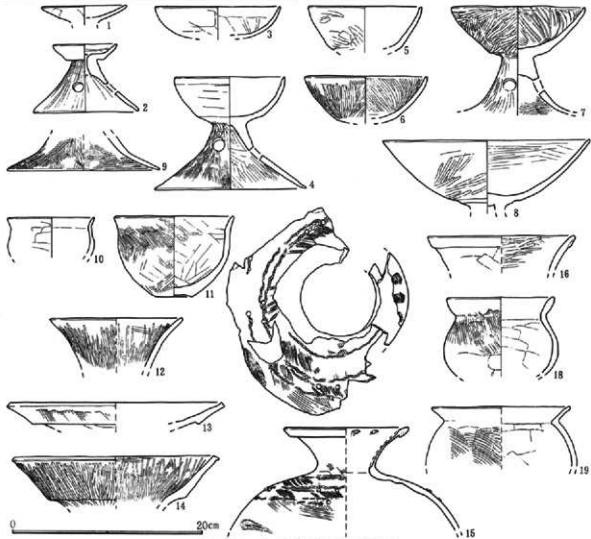
円形赤彩文を点する。E<sub>2</sub>類 (16) は外面刷毛、内面寛磨き。(17) は体部形状よりD<sub>2</sub>類か。体部外面刷毛後寛磨き。

甕 (18~24) はB<sub>1</sub>類になろうか。(25) はB<sub>2</sub>類。口唇部上端を掴み出す。体部外面寛削り、内面寛撫で。C<sub>1</sub>類 (26) は体部外面細目、(27) は粗目刷毛。(29~30) はC<sub>2</sub>類、(31) はD<sub>2</sub>類の台部。

(32~33) は大型の壺底部、寛撫でご寛磨きを施す。

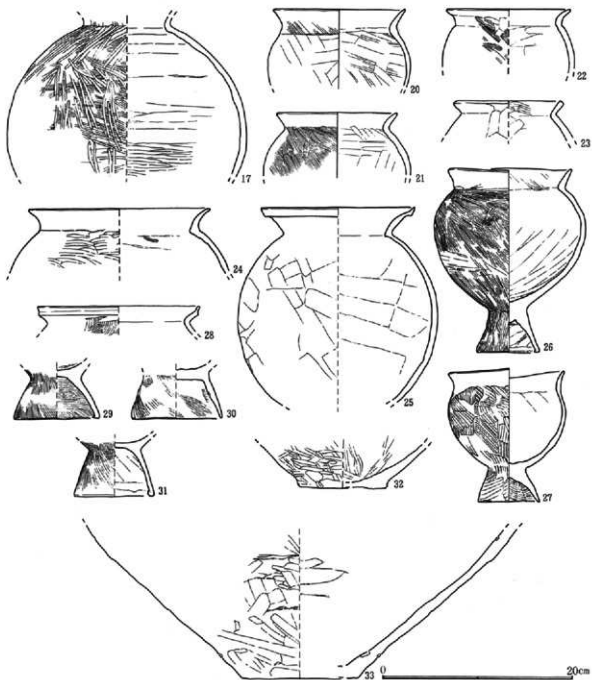
## F-65号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	器台	9				赤陶	埋土	18	甕	11.3		現高8.3	12	灰白	P1上面
2	器台	6.7	11	7.2		灰陶	埋土	19	甕	14.6		現高6.1	15.7	暗青	埋土
3	高坏坏部	13.3		現高3.3		灰白	埋土	20	甕	13.8		現高5		灰白	砂込
4	高坏	11.6	16	12		灰陶	北東野原土	21	甕	12.6		現高6.5	15.3	灰白	P1上面
5	高坏坏部	12		現高4.6		灰白	埋土	22	甕	13.2		現高6.7	14	暗青	P1上面
6	高坏坏部	12.8		現高5		灰白	北東野原土内	23	甕	11.7		現高6.7	23+8	灰陶	埋土
7	高坏	14		現高11.5		灰白	埋土	24	甕	19.2		現高20.6	21	灰陶	P1上面
8	高坏坏部	21.8		現高7.5		灰白	埋土	25	甕	16.3		現高10.6	19.5	灰白	P1上面
9	高坏坏部		16			灰白	埋土	26	平口縁台付甕	13	6.6	19.5	16	灰陶	南東穴内
10	鉢	9.2		現高4.1	9.2	灰白	南東穴内	27	平口縁台付甕	12.2	6.6	14.1	12.4	灰白	P1上面
11	鉢	12.4	4	8.5	12	灰白	埋土	28	S字口縁台付甕	17.2				埋土	埋土
12	波口罎部	13.8		現高5		灰白	埋土	29	平口縁台付甕台		9	現高5.9		赤陶	埋土
13	二波口縁甕	23		現高5		灰白	埋土	30	平口縁台付甕台		9.7	現高5.9		赤陶	埋土
14	二波口縁甕	21		現高5		灰白	埋土	31	S字口縁台付甕台		8.4	現高6.2		赤陶	埋土
15	甕	13		現高10.7	24+8	灰白	埋土	32	壺底部		9.6			灰白	北東野原土内
16	甕	15.5				灰白	埋土	33	壺		12.4	現高15.7		暗青	砂込
17	甕			現高17		白陶	北東野原土内								



第485図 F-65号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第486図 F-65号住居跡出土遺物(2)

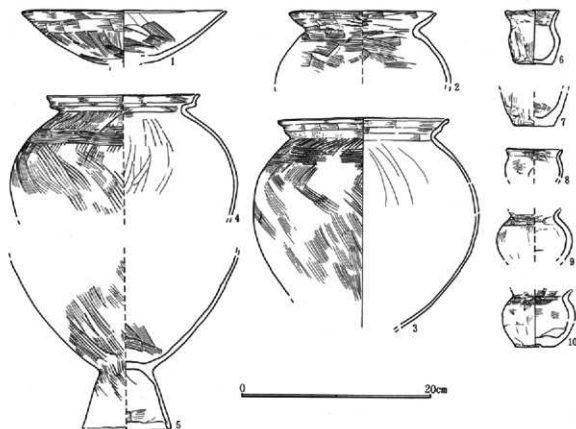
F-68号住居跡 (第487図 P L. 108)

高坏 (1) はA<sub>2</sub>類か。体部内外面極細目刷毛、腰部施削り。

甕 D類 (3~5)。(3・4)は肩部に横位刷毛目。(3)は口縁内面S字形状は緩く、(4)は直角に近く屈する。

F-68号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
1	高坏坏部	21.7		現高5.5		赤褐色	床面	6	横造土器	5.7	4.1	5.8		灰白	床面	
2	甕	15.6		現高7.5	18.5	灰白	床面	7	横造土器			4.2		現高4	灰白	床面
3	S字口縁甕	18.1		現高22	24	赤褐色	床面	8	横造土器	6				現高3	灰白	彫形
4	S字口縁台付甕	16.2		18.5	34	灰白	床面	9	横造土器			現高5.5		8	灰白	復原層彫形内
5	S字口縁台付甕		9.4			灰白	床面	10	横造土器			4.3		現高6	灰白	床面



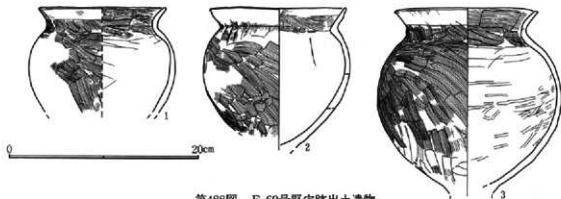
第487図 F-68号住居跡出土遺物

## F-69号壑穴跡 (第488図 P.L.109)

壑 (1) はB類か。細目刷毛調整。(2・3) はC類、細目刷毛調整。

## F-69号壑

番号	壑 種	口径	底径	壑高	胴径他	色調	出土位置	番号	壑 種	口径	底径	壑高	胴径他	色調	出土位置
1	壑	13.6		壑高11	15.5	灰白	床面	3	壑口縁台付壑	15		壑高19.5	19.5	灰白	床面
2	壑口縁台付壑	14.4		壑高15	15.5	灰白	床面								



第488図 F-69号壑穴跡出土遺物

## F-73号住居跡 (第489図 P.L.109)

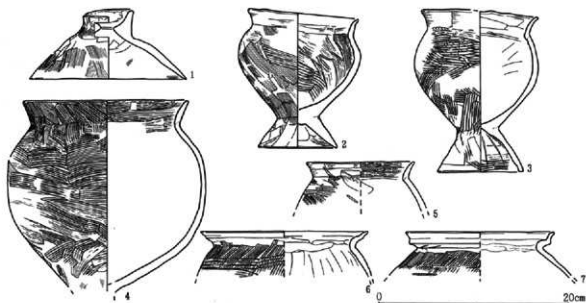
蓋 A類 (1) は凹状の擠みに貫通孔をもつ。体部刷毛目調整。

壑 C類 (2~5)。体部粗目刷毛調整。(2) は肩・腰部に細目刷毛を施す。D類 (6・7) は粗目刷毛で肩部に横位刷毛目。(6) は口縁内面のS字形状が緩く (7) は直角に近く屈する。

第3章 検出された遺構と遺物

F-73号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	甕	16	5.3	7.4		灰白	床面	5	鉢	11.4		現高9.5		焼灰	床面
2	單口鉢台付甕	11.8	8.4	13.5	13	灰白	床面	6	5字口鉢	17.6		現高5		焼灰	床面
3	單口鉢台付甕	12.4	9.1	17.2	13	灰白	床面	7	5字口鉢	15.8				焼灰	床面
4	單口鉢台付甕	17.6		現高20.2	21	灰白	床面								



第489図 F-73号住居跡出土遺物

F-74号住居跡 (第490・491図 P.L.109)

高坏 (1) はA<sub>1</sub>類か。坏内外面丁寧な寛磨き。(2) は脚部か、やや広がり弱い。4円孔を穿つ。

鉢 (3) はE<sub>3</sub>類か。口縁部外傾するものの端部丸まる。体部寛撫で。E<sub>4</sub>類 (4) は口縁部やや大きく開き、体部刷毛目調整。

甕 (5) はA<sub>2</sub>類。寛撫で調整。(6) はC<sub>6</sub>類か。底部凸状平底、粉痕が付く。(7) は形状D<sub>1</sub>類に似る。内外面寛磨き。(8・9) は甕下半部になろう。

甕 (10) はB<sub>1</sub>類かC<sub>1</sub>類になろう。体部細目刷毛調整。

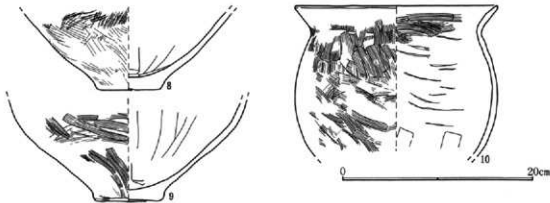
F-74号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
1	高坏坏部	12.5		現高3		赤褐色	床面	6	甕	10.9	5.0	14.3	12	灰白	高坏野原穴内	
2	高坏坏部		9.4			灰白	埋土	7	二段口縁甕	16.4				灰白	床面	
3	甕	9.3		現高6	9.5	灰白	高坏野原穴内	8	甕			6.9		現高9	赤褐色	床面
4	鉢	17		現高10.5	15	焼灰	床面	9	甕			7.3	現高10.5	25+9	焼灰	床面
5	甕	9		現高4		灰白	床面	10	甕	21.4		現高16	21.5	灰白	床面	



第490図 F-74号住居跡出土遺物(1)





第491図 F-74号住居跡出土遺物(2)

## F-75号住居跡(第492・493図 P.L.109・110)

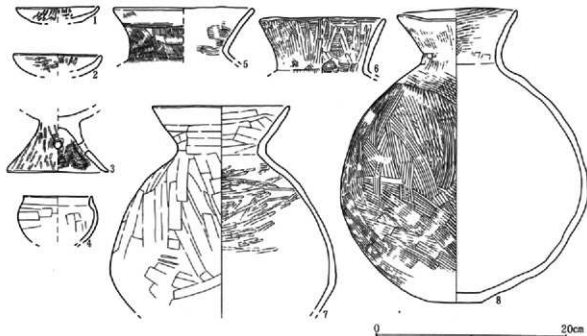
(1・2)は器台A<sub>1</sub>類。高坏脚(3)は4円孔を穿つ。鉢(4)はE<sub>3</sub>類で口縁部短く立ち、端部が尖る。体部篋撫で。

壺 F<sub>2</sub>類(5~8)。(7)は外面篋撫で、内面磨き。(8)は粗目(掻き目)刷毛。(9)はH<sub>1</sub>目類になるか。体部刷毛後磨き。

甕 (10)はB<sub>1</sub>類かC<sub>1</sub>類。体部篋撫で、内面磨きが見られる。(11)はC<sub>1</sub>類の小型、(12)は口縁部が大きくC<sub>2</sub>類、体部極細目刷毛調整。

## F-75号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	器台	8.8				赤褐	貯蔵穴内	8	壺	12.7	6	31	26.2	灰白	貯蔵穴内
2	器台	9.5				赤褐	貯蔵穴内	9	壺下半		10	規高17	26	赤褐	貯蔵穴内
3	高坏脚		10.8			灰白	灰面	10	甕	17.1		規高13	19.5	輪灰	貯蔵穴内
4	鉢	7.3		規高5	8.5	灰白	西壁貯穴内	11	単口縁台付壺	11.8	9	13.5	12.3	赤褐	貯蔵穴内
5	壺口頸	14.8		規高6		暗褐	貯蔵穴内	12	単口縁台付壺	20.2	8.7	27	22.5	赤褐	貯蔵穴内
6	壺口頸	13.5		規高6.5		灰白	貯蔵穴内	13	模造土器	5.2	3.2	3.6		灰白	貯蔵穴内
7	壺	14.5		規高21.5	23.6	赤褐	貯蔵穴内								



第492図 F-75号住居跡出土遺物(1)



第493図 F-75号住居跡出土遺物(2)

F-77号住居跡 (第494図)

甕 A<sub>1</sub>類 (1)。やや幅狭な折り返し口縁帯。口縁下位は細目刷毛調整。

F-77号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	甕	19		甕高5		赤陶	埋土
2	横溝土器	6		甕高4		灰白	埋土



第494図 F-77号住居跡出土遺物

F-78号住居跡 (第495図 P L. 110・111)

器台 A<sub>1</sub>類 (1) 内外面施磨き、胎土緻密で精製。脚に3円孔を穿つ。A<sub>2</sub>類 (2)。(3)は4円孔を穿ち長い柱状脚でA<sub>3</sub>類か。(4)も坏部の形状より同類と思われる。(5)は4円孔を穿つ。

高坏 A<sub>1</sub>類 (7)。脚部大きく開き、3円孔を穿つ。椀形の坏部で内外面施磨き。(6)は4円孔で同類。

結合土器 A<sub>1</sub>類 (8・9)。ともに坏・脚に貫通孔。(8)は坏外面施磨り、内面施磨きで黒彩の痕跡がある。脚部上下に孔を配し、6円孔を穿つ。(9)は内外面施磨き。脚上3孔、下4孔で計7円孔を穿つ。

鉢 C類 (10)。口縁部内斜。外面施磨り、内面施磨きで丸底。D類 (11)は外面施磨き、内外面黒色処理。

壺 A<sub>2</sub>類 (12)は外面・口頸内面施磨き。C<sub>1</sub>類 (13)は小型で外面刷毛後施磨き。D<sub>2</sub>類 (14)。F<sub>1</sub>類 (15)は球形の体部下半が強くくびれ下膨れ。底部凸状平底。頸部刷毛目、体部施磨き。H<sub>3</sub>類 (16)は口縁部長く直立気味。体部刷毛後施磨き、底部窪み底。(17)は壺下半部、外面施磨き。

甕 (18~21)はB類またはC<sub>1</sub>類。(19・20)は体部施磨り気味の強い甕で調整。

F-78号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	器台	7.8	9.3	6.4		灰白	埋土
2	器台			甕高4.5		赤陶	埋土
3	器台			甕高7		赤陶	埋土
4	器台坏部	8.2				赤陶	埋土
5	器台脚部		10.4			灰白	埋土
6	高坏脚部			甕高7.2		赤陶	埋土
7	高坏	12.1	18.7	12		灰白	埋土
8	結合土部	18.1	14.4	13.6		灰白	埋土
9	結合土部		19.2	甕高12.5		灰白	貯蔵穴内
10	鉢	9.9		4.8		赤陶	埋土

第5篇 古墳時代前期の遺物

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
11	鉢	8.5	4	4.5		灰白	埋土	18	壺	13.3		現高7.5		15	褐灰	埋土
12	甕	8	3.2	13.8	12	赤褐	埋土	19	壺	14.6		現高8	15.5	赤褐	埋土	
13	甕	8.9	4.8	9.9	9	灰白	埋土	20	壺	14.2		現高5.5		褐灰	埋土	
15	甕	12.4	6.3	27.6	23	灰白	埋土	21	壺	17.6		現高10		灰白	埋土	
16	甕	13	7.7	21.3	19.5	灰白	埋土	22	腰土師	7.4	4.7	8.7		褐灰	埋土	
17	甕下半		7	現高13	24.5	灰白	埋土	23	腰土師	5.9	4.1	10.4		褐灰	埋土	



第495図 F-78号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

F-82号住居跡 (第496図)

竈 A<sub>1</sub>類 (1) は幅狭な折り返し口縁帯で下位は細目刷毛。

F-82号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	竈	19.7				刷毛 陶器	



第496図 F-82号住居跡出土遺物

F-91号住居跡 (第497図 P L. 111)

高坏 B<sub>2</sub>類 (1)。腰部種の作りはD類に通ずる。内外面寛磨き。

結合土器 A<sub>2</sub>類 (2)。内外面寛磨き。坏部上下段各6円孔、計12円孔、脚部4円孔を穿つ。

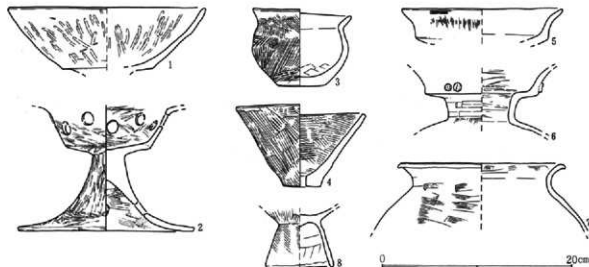
鉢 E<sub>4</sub>類 (3) は口縁部やや強くくの字状に折れる。外面刷毛目調整。

瓶 A<sub>1</sub>類 (4) は直線的に上方へ開く体部。口唇部面取り状に矩形。底部単孔を穿つ。内外面粗目刷毛。

壺 D<sub>1a</sub>類 (5・6) それぞれ二段口縁帯の口縁と頸部にあたる。口縁下部に2点組3対の円形浮文を貼る。

F-91号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏坏部	21		現高6.5		赤褐色 粗土	
2	結合土器	19.2	4.9	現高12.7		褐色 粗土	
3	鉢	10.4		8.1	10.2	灰褐色 粗土	
4	瓶	13.8	8	8.7	口径1.2	灰褐色 粗土	
5	二段口縁帯口蓋	17		現高0.8		褐色 粗土	
6	二段口縁帯口蓋			現高0.8		褐色 粗土	
7	壺	17.2		現高7		褐色 粗土	
8	57口径白台白			現高6.3		褐色 粗土	



第497図 F-91号住居跡出土遺物

F-92号住居跡 (第498図 P L. 111)

(1) は壺 C<sub>1</sub>類の小型品か。模造土器とも思われる。寛撫で調整。

F-92号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	模造土器	7.4	4	8		灰白 漆面	



第498図 F-92号住居跡出土遺物

F-93号住居跡 (第499図 P L. 111)

(1) は埴 A<sub>1</sub>類にならうか。体部に深味がある。

器台 B<sub>1</sub>類 (2)。坏と脚への貫通孔は無い。坏部口縁は短く細まって直立する。脚4円孔を穿つ。

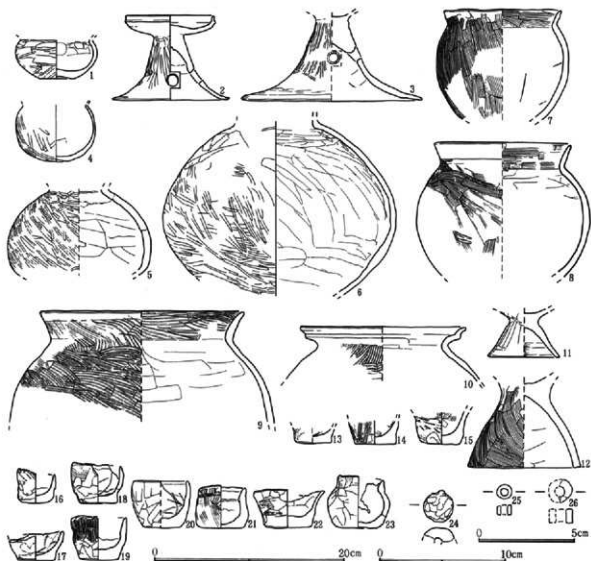
(3) は高坏脚部。内外面に赤彩の痕跡が見られる。4円孔を穿つ。

壺 (4~6) はA類になろう。(5・6) は体部やや扁平な球形、(6) は粗目刷毛後施磨き。

甕 (7~9) はB類またはC類。(7・8) は細目、(9) は粗目刷毛。D類(10) は粗目刷毛で肩部横刷毛。(12) はC類の台部。

## F-93号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	土位置
1	野原壺		3.6	現高4.2		灰白	表面	14	横流土器		4.5	現高2.5		灰白	埋土
2	野台	9.3	12.4	8.9		灰白	表面	15	横流土器		4.2	現高3.5		灰白	埋土
3	高杯脚部		19.2	現高9.3		赤褐色	表面	16	横流土器	5	4	4.4		灰白	表面
4	壺		2	現高6	8.3	黄褐色	表面	17	横流土器	3.9	3.4	3.7		灰白	埋土
5	壺			現高9	15	灰白	表面	18	横流土器	6	4	3		灰白	表面
6	壺			現高19	24.7	灰白	表面	19	横流土器	5.8	4.1	4.7		灰白	表面
7	甕	12.3		現高12	13.8	灰褐色	表面	20	横流土器	5.6	3.9	4.9		灰白	野藏穴
8	甕	14.4		現高14	18	赤褐色	表面	21	横流土器	5.7	5	4.5		灰白	表面
9	甕	21.6		現高11	28	灰白	表面	22	横流土器	7.5	5.1	4.1		灰白	表面
10	S字口脚部	17.4				灰白	埋土	23	横流土器	4.8	4.4	5.5		赤褐色	表面
11	■口縁付臺台		7.5	現高5.1		灰白	表面	24	土製埴	径2.3	孔径0.6			灰白	埋土
12	■口縁付臺台		11.8	現高9.5		灰褐色	表面	25	ガラス玉	径0.4	孔径0.2			埋土	
13	横流土器		3.9	現高1.3		灰白	埋土	26	ガラス玉	径0.6	孔径0.3			表面	



第499図 F-93号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

F-94号住居跡 (第500図)

F-94号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	横造土器		3.0	現高2.5		灰白	埋土
2	半口縁台付甕		9	現高6		赤褐色	埋土
3	半口縁台付甕		10	現高7		黄褐色	埋土



第500図 F-94号住居跡出土遺物

F-95号住居跡 (第501図 P L.112)

(1) は増A<sub>1</sub>類になろうか。内外面赤彩を施す。

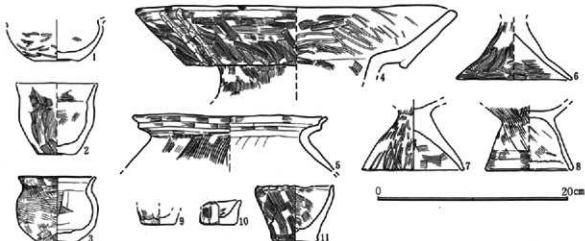
鉢 E<sub>1</sub>類(2)は口縁部小さく外傾する。内外面粗目刷毛。模造土器に近い。E<sub>2</sub>類(3)は体部の丸味強い。

甕 D<sub>2</sub>類(4)は器内厚く大型の二段口縁蓋。2本組棒状浮文を貼る。

(6・7)は脚部内面の作りから、台付甕とは異なる器種の脚になろう。

F-95号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	甕		5	現高4.3		灰白	埋土
2	鉢	8.7	4.1	7.7		灰白	埋土
3	鉢	8.2	4	6.9		灰白	埋土
4	二段口縁蓋口縁	34		現高7.3		灰白	埋土
5	S字口縁蓋	20.6				灰白	埋土
6	高坏脚部		12.2	現高6.2		赤褐色	埋土
7	高坏脚部		10.7	現高7.3		灰白	埋土
8	S字口縁台付甕		9.3	現高7.2		灰白	埋土
9	模造土器		3.7	現高2		灰白	埋土
10	模造土器		3.9	現高2		灰白	埋土
11	模造土器	8.1	5	6		灰白	埋土



第501図 F-95号住居跡出土遺物

F-96号住居跡 (第502図 P L.112)

器台 A<sub>1</sub>類(1)は内外面施磨き、脚3円孔を穿つ。A<sub>2</sub>類(2)はやや粗い施磨き、脚4円孔を穿つ。

高坏 A<sub>2</sub>類(3)は内外面施磨き、脚4円孔を穿つ。(4・5)は3円孔を穿つ。

結合土器(6)はA<sub>1</sub>類か、坏部に3円孔を穿ち、内外面に赤彩痕が認められる。

甕 A<sub>2</sub>類(8・9)は口縁部がやや短め。(8)は頸部に細目刷毛痕が残る。(9)は刷毛後施磨き。E<sub>2</sub>類(10)。E<sub>1</sub>類(11)。F<sub>1</sub>類(12)。

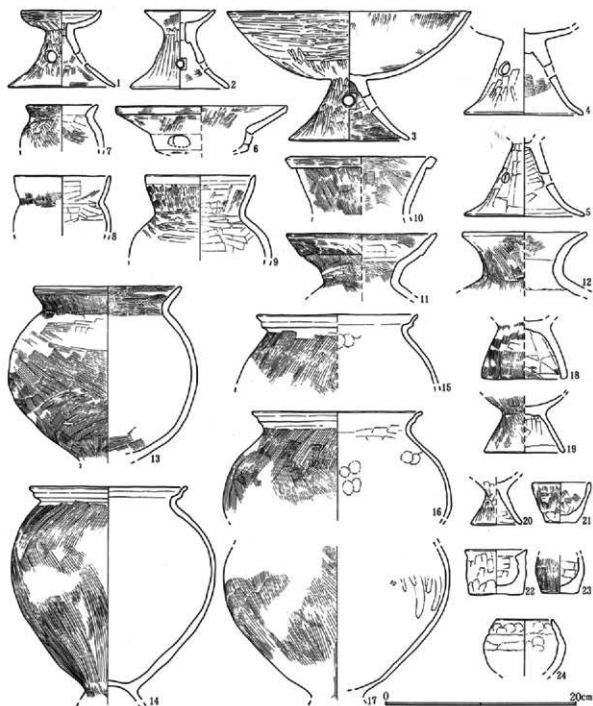
甕 C<sub>1</sub>類(13)は粗目刷毛を施す。D類(14~17)。(16)は口縁内面のS字状屈曲が緩い。(14・15)は粗目刷毛。

F-96号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	器台	8.4	11.3	8		黄褐色	床面
2	器台	7.6	10.4	8.2		灰白	床面
3	高坏	25.0	12.6	13.6		灰白	床面
4	高坏脚部		12.4	現高9.5		灰白	床面
5	高坏脚部		12.6	現高8.7		灰白	床面
6	結合土器	16		現高4.5		灰白	埋土
7	鉢	7.5		現高4.5		黄褐色	埋土
8	甕	10.2		現高6		灰白	貯蔵穴内

第5節 古墳時代前期の遺物

番号	器種	口径	底径	器高	胴物色	胎土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴物色	胎土位置		
9	甕	11.7		規高9	灰白	伊勢穴縁6厘	17	S字口鉢付甕			規高16.7	23.7	灰白	伊勢床面	
10	甕	16		規高6	灰白	伊勢器	18	S字口鉢付甕台		8.6	規高6.5		灰白	甕土	
11	二流口鉢盛口甕	16		規高7	灰白	伊勢器	19	S字口鉢付甕台		8.4	規高6		灰白	廣東面層	
12	甕	13.1		規高6.5	灰白	伊勢面	20	模造土器?		5.4	規高5		灰白	伊勢面	
13	単口鉢台付甕	15.6		規高18.5	20	灰白	伊勢床面	21	模造土器	6.2	3.2	4.3		雜灰	甕土
14	S字口鉢付甕	16.7		規高22.5	21.5	灰白	伊勢穴縁6厘	22	模造土器	6.5	5.5	5		灰白	甕土
15	S字口鉢甕	17		規高7.3	21	灰白	伊勢床面	23	模造土器		4	規高4		灰白	甕土
16	S字口鉢甕	18		規高11	24	灰白	野藏穴内	24	鉢?	6		規高6		灰白	甕土



第502図 F-96号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

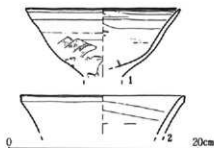
G-88号住居跡 (第503図)

高坏 C類 (1) は深目の体部、外面篋撫で、内面篋磨き。

(2) はA類の壺。

G-88号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	高坏	16.2		腹高7		灰白	埋土
2	壺	17				灰白	埋土



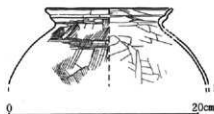
第503図 G-88号住居跡出土遺物

G-98号壺穴跡 (第504図)

壺 D類 (1) は体部粗目刷毛、肩部に横位刷毛目。

G-98号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
5	半口縁壺	13.4		腹高3		灰白	灰層



第504図 G-98号壺穴跡出土遺物

工境-1号住居跡 (第505図 P.L.112)

(1・2) は高坏脚、篋磨きを施し4円孔を穿つ。

鉢 E<sub>3</sub>類 (3) は口縁部短く外屈し内斜。内外面刷毛目。

E<sub>2</sub>類 (4) は口縁部くの字状に折れ、体部篋撫で。

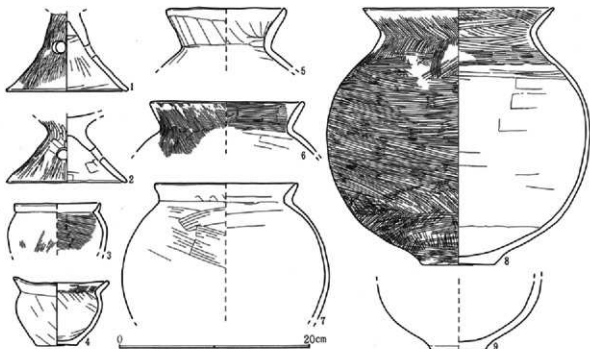
壺 F<sub>2</sub>類 (5) は口頸部篋削り。(9) は壺になろうか。腰部篋削り、底部窪み底。

壺 (6~8) はB<sub>2</sub>類になろうか。(8) は粗目刷毛。(7) は外面強い篋撫で、頸部内面篋削り。

工境-1号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	高坏脚部		12.8	腹高2.3		赤褐色	埋土
2	高坏脚部		12.6	腹高7.3		灰白	灰層
3	鉢	9		腹高5.2		灰白	埋土
4	鉢	10	4.4	7.2		灰白	灰層
5	壺	12.4		腹高6.2		灰白	灰層

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
6	壺	15.8		腹高5.2		灰白	埋土
7	壺	15		腹高14.3	19.7	赤褐色	灰層
8	壺	20	7.4	26.9	27.5	灰白	灰層
9	壺		5.6	腹高7	17.4	灰白	灰層



第505図 工境-1号住居跡出土遺物



## 工境-8号竪穴跡 (第506図 P.L.113)

高坏 C<sub>1</sub>類 (1) は深目の体部、内外面施磨き。(2) は高坏脚部C類、細身の長形で裾部強く開く。施磨き。

蓋 B<sub>2</sub>類 (3) は凸状摘み、内外面細目刷毛、裾部幅広く横撫で。

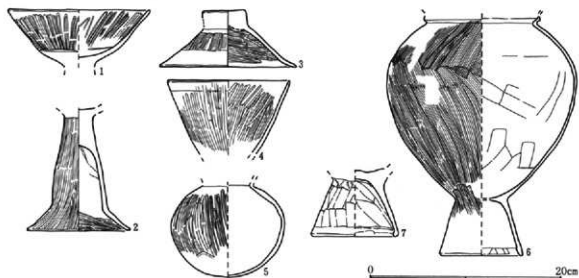
壺 (4・5) ともA<sub>2</sub>類。丁寧な施磨きを施す。(5) は丸底。

甕 D類 (6・7)。(6) の刷毛目は体部下位が後調整。

## 工境-8号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	高坏体部	15		規高6.1		黄 灰面	
2	高坏脚部		11	規高12.9		赤褐 灰面	
3	蓋	14.6	頂径4.6	6		灰白 灰面	
4	壺口頸部	13		規高7.7		灰白 灰面	

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
5	壺			規高10	13	黄 灰面	
6	S字口縁甕		8.8	規高25.2	20	灰白 灰面	
7	S字口縁甕		9.2	規高7		灰白 灰面	



第506図 工境-8号竪穴跡出土遺物

## 工境-9号竪穴跡 (第507図)

## 工境-9号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	壺	18.4		規高4.6		灰白 埋土	



第507図 工境-9号竪穴跡出土遺物

## 工境-10・11号竪穴跡 (第508図 P.L.113)

埴 A<sub>2</sub>類 (1~3) は口縁部横撫で、体部寛削り、丸底。(3) は口縁部広く開く。

高坏脚部 (4~6)。(4) はA類脚部か、裾部強く大きく開く。柱部横撫で、裾部細目刷毛。(5) はB類で丈高で裾部小さく直角に近く開く。横撫で。(6) はD類で細身の柱部から裾が緩やかに大きく開き、刷毛後施磨き。

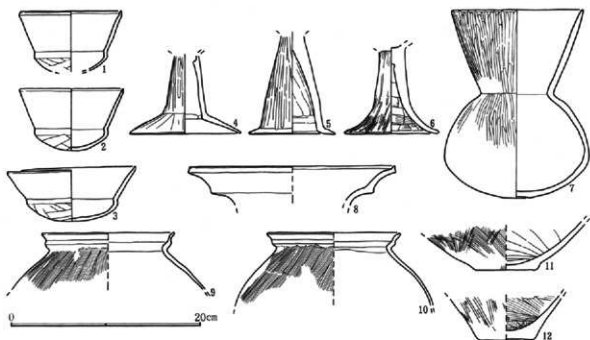
壺 A<sub>2</sub>類 (7)。丈高に延びる口頸部にやや扁平な球形体部、底部は小さな窪み底。全体に施磨きを施す。

## 工境-10・11号壺

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	埴	11		6.5		灰白 灰面	
2	埴	10.8		6.3		灰白 灰面	
3	埴	12.6		5.7		灰白 灰面	
4	高坏脚部		11.8	規高8.2		灰白 灰面	
5	高坏脚部		9.2	規高10.2		灰白 灰面	
6	高坏脚部		10	規高8.2		赤褐 灰面	

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
7	壺	14	2.5	19.8	15	灰白 灰面	
8	壺	21.5				赤褐 灰面	
9	S字口縁壺	14		規高6		灰白 灰面	
10	S字口縁壺	14		規高7.8		灰白 灰面	
11	壺底部		6.4	規高3		灰白 灰面	
12	壺底部		5.8	規高4.5		灰白 灰面	

第3章 検出された遺構と遺物



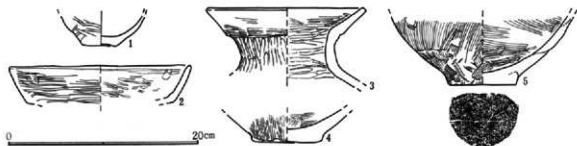
第508図 工境-10・11号竖穴跡出土遺物

工境-12号住居跡 (第509図)

(2) は壺D<sub>3</sub>類か。内外面艶磨き。(3) は外面に段を作りE<sub>3</sub>類折り返し口縁風。口縁帯艶削り、頸部の内面艶磨き、黒色に焼成。

工境-12号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色裏	色裏出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色裏	出土位置
1	鉢			3.5		灰白	腰土	4	埴輪部		7.2			灰白	腰土
2	壺口頸部	18.8				灰白	腰土	5	蓋		7			灰白	腰土
3	壺口頸部	16.4		現高8.5		灰白	腰土								



第509図 工境-12号住居跡出土遺物

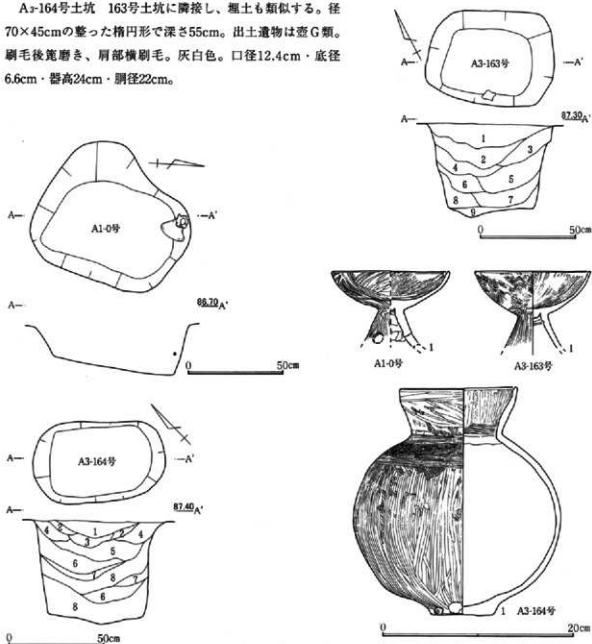
## 3. 土坑 (第510図 P.L.113)

舞台遺跡で検出された土坑状遺構はかなりの多数に上り、当該期に帰属するであろうものも多いと考えられる。しかし土層観察や出土遺物からの認定に徹底さを欠き本誌での報告に至らず後巻を待ちたい。ここでは遺構形状と比較的良好な遺物を伴う土坑を掲載するに止める。

A1-0土坑 古墳後期A1-13号住居跡の北東隅に近接しており、80×60cmの略方形。底面は北方向に深く傾斜。深さ15~25cm。出土遺物は北壁沿いに床面より若干浮く。高坏A1類で内外面荒磨きで胎土灰白色。口径12.6cm。

A3-163号土坑 該期遺構の少ない空閑域にある。埋土にはLoam塊・炭化粒が混じる。70×50cmの方形で深さ50cm。出土遺物は高坏A1類。内外面荒磨き。灰白色。口径12.2cm

A3-164号土坑 163号土坑に隣接し、埋土も類似する。径70×45cmの整った楕円形で深さ55cm。出土遺物は壺G類。刷毛後荒磨き、肩部横刷毛。灰白色。口径12.4cm・底径6.6cm・器高24cm・胴径22cm。



第510図 A区土坑・出土遺物

## 第6節 周溝墓と出土遺物

舞台遺跡における周溝墓は南方へ舌状に延びる低台地の中央部にあり、周辺にはほぼ同期に属する住居群が展開する。墓域と居住域の分状況からは、幾多の重複関係が生じており判然とした区域分けが成されてきたとは考えられない。切り合い関係にあるものについてのみであるが、周溝墓に対して住居跡が先行する調査所見がある。

### 1. 周溝墓

舞台遺跡における周溝墓は方形・前方後方形を合わせ、10基が検出されている。周溝墓に限らず、各項で言及したように周溝墓もまた隣接する三和工業団地遺跡との関係を等閑視しては何ら問題解決には成らないのが現状であるが、ともに周辺に展開する集落に直結した墓域と考えられる。知りうる限りの状況把握では、舞台遺跡と地続きの台地上に13基余の周溝墓が検出されており、形態は方形周溝墓のみで構成されている。細部形状では何種類かの周溝溝切れの形態があるものの、後世の削平に伴う消失度合いによる可能性もあり即断はできない。当遺跡の周溝墓との配置関係では間を埋めるように造墓された2基を除き群間には若干の空地が意識されているようである。墓域としての立地環境は、成立過程は置くとして舞台遺跡に見られる様な住居群との混在性は希薄で墓域環境は整っている。墓域を区別する規定を何に求めるかは検討されねばならず両者の関係は今のところ不明である。ところで周溝墓の規模・形態差による理解では大規模・前方後方形には集落内におけるより上位者誕生への階層分化が顕現したものと捉えられている。この観点に沿えば前方後方形周溝墓である1号・9号周溝墓の2基を擁する舞台遺跡ではより階層化の進展した姿として捉えられる。しかし、両者間の関係は墓域の問題も含め周溝造墓の時間的変遷や造墓対称となる集落構造や共同体単位の抽出など多くの解明課題が残されている。

集落の内部構成や階層性を検討する上では、もちろん集落における個々の住居の規模や構造・配置関係の検証は欠かせない。周溝墓の被葬者を示す埋葬施設のあり方もまた集落構造や広く社会発展段階を探る有効な検討手段であるが、舞台遺跡の周溝墓からの主体部検出事例はない。しかしながら、葬送儀礼に用いたと考えられる周溝内より出土した土器類からある程度、被葬者の階層的位の推定は可能であろう。土器類の多くはその出土状況より方台部側からの転落を示し、しかも周溝に土の埋没がかなり進行した段階と考えることができ、葬送行為の後も一定期間方台部に設置されていたことが窺われる。出土土器の量と器種は前方後方形周溝墓が他の方形周溝墓に卓越しており、特に底部が穿孔された穿孔二段口縁蓋の偏在性は高く、焼成前の穿孔から見て明器として作られたものである。中でも規模の面で9号周溝墓にやや劣るが、1号周溝墓のもつ9個体の二段口縁蓋のうち6個体には肩部に二段の縄文帯で加飾され被葬者の階層に規模のみでは規定できない複雑さを覗かせている。

出土遺物と規模に関しては6号周溝墓もまた特異な様相を示している。6号周溝墓は方形形態を持つものの、方台部の規模は前方後方形の後方を凌ぎ、さらに周溝の掘り幅広くなお整った箱形で他に見られない形状を呈する。規模とその形状からは前方後方形周溝墓に次ぐ階層者を想定させるが、出土遺物では量・器種揃えとも貧弱で他の小規模な方形周溝墓に伍するかややもすれば劣勢の観すらある。埋葬形態としての周溝墓制規範とどのように関連するのか、個別集落構造の多様さに起因するのか、その終焉を含め興味有る事象である。



第511図 舞台遺跡周溝墓群位置図

## 1号周溝墓 (第512~516図 P.L.114・115・126・127)

座標値  $X = 125 \sim 151$ 、 $Y = -722 \sim -748$  の範囲にある。略南北方向に長軸をもち、南に前方部をなす前方後方形周溝墓である。遺骸埋葬施設は検出されていない。東方には9号・10号が、南に2号周溝墓が接し、西・北西方に3号・4号・5号・6号の各周溝墓が分布する。周溝墓群中での空間的にはほぼ中央に位置する。後方の方台部は旧地表に近い黒色土面が残り、D-01号竈穴跡・及び鳥状さく条痕が検出されている。また、北側周溝部でD-85号住居跡と重複している。三者とも古墳前期に属するが跡がいずれより新しい調査所見がある。前方部南周溝は2号周溝墓北周溝と接することくであるが新旧関係は不明である。

周溝外縁の全体形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈する。周溝の北縁から東縁の外縁は緩い膨らみをなし、隅部に丸味をなす。南縁周溝は前方部に向かい狭まって角切り状の縁線をつくる。周溝外縁を含む全体規模は長軸25.5m・短軸21.5mで、周溝内縁方台部全長20mを測る。後方部長軸(南北)15m・短軸(東西)13.5m、前方部長5m・基部幅2m・南端幅5.5mである。長軸方位はN-24°-Eを示す。

周溝埋土は下位から中位層にLoam粒・塊が多く混入するが自然流入の堆積状況であるが、流入方向は下位層はどの方台部側からの堆積であることが窺われる。断面形状は西溝の一部が整った箱堀を呈するが他所では方台部側が直線的な壁面で外縁側が緩く間のびした立ち上がりになる。周溝規模は上幅4.0~4.5m・下幅3.0~3.5mが平均的で前方部東・西縁が最も広く上幅で5.5~6.0mになる。深さは溝各辺の中央部が総じて深く隅部は浅い掘形の傾向がある。また、前方部正面部分の溝幅は極めて狭く1mに満たず、深さも0.7~1.3mである。

出土遺物は供献用の完形度の高い底部穿孔二段口縁を中心に大小壺類・高坏・埴等で構成される。いずれも溝中埋土からの出土で、平面的位置からは方台部側に寄っている例が多い。二段口縁壺は複数個体がまとも北辺溝中央には3個体、東辺中央からは2・2の4個体、前方部東からは2個体が出土する。出土状況からは溝底面よりかなり高い位置にあり、溝中に置かれたとするよりは方台部に献置されたものが溝の埋没過程で転落したとする方が妥当であろう。

## 出土遺物

(1) は小型の鉢類になろう。小径の平底で刷毛目後粗く撫でを施す。灰白。

埴(2~4)は(2・3)が上げ底状の平底である。刷毛目後磨きで、(2)の下半は篋削り後の磨きである。橙・鈍橙。(4)は大型で内外面に精緻な磨きを施す精製土器で、下半は篋削りである。黄橙  
小型壺(5)は底部小径な上げ底状平底。内外面に丁寧な磨きを施す精製土器。鈍橙。

高坏(6~12)は(11)が脚部3円孔で他は4円孔を配す。脚(12)は内湾気味に開き端部は矩形。(6)は坏部と脚部間に円盤を持つ形態である。いずれも磨きを施す。(7・8・11・12)は橙。(9)は明赤橙~浅黄橙。(10)は灰白。

二段口縁壺(13~21)は肩部に縄文による加飾されるものと無文の2種類がある。いずれも焼成前の底部穿孔であるが、(19)は焼成後に孔を修正したような擦痕が見られる。口唇端部は矩形に整えられるが(14)のみ細く丸味をもつ。色調は橙で浅黄橙・黄橙が少数ある。(13~18)は縄文加飾である。細目の刷毛目後削り調整がなされる。内面撫でを施すが紐作り接合痕が明瞭に残され、見込み部は刷毛目調整である。肩部に横位二段の縄文帯が施文される。L-R-1・1・1の捻りからなり段3条の単節縄文とみられ、結節は一方の条により末端を結ぶ自条結節でR条が結ばれる。(19~21)は無加飾で胴部に磨きがかかる。

(22・23)は素口縁の壺で、(23)は削り後横・縦の磨きを施す。(22)は灰白。(23)は淡黄橙。

(24)は口縁を磨き、2条1組の棒状浮文をもつ大型壺の口縁部である。赤橙。

1号周溝墓

A-A'

1. 暗褐色土 砂質、Loam粒混
2. 褐色土 締まり無くLoam粒多混
3. 暗黄褐色土 弱粘性、Loam粒多、C粒石混
4. 暗褐色土 砂質、Loam粒混
5. 褐色土 締まり無くLoam粒多混
6. 暗褐色土 弱粘性
7. 暗褐色土 弱粘性、Loam粒混
8. 暗褐色土 弱粘性、Loam粒多混
9. 暗褐色土 弱粘性、黑色土壤多混
10. 暗褐色土 弱粘性、Loam粒多、黑色土壤混
11. 暗褐色土 弱粘性、Loam粒、塊多混
12. 暗褐色土 弱粘性、Loam粒 黄色土壤混
13. 黑褐色土 粘性、黑色土壤多、Loam粒混
14. 暗褐色土 弱粘性、黑色土壤多、Loam塊混
15. 褐色土 強粘性、Loam粒多混
16. 暗黄褐色土 粘性、Loam小塊多混
17. 灰黄褐色土 強粘性、Loam土多混

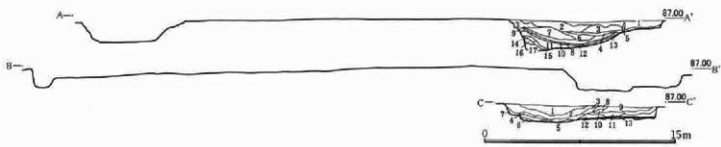
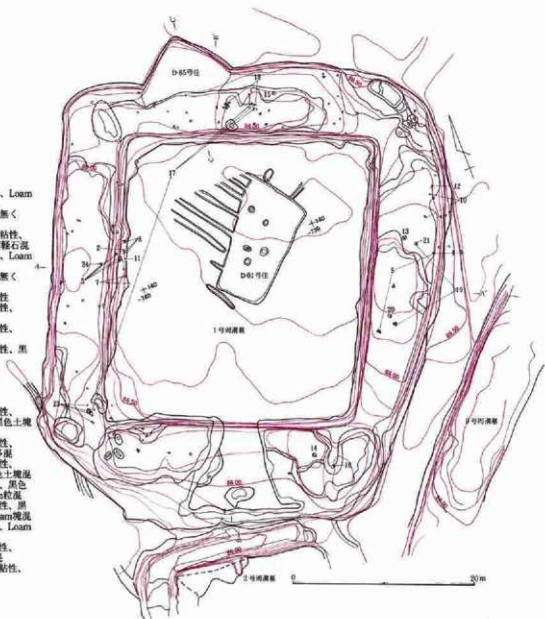
C-C'

1. 黑色土 C粒石粒多混
2. 暗褐色土 Loam粒混
3. 褐色土 Loam大粒混
4. 褐色土 弱粘性、Loam粒多混
5. 灰褐色土 弱粘性、Loam粒・C粒石粒混
6. 明褐色土 強粘性、Loam粒・塊・炭化粒混
7. 黄褐色土 弱粘性、Loam粒多混

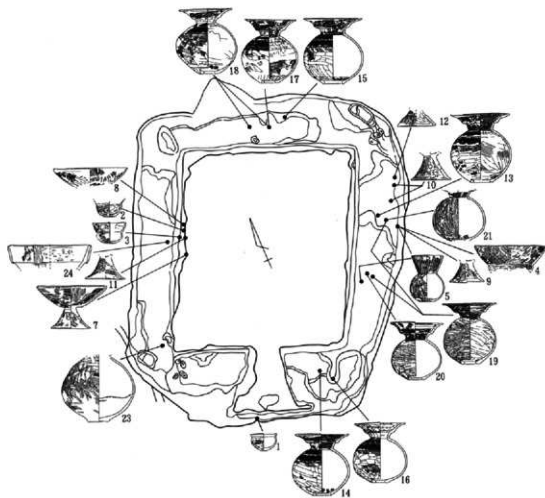
8. 褐色土 弱粘性、Loam粒多混

D-B5号在层

9. 暗褐色土 締まり無し、Loam粒多・C粒石粒混
10. 暗褐色土 締まり無し、Loam粒・C粒石粒混
11. 暗褐色土 弱粘性、Loam塊・C粒石粒多混
12. 褐色土 粘性、Loam塊混
13. 淡黄褐色土 暗褐色土壤塊(团形)



第512图 1号周溝墓



第513図 1号周溝墓遺物出土位置

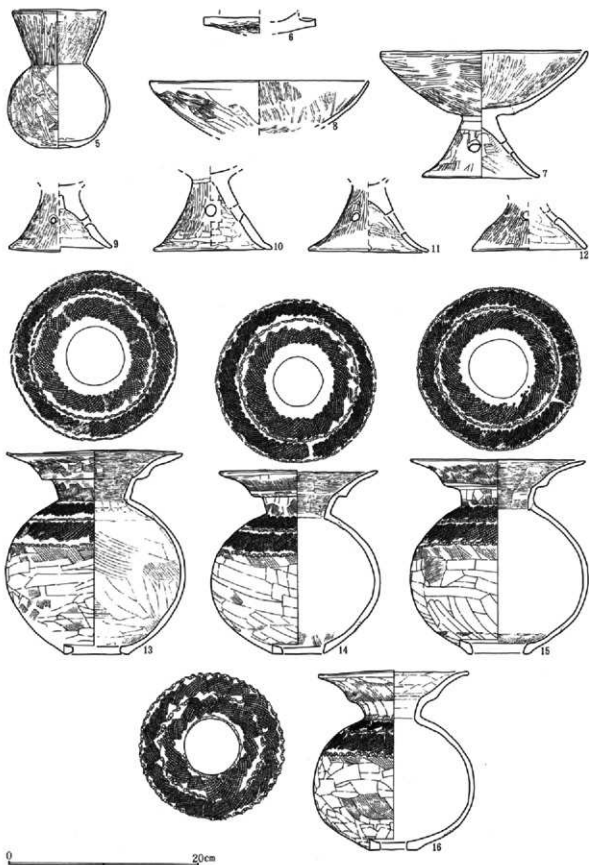
1号周溝墓

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	鉢	8.4	2	5.3		灰白		13	二段口緑香	18.7	6.9	21.4		19	黄緑
2	埴		3.5	埴高5		橙		14	二段口緑香	17	5.5	19.3		18	橙
3	埴	10.5	2.9	6.4		黄緑		15	二段口緑香	18.5	6.6	20.4		18.7	橙
4	大型埴	22.7		埴高8.5		黄緑		16	二段口緑香	15.1	5	18.8		17	橙
5	長頸甕	30	4.1	14.6	10.8	黄緑		17	二段口緑香	16.2	5.9	19.5		17.9	橙
6	異形高坏					灰白		18	二段口緑香	16.6	5.8	20.3		19	黄緑
7	高坏	21.8	12	13.5		橙		19	二段口緑香	17.1	5.8	19.1		16.5	橙
8	高坏坏部	23.2		埴高6.8		橙		20	二段口緑香	16.6	5.4	18		15.7	橙
9	高坏脚		19.8	埴高7		黄緑		21	二段口緑香		5	埴高16.6		16.5	橙
10	高坏脚		12.5	埴高7.5		灰白		22	表口緑香	13.6		埴高4			灰白
11	高坏脚		12.7	埴高7.4		橙		23	埴		6.6	埴高20.8		23	黄緑
12	高坏脚		12	埴高4.9		橙		24	埴	26					橙

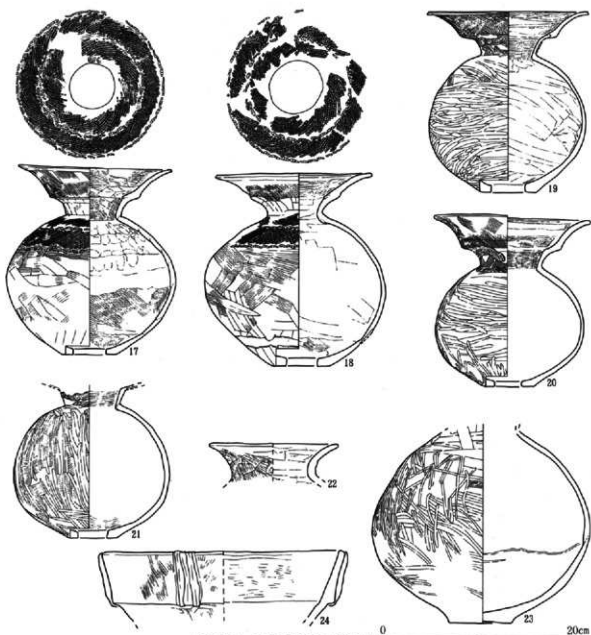


第514図 1号周溝墓出土遺物(1)





第515図 1号周濬墓出土遺物(2)



第516図 1号周溝墓出土遺物(3)

2号周溝墓 (第517～520図 P.L.116・127・128)

座標値X=112～126・Y=-734～-747の範囲にあり、形状・形態は南北方向に長軸をもつ方形周溝墓で東辺溝外縁は緩く膨らむ。遺骸埋葬施設は検出されていない。北辺周溝は1号周溝墓の前方部周溝と接することくに近いが新旧関係は不明である。東・西方に9号・4号周溝墓が位置する。

周溝外縁を含む規模は、長軸14.0m・短軸13.0m、方台部長軸10.0m・短軸8.5mを測る。長軸方位はN-12°-Eを示す。

周溝埋土は下位から中位にLoam粒・塊が多く混入し、方台部側からの流入が顕著である。周溝断面は略箱型またはU字形状を呈する。周溝規模は上幅2～2.5m・下幅1.0～1.3mで、深さは底面の状況が一定ではなく大凡80～90cmの掘形であるが南辺がもっとも浅く30～40cm程度の部分もある。

出土遺物はやや大振りの二段口緑甕1個体・単口緑甕が多く5～6個体で、その他埴・小型甕の各1個

体がある。東周溝内に最も集中し二段口縁壺もここからの出土である。南辺からの出土はない。

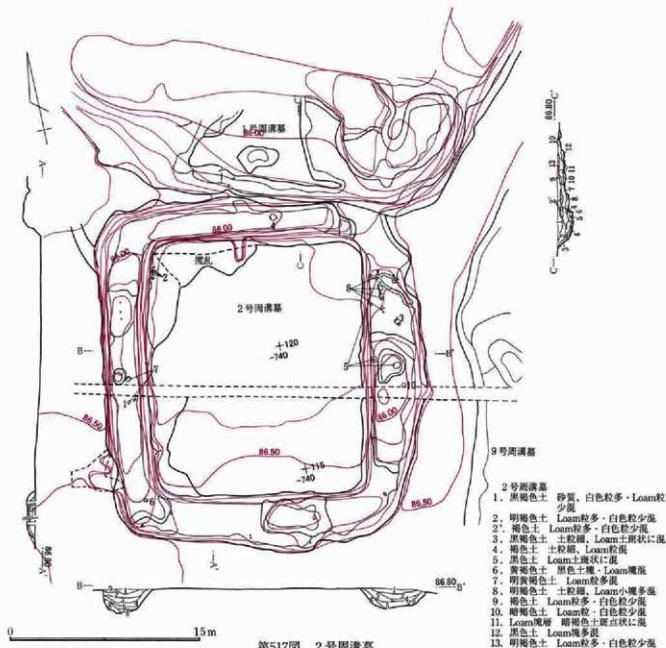
#### 出土遺物

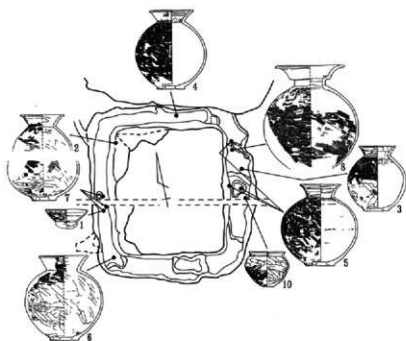
(1) は底部平底の埴で口縁部の開きが大きい。口縁には弱い刷毛目、内面篋撫で、体部は篋削り調整である。鈍赤褐。

素口縁壺(2-6)で(7)もこれに属しよう。(3-7)は厚みのある底部で焼成後に穿孔され外側からの圧で穿たれるが、剥離面が外面に生じている(5)は内側からの打撃であろう。器面調整は口縁部内外横撫で、胴部篋削り後に上半部を中心に細刷毛目を施すが、(4・5)は全体におよぶ。(5)は底部に木葉痕がある。鈍赤褐。

二段口縁壺(8・9)で(9)は口縁小片である。(8)は頸部直立で内面に明瞭な段を無し強く外反して開く。胴部外面刷毛目後粗間隔で縦位篋磨き、内面はやや粗目刷毛調整である。明黄橙。

小型甕(10)は腰部は強い篋削りで中位に刷毛調整を施す。3条ほどの巻き上げ痕が明瞭に残る。浅黄橙。

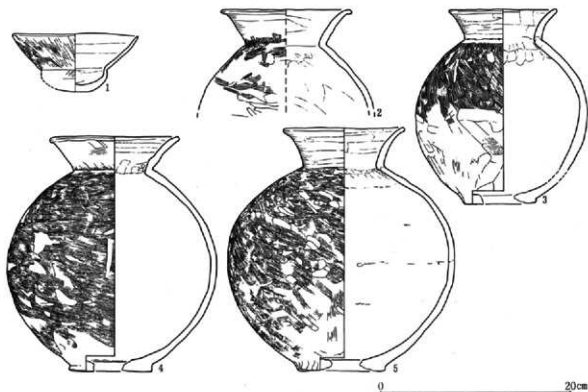




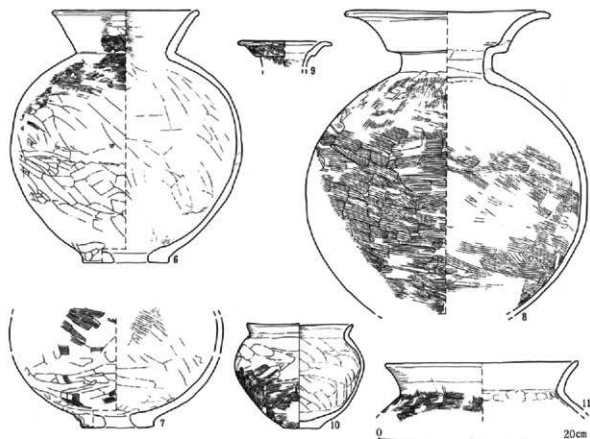
第518図 2号周溝墓遺物出土位置

2号周溝墓

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	埴	13.3		6.1		黒緑		7	埴	21.7	7.8	底高12.7		22.5	黒緑
2	大口鉢	13.4		腹高11.6	18.5	黒緑		8	二股口鉢	21.7		底高31.7		29.5	黄
3	大口鉢	11.4	7.4	21.8	18.2	黒緑		9	二股口鉢	10		底高2.7			黒緑
4	大口鉢	13.5	8.8	24.5	22.2	緑黄		10	小壺	11.3	3.8	11	13.7	黄微	
5	大口鉢	13	9.2	25.5	23.9	黄		11	單口鉢	12		底高6.1		灰白	
6	大口鉢	15.5	9.2	26.4	24.5	黄									



第519図 2号周溝墓出土遺物(1)



第520図 2号周溝墓出土遺物(2)

## 3号周溝墓(第521・522図 P L. 117・128)

座標値 $X=140\sim 153$ ・ $Y=-750\sim -763$ の範囲にあり、周辺には北方の6号周溝墓から時計回りに1号・2号・4号・5号の各周溝墓が巡る。形状・形態は東西方向に僅かに長軸をなす方形周溝墓である。遺骸埋葬施設は検出されない。西辺周溝の中央部には蒸層Loam土を掘り残すような掘形の浅い高まり部が見られる。北辺部で一部方台部にかかりD-89号住居跡(古墳前期)と重複するが、これより新しいとの調査所見がある。

周溝外縁を含む規模は、長軸13m・短軸12.2m、方台部長軸9.5m・短軸8.7mを測る。長軸方位は $N-68^{\circ}-E$ を示す。西辺中央部の浅い掘形幅は約1.5mである。

周溝掘土は方台部寄り下位層にLoam粒・塊の混入が多く、方台部への盛土の一部が流失したと考えられる。溝の断面形は略U字形状を呈する。規模は上幅1.5~1.8m・下幅0.9~1.3mで深さは0.7m前後の部分が多く、各辺とも中央部分が若干深めの掘形をもつ。

出土遺物は埋土中で西辺溝の南側より埴2個体・南辺からは単口緑壺・鉄器がある。北辺には模造土器・台付甕(S字口縁)等が集中的に検出されているが、重複するD-89号住居跡に属する可能性が高く、混入物と考えられる。

## 出土遺物

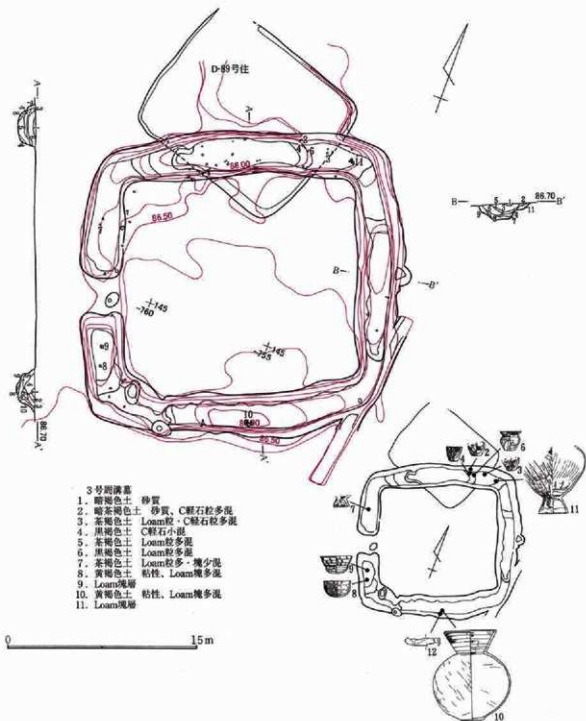
模造土器(1~7)は鉢・甕・台付甕を模したものであろう。作りはさほどの粗略差はなく、刷毛目調整を施すものも多い。模造土器には(1~4)のように鉢形を模した製品を多く見るが、原形にあたると思われる鉢形は器種としては多くはない。灰白色が多く、(7)には煙しがかかる。

(8) は鉢形になろうか。外面体部は丁寧な寛磨きを施す精製土器である。浅黄橙で外面の一部に吸炭がある。

丸底埴(9) は口縁部刷毛目後横撫で、体部は寛削り。浅黄橙。

壺(10) は口縁部が長く直線的に開く。口縁部横撫で、胴部寛削りを施す。浅黄橙。

(11) はS字口縁台付甕になろう。粗刷毛目で胴中位に寛削りが残る。台端部内側への折り返しは幅広である。台・胴接部両面には混砂土が塗布される。明黄橙。

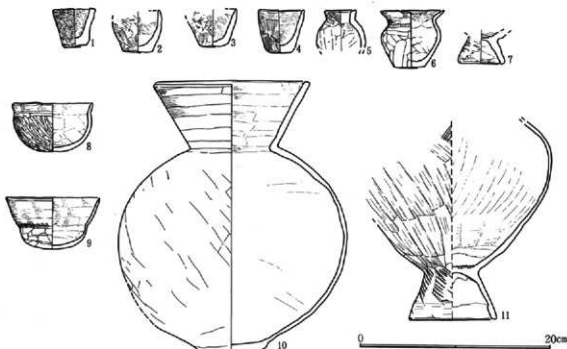


第521図 3号周溝墓・遺物出土位置

## 3号周溝墓

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	横造土器	4.5	2.3	4		灰白	
2	横造土器	4.4	3.2	4.4		灰白	
3	横造土器	4.8	2.8	4		灰白	
4	横造土器	5	2.5	4.5		灰白	
5	横造土器	3.4		現高4		灰白	
6	横造土器	6.7	3.3	6		灰白	

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
7	横造土器			4.9	現高3.6	灰白	
8	小型鉢	8.4		5		浅黄	
9	埴	10		5.4		浅黄	
10	壺口縁窓	16.5	7	28.3	24.2	浅黄	
11	SP1埴台付壺		9.3	現高21	21	浅黄	



第522図 3号周溝墓出土遺物

## 4号周溝墓 (第523～527図 P.L. 118・129・130)

座標値X=113～130・Y=-750～-764の範囲にある。東・北東方には1号・2号周溝墓が近接し、北西方には3号・5号周溝墓がある。形状・形態は南北方向に長軸をもつ方形周溝墓である。遺骸埋葬施設は検出されていない。周溝外縁は全体に膨らんで四隅の溝幅が狭まり、また南辺はやや突出が大きく外周縁形状は楕円形に近い。

周溝外縁を含む全体規模は、長軸17.8m・短軸14.5m、方台部長軸11.2m・短軸9.0mを測る。長軸方向はN-12°-Eを示す。

周溝埋土は下位から中位層にかけてLoam粒・塊の混入が多く、方台寄りに一層顕著である。方台部下縁にはLoam塊の崩落堆積状態が目立つ。周溝の平面的掘削はやや企圖性に乏しく縁線は不均一になっている。溝幅は部位によって差があり、最大上幅は南辺中央で約4.0m・最狭は北西・南西・南東の隅部で1.0～1.3m、下幅は2.0～0.5mまでの広・狭がある。深さは各辺の中央に最深部があり1.0mから浅い箇所では0.6mである。掘形断面は東・西辺が深めのU字形を、南・北辺は浅いU字形を呈す。

出土遺物は周溝内埋土中から明らかに方台部側からの転落を窺わせる出土状態のものもある。出土器種には埴・小型壺・二段口縁窓等のほか変類がある。埴・小型壺類は全て東辺周溝に集中し、二段口縁窓は北辺・東辺南寄り・南辺からの出土で西辺では底部のみである。

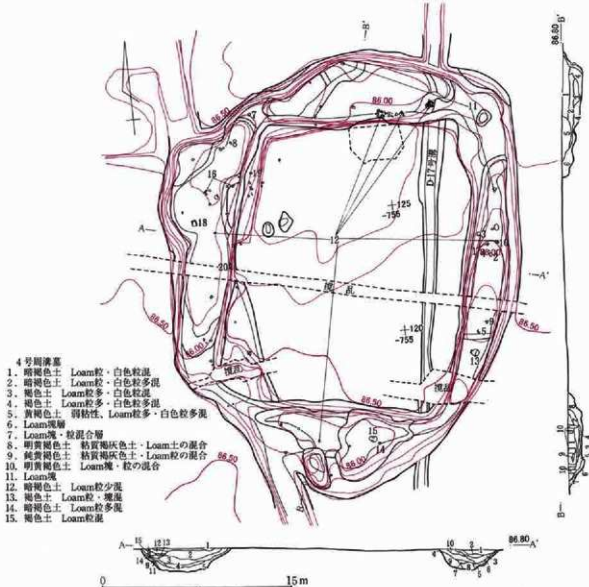
出土遺物

埴 (1~5) は丸底である。器面調整に精 (1~3)・粗 (4・5) がある。(1~3) は精製土器で体部寛削り後施磨き、口縁部内外面は丁寧な施磨きを施す。口唇部外にやや強めの撫でによって凹状の段を作る。橙。(4・5) は体部寛削り、口縁施撫で調整。口唇部は掴み撫でで鋭く細まる。(4) は鈍橙 (5) は明黄橙。

器台 (6~8)、施磨きを施す。坏部 (6) は外面粗目刷毛調整後の磨き、橙。(7) は3円孔・(8) は4円孔、明赤橙。

小型壺 (9~11) は器面調整に精・粗があり、埴類に共通する差異である。(9) は施による削りと撫で、丸底・赤橙。(10) は胴部寛削りまたは撫で後胴部に粗い施磨き、口唇部は内に小さく屈す。明黄橙。(11) は全面精緻な施磨きを施し精製土器である。底部は小径な上げ底状。橙。

壺類 (12~16) は中型で (12~14) は二段口縁壺である。(15・16) もこれに類しようか。底部は中央が窪み外縁は低い輪状になる。(12・16) の底部穿孔は焼成後。(12~14) は口縁部上半が強く外反し水平に近い。端面部は丁寧な矩形に整えられ、上端は小さく掴み上げられる。胴部外面は粗目の刷毛後施撫で、



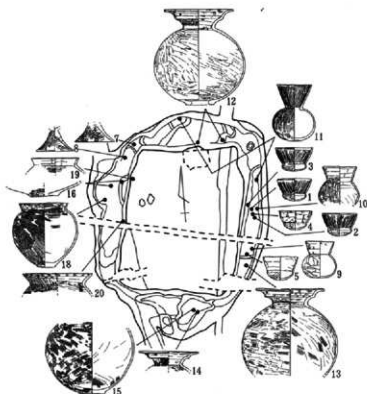
第523図 4号周溝墓



内面は粗目の刷毛目を施す。浅黄橙。

(17)は加飾大頸壺口縁にならうか。口縁は上下に幅広く外面には5条凹線がめぐり、複数本の棒状浮文が貼付される。内面に稜を有し、5段羽状刺突文を施す。橙。出自は東海地方に求められる。

甕(18~22)は単口縁で(22)は単口縁台付甕の台部である。(18)は2分割破損の接合された資料で、片半内面にのみ赤色塗料が付着する。浅黄橙。



第524図 4号周溝墓遺物出土位置

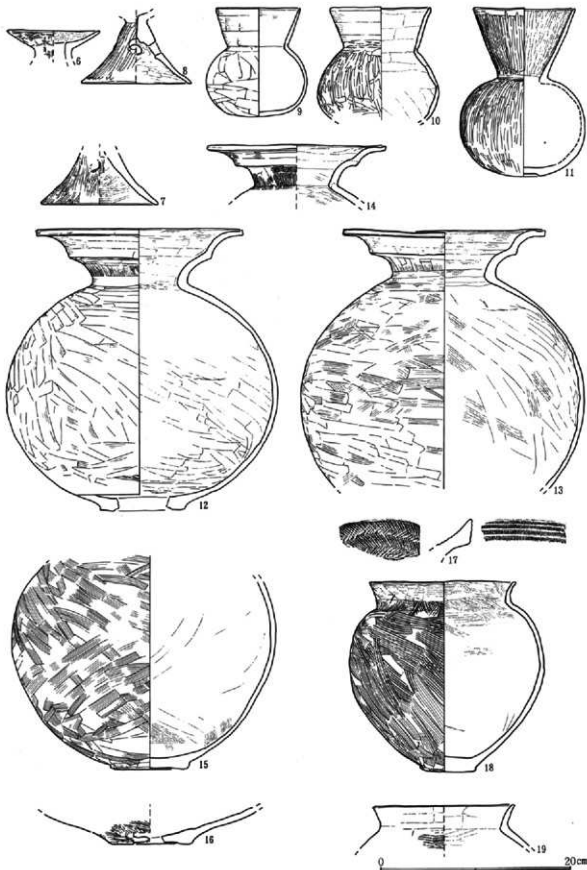
#### 4号周溝墓

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	埴	10.7		7		橙		12	二段口縁甕	21.9	9	29.7	26.7	浅黄橙	
2	埴	11		7		橙		13	二段口縁甕	21.4		現高27	26.6	浅黄橙	
3	埴	11.7		7.3		橙		14	二段口縁甕	18.8		現高6		浅黄橙	
4	埴	10.2		6.1		黄橙		15	甕		8.1	現高22	27.8	黄橙	
5	埴	10.8		7.2		黄橙		16	甕底部		8.8			黄橙	
6	胎台	9.8				橙		17	加飾大頸甕					橙	
7	高杯脣部		12.4	現高5.5		黄橙		18	単口縁甕	15.5	5.9	20	20.5	黄橙	
8	高杯脣部		11.7	現高7.7		黄橙		19	単口縁甕	15				灰褐	
9	長頸甕	8.9		11.5	10.7	赤橙		20	単口縁甕	22				黄橙	
10	長頸甕	10.6		現高11.6	12.7	黄橙		21	甕底部		6.3			灰褐	
11	長頸甕	10.7	3	17.7	13.2	橙		22	単口縁甕台部	10		現高7.5		灰灰	



第525図 4号周溝墓出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第526図 4号周溝墓出土遺物(2)



第527図 4号周溝墓出土遺物(3)

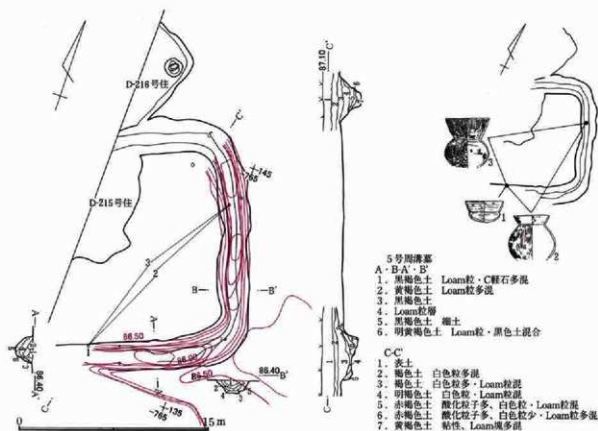
## 5号周溝墓 (第528・529図 P L. 119・130)

座標値  $X=135-146$ ・ $Y=-763\sim-770$  範囲にあり、北東方附近に3号周溝墓が位置する。西半は現道(調査時)にかかり全容は不明であるが、現状平面形からは整った方形周溝墓になろう。周溝北辺でD-216号住居跡(古墳前期)と重複するが新旧関係はこれより新しい調査所見がある。

周溝外縁を含めた規模は南北軸全長10m・方台部7.5m、東西方向は全長約8.0m・方台部は6.5mの範囲まで検出した。南北軸方位  $N-22^{\circ}-W$  を示す。遺散埋葬施設は検出されていない。

周溝内埋土は下位層にLoam粒の混入が多く、方台寄りに顕著である。断面は箱型形状を呈する。周溝規模は上幅1.0~1.3m・下幅30~40cm・深さ70cm前後で溝底面は深・浅差が少なく比較的均一でやや狭小な掘形である。

出土遺物は少なく埴と小型壺類3点で埋土中からの出土である。



第528図 5号周溝墓・遺物出土位置

出土遺物

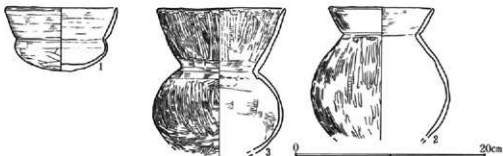
埴(1)は小径な平底。体部は寛削り、口縁部撫で、口唇部は強い握み撫で調整。浅黄橙。

小型壺(2・3)の(2)は胴部寛削り後相間隔の寛磨き、橙。(3)は精製土器で内外面に丁寧な寛磨きを施し頸基部内外面に“どべ”塗布状の撫でが施される。橙。

5号周溝墓

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	埴	11.8	1.8	6.7	6.8	浅黄橙	
2	小型壺	11.2		規高13.5	14.5	橙	

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
3	長頸壺	13.6		規高15	13.5	橙	



第529図 5号周溝墓出土遺物

6号周溝墓(第530~533図 P.L.120・130)

座標値X=159~181・Y=-735~-759の範囲にある。周溝墓群中もっとも北側に位置する。形状・形態は東西方向に長軸をもち、周溝外縁・方台部とも形状の整った方形周溝墓である。方台部には古墳前期当時における地表の構成層に相当すると考えられるC軽石混じりの黒褐色土が残り、遺構埋葬施設が存在が期待されたが検出できなかった。方台部南東隅および周溝南辺でD・38号・D・86号住居跡(古墳前期)と重複するが新旧関係ではいずれよりも新しい調査所見である。

周溝外縁を含めた長軸全長は23.5m・短軸21.5m、方台部長軸15.0m・短軸13.5mを測る。長軸方位はN-83°-Eを示す。

周溝域の覆土最上位にはB軽石の堆積が見られ、軽石降下時も若干の窪地として痕跡を残していた可能性がある。周溝内埋土は下位層にLoam粒・塊が多く混入し、堆積状況からは方台部側からの流入が考えられる。掘形断面は壁面・底面とも乱れは少なく、箱型形状を呈する。溝上幅は4.5mの西辺が最も広く、下幅4.2mである。東辺では3.0mで他辺より狭く、下幅も2.5mである。深さは1.3m前後である。

出土遺物には埴・器台・高坏・小型壺等で、完成度の高い遺物は少ない。他の周溝墓と比べ、遺構規模の割には供献用土器類の少なさが特徴的である。また、模造土器・甕類・土製勾玉など重複住居跡からの混入と思われる遺物が多い。埋土中には明らかに年代の下る古墳時代後期に属する土師器杯・須恵器なども混在している。

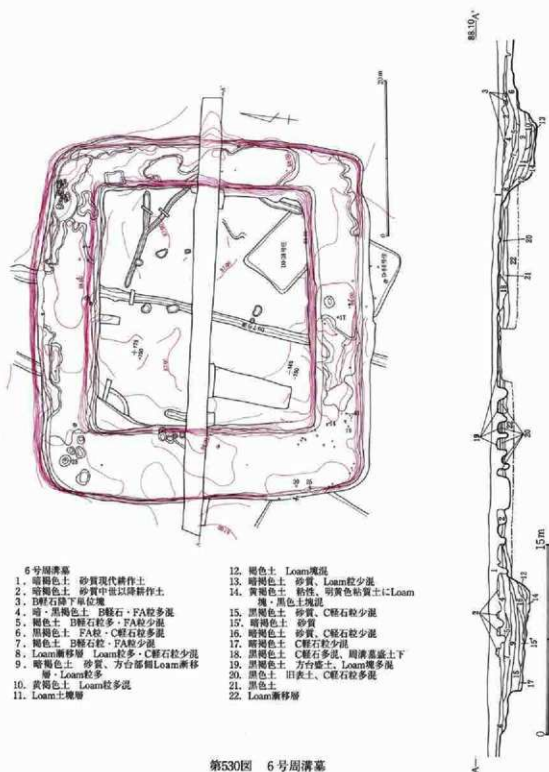
出土遺物

(1~7)は模造土器である。粗略な刷毛目を施す。色調は灰白~灰黄。

埴(8)は赤色塗彩精製土器である。

器台(9・10)は寛磨き。(9)が坏部直線的に開き脚部に円孔を穿つが数不明。黄橙。(10)は4円孔を穿つ。橙。

高坏(11~16)。坏部(11)は刷毛目調整で内面撫でを加える。口唇部内傾に面取り。浅黄橙。(12)は施磨きを施すが被熱による肌荒れ。脚は寛磨き。(13)は二段各4円孔。黄橙。(14)は3円孔。(15・16)は4円孔。浅黄橙。



(17・18) は長頸壺類か、冪形態の大型化変移であろうか。(17) は内外面丁寧な鈍磨きで精製土器。底部は小径上げ底。赤褐色。(18) は内外面刷毛目調整後やや粗い鈍磨きを施す。底部小径で上げ底。灰白。

二段口縁壺(19) はやや小型になろうか。内面の段は緩やかで内外面鈍磨きを施す。浅黄褐色。

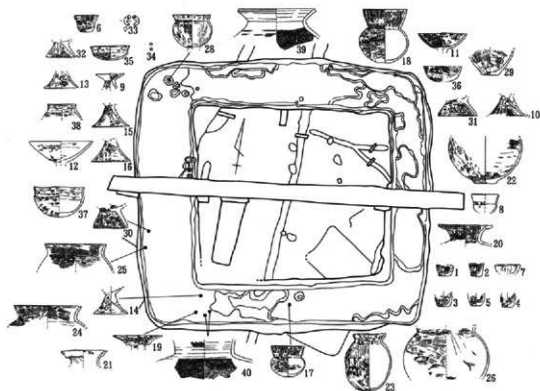
折返し口縁壺(20・21)。(20) は上縁が水平に開き、口唇端部矩形で垂直面を縄文圧痕で刻む。赤褐色。(21)

第3章 検出された遺構と遺物

は口唇端部が細まる。浅黄橙。ともに刷毛目調整。(22)も壺になろうか。刷毛目後撫でを施す。浅黄橙。

壺(23~32)。(23)は長刷気味の小型で、底部は小径な上げ底。作りは粗く、細目刷毛後強い荒削りを施す。浅黄橙。(28)は小型単口縁台付で胴部外面細目刷毛、内面強い撫で上げ。赤橙。(30~32)は単口縁台部。

(35~40)は古墳後期に属する土師器(坏・鉢)・須恵器である。(33・34)は土製の勾玉・小玉であるが重複住居跡のもので古墳前期に帰属するものであろうか。



第531図 6号周溝墓遺物出土位置

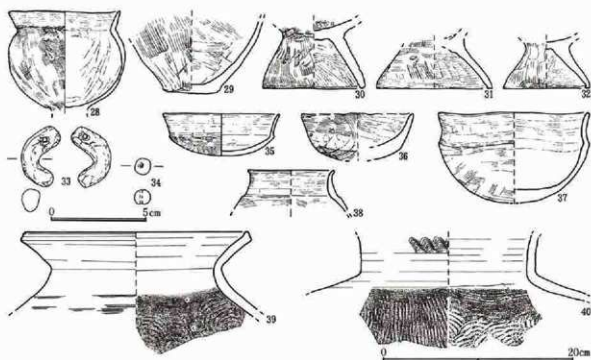
6号周溝墓

番号	器種	口径	底径	器高	刷毛目	色調	出土位置
1	模造土器	4.9	3.7	3.6		灰白	
2	模造土器	4.8	3	4		灰白	
3	模造土器		3.7	底高4.5		灰白	
4	模造土器		3.3	底高4.2		灰白	
5	模造土器		3.1	底高3.2		灰白	
6	模造土器	7.2	3.5	5.3		灰白	
7	模造土器	4		底高3		灰白	
8	埴	8.4		底高6	赤橙		
9	器台一断面	9		底高4.5	黄橙		
10	器台断面			底高6.5	橙		
11	高坏坏部	15.2		底高5	赤橙		
12	高坏坏部	30		底高7	赤橙		
13	高坏器台部		11	底高5	黄橙		
14	高坏脚部		19.8	底高8.2	赤橙		
15	高坏脚部		11.7	底高7	赤橙		
16	高坏脚部		12.3	底高7	赤橙		
17	片断器台	10.4	2.5	9.7	10.8	赤輪	
18	片断器	13.9	4	16.8	15.5	灰白	
19	二段口縁壺	15.5				赤輪	
20	折り返し口縁壺	14.6				赤輪	
21	折り返し口縁壺	14.6		底高5		赤輪	
22	壺		7	底高14.2		赤輪	
23	壺	10.3	3.2	18	14.5	灰輪	
24	壺	21.2		底高6.5		赤輪	
25	壺	19.4		底高6.5		赤輪	
26	壺			底高17	26.1	灰輪	
27	単口縁台付壺?					橙	
28	単口縁台付壺	11.8		底高10.2		赤橙	
29	壺底部		6.9	底高9.5		橙	
30	単口縁壺台部		10.8	底高8		灰輪	
31	単口縁壺台部		12.2	底高5.5		赤輪	
32	単口縁壺台部		9.2	底高5.5		赤輪	
33	土製勾玉	長3.2	径1.2×0.9				
34	土製小玉	0.8×0.7					
35	土師器坏	12.3		4.5		灰輪	
36	土師器坏	11.8		底高5		灰白	
37	土師器鉢	16		9.5		灰白	
38	土師器鉢	9.1		底高4		橙	
39	須恵器器台口縁	23.7		底高9		灰	
40	須恵器器台断面	断面18.5		底高7		灰	

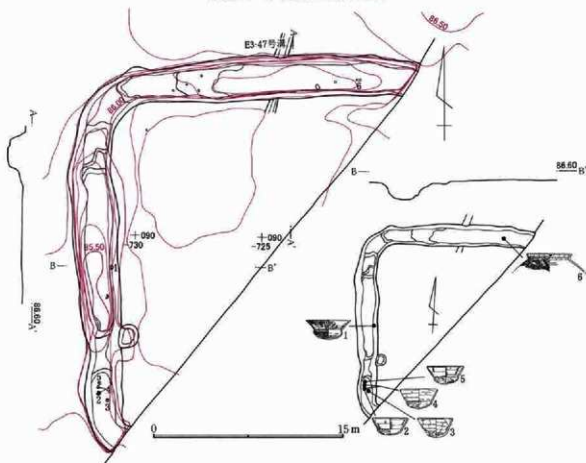


第532図 6号周溝墓出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第533図 6号周溝墓出土遺物(2)



第534図 8号周溝墓・遺物出土位置



## 8号周溝墓 (第534・535図 P.L.121・131)

座標値  $X=080-097$ ・ $Y=-718\sim-732$ の範囲にある。南東半は調査区域外にかり全容は不明である。なお南東半部分は伊勢崎市によって三和工業団地遺跡で調査されている。形状・形態は長短軸長差の小さな方形周溝墓にならう。遺骸埋葬施設は検出されていない。周溝外縁を含む全長は16m、方台部12mにならう。南北軸方位は真北に近く  $N-3^{\circ}-W$ を示す。

周溝埋土は方台部寄りの下位層にLoam粒が多く混じり、方台部側からの流入であろう。掘形断面はU字または箱型の形状をなし、周溝壁線や底面の掘削は比較的整っている。溝上幅は1.8~2.0m・下幅1.0m前後、深さは0.7~0.8mを測り各辺の中央部が僅かながら低くなる。掘形自体は狭小な感じを受けるが上面削平の深さに起因するものであろう。

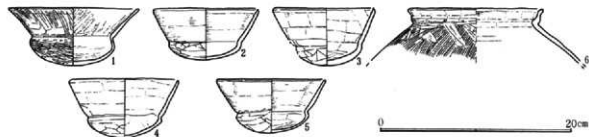
出土遺物は埴形土器で、周溝西辺南寄りに4個体が集中している。いずれも埋土中からの出土である。

## 出土遺物

埴 (1~5) は丸底。(1) は口縁部が直線的で大きく開く。精製土器で丁寧な施磨きを施す。体部は施削り後施磨きである。明赤褐。(2~5) は形状・技法が酷似し同一人物による製作の可能性が高い。体部施削り、口縁部施磨で調整、口唇部は内屈気味に強めの掴み無で共通する。また、(3~5) の口縁内面には篋止め状で粗間隔の放射圧痕が残る。浅黄褐色。

## 8号周溝墓

番号	器種	口径	底径	器高	胴径色	色調	出土位置
1埋		13.8		6	明赤褐		
2埋		11		5.5	浅黄褐		
3埋		10.6		6.1	浅黄褐		
番号	器種	口径	底径	器高	胴径色	色調	出土位置
4埋		11.6		6.3	浅黄褐		
5埋		11.5		5.4	浅黄褐		
6	S字口縁壺	14.2		壺高5.5		明灰	



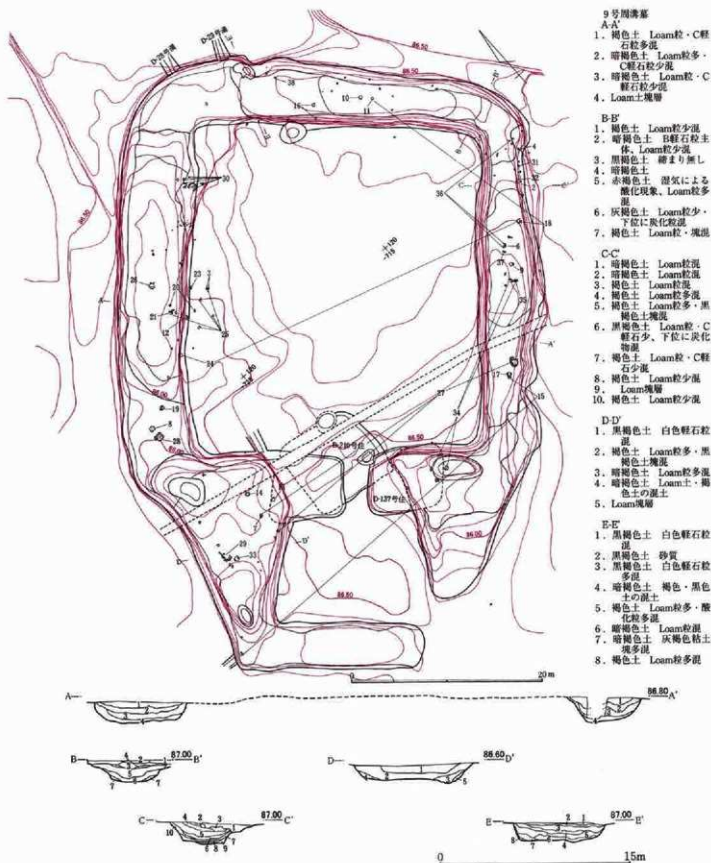
第535図 8号周溝墓出土遺物

## 9号周溝墓 (第536~541図 P.L.122・123・131~134)

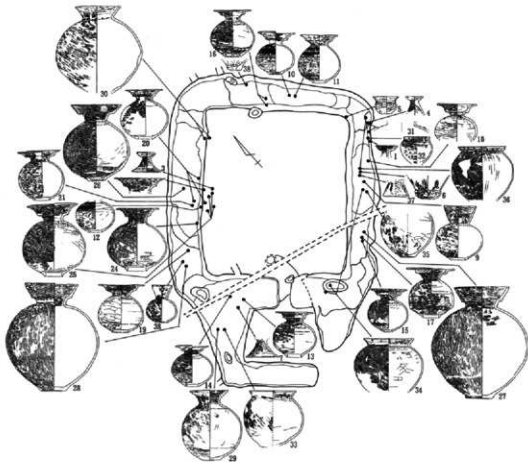
座標値  $X=102-134$ ・ $Y=-705\sim-735$ の範囲にある。形状・形態は略南北方向に長軸をもち、南に前方部をなす前方後方形周溝墓で周溝群中最大規模をもつ。遺骸埋葬施設は検出されない。西側間近に同じく前方後方形の1号周溝墓と2号方形周溝墓が並び、北東方には10号周溝墓・南方に8号周溝墓が位置する。

周溝外縁形状は後部は比較的整った線を描き、東・西縁ともに南前方部にかかる隅部で鈍角に折れる。西縁は前方部西端位置で再び折れて前方部の南辺を形成する。東縁は南辺とは結ばず、掘り残し状態で前方部南東隅で周溝が踏切れる。周溝外縁を含む全体規模は、長軸31.3m・短軸22m、前方部南辺は約10.0m周溝内縁方台部全長は26mを測る。後方方台部は整った方形で長軸17.2m・短軸15.0m、掘形を呈す前方部は長軸9.0m・基部幅約5.0m・南先端幅7.0m前後になる。長軸方位は  $N-45^{\circ}-E$ を示す。

周溝内埋土は北辺周溝の上位には部分的にB軽石の堆積が認められる。下位層には湿気が多く、やや粘



第536図 9号周溝墓



第537図 9号周溝墓遺物出土位置

製をもつ。下位から中位層の方台部寄りにはLoam粒・塊の混入が多い。周溝上幅は4.0~2.5m・下幅1.5~3.0m、深さ0.8~1.0mである。総じて各辺の中央部がやや深くなる。南辺前方部は溝幅が狭く上幅2.5m・下幅2.0m、深さ20~30cmになる。

出土遺物は周溝墓群中最も量が多く、大・中・小の各二段口縁壺を主体とする。周溝各辺より出土するが大半は埋土中からである。西辺と東辺に集中し、方台部からの転落を窺わせる出土状況もある。西辺では方台部と周溝内の接合関係も認められる。

#### 出土遺物

器台(1~4)は器面調整は鈍磨きである。坏形状が異なり、(1)は口唇端部が直立して尖り赤色塗彩。(2)は腰部が強く屈する。(3)は内湾し、(4)は直線的に開く。浅黄橙。(3)は坏部無孔で脚4円孔、(4)は坏部・脚部とも無孔である。

小型鉢(5)は平底で中央部が窪む。刷毛目後撫で調整。内面は粗雑な鈍痕が残る。浅黄橙。

大型埴(6)は内外面丁寧な鈍磨きを施し、胎土精緻な精製土器である。外面に黒色塗彩状の痕跡が残る。底部上げ底。灰白。

高坏脚部(7)は3円孔で内面刷毛目。外面に赤化処理を施したようである。

長頸壺(8・9)。(8)は刷毛目調整で、底部穿孔は焼成後である。浅黄橙。(9)は大振りで頸・胴部

### 第3章 検出された遺構と遺物

細目刷毛、腰部の刷毛目はやや粗雑である。外面と内面の口頸部に赤色塗彩の痕跡が残る。底部焼成前の穿孔。橙。

二段口縁壺(10~28)は小型(10~21)・中型(22~26)・大型(27・28)に分類できる。底部穿孔は小型・中型に施され焼成前である。成形上の特徴に腰部下段接面に刷毛目を施し、巻き上げ粘土紐の接着を意図したものと考えられる。また(17・26)には接面に1~1.5cm間隔の凸線状圧痕(押圧具は凹線)が見られる。内面の粘土紐接合痕が上半部に顕著に残る。なお大型は無孔である。

小型二段口縁壺(10~12)は肩部に2段の縄文による加飾がなされる。撚りは横位L-R-R・1・1・1で0段3条の単節縄文と見られる。結節は一方の条により末端をしぼる自然結節でR条が結ばれる。横位に認められる回転圧痕は一条毎に見られる様であるが、一段施文時に一方の条に結んだか、繋いだかされて加えられたものであろう。口頸部刷毛撫で、胴部削り後刷毛目調整。口縁端部は矩形に整える。浅黄橙。(10)の口頸内外面には赤色塗彩の痕跡がある。(13~21)は縄文加飾が施されず、刷毛目調整が主である。ただ、(13)には小部分に縄文の加飾痕が残り刷毛目で撫で消されたようである。総じて下半部の調整が粗く刷毛目後削りがなされるが、(18・19)は刷毛目後の撫で顕著である。縄文加飾壺類に比べ、口縁上半の開きが大きく水平に近い。口唇部断面形矩形・丸味の両者がある。色調は橙~浅黄橙が多い。

中型二段口縁壺(22~26)は(26)が口縁部が内湾して開く。(22・23)は口径から中型に属しよう。外面刷毛目、内面撫で、底部周辺には刷毛目調整。淡橙~浅黄橙。

大型二段口縁壺(27・28)は幅広い口縁部が内湾して開く。口唇端部は水平・矩形を呈す。細目刷毛後比較的丁寧な寛磨きを施し、内面胴部は強い撫で調整である。

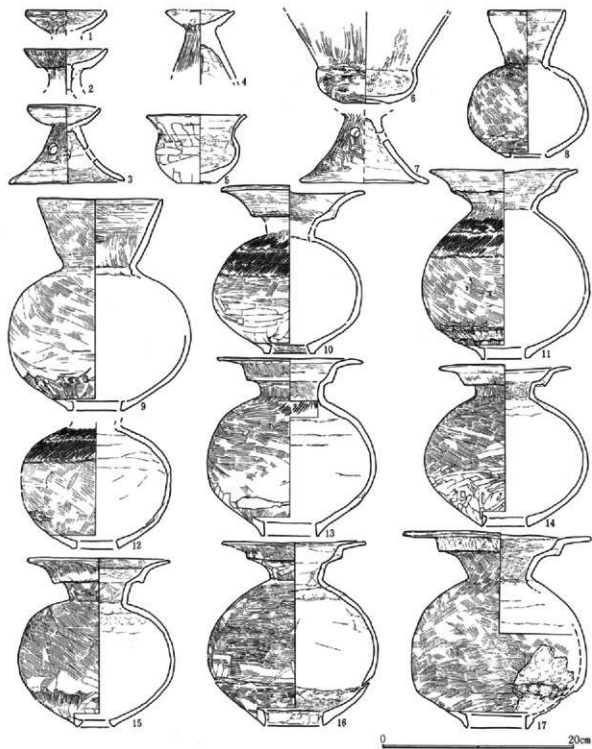
素口縁壺(29・30)。(30)は焼成後の底部穿孔であろう。くの字状に直線が開く。頸部・肩部は細目刷毛・胴部はやや粗目の刷毛調整。内面は使用のためか器面の剥落が多い。(29)は無穿孔。強く外反する。細目刷毛後粗い寛磨きを施す。腰部内接面に刷毛目。

甕(32~37)。(32)は台付甕になろう。粗い刷毛目。灰白。(33~35)は刷毛目調整で、(35)は外面に、(34)は内面に粗い寛磨きを施す。浅黄橙。

S字口縁台付甕(36・37)。(36)は粗い刷毛目。内面強い撫で上げ調整。台部とも橙。

#### 9号周溝墓

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	壺台坏	8.4		現高2.5		純橙		20	二段口縁壺	15.4	5.9	20.4	19.7	純灰	
2	壺台坏-胸部	8.8		現高4.5		純橙		21	二段口縁壺	17.8	6.3	20.8	18.8	純橙	
3	壺台	7.7	12.2		8.2	純橙		22	二段口縁壺	20		現高5		純橙	
4	壺台	7.3		現高7		純橙		23	二段口縁壺	21		現高5		純橙	
5	小型鉢	10.5	4.9	7.2	9	純橙		24	二排口縁壺	17.7	8.2	25.8	24.8	純橙	
6	大型鉢	17.4	4.6	現高9.5	10.7	灰白		25	二段口縁壺	21.1	7.6	30.3	29	純橙	
7	高杯形甕		12.7	現高7.5		橙		26	二段口縁壺	20.6	6.8	31.3	27	純橙	
8	長頸甕	8.3	4.7	15.5	12.6	純橙		27	二段口縁壺	22.6	11.5	45.7	40	橙	
9	長頸甕	13.2	3.9	22.4	19.2	橙		28	二段口縁壺	22	10.4	44.2	38	橙	
10	二段口縁壺	15.2	5.4	17.7	15.7	純橙		29	甕口縁壺	15.8	7.4	28.8	34.7	純灰	
11	二段口縁壺	15.6	5.1	20	17.5	純灰		30	甕口縁壺	18.6	11.7	現高36	35	純橙	
12	二段口縁壺			現高13.5	15.7	純橙		31	甕	口径12				純灰	
13	二段口縁壺	15.4	6	18.7	17.8	純橙		32	単口縁台付甕	10.7		現高11	13.2	灰白	
14	二段口縁壺	13.7	4.8	17	17	純橙		33	単口縁壺	19.5	7	23	21.5	純灰	
15	二段口縁壺	15.7	4	17.8	16.5	純橙		34	単口縁壺	20.5		現高21.5	28.2	純橙	
16	二段口縁壺	15.3	6.4	19.2	18	橙		35	単口縁壺?		6.8	現高17.8	21.8	橙	
17	二段口縁壺	19.7	6.4	20.7	18.4	橙		36	S字口縁壺	19.4		現高22	25.3	橙	
18	二段口縁壺	16.3		現高15	17.5	橙		37	S字口縁壺台部		10.6			橙	
19	二段口縁壺	18.8	6.1	19.7	18.5	橙		38	板底部	孔径2~1		現高4.5		純灰	



第538図 9号周溝墓出土遺物(1)